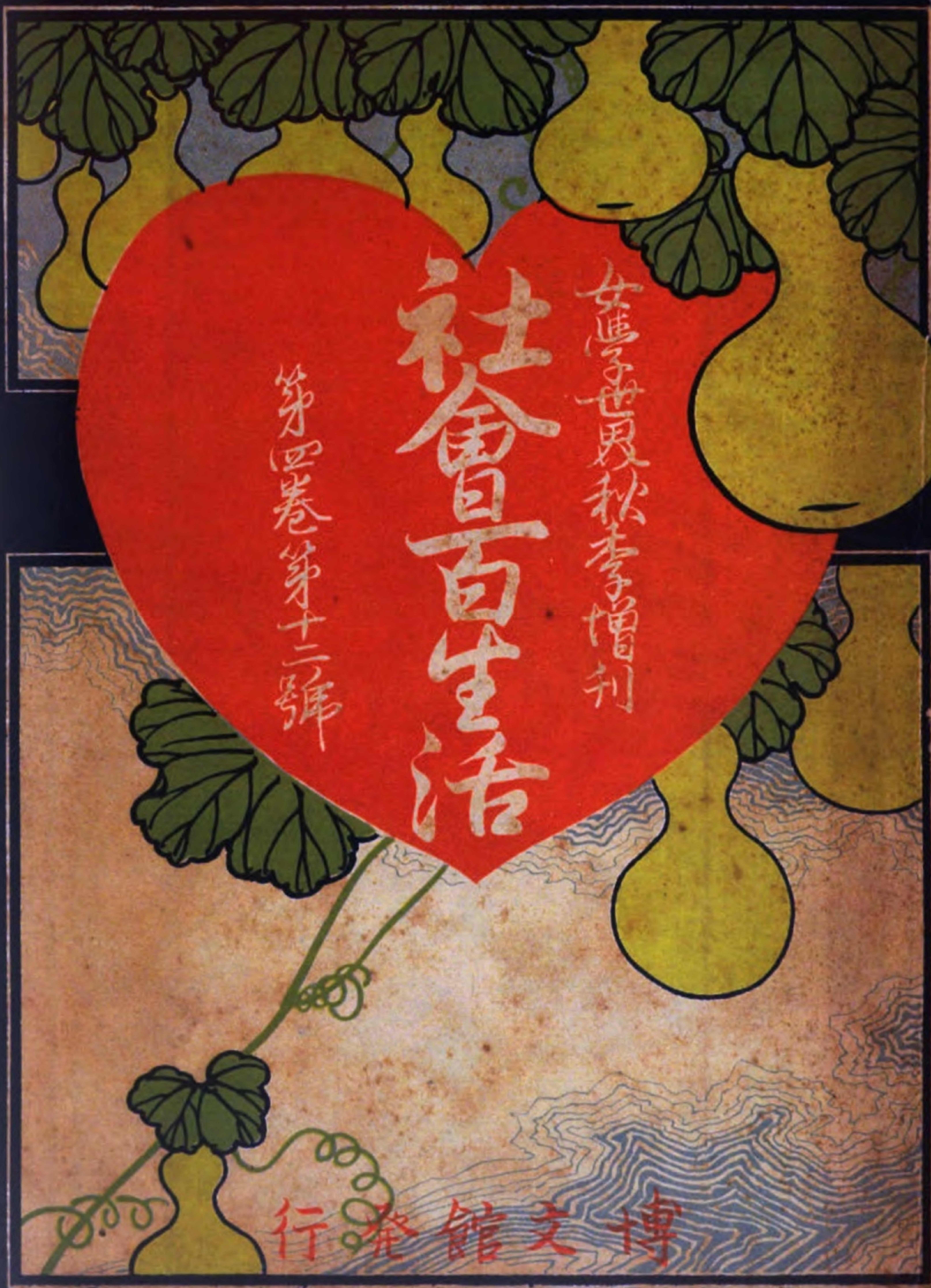
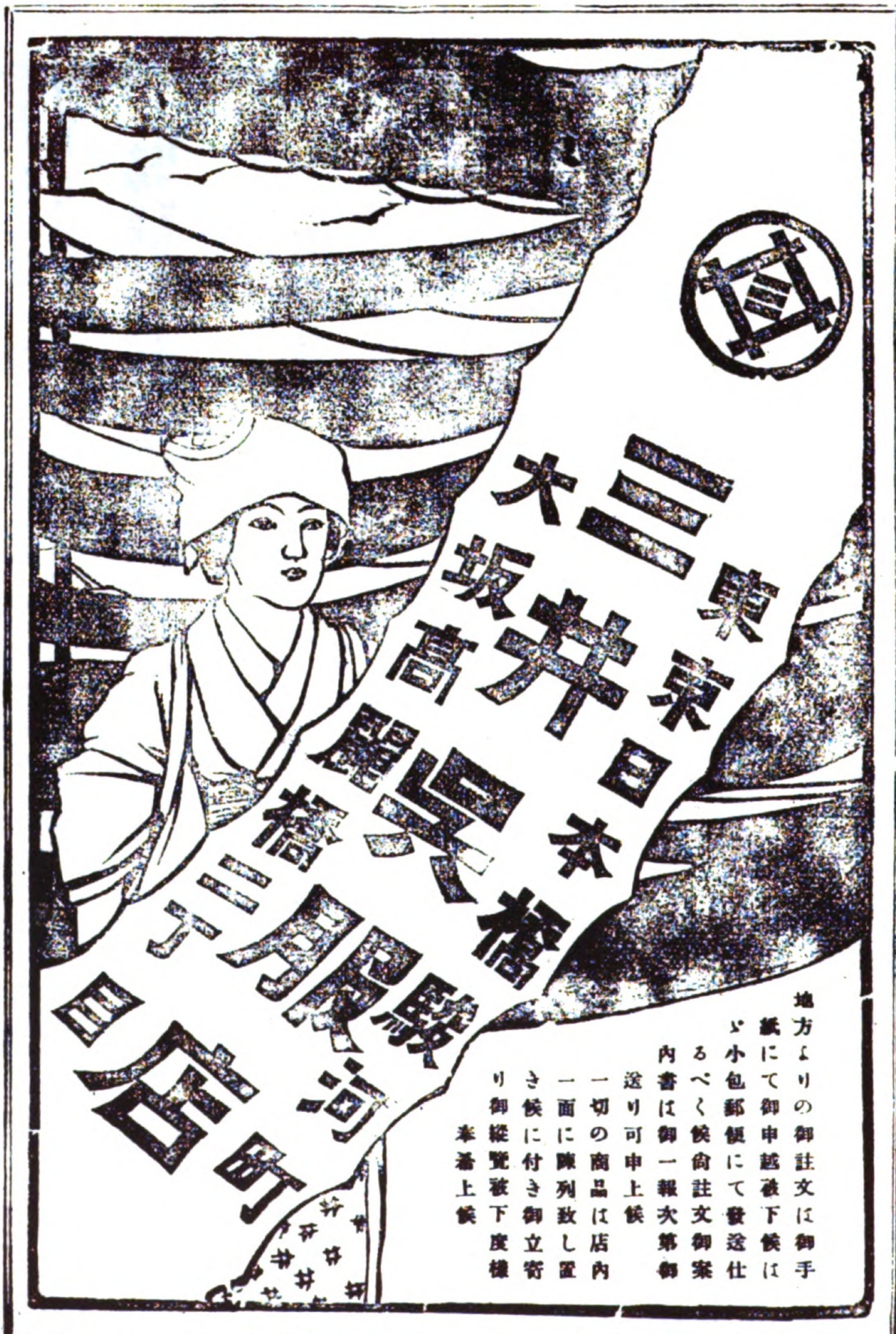

女學世界秋季增刊
社會百生活
第四卷第十二號
博文館發行


東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕るべく候尚註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置き候に付き御立寄り御縦覧被下度様奉希上候

女學世界秋季增刊 社會百生活目次

九月十五日發行

博文館發行
日露戰爭實記
第三十一編

日露戰爭 **寫眞畫報** 臨時增刊

（九月十五日發行）

### 寫眞版

皇軍の勇將雲の如く、野津大將、黑木大將、奥大將の三軍團長上原少將、藤井少將落合少將の三軍團參謀長、各入師團長、及各參謀長、各旅團長。

最新寫眞版には勇敢なる各聯隊長以下綺羅星の如く、從軍寫眞班が彈丸雨飛の間にあつて撮影せし戰地各方面の寫眞は壯絶快絶現狀を臨るに異ならず。其他死を決して露軍中にありし米國從軍記者エマルソンの寄贈にかゝる遼陽附近戰狀の寫眞は實に無類の珍品にして黑鳩公の陣中を眼下に見下すの感あらん

# 遼陽大決戰

大判縦八寸五分横六寸
口繪四十四頁
正價廿錢
郵税二錢

我征露の大軍は、一面旅順口の敵を厭迫窮窘せしむると同時に、一面遼陽を包圍環攻して、激戰苦鬪百折撓まず遂に之を占畧せんとす。

抑も日露戰爭の成敗得失は、繫りて遼陽の一戰爭にあり。遼陽既に皇軍の占有に歸す。戰局勝敗の數は、已に明了せしと言ふも、強ち早計に非ざるべきなり。

千歳一遇の大戰は、斯の如くして無前の好果を收めつゝあるもの、主として　大元帥陛下の御稜威と、師の名正しく、事順なるによれりと雖、亦將士の忠勇赤誠の力に待つこと少しと言ふべからざるなり。

然らば則ち、遼陽大決戰の顛末を叙述し、之を天下後世に傳へて、曠世の一大紀念となすと、詢に止むべからざるものあり、其製本裝幀の優美、挿入寫眞の珍奇に至りては、他其比を見るべからざるなり。

（詳細なる遼陽戰鬪地圖 附録）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

徳川公爵の家庭



前征夷大將軍慶喜公

現貴族院議長家達公

同夫人泰子

## 九州一の絶勝

豐後國魚住の飛瀑





紀南風景

紀伊國木本之浦蛙石

黒田公爵夫人喜代子
（舊筑前藩主）



文學士大町桂月　文學士久保天隨　大田淳軒　三先生共修

# 新式いろは引節用辭典

全壹册

洋裝上製美文字入
長方形金本紙數
約千二百ページ
正價 郵稅……未定

字書の讀書家に於るは猶諸器械の工匠に於けるが如く蓋し一日として無かるべからざるものなり是を以て古來學者の良好なる字書を編して世の便益を圖らんとするもの甚だ多し、されど今日に至るまで世に流布せる字書は其數こそ多けれ内容に至りては大同小異にして特に出色のものを見ず、某々の字書出づるに至りて始めて完璧と稱せられき。然ども其書古言を解するもの半に居り且卷册尨大にして携帶に不便なるの憂あり、是に於て本館一種出色の實用的辭書を編纂せんと欲し大町久保大田の三文士に請ひ力を該編纂に專らにせしめ數閲月の後始めて完成を告ぐるに至る、本書乃ち是なり、書中收むる所は更に數萬言の多きに上り現今社會の普通語として人々の口頭より發するものは邦語と漢語とに論なく、殆んと網羅して遺す所なしといふべし、又其搜索の方も尤も簡便にして字書は總て文部省規定の假名遣ひに倣ひ、覧者をして容易に搜索し得る樣にしたり、蓋し字書中語數最も夥多にして實用に適し携帶に便なるものは本書の右に出づるものなかるべし、且つ本書が實に一の特色とすべきものは欄上に和漢古今の名數を擧けたるにあり、名數の書は世に流布するもの數多ありと雖、完全のもの一もなし本書は實に千餘頁に涉りて東洋西洋の名數に關するものを遺憾なきまでに網羅し盡くしたれば讀者に便益を與ふること實に多大なるべし乞ふ速に一本を座右に備へて眞價のある所を知り給はんことを

## 類書

青蓋居士編
● 歴史文章 **皇國字典**（全一册和裝）正價金二十二錢 郵稅金四錢

棚橋廣君著
● **新撰漢語字引**（全一册和裝）正價金二十五錢 郵稅金二錢

大田淳軒君著
● **新撰歴史字典**（全一册和裝）正價金六十錢 郵稅金六錢

大田淳軒君著
● **新撰明治字典**（全一册和裝）正價金三十八錢 郵稅金四錢

●（甲の一）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の二)

醫學博士 井上通泰先生監修 中川恭次郎君編輯

全部六册 菊判洋裝

# 家庭衞生叢書

▲毎編講話大家肖像入……紙數一册百六十頁

家庭に衞生上の智識の必要であるといふとは今更いふ迄もないが、此衞生上の智識は實に一日でも應用せられぬといふ事はない、住居を撰ぶにしても、衣服を製るにしても、食物を調理するにしても、之に衞生上の智識を應用したなれば、家庭がどの位幸福になるか、殆んど測り知ることが出來ないと思ふ。

其他小供を育てるにも、傳染病の流行時にも、病人の出來た時にも、婦人の姙娠時にも凡て吾々の家庭に衞生上の智識の必要であるといふを證據立てる機會は日常甚だ多いのである。

家庭衞生叢書は各專門の大家が特に衞生上注意すべき事項に就て、講話せられたる所を成るべく平易に寫し出して一般人が衞生上の智識を開發するといふを目的として發行せられたのであつて、讀者は必ず得る所が多いとと思ふ、尙此叢書に講話を承諾せられたる大家は左の諸先生である。

醫學博士 吳秀三先生
醫學博士 中濱東一郎先生
醫學博士 入澤達吉先生
醫學博士 北里柴三郎先生

醫學博士　岡田和一郎先生
醫學博士　長與稱吉先生
醫學博士　木下正中先生
醫學博士　森林太郎先生
醫學博士　金杉英五郎先生
醫學博士　緒方正規先生
醫學博士　土肥慶藏先生

醫學博士　弘田長先生
醫學博士　近藤次繁先生
醫學博士　佐々木政吉先生
醫學博士　桐淵鏡治先生
ドクトル　富士川游先生
醫學士　賀古鶴所先生
醫學士　宮本叔先生

# 第壹號

——（九月中旬發行）——

口繪　北里博士、長與博士、金杉博士、土肥博士（肖像）

講話
傳染病の話……北里柴三郎先生
胃の攝生法……長與稱吉先生
眼科衛生談（第一）……井上通泰先生
血族結婚と聾啞との關係……金杉英五郎先生
淋病と家庭……土肥慶藏先生

雜錄
患者を生したる時の注意……第一次

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の三）

中島春郊畫伯著

# スケッチ 圖畫速寫法

●符號 並に圖書法凡そ千個

右は圖速寫畫法の規定として先生が多年の苦心と經驗とにて符號より成立つ嚼寫の眞法なる事、言語の速記に等きものを發明され最も圖畫を學び居ると居らざるとに拘らず簡易に覺へ得らる良書也

酒井勉編纂

上下合本 正價金四十錢 郵稅四錢

# 卅七年度 男女 東京遊學案内 附試驗問題

同名類似の書が徒らに其外形のみを本書に似せ其内容に至りては數年前の規則等を其儘掲出して遊學者を誤る者とは大に其撰を異にせり去れば本書は男女を問はず東京遊學者には此上なき好著にして都門に學を修めんとするの士は是れ缺かざるべからず

全一册●正價金五十錢●送料金六錢●

# 卅七年度 官立諸學校 入學試驗問題

正價十五錢 郵稅二錢

國語漢文研究會編纂

# 國語漢文獨修自在

本書は著者が多年和漢學研讃の結果、蒐積して成りたるものなれば、其内容の有實なる、其中の一語を諳じ一事を記すも一として讀者の實力とならざるはなく閲者の裨益ならざるはなし殊に本書は書中の語を「イロハ」別に分類し最も索引に便ならしむ

全一册●語數二千餘●價卅錢●郵稅六錢

東京中學校及研數學館數學專門敎授松本小七郞先生著

# 普通教育 代數學講義

全二册 上卷三百卅頁●下卷二百十頁●價各卅五錢●郵稅各四錢宛

東京中學校教務幹事研數學館講師松本小七郞先生講述

# 算術講義

洋裝美本合本價八十錢 一册郵稅十錢 分本假裝三册各卅錢郵稅各四錢

工學士 影山種作講述

# 測量術講義

洋裝合本價一圓廿錢 一册郵稅十錢 分本假裝三册各四十錢郵稅各四錢

發行所 東京神田表神保町 電話本局一七五三 修學堂書店 出版目錄入用の方は郵券三錢送れ

---













本會發行の繪はがきは砲烟劍光の狀壯烈觀るが如く多忙なる勇士の通信に最も適當にして戰陣には軍事郵便の制あり無印紙の儘發送を許され後世の一大紀念たるべし故に出征將士への進物には唯一無二の珍品なり意匠斬新印刷鮮美

▲日露戰爭繪はがき目錄▼

木曜會圖案 **第一編 海戰**(第一輯) 大高評四版

仝 **第二編 陸戰**(第一輯) 四版 (石版極彩色各六枚)金十五錢

水哉君輯 古洞君畫 **第三編 旅順の海戰**(附軍歌) 三版

**第四編 在韓の我陸軍** 三版 (寫眞彩色各十二枚)金十二錢

新刊豫告

中村不折君畫 **旅順陷落紀念**(千部限) 全六枚 金十五錢 (石版極彩色) 頗斬新陷落當日發賣

渡部審也君畫 **第五編 海戰**(第二輯) 好評三版

和田英作君畫 **第六編 陸戰**(第二輯) 再版 (石版極彩色各六枚) 金十五錢

▲郵稅四組迄 各二錢

祝大捷大割引 三十部以上一割引 五十部以上二割引

## 會員募集

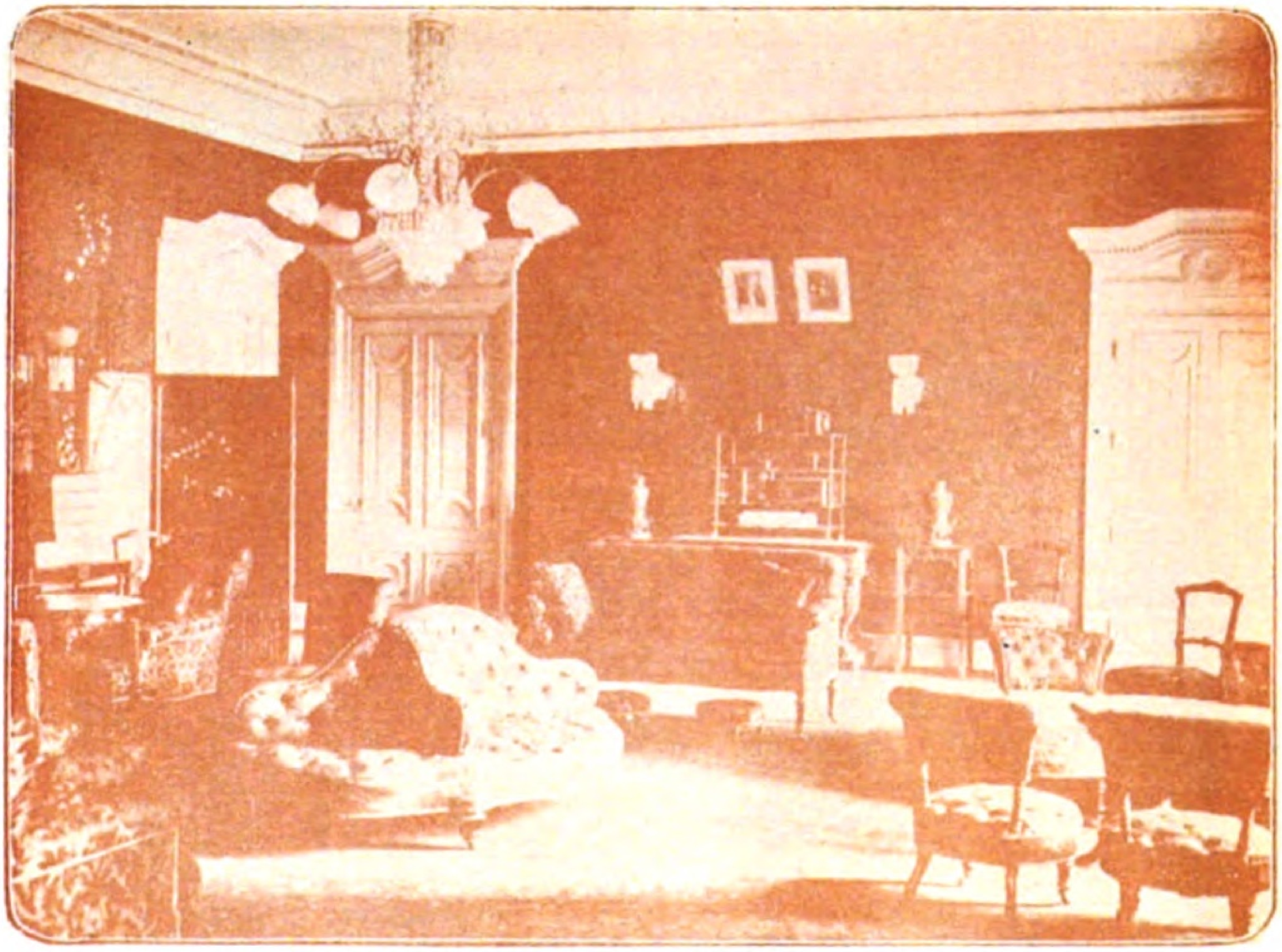
入會金拾錢會費六ヶ月卅錢を送附せば會員徽章を呈し六ヶ月間雜誌「はがき文學」を頒布す投書歡迎 會規は要郵券二錢

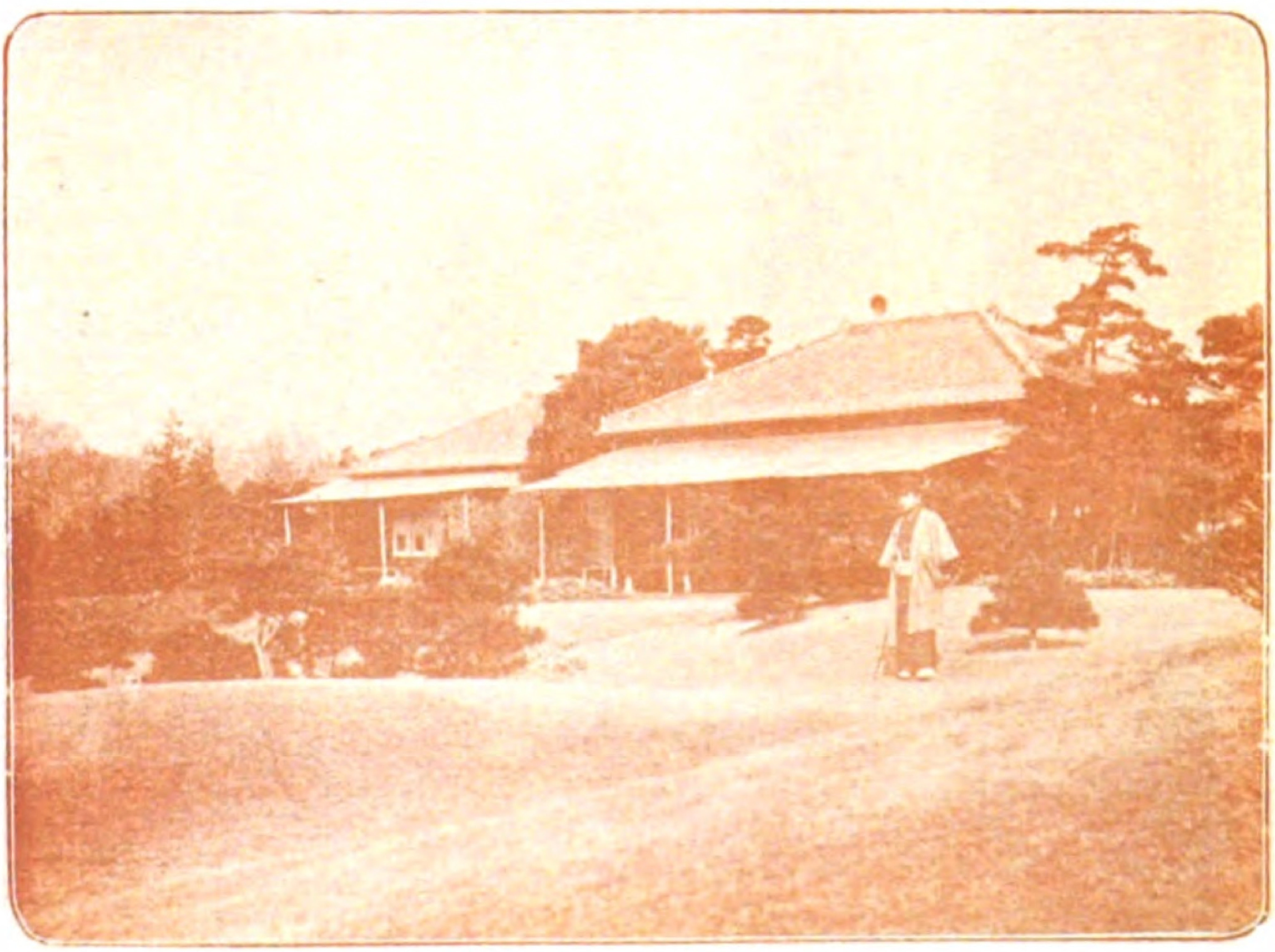
發行所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 日本葉書會

發兌元 東京本町 博文館

(甲の四)

外務大臣官邸內應接室





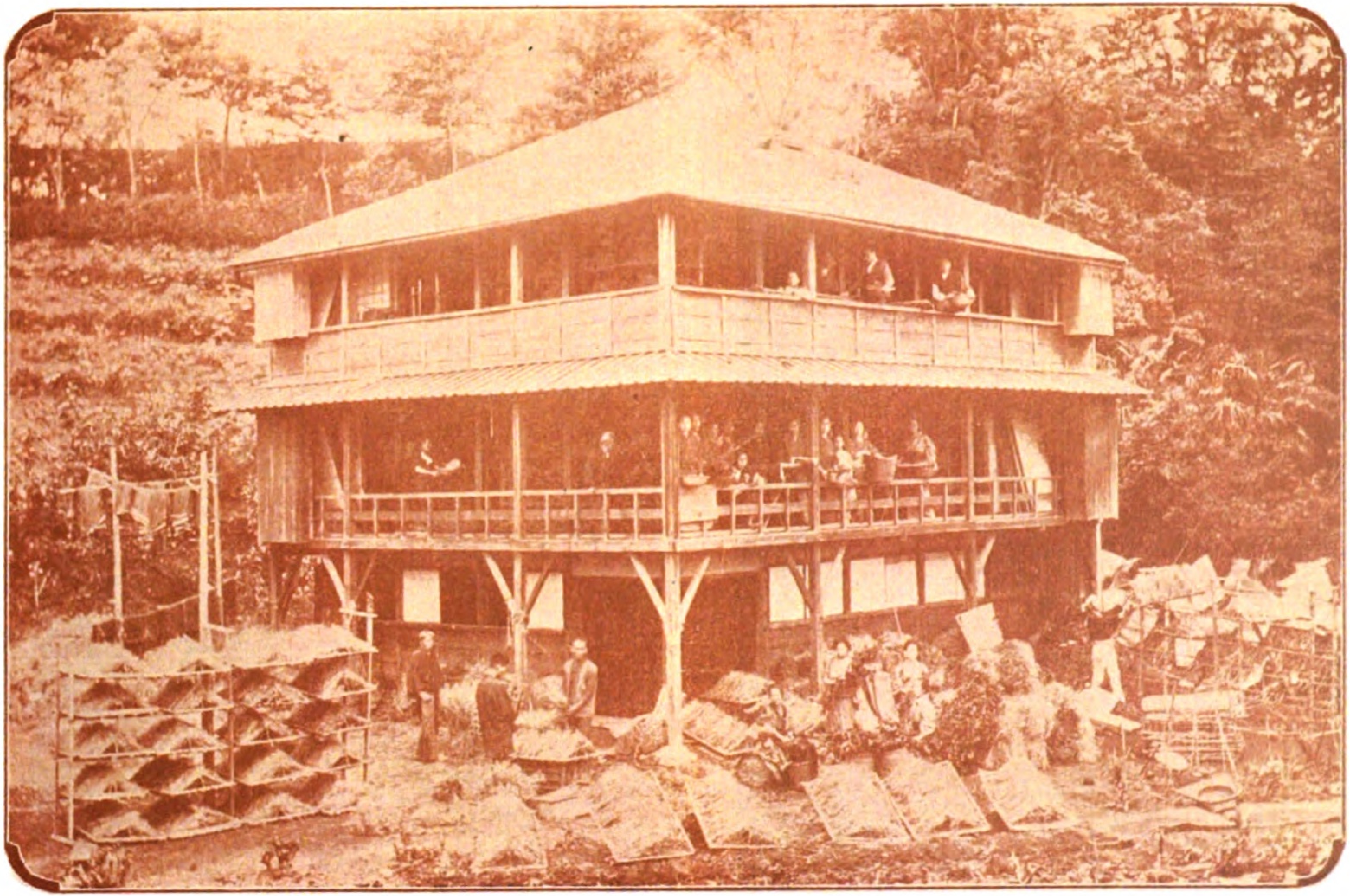
[illegible]

# 東京富豪の家庭

日本郵船會社長近藤廉平氏一家



谷子爵家の養蠶場



## 姉と弟



日本銀行副取締島氏の令嬢と令息

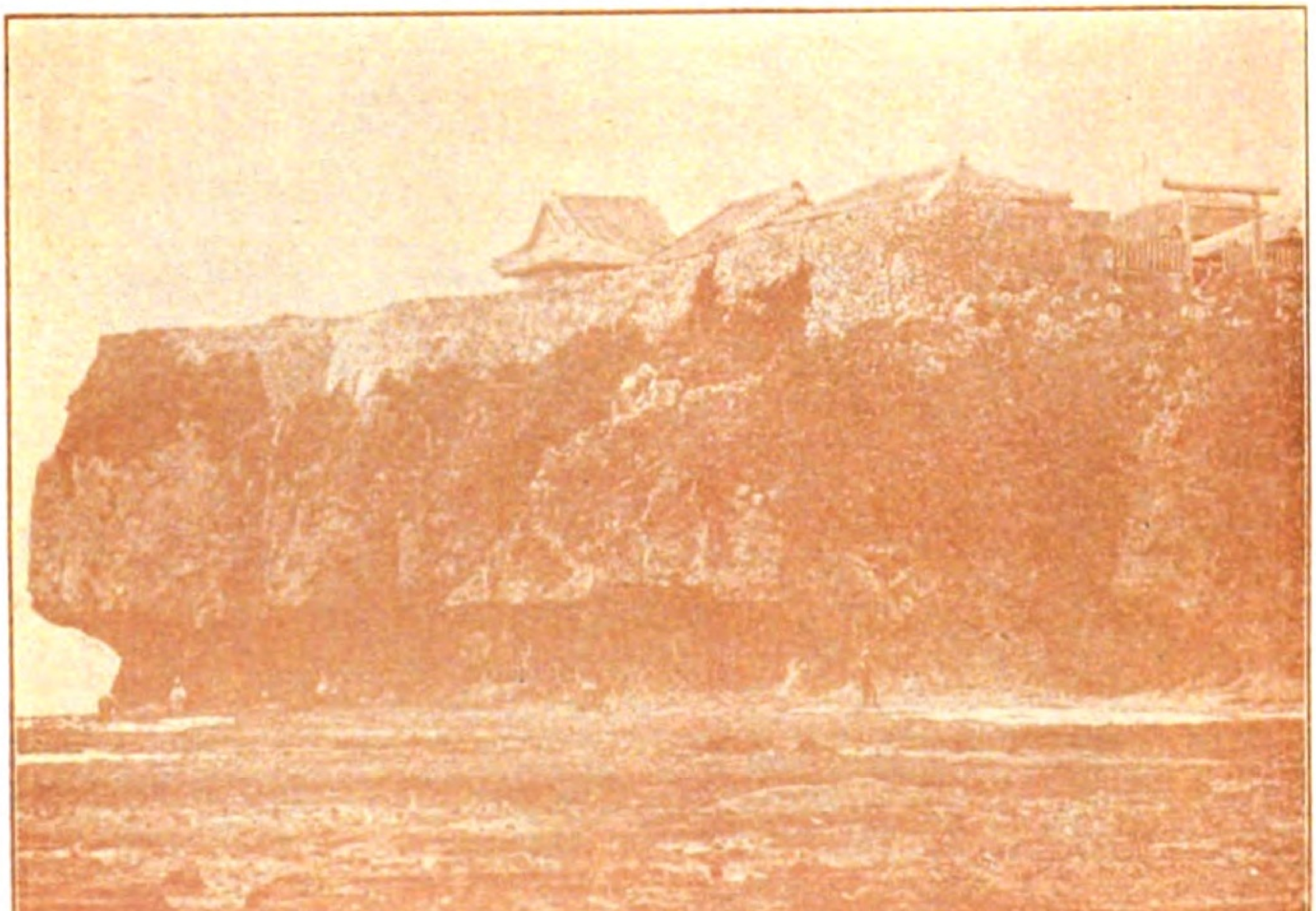
## 母と子



筑前炭鑛業者貝島氏の令孫とその母君

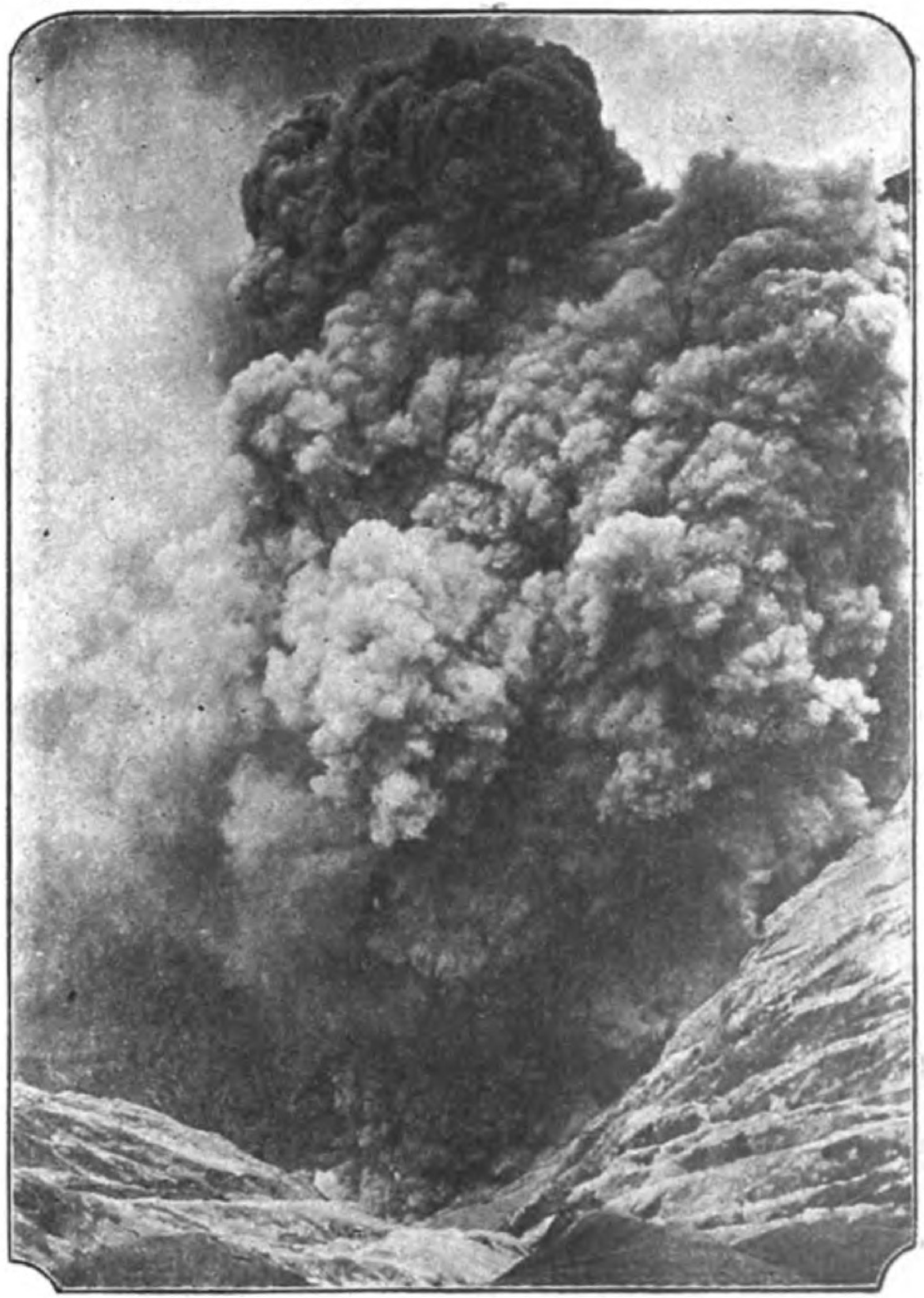
臺灣學童の風俗





琉球那覇港波の上宮

## 九州阿蘇の奇勝



阿蘇山の噴火口

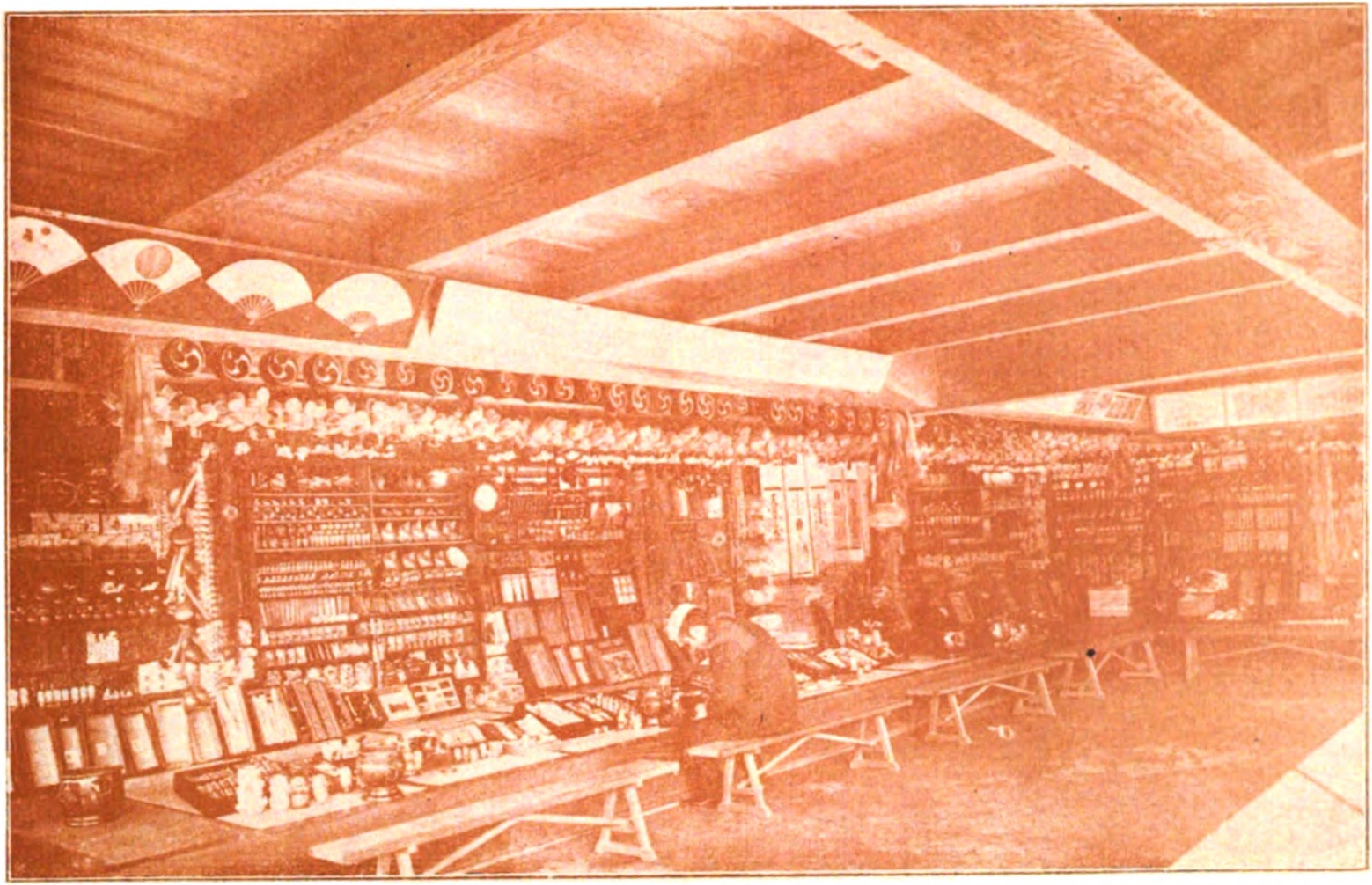


阿蘇山麓鹿笛の瀧

アイノ婦人風俗

北海道十勝國白人村の土人





伊勢參宮の土產賣店

# 帝國百科全書新刊

## 第百四拾編

農學博士 大森順造君
農學士 山田玄太郎君 合著（近刊）

# 植物病理學

農稼、樹藝の業に從ひ、圓滿の收穫を得んとせば、須らく其植物の病因を究め之れが豫防除害の方法を講せざるべからず、近來肥培耕耘の法を說けるものあれども未だ植物病理を記述せしの書あるを見ず、著者之を遺憾とし學生敎授の餘暇を以て本書を公にせり本書上篇には植物生理の違常より來れる病害に就きて詳說し下篇には主として寄生菌の害に因れる疾病を叙述し可成的本邦產植物上に就き各病害には各豫防除害の方法を併記せり蓋し農稼樹藝の業に從事するもの本書を得て大に稗益する所あるべし

上製 五十五錢　郵稅 十錢
並製 四十錢　郵稅 八錢

## 第百五拾編

理學士 吉田弟彥君著（近刊）

# 地文學

總論

第一編 地球星學
地球の成因●大陽系●地球の形狀及大さ●地球比重の測定●地球の重力の測定●地熱●地球內部の狀態●地磁氣●地球の運動●經緯度●晝夜の長短●四季及五帶●日蝕及月蝕●地圖（以上十四章）

第二編 氣圏學
大氣●氣溫●氣流●大氣中の水分●氣圏に於ける光の現象●天氣及氣候（以上六章）

第三編 海洋學
海の分布●海水の性質●海水の溫度●海泉●海底●海水運動（以上六章）

第四編 陸圏學
陸地の分布●陸地を構成する石●地史原統●地層の排置●境界の種類●平原及臺地●山嶺及溪谷●河川●海岸線●陸界の變動（以上十章）

第五編 生物編
生物の分布●生物の移動及變動●地球上に於ける人類の位置●日水の文明と天然の關係●地球上人種の分布（以上五章）

上製 五十五錢　郵稅 十錢
並製 四十錢　郵稅 八錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の二）

（乙の五）

文科大學長文學博士坪井九馬三先生校閲
在大學院露史專攻文學士堀竹雄先生編纂

# 露國の實相

躬行會藏版

全壹册洋裝上製本
紙數菊判三百廿頁

精巧地圖（露國全圖・同政治地圖・同産業地圖）着色大判

九月中旬製本出來

要目

**地理** 歐羅巴露西亞●西伯利亞●トルキスタン●カフガス地方●行政區劃 **社會** 貴族●僧侶●市民●農民●外國人● **經濟** 産業財政 **交通** 道路●河流●海運●鐵道●郵便電信 **行政** 中央政府 地方政治 **宗** 虛無黨 **教** 一般教育●專門學校●女子教育 **軍事** 陸軍 海軍 **學藝** 文學學及刊行物●科音樂●美術 （以上）

本書は我が名門華冑に依りて組織せられし躬行會に於て今回特に編纂せられたるものなり、戰爭に要する第一義は能く己が力量を知ると同時に併せて敵の實狀眞相を審にし一に應急手段を誤らざるにあり、世上今や暗黒面の露國を示すもの多しと雖も、未だ露國の進歩發達せる眞相を語るもの稀なり、蓋し露國が今日に至るまで能く覇を歐土列强に成せし所以は必らずや豪壯雄大の素ある事恰かも秦王が六國に對せし概無くんばあらず、躬行會諸氏玆に見る所あり、堀文學士に托して攻究數月以て本書を大成せしめ、坪井博士に囑して更に嚴密なる校訂を加へしめらる其價値ある以て知るべきなり、苟も濟世愛國の士は必らず一本を座右に備へ以て大資料とする所あれ。

## 書類

法學士 須崎芳三郎君著 ●現代露西亞 全一册 特製五拾五錢 郵税拾貳錢 並製四拾錢 郵税拾錢

法學士 須崎芳三郎君著 ●露國侵略史 全一册 特製五拾五錢 郵税拾錢 並製四拾錢 郵税八錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の六）

日露戰爭

# 博文館發行 寫眞畫報 臨時增刊

顧みれば拾年の以前に於て、一旦王師の攻略したる旅順口は、魯國の詐謀に出たる三國干涉の爲めに、魯國の掠有せる所となり、五千餘萬の同胞、臥薪嘗膽以て今日に至れり。彼れ暴魯益驕りて悛むるを知らず、遂に宣戰の大詔となり、遼東の征戰となり、再び旅順口陷落の快事を見んとす。本編は其顛末を叙して後世に傳へんが爲め、筆を陸軍の南山占略、海軍の遼海封鎖に起し、最後**陷落に至る迄**の經過を詳叙精寫し、全く**寫眞畫報と同一体裁**を以て發行し、精新なる寫眞と、雄健なる文字と、相待つて遺憾なく眞相を江湖に報じ、以て絶好の紀念品となさんとす。發行の期は陷落の公報至りてより必らず**一週間以內**にあるべし

**請ふ刮目時期の到る**を**待**たれんことを

# 旅順口陷落

大判 縦八寸五分 横六寸 美本
口繪四十四頁入
附錄 旅順口陷落戰圖
正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

## 口繪

**○光澤寫眞版**

▲滿洲軍總指揮官
▲聯合艦隊の三殿下
▲第三軍司令官と參謀長
▲各艦隊司令長官
▲各戰隊司令長官
▲海軍帷幕の謀將
▲旅順口攻擊軍各師團長
▲旅順口攻擊軍各旅團長

**○旅順口陷落畫譜**

旅順口背面攻擊○重圍の旅順口○露女の避難○敵驅逐艦長の粗暴○攻擊陣中の快事○空前の大海戰○我が軍使敵壘に到る○旅順口陷落○敵艦隊の潰敗○敵壘の警戒○壯絶快絶！等十數枚の活畫

**○紀念寫眞銅版**

攻擊軍各師團謀將○聯合艦隊各艦長○各驅逐隊司令及艦長○各水雷艇隊司令及艇長○忠勇武烈の將士○旅順口內部の光景○老虎尾半島と西港○二龍山○旅順口海岸○攻擊軍野戰病院○大和尚山附近○敵艦の逃込みし芝罘○ジャンク臨檢の實寫○攻擊軍の突進○遼東半島の奇觀等數十葉の奇絶珍絶なる寫眞は旅順口陷落の永久紀念品たるべし

（乙の七）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

第六高等學校教授工學得業士松尾哲太郎君著

# 新撰中等 用器畫教科書

解説一册（近刊）

圖式一册

▲全貳册洋装上製金字入正價五十錢郵税六錢

用器畫は複雑なる工業用製圖の準備として必要なるは勿論、廣く一般器物の製作上若くは自在畫に活用して日常缺くべからざるに拘らず、斯學科に關する著書甚だ少く、中等教育に於ける斯科教授の現況尚未だ幼稚の憾あるを免れず。本書は此缺陷を補はんが爲めに、著者が多年の研鑽と教授上の經驗とにより、主として最新の中學校教授要目に基き、著述せられたるものにして、單に書法を記載するのみに止まらず、併せて其書法の原理をも解説し、且毎章練習題を設け、以て應用實習の便に供せり、本書が中學校、工業學校、其他中學程度の學校に於て最も適當なる教科書たること弊館の深く信じて疑はざる所なり。

## 類書

松尾哲太郎君著 ●製圖用文字（全一册）正價金四拾錢 郵税金四錢

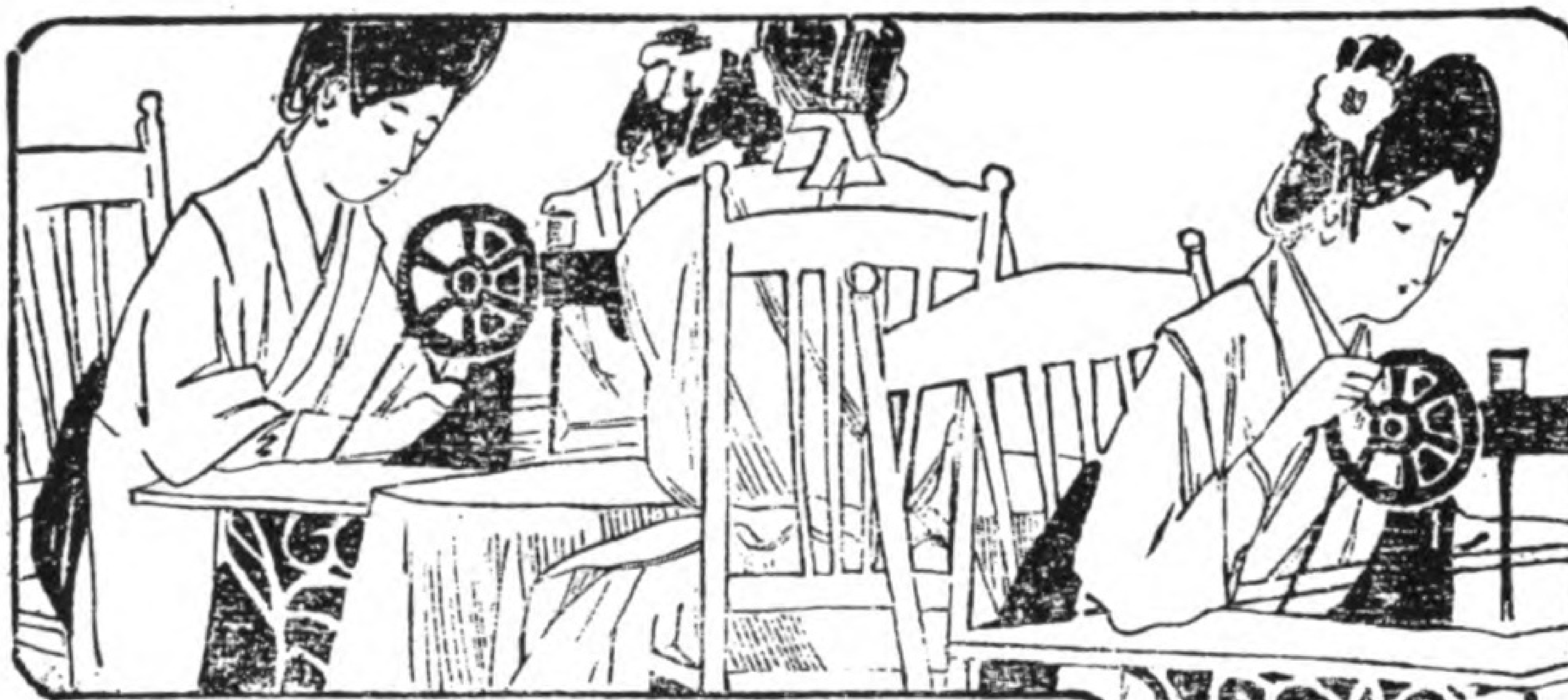
松尾哲太郎君著 ●器械設計製圖學初歩（全一册）正價金六拾錢 郵税金四錢

毛筆畫研究會編 ●初心毛筆畫譜（全五册）正價一册金拾貳錢 郵税一册金四錢

伊藤直楯君 岡村増太郎君 合著 ●幾何畫法（全一册）正價金拾貳錢 郵税金四錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の八）



女學世界秋季增刊
第四巻第十貳號

# 社會百生活

## 百生活の意義

家庭は社會の分子なり、善良なる家庭は健全なる社會を作り、健全なる社會は優大なる國家を作る。一國の文明は即ち個々善良なる家庭の集合に外ならざるなり。家庭は生活に由つて立つ、家庭の風儀は生活狀態に由て其根本を培養す、これを社會に及ぼし、之を國家に及ぼす、生活の輕視すべからざるや知るべきなり。本篇必らずしも社會風教の摸範たるを期せずと雖も彼の英國に所謂紳士の家風なるものありて常に社會の良風を維持し一國文明の源泉となるが如く、我國にも又この種の家風ありて以て國家の重に任ぜんとす。

こゝに獨立の人あれば爰に紳士淑女あり、こゝに健全なる家庭あれば爰に良家風あり本篇に記するもの即ちこの良家風なり必らずしもその金衣玉食たると、麁衣粗餐たるとを問はざるなり、又必らずしもその大臣たり、貴族たると、車夫たり馬丁たるとを問はざるなり。本誌は即ち此の趣旨を以て社會各階級に於ける生活の狀態を紹介するものなり。

# 主婦の境遇

家庭生活の主宰者

△世に主婦の位置ほど美麗にして且つ價ある職務はあらじ。主婦は生活の主宰者にして又世界の主宰者なり

△主婦は其身の在るを打忘れて他の爲めに甘んじて日日の心配と勞苦とを犧牲にするものなり。

△主婦が日夜仕事を爲し又心配を爲すは其身の爲めにするにあらず、皆家族の爲めにするなり、夜は晝の勞れに打敗けて臥床に横はり、新に明日の爲めに力を養成するも又其身の爲めにあらず、皆他の爲にするものにして其夫、其子、其家族、其婢僕をして今日を樂ましむるにあり。

△主婦の身は自身の所有にあらで其運命の幸と、不幸とは其生涯の伴侶たる夫の運命の幸と不幸とに連絡するものなり。

△主婦は夫が如何なる運を有するも之に滿足し、夫が貧困となれば、共に其苦みを嘗め、憂を分ち、夫が疾めば之を看護し、病者自身よりも多く心配す、一として身の爲めにするにあらず、皆他の爲めにするなり。

△母となりては其苦痛と危險とを以て生命を與へたる子の爲めに生活し、他の人々は心を安んじ身を舒ばすの時、主婦は深夜にも愛兒の爲めに眠むる能はず、若し病氣に罹れば其呼吸にも注意し、心中には潛かに之が回復を祈る、而かも誰一人としてその母のなす所を知るものなく、誰一人として母の惱む所を知ることなし、只だ萬能のまことの神のみぞ知り玉ふ。

△主婦となりては他の爲めに思考を煩はし、其身が病床に臥すも他人の健康に注意し、其身の保養を後にし觀樂を後にして先づ其家族の者が之を受くるに注意す

△主婦は家庭に於ける平和の神使なり、家庭の順序と幸福との有形なる守護神にて最大と最小のものにも注目して一も之を忘るゝことなく、渾身の愛と慈母の注

意とによりて總てを包括す。

△主婦の職や單純なるも、その影響する所深くして且つ大なり、主婦の職は愛を以て奉公するもの丶良標本なり、假令男の力は半世界を震動することあるも良好なる主婦が恭謙他の知らざる間に盡すほど直接に熱心に永久に愉快ならしむるものなし。

△主婦の品行方正なるは又た家族の良標本にて其宗教心は行爲を益々高尚ならしむ。

△主婦の心情清潔なれば此世の人々が如何に不潔なる慾情を以て交際し來るあるも天性の廉潔もて之を破るを得べし。

△心情の清潔は婦人の貴重なる裝飾品なるを知れ、一度之を失ふことあらば幾多の寶石を飾り金製の美服を纏ふも之を回復するを得ざるなり。

△行狀に嚴格なれば家族も主婦を尊敬し、言語と實行とにて之を示せば其子の心中にも之を感染せしむ。

△經濟を知れる主婦が儉約にて貯蓄せしものは、即ち主人が得たる眞誠の利益なりと知るべし。

△婢僕の心は親愛にて收め、之を指揮することを知れ彼等の心中に尊敬の念を惹起さしむれば從順の心を生じて怠惰者も又その義務を盡すに至るべし。

△よく家事に注意し、家庭の生活を快活ならしめ其夫其子の心を他方に向けず常に主婦の周圍より離れざる樣なすべし。

△諸人に對して慈悲深くあれ、美麗なる親睦と相互の信用とを破るが如き事を避けよ。

△其子に對して慈愛を與へよ、是れ神の主婦に與へたる唯一の賜なれば、全力を盡して是を尊重すべし。

△人間の一生は五六十年に過ぎずと雖も、主婦が家に對する感念は百年、千年永久無限なり、彼れは現在に勤むるのみならず、又將來の爲めにつとむ、啻に我が一生の爲めに勤むるのみならず、其の家に對して永久無限の感念を以て勤む、故に彼れの良人は他人に感謝する前にまづ其の妻に感謝すべし、彼れの子は父に感謝する前にまづ其母に感謝すべし。是れ即ち主婦を敬するの道なり。

家政談

# 谷子爵夫人生活苦心談

中村鈴子

勤儉力行の聞え高き谷子爵夫人を市ヶ谷田町の御邸に尋ねましたのは、殘暑強き八月十四日の午前九時頃でした。質素な御玄關には油團の敷物を釘張にされてあり、書生さんが恭しく名刺を持ち行きて應接間へ案内されましたが、樟の本箱數多と洋書棚とを列べ、大卓子と椅子五六脚を置かれ、小壁には夫人御手製の繍「小石丸」が第四回勸業博覽會で得られた褒狀の匾額、楠公父子訣別の圖、報國婦人會寫眞等を掲げられてあり。左手の御庭は幽邃な築山を後にして、瓢形の大池に金魚の潑剌たるを見、水際に咲き亂れた百日紅、鳳仙花は朝風に戰いで、紅色の小波風情面白く覺えました。夫人は白絣の浴衣に茶博多の幅狹き帶を結びて出で來られ、初對面の御話振も極質實で隔てなく、冴え冴えしい眉毛とハツキリした睛眸は凜々しい御氣象を表はし、坐ろに熊本御籠城の當時を偲ばしめられました。夫人は記者の唐突な質問を斥けられず、打ち寛いで生活談をお聽かせ下さつたのです。

▲大多忙

私は無學文盲で實に御耻かしいので御坐います、それで愛國婦人會の評議員と云ふとも、幾度か岩倉夫人や佐藤少將夫人に御斷りに參りましたが、何と申しても御免し下さいませんから、餘儀なく連つて居りますが、耳はうとし文字は見えず、何の御役にも立ちません。總會の時は評議員方は皆書付を御持參ですけれど、私は持つて參りません、持つて居つた所で盲の垣覗きですから……。先づ其位の人間で家事を働くより外に何も用が御坐いません。子は一人も持ちませんで養子致しましたが、それも早く歿し、後に嫁も孫三人を遺して夭死致して了ひました。總領の孫（近衛步兵少

財谷儀一氏）は最早士官學校を卒業致し、當年二月戰地へ向ひ、末のは女子で十九歳に爲り、是れも漸く下田の學校（實踐女學校）を卒業致しました。嫁が死亡なりましたので、私も隱居どころで無く、家事萬端殘らず引受けて居るのですが、昔から隙間なく働くのが好きな性質ですから、自分の勝手で忙しく暮して居るやうなもので御坐います。

▲花嫁時代

私の實家は下女、下男をも使つて如何にか暮して居つたのですが、父親が嚴重な人で、私が十二歳位から婚嫁後の心得になるやうにと申し、下女を廢して私と姉と兩人に家事一切を取扱はせました。それで御飯炊は申す迄もなく、料理から交際、裁縫、機織、養蠶其他女子の仕業は何に限らず致しましたから、其御蔭で十九歳の時此家へ片付いてから、小さい世帯を致すのに困りませんでした。唯今でこそ斯樣な有り難い身分に爲りましたが、私の參つた頃は鄉國（高知縣）で五人扶持しか貰つて居りませんでしたから、却々樂どころぢや御坐いません、良人は終始留守勝ではあり、私は男のする業まで致して一生懸命に働きました、實家では致した事のない百姓業までも……。それから米麥を搗き、薪を割り、味噌醤油を製り、蠶を飼ひ機を織つて、何一つ買ふ物のないやうに致し、夜分は遲くまで縫物や糸取を致し年中僅かの間も休むと云ふヿはありませんでした。唯今以て朝起夜業の止められないのは、親の躾もあり此時分の癖が沁み込んだ故で、有り難い事だと思つて居ります。昔を考へますと一日でも贅澤な心を起しては濟まぬと存じ、良人も御承知の通り質素な人ですから、少しも奢つた生活向は致さぬので御坐いますよ。

▲夙起夜寢

昔から夏冬とも大抵四時に起きます、私は十一二の時父親に申し付けられて以來、一遍でも起されたヿは御坐いません、奉公人を起したとも御坐いません。大抵蠟燭を二本位ともして、可なり廣い此座敷々々を拭き掃き致し、時によると御飯まで炊くヿがありました。

餘り早朝から私のゴソ〳〵するのを良人が厭がりまして、其樣なにすると下女が迷惑するから止めろと申します。併し奥さんが朝起だから勤まらぬとて暇を取つた下女は一人もないから宜いぢや御坐いませんかつて笑つたのです。其後脇腹の赤子を受け取つて世話しましたが、私が起き出ますと泣きますので、思ふやうに朝の働きが出來なく爲り、九年以來は餘り早く起きないやうに爲つたのです。夜業は昔からズツト休みません、子供の着物など矢張私が縫はなければ格好がシツクリ出來ませんから……。此頃は報國婦人會のシャツを宅へ持つて參つて孫女と縫つて居りますが、私は十一時までも致すので孫女を先へ臥させるとも御坐います。『汝が五枚縫ふなら祖母さんは十枚も縫はにや氣が濟まんわ』と申しましたのですよアハヽヽ。イエ最早六十一ですから根氣が大分衰へました。朝起は癖になつて居りますので、イクラ夜業致しても四時にはチヤント目が覺めます。

▲食膳の費用

良人は食物に少しも構ひません方で、豆腐さへあれば何も要らぬと申します、此頃は煮る世話もありません私なぞ漬物さへあれば何にも要らぬのです。御膳は麥飯で、別に乳だの卵だのと云ふ滋養品を定めては用ゐませぬが、身軀は働く故か至極丈夫で御坐います。時々極輕い腦加答兒を起すことがありますが、此通りお灸で療します。

夫人は腕をまくつてお灸の痕を示されました。

良人は御酒を二合づゝ飲みましたが、孫が出陣致した日から一合に減しました。外出などして疲れて戻つた時には最少し上つたらと私が勸めましても、否少しでも量を増せば溫になると申して、決して一合より多く用ゐません。

▲米　麥

唯今は六人の家族に、書生が六人、車夫が二人、下女が四人――都合十八人で御坐います。左樣ですネエ、米が一石七八斗、麥が五六斗要りませう、是れも一度に澤山買ひ置いたり、宅で搗いて見たり致しましたが

澤山あると粗末に取扱ひますし、宅で小米を搗くと小米が多く出來ますので、却て損で御坐います。それも極小勢の家で手搗きに致せば損は無いのですが、人に致させるのは萬事加減が違ひますから、種々場合に應じて考へなけりやなりません。麥は身躰に極宜しいが、此節報國會へ出まする御辨當は、朝よくさまして結びに致し梅干を入れて持つて參るのに、お晝には少し臭ひが付いて心持が惡いので、勿躰ない次第ですが彼方で御辨當を取つて居ります。

### ▲野菜

野菜は唯今一個月に凡そ二十圓ぐらゐ求めます。ズット以前人數が少い頃一個月十圓ほど要りましたので、野菜に十圓と云つては大きい事だからと存じで、農夫を一個月三圓の給料で雇つて畑物を作らせ、澤山出來るとは出來ましたが、矢張り作つた外に十圓要りました。何故ですかサッパリ判りませんけれども、十分あれば粗末にしたり、又ちよい〳〵引け道もある故でも御坐いませう。斯う云ふ次第で一向經濟にも爲りませんから農夫は廢してしまひ、今は車夫に致させて置きますが、私が毎日見廻らなければ、茄子や胡瓜がイクラ實つて居ても其儘捨て置くのが多いので、遂には烏に啄かれたり腐つたり、勿躰ないとばかりで御坐います。過日も畑を見廻つて「此家では唯だ野菜に花を咲かして樂むのです」と良人に話しましたアハヽヽ。併し牛蒡など掘り立ては味が別段で、迚も水に幾日も漬けた八百屋のとは較べ物になりません。ハイ澤庵は十樽ほど漬けます。

### ▲茶

御茶も畑に造つて、一番も二番も摘ます、悉皆番茶に製して了ひますから、其番茶の薫りと味は却々宜しいのです。過日も供待の部屋で客の車夫が辨當をつかふ折、土瓶のお茶をしぼつて後の茶殼を箸で取り出して食べて居つたさうです、宅の番茶は全く茶殼でも旨いのでせう。一個年に大抵二十俵位取りまして、これだけを一年分に用ひます。茶殼は乾して貯へ置き枕の中へ入れさせます。

▲味噌醬油

味噌も醬油も以前は製つても見ましたが、國で製つたのとは何だか手加減も違ひ、思ふやうに出來ませんから止めました。ハイ醬油は月に二樽ほども用ひます。炭薪も元は二三百圓位づゝ一度に買ひ置きましたが、矢張り粗末になりますから必要だけ入れます。焚付は主に宅の桑の枯枝を用つて居ります。

▲召使の役割給料

一番年を取つたのを取締と致し、御飯炊、仲働、小間使各々一人ですが、仲働には機も織らせ又養蠶の手傳ひなど致させます。給料は取締が三圓、他は二圓五十錢、盆と暮は勿論、間にもちよい／＼氣を付けて遣ります。髮は近頃皆束髮に致し、風呂も宅で沸てますから、小費は鼻紙と郵便錢位の事でせう。庭の手入れも植木屋を呼びますと二三日で十圓や十五圓は取りますし、特に當年など此時節柄御大層な事はお廢止にして車夫に庭の手入れを致させます。此庭は元切株ばかりで、彼の松の外は何一つなかつたのを、良人が皆植ゑたので御座いますよ。

▲臺所の注意

臺所は始終氣を付けなければ、無益の費が出來ると何の位だか知れません。澤庵の中央ばかり用つて後先を澤山塵溜へ棄てたり、竈の下の焚き落しが一ぱいたまつて居ても火消壺へ入れずに灰にして了つたり、薪が燃え下つて竈の口元で上向になつて居るなどは、毎々で御座います。それからコップや茶碗などよく壞れますこと『桶の中へ入れたばかりで割れました』と申しますが、平常大きな笊の中へ一ぱい入れてガチャ／＼取扱ふので、自然龜裂が出來るので御座います。それですから私は五錢か八錢の茶碗を買つて置きます、二三十錢の茶碗でも同じやうに壞れて堪りませんから……。ツイ過日も小刀を半ダース求めたのが、二本しか殘つて居りません。『小刀や肉叉は偶にビフテキなど拵へた時用ふだけだのに如何して失つて了ふのか責ても燒いても食べられる物ぢやあなし』つて申した程ですが、先づ斯樣な鹽梅で少しも心は許せません。『汝達は

私が吝嗇で小言を云ふと思ふか、汝達も縁付てから隨分始末を心掛けねばならぬから、我身の爲めと思ふて氣を付けなされ』と申し聞かせて居りますが、『貴婦の樣に嚴ましく仰しやると奉公人が後でベロリと舌を出しますよ』と御注意下すつた御方が御坐います、良人が少しも小言を申しませんから、私一人が憎まれ役ですアハヽヽヽ。

▲井戸

此家は本から井戸の多い邸で、畑にも二個あり、臺所にも柄杓で汲んで用へるのがあります、雜水井戸を合るせと八個もありませう。宅の畑は昔大久保彥衛左門の邸跡であつたのですが、其處にある埋まつた井戸を私が見付け出して井戸屋に掘らせた處、大きな漆塗の瓦を掘り出しましたが、其瓦には金で葵の紋が付いて居たので、多分拜領の瓦であつたらうと存じました井戸は皆水の性質が極宜しいので上水を引かないで濟むのです。

▲養蠶

養蠶は每年致して居りますが、大抵種紙三枚で三斛位の繭が取れます。織るのと染めるのは京都へ遣ります が、白縮緬一匹が三四圓位、風通御召が六圓位で出來ます。それですから良人の袴羽織から娘の禮服まで皆宅の繭から作りますので、呉服類を買ふ事は御坐いません。近頃は宮樣（常宮周宮御兩殿下）が御熱心に養蠶を遊ばしますが、種紙は谷の婆のが宜いから貰へと御意遊ばすさうで、實に有り難い事と存じます。大抵半枚ぐらゐ差し上げまして、五六斗位御取り遊ばすのですが、矢張り京都へ御遣しで御常着を御織らせに成ります。當年は養蠶の御次の間で繃帶卷を遊ばしたので、消毒藥の香が蠶に障つた爲ですか、結果が御惡かつた樣に承りました。私共の桑畑はチヨツト千坪弱もありましたが、白山に居つた娘夫婦の住居を此桑畑の處へ建てる爲めに七百坪ばかりの地所を塞げて桑が不足になりました。當年は會（愛國婦人會）の爲めに養蠶を致さうと存じて、切通の岩崎へ參り其話を致した處が、是非私共の桑を遣つて吳れと申されたので、私

も大喜びで仕上げ、繭悉皆を三十七圓ほどに賣り拂ひ早速愛國婦人會へ持つて參りましたが、岩倉様も佐藤少將も大層御喜びで受領書を下さいました。岩崎への禮は總裁の印の据はつた有り難い受領書を見せて喜ばせるのが何よりだと存じて居ります。

夫人は記者の請を容れて、後園の養蠶室へ案内されましたが、宏濶堅牢な三階造で桑畑の側に建てられてあり。内に入れば棚や籠を數多立て掛け又は積み重ね、自から專門家の規模が備つて居り、燭臺四五脚も一隅に片付けられてありました。夫人は團扇を用ひながら話さるゝやう、

室は此通り締切つて汚う御座います。此室を建てたのは確か良夫が歐羅巴から歸つた年でした。それまでは彼方の座敷で致したのですが、丁度六月蠶の忙しい時歸つて參ると云ふので、此室を建てました。これだけの室を平家に致せば税が大層ですから、私が考へて三階にしたので御座います。左樣家屋税だけでも大分かゝります、總ての税で三百圓ばかりに爲りませう。飼も十個所ありますので、衛生組合とか申して白い粉を撒きに參るばかりで、一個月一圓二十錢ほど取ります繭の忙しい際には、私は此室に詰め切りで握飯を食べて居ります。成るべく廢れ物のないやうに、此蠶籠の古い毀れは畑の圍などに使ひ、蠟の流れや紙屑の賣拂は下女の所得としてあります。

尚ほ數々の家政談を成され、記者は一々感じ入りつつ元の御座敷へ歸る時、御主人の書庫の前を通りましたが、此頃は毎日御自身蟲干を成され御座敷一ぱい書物で埋まると、夜半まで讀書に耽けらるゝとなど話されましたが、御勝手口を入ると年若の女中が蒲團地を織つて居りました。

▲機

常着や蒲團皮は、唐糸を買つて私や下女が織ります、機屑も纒めては繋いで織りますと丈夫な布が出來ますよ。養蠶の時働く着物は、紺と白の手織縞の筒袖を揃ひに拵へ、私が先へ立つて着てかゝるのです。今年は安上りに藍と白の辨慶を織つて着ました。彼の紙布織

ですが、彼れは郷國では原料の紙の薄い軟かいのを漉いて賣つて居ります。チョット奇麗ですが、直に角々が切れますヨ。山内侯爵の御幼少の頃、私が暫く御預り申して居りました。其頃御手習の反古を安井(息軒)先生の夫人が頂いて紙布の下拵えを致しかけ、死亡られる時、是非私に織つて呉れとの遺言でしたから、私が織りまして敷蒲團の片皮に附け大切にして居りましたが、最早切れて了ひました。

今昔の興ある御話しに聞き惚れながら、令息の御部屋の前を通りましたが、此室には御主人御夫婦の絹繪が掲げてありました。これは御夫婦が熊本籠城を出て直に撮影された御寫眞に據つて畵かれたものと話されました。他に御主人洋行中の肖像(原田直次郎氏畵)と安井息軒先生の畵像が掲げられてあり。武者人形の玩具も床の間に列られてありましたが、今年は玩具を買つてはならぬと、夫人は令息に申付けられたとの事です。

▲此邸が何より好き

此通り座敷には構ひませんので、良人が歸朝の際官宅へ引越せと御勸めの方もありましたが、何故か私は此穢い邸が大好で、官宅は御斷り申したので御在ます。

▲旅行中の御仕事

伊香保や箱根へ參る時には、仕事を澤山持つて參るので、逗留中は麻を裂いたり、靴足袋を繕つたり、小布を綴で袋を拵へたり致して居ります。平生如何な小さな布でも棄てずに溜めて置き、三角や四角に綴ぎ合して大きな袋を幾つも拵へて人様に上げ、又は女中共が買物に行くとき持たせて遣ります、風呂敷のやうに物を落す氣遣がなくて極便利で御座いますヨ。縮緬の耳も溜めて置き、ほごして繼ぎますと丈夫な反物が織れます、旅行の時汽車の中でも斯樣な耳をほごす事など致しますよ。隙なく何か仕事を致したいのは、親の教が深く沁み込んだ故で、私は最早死ぬまでこれで徹さうと思つて居ります。熊本籠城の際なども、シャツを洗つたり、軍服を繕つたり、御飯拵へを致したり、五十四日間一日でも休んだ事はありませんでした。

夫人は人の噂に逢はすと申すよりも、人の噂に幾倍せる忠實勤儉力行の美德を備へられ、忠實勤儉力行の化身と申して宜しい位です。而して其御話は光明正大磊々落々直に胸襟を披瀝されて、秋毫も修飾が無いのですから、餘り露骨のやうに感ずる節もありますが、聽いて了つて清々した心持になります。

# 天野博士夫人家政談

秋月女史

「ハイ大分御賑かで御坐いますから……」と避暑御遠慮の次第をほのめかされ。「生活に就て御意見でも實際の御話でも承はりたいので御坐いますが」との記者の鈍き太刀を受け流され「以前は苦勞して今は樂に生活して居ると云ふやうなのが話すにも御書きになるにも趣味があるやうに存じますが」と、何事にも速解りのする天野夫人は、一方に活路を與へて下さいました。

▲御住居

ズット以前は自分の家で御坐いましたが、中ごろ生活上の風波で暫く借家住居も致しました。漸く一昨年から自分の家にありついたので御坐いますが、古家で彼處此處損み所が出來まして、修繕に閉口して居ります。一そ建て直したいと存じたのですが、或方が住へるだけ住つてから建て直した方が可からうと仰しやるので、それも得策と存じて延ばして居ります。家は單だ損得の點から申せば、借家の方が得だと思ひますが、立ち入つた御話ですが、現金で置けば月々利の付く金を一時に支拂つて家を求めますのと、稅金と修繕費とを合算致しますと、差引餘り得は御坐いません。借宅は月々定つた家賃さへ拂つて居れば、結句氣樂で宜しう御坐います。唯だ自分の持家と定りますと何となく愉快な心持が致すのと、借家のやうに何時立退いて與れと言はれるか判らぬ心配が無いだけで御座います。

▲食物

食物に重きを置かなければならぬと申すのが主人の主

義ですから、これには割合かゝります。イヱ和洋どちらとも定りませんが、滋養物を撰んで料理致しますので、此頃は日本料理を主に致して居りますが、經濟上からは洋食の方が費用が少いやうで御坐いますネ。日本料理は味淋、鰹節など附け味の物と炭にかゝりますから……。それに私共では、魚屋にも十分嚴しく申して吟味致させ、品も種々注文致しますから、自然お高い物を求めて居るのだらうとは存じますが、食物には儉約といふことを致さぬ主義で、直段には構はず品質の良いのを撰んで居ります。爾うして宅では食品の變るのを好みますので、日外も御晝飯に附けました鮎が大層氣に入りましたから御夕飯にも附けましたが、又は御免だと申して大笑ひ致した事があります。野菜物でも初物が好きで御坐いますから、八百屋の買物も如何致してもかゝります。子供達の美食は、後來の爲に宜しくないか知らんと心配致しますが、宅で嚴しく粗食を禁じますので、無用な贅澤は不可といふ事を申し聞かせるだけで御坐います。粗食は氣力に關係しますのは著しいやうで、病後なども粗食では肥立たないやうで御坐いますネ。

▲炭　薪

唯今は煮焚に瓦斯を用ひますから炭は僅ですが、從來は年に堅炭が七十俵程と土竈が五六俵要りました。家内は下女が三人と書生が二人、私共と合せて十人ですが、主人が寒がりですのと料理の時臺所で幾個所も火を起すのとで、一年分の堅炭と薪は大抵靑梅から取り寄せました。炭薪は成るべく八九月頃のお廉い時に澤山求めて、土間へ積んで置くのが一番宜う御坐いますネ、土間へ永く置くと自然濕氣を含んで炭など大層持が宜くなります事。瓦斯は炭薪より幾分か高く付きますが、私共では火の用心の爲に之に代へました。イヱ燈には瓦斯は用ゐません、煤つて可けませんから……。

▲衣服、器具

以前困つた經驗を考へますから贅澤は致しませんが、從來求めずに居ました反動で、餘儀なく近頃は少しづ

つ拵へます。イヱ何處と定ては御坐いません、三井や白木へ參るともあり、又近所の吳服店で求めるとも御坐います。宅では從來ズット和服ばかりで面倒でしたが、近頃洋服に致して與れましたので、大層樂になりました。洋服の方がイクラ經濟か知れません、和服ですと第一袴にかゝりまして、仙臺平も直に前が擦れて汚くなつて堪りませんから、仙臺平より少し次の品で拵へましたが、却て損が早くつて不利ですから、矢張り又仙臺平を用ゐて居りました。其他何や彼やに隨分いりまして……其上フロックコートの一枚位はなければならず、本當に洋服の方か輕便で洗張の世話はなしどの位よいか知れません。道具類も贅澤品は求めないのですが、道具なぞは高くても良い品を求めるのが利益だらうと存じますネ。良い品ですと自然大切に取扱ひますから、永く持つ次第で御坐います。一家の經濟不經濟は道具の良否を見て判ると、或方が仰しやいましたが道理だと存じますよ。

### ▲御主人の小費

宅では御酒も煙草も用ゐまんせが、前に申し上げた通り食道樂で時々學校の書生さんに奢る位の事ですから、小費は餘り入らぬ人で御坐います。世事には一躰無頓着で總ての收入は殘らず私に渡して萬事任せきりなのです、偶に相談なぞ仕掛けましても『それは僕が干涉すべき範圍では無い』と申して澄して居りますから、私も一切細い事は耳に入れぬやうに致します。自分の小費などもイクラなくてはならぬと申した事は御坐いませんが、今日は學生を何處へ連れて行くとか云ふ話のあつた折は、私の方で氣を付けて紙入へ準備を入れて置くやうに致します。宅では何より書生が好きで、『僕は學生ほど可愛い者はない』と申して居ります。それゆゑ學生と共に何處かで食べますのが、小費の主な部分と申しても宜しい位です。

### ▲博士の修業時代

主人は九歲の時に父を失ひましたので、母親が主人と其時四歲であつた弟とを育て丶隨分難義致したので御坐います。主人は十三歲の時出京して苦學したので

すが、それから二年ばかり經つて出京した母親は非常の奮發で人の洗濯まで致して生活を立て僅かの公債の利子で大學に通はせましたので、實に普通の苦勞ではなかつたさうです。卒業致してから其公債を賣つて今川小路へ小さい家を求め、漸と安心の緒を開きましたので、私の嫁つたのも此今川小路の家で御坐いました。其頃(明治十八九年)家族は少し物價は廉し、御米など二圓で一個月あつた事も御坐いまして、今考へると可笑しいやうですよ。其上主人で專門學校(今の早稻田大學)の外に囑托の學校も受持つて居りまして別途の收入も少しはありましたので、先づ此時は平和な生活で御坐いました。其後專門學校の方が或筋の干渉で追々都合が惡く爲り、敎師は時間給と云ふ定にされましたので、休みの多かつた月は收入に大層違ひが生じて參りました。それから明治二十三年の總選擧に佐賀縣から推されましたのが、生活の困難を惹起した初めで御坐いました。斯ういふ事に關係して居ると、肝心の務は御留守で休み勝に爲り例の時間給で引かれますし、來客があつて交際費が掛りますから、出入では大層の狂ひで、負債も此選擧の際に出來たのです。併し此時に當選しましたが、二十四年十二月に解散になつてから最早自分では止める積りで居たところを明治二十五年に事情のがれ難くなつて、又選擧を爭ふ事に爲り、前年の負債が償へないうちに又何千圓といふ位の負債が出來ました。其上あの時は御承知の通り非常な干渉で、丁度選擧の前に壯士に身躰の利かぬほど毆かれましたのです。それから後は全然斷念して勸誘に御出の人にも遠ざかる樣に致し、漸く人から忘れられるやうになつたのですが、此負債のため生活の困難は御話しに爲りません。暇を潰した爲めに二個月も三個月も全然收入のない事があつた上に、月々拂ふ利金ばかりも却々で、月末に諸支出を濟ますと、あとは漸く月半ば位迄の小費しか殘りませんから、月末になると齒磨代にも差支へる事がありましたので、過日も『あの頃は一錢五厘で三日暮した事があつたッけ』と申して笑ひました。家計が傾くと病人も伴ふもので、私も產後身躰衰弱の

ために臥せつて居る際、主人がチヨツト矢來まで用足しに出た時人力車が衝き當つて跳ね飛ばされ大怪我を致したので、私も病中ながら其介抱で種々氣を採み、腦がボンヤリとなつて今言つたことを直に忘れて了ふ位でした。

それから其養生やら何やらで隨分難儀致し、お恥かしい次第ですが、一時は自分の衣類などはホンの買物に出る位の着替一枚だけ殘して、懇意な老人に頼んで預けた位で、私は最早何の經驗でも致しました。其頃は若い勢であつた故ですか、以前讀んだものなど思ひ出し、此困難を切り拔けて見るのが却つて面白いことだ位に思つて居りました。それに主人が極孝心の方で大恩になつた母親に心配を懸けては濟まぬと云ふので、一心に働いて無益の小費は一切つかひませず、專ら回復に熱心になつて居りましたから、私も母には難い事は少しも聞かせぬやうに遣繰致して居りました。衣類などもつぎはぎして算段を致すので、夜分も一時二時頃まで夜業致したことがありました。

▲花　見

斯ういふ際に餘り氣を屈しては可けないと存じて、子供や召使を殘らず連れて花見に出掛け、暢氣に遊んで參りましたが、氣が晴れて根が續くやうに爲りました

私の家で每年花見を致すのは、此時から始まつて例となつたので御座います。

▲負債完濟

人樣の物を拜借して居るうちは、一日も安い心が御坐いませんでしたが、漸く明治三十年までに全然借財を濟して了ひまして暢々致しました。それから次第に生活も樂に爲り、收入も少しづゝ增えて參ると云ふ具合で、唯今では先づ餘裕が出來たので御坐います。人樣がよく今一度若くなつて見たいと仰しやいますが、私は若い時の辛酸が浸み込んで居ますから、直に彼樣な辛い目は厭なこと……眞平御免といふ感が浮びますのですよ。併し唯今になつて、幾分か人樣の御苦勞も解り、少しも油斷しないやうになつたのは、一時難儀致した結果なので、私に取つては大きな學問であ

つたと存じますよ。

▲收支の帳簿

日々の小費と月末拂を自巳流の簿記躰に認めるとは、家を持ちましてから今日まで少しも休みません。窮した時代には帳簿を附ける張合もなかつたのですが、他日の參考にと存じて一日も缺かさず認め置きました。其頃と唯今とは豫算の立て方が違ひまして、唯今では先月の繰越と收入とを合せて其内から今月の豫算高を引き其剩餘を預けると云ふ風に出來ますが、窮して居る頃は、先月は幾何不足、今月は幾何不足と云ふ風に不足の高を計算して、不足高が少なければ先づ嬉しいと存じたやうな次第で、畢竟不足の豫算を立てゝ居たやうなものでした。唯今でも昔を忘れぬ爲めに、時々其時代の帳簿を取り出して見て居ります。

夫人は却々の御話上手で、文學趣味哲學趣味を含まれて居るとは、昨年『貴婦人の嗜好』中に紹介申し上げた通りですが、今度の御話中にも、善惡の距離は決して天地雲泥ではなく殆ど密接して居ることを一實例に照らして示され、『番町の舊宅は目も當てられぬ穢さで山三の浪宅のやうでした』も演劇の典故を引かれ、『本當の儉約法は逼迫の際には行はれません』と經濟上の眞理を敎へられました。夫人は斯く妙趣横溢、感興湧くばかりの御話を爲さつて、對手の手の舞ひ足の蹈むを知らしめぬ御方ですが、小聲で落着き拂つて居らつしやる處は、練達な話術家の態度と熱々感服致しました。

# 加納子爵夫人生活談

中村鈴子

大森八景園に隣れる鐵柵の御門は、舊一ノ宮（上總）藩主子爵加納久宜氏の御邸で、平民的生活を以て文明的敎育を令息令孃に施されつゝあるとは、世人の普く歎美する所であります。記者の訪問致したのは八月十九日の午前でしたが、御門を入ると右手に御供待があ

つて、松、梅、櫻、楓などの間に躑躅を列植せる阪路は、兩側に茶の木で圍うた芋畑、菜畑、麥冬畑などが層一層匠劃正しく作られてあり。「玄關及び勝手口は此道より」と書いた立札ある道を縫ひ登ること數十歩、寂寛を破る蟬聲に迎へられて綠陰の下を過ぎ、竹の枝折戸を開けて御玄關にベルを鳴らし、お女中に導かれて滑るやうな御廊下を二つ三つ越え、二室續きの應接室へ通りました。此室は　兩陛下の御眞影、博恭親王殿下の御寫眞等を掲げられ、置物は加納家代々の重寶龍頭の兜、枝振見事な珊瑚、彫刻精巧な黒檀の書棚等何れも整齊雅潔に裝置されてあり。東南に面する御庭は廣々とした芝生で、圓形に刈込だ若松の間に車井戸の屋根僅かに見はれ、崖下の木立を越えて廣濶な眼界は此御庭の特有とも申すべく、大森の村落田圃を隔てて鈴が森の松林模糊たる空氣に包まれ、品川灣の白帆點々たる間を汽船の煙長く曳いて峯なす雲に影を沒するなど、何時まで眺めても眺め飽きぬ光景と存じました。下り列車の轟々たる響稍遠ざかれる時、夫人は出で來られましたが、白絣の帷子に黒繻子と紫紺繻子との晝夜帯を締め、小さい丸髷に結ばれ中高で淸秀な御容姿に、眞率平明な御應對振り、記者に多大の裨益を與へられました。記者は先づ御主人が鹿兒島縣知事御奉職時代の御生活から伺ひ始めました。

### ▲鹿兒島の生活

明治二十七年に圖らず仰せ付かりました時、主人は姑と私を喚んで、任地へ參つて家族が長官顏をする事を呉々も戒めました。然て子供や下女を引き連れて引越しました所が、先知事さんの代から使はれて居た家僕だとか又は書生だとか行きがゝり上傭かねばならぬ者が可なり在りまして、一時は下ばかり十三人それに家族が十一人皆で二十四人の生活でしたが物價が唯今とは違ひます上に、鹿兒島は何でもお廉い處でしたから、唯今の小人數よりも經費が少くつて濟みました。米が東京で一升二十五錢にも暴騰致した時に十八錢の相場でした、炭は唯今三十二錢位のより心持小さい俵が十錢、薪は櫸のやうな堅木を一間四方積んだのを一

ザイと申して五圓で此割賃が五十錢と定つて居り薪を買ふとチャント薪割男が參つて割るのですが、皆ぶらぶらして出して置く御茶を飮んだり漬物を食べたりして暇を潰し、澤山割つて澤山賃錢を稼がうとは致しません、畢竟生活が樂な故で御坐いませう。沖繩の生活と申したら本當に御話のやうに樂なので、石油を賣り歩く者が一罐買つて了ふと、空罐を四錢で問屋へ買つて貰ふので、其四錢だけが利益ださうですが、四錢あれば三日も暮せるさうです。沖繩では常食が薩摩藷ですが、鹿兒島でも多くお藷が御飯の代りですよ。それで燒芋屋はありませんでしたから、私は誰か燒芋屋を始めたら乾度賣れるだらうと存じ、資本ぐらゐは出して遣るからと出入の者に勸めた事がありました。

### ▲大島の女學生

主人か赴任匆々管轄の島々を巡回しましたところ、小學の高等科に出て居る女子は唯つた一人で西いと子と申す者でしたが、他日鹿兒島の女子師範學校へ入學したい望の由で、主人も感心致し、小學卒業の上は世話して遣らうと約束致して置いたさうで、それが忘れた時分とヨッタリ宅へ出て參つたのですが、却々確乎した女で、特に男女の隔てなどは困るほど嚴重に守つて居り、チヨット書生に之を渡して與れと申しても、容を改めて斷ると云ふ風で、言葉も敎師に敎へられた通り漢語ばかり使つて居りました。それに卷帶の島風で後で帶を締めることが出來ません。一躰鹿島では皆前で結んで後へ廻しますネ。此女が段々と樣子も言葉も變つて、チヨット見ては大島の者と思はれないやうになりましたが、唯だ顏色は大島特有の青い土氣色でした。

### ▲歸京後規定の家憲

七年もなじみました鹿兒島を去る時は、名殘惜くつて其上皆樣が留任運動を爲すつて下すつて別れる時は實に泣きの涙でした。此處へ歸りましてからは、御承知の通り華族と申しても小祿の家で多勢の子に讓るべき資産とても餘り多くは無いのですが、何卒借財だけは讓りたくないと云ふ考へで、一同心を揃へて節約を守

るとに定めました。召使も下婢三人に家僕一人だけと致し、子供達の學校通ひも三等汽車に乘せ、新橋停車場から學校までは徒歩と定め、衣服は夏冬とも一切綿服筒袖と致したのです。

▲令息令孃の通學

幼少で亡くなりました長男は、只今居ると今度（征露役）の御役に立つ位の年になるので御坐います。長女は縁付きまして最早孫もありますので、宅に居るのは十八歳に十六歳の男兒と、十五から十二まで年子の女子と都合六人で御坐います。此邊から華族女學校へ御通はせの方は大抵二等で、其處の停車場へも御車、新橋から學校までも御車で、其上女中が毎日御出迎へと云ふやうに成さる中を、私共の子供は男兒は勿論、末の娘まで人車には乘せぬ事とし、三等の汽車に乘せて通はせましたから、最初は子供心に片身が狹い心持も致したでせうが、近頃は何方樣でも皆三等になさいました。學生には汽車賃の割引がありまして、普通定期の乘車賃より又お廉くなつて居り、丁度半期で十圓づつで御坐います、學生の爲めには鐵道局で此通り便利を與へて居るのに、二等で通はせるのは無益で御坐います。それが止んだのは結構ですが、唯だ人車の送り迎へだけは止みません。新橋から華族女學校まで私が歩いて四十分かゝりますが、娘達はモット足が早う御坐います。それで大抵な雨天にも歩きますけれども、ひどい風雨の節には新橋停車場の直側に主人が乘りつけの朝屋と申す車宿へ學校から電話をかけて呼ぶやうに致して居ります。倅共は風雨の時には四谷から電車で途中乘換致して此方まで歸る事があります、本當は定期のパッスを持つて居る者が電車に乘るのは損ですけれども、時によつて已むを得ません。私が時々東京へ參るにも三等ですが、主人だけは二等の定期符切を買つて居ります、これは年に三十一圓八十錢ですが、一体に定期切符は便利な物で、一日に何度でも自由に乘れますから、子供なぞ御友達が御出でだと何時も東京まで送つたりして居ります。

▲月謝と御辨當

華族女學校の月謝は一圓五十錢以上階級が御坐いますが、私共では二圓づゝ出して居ります。御辨當は食麪包ばかりで、六人分を二斤と定めて置きます。娘達は小さな切れを三個程づゝで澤山なので、男兒の方が餘程多い割合になつて居ります。それにジャミとかバタとか各々好いた方を付けて遣はしますが、中にはジャミとバタと兩方少しづゝ入れて下さいと申す者もあります。皆慣れて居りますから、毎日それだけで澤山ださうですが、其代り歸つて參ると直ぐ御夕飯と云ふ規則に致し、四時半に一同食事するので御坐います。

▲食事

私共では主人を始め一同間食は一切致しません。子供も習慣になつて食べたがりは致しませんが、末の娘など餘り寂しさうな時はツイ私の方で可愛相だと存じて少しばかりのビスケットなど遣はしますと、其日の御夕飯が直ぐ減けます、チャンド御腹が定つて居ると見えますネ。十八の悴は一番嚴ましう御坐いまして『母様又何か夏様にお上げなさつたでせう、可けません、左様いふ事をなさるから爲になりません』と叱され『誠に面目ないがツイ少しばかり遣りました』と私が詫るやうな始末で御坐います。其代り能く御飯を食べますこと〳〵、何の子供も驚くやうに食べます、並の御茶漬茶碗に山盛四ぜんは缺しません。時によると『母様今日は五ぜん食べました』などゝ自慢に致しますから、『さうかい澤山お上り』と申して笑ふので御坐いますが、宅の娘共を嫁に遣はす時は大食と云ふことを第一に承知して貰はなければならないと心配致して居りますホヽヽヽ。畢竟運動が激しくつて、身体が丈夫な故で御坐いましやう。

▲米

家の人數が家族八人に家婢三人、家僕一人、都合十一人で、御米が平均一個月に三俵半、麥が七升程です。朝と晝は米の御飯で御夕飯に米一升につき麥三合の割にして炊きます。米屋は隨分方々から競つて參りますが、此處に住んだ時からの取付の店ばかりからで、一度も取り易へません。其代りに小言も充分に申して遣

ります、先達ても一升の小豆の中に凡そ一合程も屑が在つたので、小言を申したところ、雇人の不行届にかこつけましたから、私が談じて遣りました、「顧客先へ物を持ち出す時主人や番頭が無責任では濟むまい、一體月々の支拂を奇麗にすれば、何處の店から買ふのも自由であるのに、殊に汝の店を愛顧にして居るのだから、其積りで勉强するが宜い、私の家では一々俵を開けて衡つて見ないからと言つて、如何ほど升數を減らして置いても可いと云ふやうな怪しからぬ事があれば以後斷る」と、斯う申し遣はしました處、さん〴〵詫び入つて注意する樣になりました。矢張り商人には時時小言が必要で御座いまする。

### ▲牛肉魚類

倅が日曜だけ肉食をしたいと申しますので、此日はずッとした洋食を拵え、間は野菜を煮たり種々にして用ゐます。平生は品川から取りますが、客でも致す時には、私が一番滊車で土橋の喜川田まで買ひに參り、西洋野菜も序に彼の近所の梅村で取つて參ります。誰ぞ病氣でも致した時は、肉をチヨツト炙つて搾め、搾れた血汁を用ゐたり致すので却々肉も要りますが、平生は平均七八圓位で御座いませう、宅では牛肉ばかりで豚は用ひません。御魚は東京に較べて餘りお安くは無いと存じます。立ち入つた御話ですが、五寸位の小鯵が一錢八厘位で、之を二尾に何か野菜を添へたのを奥から下へ一統に附けますが、倅達は血氣盛んの年頃で、却々二尾ぐらゐでは足りませんから、先づ少くも總計三十尾位は要ります。尤も御魚は時によつて直段もいろ〳〵變りますが、先づ一日に六十錢位と定めて置きます。奥と召使と食物の違ふのは、主人が大嫌ひで、殘らず公平に致して居るので御座います。

### ▲野菜

八百屋物は畑の物で大抵間に合ひますが、客でも致す時に用ふ蓮根、慈姑、午蒡のやうな物とか、胡麻とかホンの僅ばかりを買ひますだけで、一個月二圓までにはなりません。畑の世話は家僕が一切熱心に致し、何でも善く出來まして、此頃は毎朝百個位の茄子が取れ

ます。冬の漬菜は、皆さんが加納の菜は別段だと仰しやる位で、井の中の蛙か知れませんが、土地が適して居ますのか隨分旨しい御葉が出來ますので、毎年四樽ほど漬けます。菜はさんたう菜と申して唐菜のやうで却々丈が高くなるのですが、其御葉の根の所を細く短册に切つてチョット鹽で壓し、辛子醤油で頂くとサッパリして旨しう御座いますよ。一同が菜漬を珍重しますので、澤庵は三樽しか漬けません。畑物の種は三田の育種場から買ひ、肥料は肥料取次所から買ひますが、肥料は二俵(二圓位)ほど買ひますと剩つて人樣に上げる位で御座います。

▲茶

畑の垣に少しばかり茶の木を植ゑ、毎年一同で御茶摘を致し、番茶に製して置きます。併し主人は御茶嫌ひで、御客樣にも冬は珈琲、夏は麥湯ばかり出しますから、摘んだのは私が御茶好きで時々頂くばかり、大抵は遣ひ物に致して了ひます。

▲牛乳と卵

牛乳は病氣の時は例外ですけれども、平生は主人が二合、倅兩人が一合宛、毎日四合取つて居ります。卵は宅の鷄が生むので用料だけ御座います、ハイ唯今雄が一羽に雌が十二羽、それに此程生れた名古屋コーチンの雛雞が居ります。雞の世話は私が受持で、毎朝早く塒を開けて遣るのが樂みで御座います。餌は稗の外に肴の腸を煮て遣つたり致します。お暑い間は餘り卵を生みませんが、それでも毎日六個は拾つて參るので、春さきの生む盛りには兩手に持ち切れませんから籠へ入れて持つて來る位で御座います。

▲味噌醤油

味噌は辛味噌を用ひますが、必要だけづゝ求めます。大抵五百目づゝ取りますが、一個月一貫五百目程でせう。醤油は月に一樽で餘る位で、豆類など煮るには醤油を少しも用ゐないで鹽と砂糖で煮ます。鰹節は一圓位ですね、これは下婢に用はせるのに極堅い良いのを當てがひませんと、無益に澤山削いて不經濟になりますから、イで一圓に三本位の薩摩節を購つて置きます。

▲砂糖

私共には酒鹽の外酒類は一切用ゐません、其代りに砂糖の要るとは非常で御坐います。特に苺時分には子供が學校から歸つて參ると、裏の苺畑へ出て苺を大きな味噌漉に一パイ取つて參り、洗つて丼へ入れ白砂糖を澤山かけて父を始め下女にまで悉皆行渡るやうに致し、御友達でも御出でなさると矢張り苺に砂糖を澤山かけて出しますから、砂糖は隨分澤山用ゐます。苺のない時でも御菓子を拵へたり、御汁粉に入れたり、種種に用ひますから、毎月白砂糖一貫目足らず、天光五百目、玉砂糖五百目程用ゐます。煑物には天光や玉砂糖の滓を引いて用ひます。

▲麥酒を廢して寄附金に

主人は日本酒を少しも頂きませんで、御菓子が好きな方で御坐いますが、食後に越の雪を一個食べる位で御坐います。併し麥酒だけは胃の爲めに宜いと云ふので夕飯に半罎を私と二人で飲んで居りました。所が主人が先頃腸の具合を損じてから、麥酒も全然止めました。主人が飲まぬのに私が好きもせぬ物を頂くのも無益と存じ、一個月四圓程か丶る麥酒代を毎月獎兵會へ寄附する事に定めました。

▲炭　薪

炭は唯今六俵ぐらゐ用ひます。冬分はストーブに土竈炭を用ゐ、客間の埋け炭は櫻炭を用ゐますが、組合の會議などがあつて夜を更す時は、一晩に櫻炭一俵（三十錢）位費つて了ひます。組合と申すのは小さな銀行の樣なもので、村の人々組合つて貯金致しそれを資本家へ貸して利分を取るのですが、私共で其周旋をして居るのです。薪で御坐いますが、これは湯殿の分も入れて四圓位で御坐います。

▲現金買ひ

通にして置くのは米、牛肉、牛乳ぐらゐで、あとは殘らず現金拂で御坐います。通帳と申すものは間違ひの因で、覺えのない品が附けてあつたとか、何とかで面倒で可けません。

▲電氣と石油

電氣鐵道が此地へ引けますと、一番先に申し込み、電氣燈を引きましたので、十燭光の半夜燈を八個所程附けて居ります。此器械を借りると十六錢づゝ掛るのですが、私共では永遠轉宅致さぬ積りですから、最初に買つて了つたのです。ハイ便利燈と申すと二室兼用に用ふので、此室で用ふ時は彼室は消えるのです。宅では此座敷と主人の書齋が便利燈、又臺所と玄關が便利燈になつて居るのですが、臺所の御夕飯は五時で大概日の暮れぬ内に後仕舞が出來て了ひます。併し朝が早いので冬分はランプを點けなければなりません。此石油が一鑵弱も要りませう。宅では安全の爲に久美油を用つて居りまして、一箱(二鑵入)五圓二十五錢、石油より一箱で二圓位高う御坐いませうか、電氣燈をつけてからは、ランプが危なくなつて耐らなく思はれます。

▲新聞

新聞は時事新報ばかり購つて居りましたが、私が考へ付いて毎日讀んだあとを此大森から出征した人達(四十八人)へ送る事にしましたが、一種の新聞では一個月内に四十八人に行き屆きませんから、此頃其爲めに萬朝報も購つて居ります。子供には新聞を見せません。三面など解せぬことがあると質問されて返答に困る事柄がありますから。雜誌は子供に必要なのを購つて見せます。

▲植木屋

庭はチヨイト先ア主人の道樂とでも申すのでせう。これだけの庭ですから、毎日植木屋が缺さず參つて居り、芝の手入れの際には六七人も參ります。皆日當ですが、毎月平均二十圓位拂つて居りませう。イエ開け放しで別段何の風情もありませんが、唯だ月の出と日の出は此庭の自慢で、毎朝日の出の時は、何か用を仕掛けて居ても、此庭へ來て見るのが、實に何より樂みで御坐います。

▲御行啓の榮譽

昨年十一月十三日に　皇后陛下が八景園へ御行啓あらせられましたが、此御沙汰は其前日に承りましたの

で、大森細工を献上致したいと存じましたけれども、何分急の場合で職人が間に合ひませんので、枝柿を五十把ほど取り寄せ、廣蓋へ載せて天覧に供へ奉つたところ、大層御叡慮に適ひ、兒島様(惟謙氏)御夫婦と私共夫婦に拜謁仰せ付けられ、其後(午前十一時頃)で香川様が久宜に貴方の御邸へ御立寄の御思召を漏らされましたから左様心得て居なさいと仰しやつたので、私共夫婦は驚喜恐懼致し、私は直に宅へ飛んで歸り、下婢共に掃除を申し付け、又下婢共が障子の孔からでも拜むやうな事があつては恐れ多いから、座敷の障子は悉皆開け拂ひ、奥の方は締切に致し、庭の落葉など掃かせて居るうちに最早御行啓遊ばし、此向ふの處へ御椅子を置かれ、望遠鏡で海を御覽遊ばしては久宜に御尋ねなど遊ばし、丁度四十分ほど御小休になりました其間に千家様が子供達の拜謁を願つたら宜しからうと仰しやつて下さいましたので、恐れ多いとは存じながら早速願ひましたが、其時までは門前で天顔を拜む積りで木綿の筒袖に袴を附けて居りましたから、衣服を着換へる暇もなく其儘　陛下の御前へ出ましたが、直御側まで御召しに成り、年は幾つ學校は何處と御尋ねあらせられ、筒袖で可愛らしいと御言葉を賜はり、尚は八景園へ御行啓の上に子供等を召され御菓子を賜はつたので、私共は嬉しさの餘り全然夢のやうに存じました。御行啓の折は大抵椅子を宮内省から運ばれますが、私共では特に宅の椅子に御掛けを辱うしたので、其椅子は直箱へ入れ樟腦詰に致して大切に藏へ收め、其御場所を人に蹈ましては勿躰ないので石で圍ひ大理石で碑を立て、文字は久宜の兄(立花種恭子)が認め永く此榮譽を子孫に殘す事に致しました。彼處に見ゆる大理石がそれで御坐います。

### ▲衣服

衣服は綿服と定めて、主人始め實行すると申しますが年を取つて木綿づくめで徹さずともと存じ、主人だけには勸めて少しは柔かい物も着せます。併し前にも申し上げた通り、子供は綿服で筒袖と定め、學校は勿論何處へ出ますにも改良服で徹して居ります。學費と申

すものは實にお廉いものですが、衣服に綺羅を張り出したら、何の位かゝるか數が知れません。八丈を御常着とし二尺五寸もある御袖の御衣服で御出でのある中へ、宅の子供が綿服で參つて若し耻ぢて厭になれば華族女學校に負けたので、參り徹せば勝つたのだと、私は申して居りましたが、今日まで何とも申さずに平氣で通つて居ります。華族女學校で早く服制を一定すれば宜いと存じますね、下には綸子を召さうと紗綾を召さうと御身分次第ですが、上張りだけは實踐女學校のやうに一定なすつたら如何でせう。左樣すれば競爭の弊も止み、又一つには誰でも一見して華族女學校生と判るので、生徒も自然行儀を愼むから極宜いと存じます、子供の改良服は山根正次さんの考案に、私が少し工夫を加へた物を拵へますが、布地もタント入らず、運動上にも便利で御坐います。此頃四人の娘の單衣用に求めたのは、舶來更紗で二十一ヤール(三反程)七圓十四錢でしたが、これだけで袴も入りません。唯だ裁ち合せの都合がありますから、四人共何時も揃ひで、各自に柄を選ばせると云ふ事は致させません。冬は下に綿入れの袖なしを着せ、上へはフランネルに金巾の裏をつけた改良服を着せます、主人は帶と長袖が大嫌ひで、先達ても夏冬一二枚の袖の着物に一二筋の帶を土用干致して居る處へ主人が歸つて參り、今に夕立が來れば宜いと申しますから、私もお暑いからと存じて返事して居ました處、イヤ夕立が此座敷へかゝつて帶も着物も流して了ふと宜いな、毎年虫干をする世話が無くつて濟々すると申して大笑致したのです。

▲靴

履物は靴ばかりで、殆んど下駄を穿くのが不慣の位です、私共の子供は車に乘りません上に運動が激しいので、靴の損みは如何しても早う御坐います。それで靴は能く足に合つた上等のを、高橋か大塚へ誂へて製らせますが、一足四圓のを年に二足程も穿きませう。

▲下婢

朝は五時にベルを鳴して一同起き出で、夜は九時にベルを鳴して臥ります。朝は私が此應接間と彼方の住居

の掃除を致し、それから裏庭へ出て鷄の世話を致します。夜分は九時に主人や子供が息みまして、私は火の元や戸締を見廻り、十時に息むので御坐います。三人の下女の受持は略定めてありますが、忙しい時は互に助け合ふやうに致させます。それから毎月貯金を致させますが、十年餘も勤めた乳母などは百圓も貯金致した上に、衣類も可なり拵えて先達て緣付きました。又高等女學校を卒業して家政の實習をしたい爲めに參つて居る者も御坐います。

▲醫　者

私共では運動が激しいので、幸に病人は出來ませぬが、掛りつけの醫者は日本橋の笹倉英三郎で用があれば電話で呼びます。電話は停車場の自働電話へ參るので……實は電話も設けたいと存じたのですが、品川から引きますだけで五六百圓もかゝりますから、澤山も用のないのに贅澤だと存じて止めました。

聽て御主人は御庭傳ひに歸り來られ、興味多き教育談家政談を聽かせられましたが、夫人は晝餐後、後園に案内せられ、先づ鐵網で張つた雞の小屋、御子達御培養の花壇、苺畑、葡萄の絡んだ垣、水蜜桃、茱萸、栗などを見せられ、それで毎日御夕飯の際に食る菓物は皆な御庭の物と話されました。それから私は行啓紀念の石碑を拜し、紅葉の頃に是非お出で下さいとの御深切な御言葉を嬉しく承つて退つたので御坐います。

▲紐育府の富

富實に於ては世界第一と稱する同府の富は市中の老幼男女一切平均して一人前四千五百弗なれば隨て上等社會の奢り甚しく、日常の生活にすら互に派手を競ひ、外面を飾るさまは歐洲の大都會に住み常住綺羅錦繡の美に飽きたる人の目にも驚く許りなるが、今その一端を記さんに同市内に於て毎年訴訟の爲に支拂ふ高は二千四百萬弗、疾病の爲めに支拂ふ高千五百三十萬弗、償債へ四百萬弗、慈善事業の爲め寄捨する額二千萬弗なりといふ流石は世界の雄都なり。

# 紳商澁澤氏の臺所

實業界の覇王として明治の始めより紳商の名を博された澁澤男爵家の生活状態を承りましたから、百生活の資料として記して見ませう。同家は兜町の本宅王子の別莊と二軒に分れて居ますが何方にも然して變りはないそうです、家族は主人夫婦親子の外、女中廿八人、書生十人、車夫三人、馭者三人、下男五人、料理人二人、合計五十一人の同勢です上下一同の賄費一ヶ月概ね二千五百圓以上三千圓以下で、存外經費は少ないやうであります。主人等は朝牛乳一合に鷄卵一二個夫に捻麵麭二個か食麵麭半斤（一斤七錢の物）と珈琲などで三日目毎ぐらゐには一等米の飯に菜や和布やの實を入れた三州味噌の汁と香の物を食さるゝそうです、執事書生等にも同く一等米を供され又鷄卵一個、香の物味噌汁は膳に上ります、下女下男達は汁に香の物に、芋の煮轉がしなど、尋で午飯は主人等は多く外出されるので格別の用意もないそうで、書生以下は牛肉や鮭ぐらゐ、又夕飯には主人側は鰻とか刺身とか清しの汁物などを用ゐ、此外に一週一度程は牛鳥肉のロースを食はれるが主人は精進揚が大好物だそうで、雇人達は豆腐の汁に香の物など是も一週一度ぐらゐは牛鳥肉の馳走に與る、酒は一家殘らず嫌ひ揃ひで、同家に酒の御用は甚だ少いとの事、雇人等に蕎麥の振舞のある事あれどこれは月に一度か二度で槪して儉約の方であります。併し同じ紳商でも安田家の家計の質素なのに比べれば中々贅澤なものだとは世間の評判です。

# 社會生活四階級

## 上等社會の團欒





下等社會の團欒

# 社會生活四階級

## 中等社會の團欒





最下層の團欒

# 豪商大倉氏の臺所

澁澤氏の紳商たると同じく大倉氏は豪商を以て聞へて居ります、同家の生活向は中々豪華だそうで益所の出入の盛んな事は百萬石の大名華族も顔色なしといふ有様だそうです、まづその一家の人數を申しますと主人側が十二人、雇人は女中が廿一人、其他執事、應接係、馬丁、車夫と數へて一家四十三人の暮しです、其處で雇人等一同の食物は朝が田舍味噌の汁に豆腐の實、午は剝身豆腐か干魚、鮭など、夜は糸蒟蒻、蓮根、燒豆腐と云つた樣な處で日曜日には刺身或は牛肉などを午に出されますが、主人側の食物は喜八郎夫婦は主に日本料理を用ゐられ朝は大抵白味噌の汁、新漬の香の物、滋養物としてはソップ玉子などを用ゐ牛乳は飲まれぬ、午は魚鳥牛肉などを始め五種ぐらゐの菜は並べられますが主人は肉類は燒いたのを、魚は旬物よりも走りを好まれ、刺身は鮪か鯛と相場が極つて居ますが比目魚の中落が大好物だそうです次いでは蝦、蝦蛄、蟹の類でこれ等は毎日でも飽かれぬとか、夜は野菜物を主に膳に上す例で就中ヌタを好まれる、此の如くで西洋料理は餘り好まぬ爲め料理人も日本の料理方が二人居ります而して主人は大食であつて三度々々二人前は必と調へるとの事、さて同家一個月の食料費用は約一千圓以上一千二三百圓位であるそうですが來客の分は赤坂溜池の料理屋三河屋から取寄せ、鳥は芝愛宕下の稻毛屋で平均月に二十羽ぐらゐ、又魚は麻布市兵衛町の三河屋一手であつて毎月五六百圓の勘定は下がるとの事、西洋食料品は新橋竹川町の亀屋等から買入るといふ事です。彼の銀行界の帝王たる安田氏が朝夕質素な生活に比較しては實に雲泥の相違があります。




# 大名華族の家政

△△△

明治は三十七年の間に維新討幕の戰爭から、今日日露戰爭の大役を見るに至るまで、日本の社會狀態は驚くべき進歩を致しました、纔か四十年に滿たぬ歲月ではありますが其間の變遷は二百年、三百年の間にも見られぬほどで、誠に應接に遑ないといふ有樣でした。封建の制度が壞れて、四民平等といふ事になり、それから又華族といふ階級が出來て國民の中に一段の城壁が築かれ、名門の家、勳功の人は庶人と區別を立てられ、顯榮の地位を占め一世の榮爵を荷ふて社交上に一種の特權を得、又社會生活上の模範ともなる事と成りました。是れに就て兎角の議論もありますが我々は社會組織の必要上、又世界の大勢上自然こうならねばならぬ因緣となつたのであらうと思ひます。

華族が既に社會國民の儀表であり、又國民生活上の模範であるとすれば、國民はその階級に感謝しこ隨て社交上にも相當の尊敬を拂はねばなりません我々が今社會百生活の一資料としてこゝに大名の家事向を御紹介致すのも必竟はこの趣旨からであります。

一と口に華族と申してもその大小、高下の階級は格段の差がありまして上は公侯爵の名門、雄族、下は子爵男爵の小家に至るまで等しく華族である、又昔時三十萬石、五十萬石の諸侯から下つて一萬石、五千石の小身、まるで殿樣と家來ほどの差があり、又徴錄の公卿家族に至るまで均しく榮爵の家であるから其の生活

狀態を記するにも一概に當はめる譯には參りません、されば爰に記するのは專ら舊時の大諸侯の家柄で、少くも二十五萬石以上の御大身、百萬圓以上の御臺所を申上るのです、舊二十五萬石以上の諸侯で今日百萬圓以上の御大身家は、毛利、島津、前田、細川、兩池田、鍋島、黑田、蜂須賀、三德川、松平、山内といふ樣な方であります。

まづ一般の家の御身代を申上ると同じ大諸侯でも格外御有福で格外に御暮し向の豪華なのがあり、又名聲や門格の著るしいにも拘らず御活計を存外質素に致さるるのもありますが、概していへば御身代百萬圓以上、年々の御暮しに五萬圓乃至十萬圓の御世帶といふのが大名華族通例だそうであります。

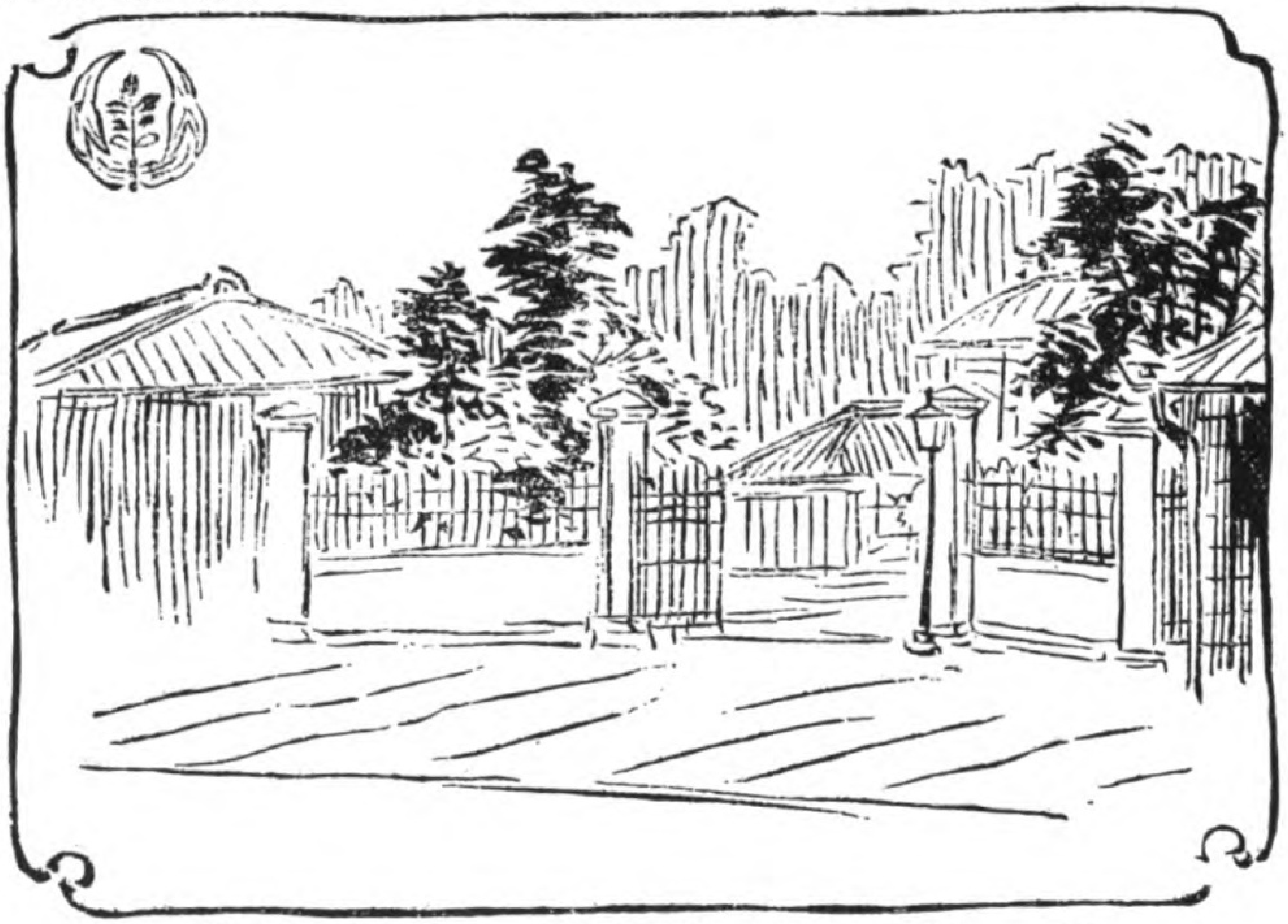
まづ其の御邸の人數から申しませう元より大名の事でありますす故、如何に質素にされても、まだ／＼舊來の慣習が家の周圍に附き纏ふてゐて、奧向から、表へかけて不斷三十人や五十人の家來の居ない邸はありません。まづ奧向からいふと老女、侍女、小間使これが奧方專屬で其外姬樣の御附きもあれば御隱居樣の御附も乾度一人、嚴ましいお邸になるとこれでも二三人は居ります、夫から乳母、保母、中働き、下働き、御縫物女が常住二人、奧樣の御髮上げ、御湯召、御衣裳の御世話をするものは侍女兼帶としても奧向だけで十五六人の奉公人が勤むる事となつて居ります。

次に表方には家令一人、家扶二三人、家從（家從の中に家庭教師兼帶のもある）四五人、御庭の掃除やら常住屋敷内の手入に職人兼帶の下男が二人は居ります、夫から馭者、馬丁、車夫、臺所に料理番二人、水仕女二人、是等が常住の奉公人として其外臨時に御出入する家庭教師用人らしい者が乾度二三人はあるので、どうしても大名邸には五十人の奉公人は欠けないのであります。これが大名の家に取つて少なからぬ雜用の原因ではありますが、某侯爵家では、家扶以下雇人の給料だけで月々千二三百圓はお仕拂になるといふ事を承はりました。で偶々洋行歸りの若殿が家督を相續されて彼地の生活に比較してあまり無駄な費用が多い

など丶申して一時家政改革の御沙汰が起りますけれども、それがいつの間にか又以前の慣例に立戻つて家扶以下四五十人の役々が頭を揃へる事となります。

### △年中行事の一
（七百圓の帶）

大名の家の年中行事は維新後大概廢りまして舊時の面影は殆んどなく、唯僅かに正月と盆だけ、むかしの儀式の一部分を執行されて居ります。それすらほんの形ばかりで豪奢の風は今日見る事は出來ません、けれども其の代り文明流の交際を開かれる家々では



毛利公爵本邸（高輪）

御屋敷の庭開き、觀櫻會、また季節其の折々の賓客御招待で家柄相應の饗應事が催ふされるから一回に三百圓五百圓の交際費の消へる事は度々であります。

某公爵家で若樣が洋行歸りに舊臣を招いて祝宴を開かれた事がある、來客百四十人に五圓づ丶の御料理を附けられまして此時の費用一切で三千圓懸つたといふ事でした、それから又某家では老公の賀筵を催ふされた時、御同族一同へ御祝ひの配り物が總計で五千圓に及んだといふ事をき丶ました。

大名の家で一番費用のか丶る

のは、姫様の御婚禮であります、某侯爵家にお二人の姫君があつて、一人は同族へ嫁せられ、一人は宮家へ入輿になりましたが、宮家へ參られたのは萬事洋風で御割合に質素であッたといふ事でしたが、それでも一領の御衣裳に七千圓、頸飾だけで五千圓近くの品物を調へられたといふ事です。同族へ嫁せられたのは、純粋の和式で萬事は御隠居様の御指示で尤も古風に奥床しく營まれまして當世では滅多に見られないお大名のお輿入でしたが、新調の簞笥十七棹に詰られる限詰て御遣はしになッたので東京隨一の呉服店二軒への仕拂高が三萬五千圓といふ高に上りました、これは當時會計の役に當ッた家扶から直に承ッたお話ですから間違ひはありません。其証據には衣裳方の老女が見立てた品物が呉服店に無いといふので態々京都の織元へ店員を上せて品物を取揃へさせたといふ事です。其時の一ッ話に御誂らへの價値の帶は容易に出來ない、出來ない譯です、不斷そんな帶は拵らへても買手が無いといふので三十日間日を延べて織工を精撰して織せましたその一筋の帶が七百圓であッたと申す事をきゝました然るに此の嫁君は惜しい事に入輿後一年經たぬうちに御逝去になッて十七棹の簞笥三棹だけ手をおつけになッたきり餘の十幾棹の御衣裳は其儘御形身分として御里方の召使共に配分されて仕舞ひました。

### △新邸の經營（四十萬圓の建築）

これは强ち大名方に限りませんが、近年上流社會で、新らしく御出世になッた方々、又は御身代の盛んになつた方々で新邸を造營にならない方はありません、殊に大名方では、維新後萬事の御改革と共に御屋敷の規模をすつかり御改めになつて、新邸の御經營といふ事になりました。中でも永田町（溜池）の鍋島様、三田の蜂須賀様、高輪の毛利様、赤阪の黒田様、高田の細川様などは有名なものであります、東京で出來星富限の新邸といへば大概は日本作を主にして傍らに洋風の一棟を建てられるのが通例ですが、何を申すも三百年來の領主様で三十萬石五十萬石の大名ですから、いく

ら世の中が開化したからといつても、そう簡單には參りません、世間へ對する外見やら顯德やらで、舊臣などが喧ましいから新邸を御經營になつても中々宏大なものです。鍋島家あたりは餘程以前にお造營になつた御屋敷ですが、それでも普請の入費は三拾萬圓といふ事です、近頃では黑田家の御屋敷です、これも彼是四五十萬圓の建築だそうで、三田の蜂須賀樣は餘程御質素に營まれたけれども十年前の落成で三拾萬圓とか聞きました。



島津公爵本邸（袖ヶ崎）

それでどれ程な御屋敷かと思ひますが、伺つて見て格別目を驚かすほどの建築ではありません、けれども大名は大名だけで流石に民間の經營とは段が違ひます、まづお玄關、お客間、御居間、御書齋、御奥、お納戸家從の詰所、御佛間、離れ、御茶坐敷、大殿御居間、御休息の間、御學問所、御寢室、大廣間などは常の通りとしたところで

臨時に御用ひになる座敷が中々大したもので、洋風の會食室が百人や百五十人の御客に差支ない樣な西洋館もあります、又御家に傳はつた古器物、寶物、由緒物などを御貯藏へになる特別のお藏もあります、其他圖書室とか、運動場とか、又は能狂言の舞臺を特別に御造營になつた御邸もあります、新華族でも早稻田の大隈樣は大層華奢な御暮しださうですが、花卉、盆栽に御熱心な殿樣では自然花壇や溫室の設備も大層で、一と鉢何百圓といふ樣な珍らしい花卉を御養ひになつて特別の植物園さへ御營みになる方々もあります。

それから御臺所の設備はむかしと違ひ近來殊に御注意になつて、和洋兩樣の割烹の出來る樣それ〲配置が整ひまして、瓦斯とか、電氣とか、新規で便利なものを御用ひになる工風が出來ました。

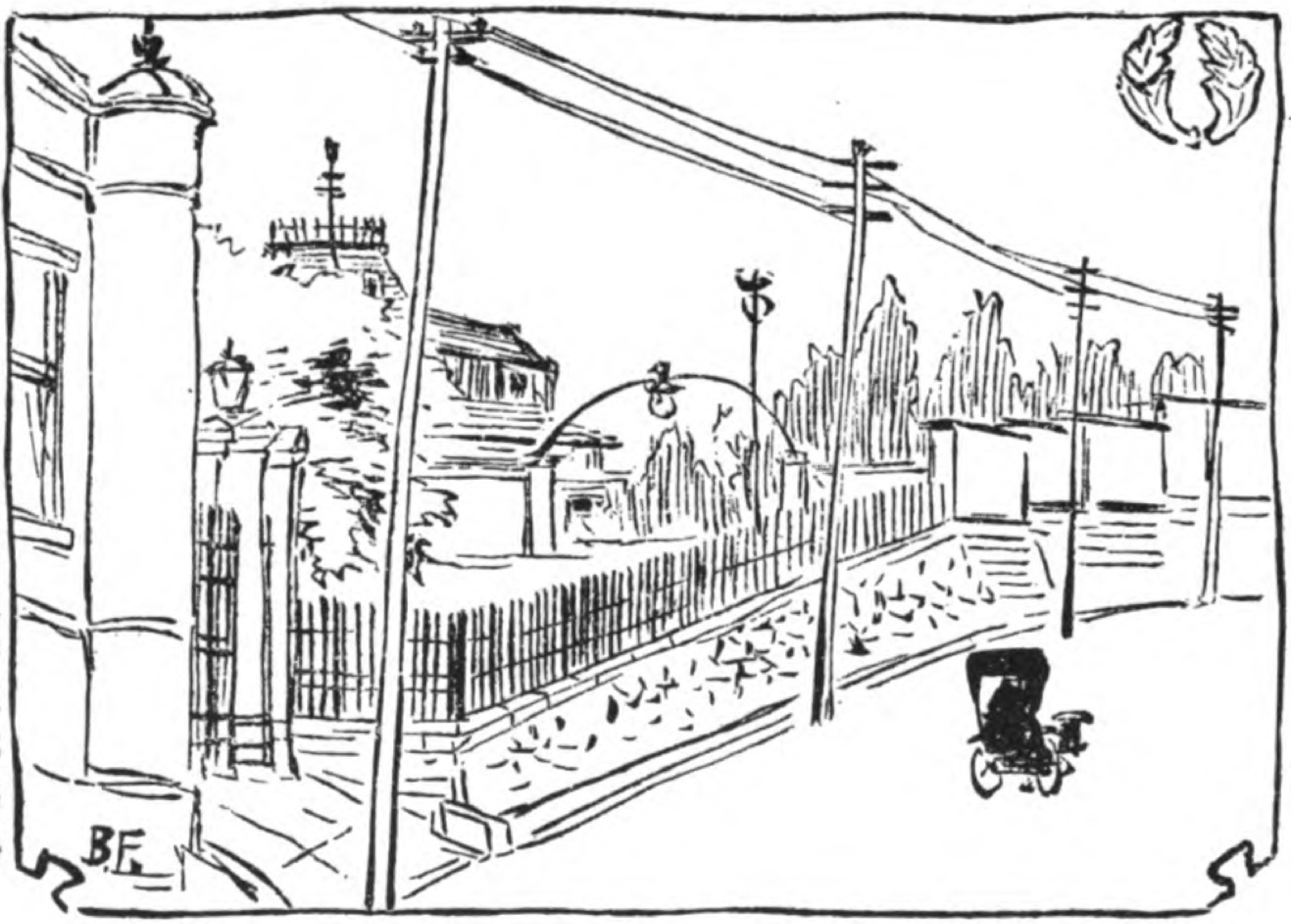
それから大名方の室內裝飾、それは私共白人のうつかり申されぬ事ですが、近頃はいづれの御邸でも光琳物流行で、あつさりと、むしろ晴々しい裝飾です、洋風の室內では一致しませぬが、中古の伊太利畫など折折見受ます。しかしいづれかと申せば、むかしと違ひまして近年はいづれの御邸でも萬事御手輕に出來まして維新前の樣に大規模な裝飾は見られぬ樣になりました、私共老人から承りますのに、むかしは十萬石位な大名でも書院の床の間には長八尺、徑二尺もある伊萬里燒の大花瓶に座敷一杯暗くするほどの松を挿けたものなどがあつて、南蠻鐵で造つた大牛の置物などが飾られてあつたと申します、それから見ると今日の大名方の御邸の規模などは極めて小さくなつた樣であります。

又むかし大名の下屋敷といへば宏大な構へで御庭の築山に五十三次や近江八景、鹽釜の景などを模造して中中大造なものでしたが、今日では斯る宏大な下屋敷は一般に不必要となつたか廢されて仕舞ひ、唯僅かに控邸といふ樣なもので、花の折節、紅葉の折節臨まれる位なもので別段是と申すほどの懸りはありません、時には避暑地の海岸などへ營まれる別莊風の邸もほんの村莊位なもので御用のない時は留主番が一人居れば

事は足りるといふ極めて質素なものになりました。

### △御臺所の雜用
(走りの覆盆子代月百圓)

次に御臺所の事を少しく申しませう、大名華族の御臺所は大概極つた出入の商家があつて、そこから日用の品物を持込みます、第一が魚屋でこれは平常物入の多い家と少い家とありますから同じ大名華族でも一概に申されませんが通例の處ろは月に百圓內外の勘定を上げます。澤山御費ひになる邸には飛放れて三四百圓も勘定の上る御邸もありますが、まづ稀です、



鍋島侯爵本邸(溜池)

八百屋も大概其の位で、いづれにしてもこれは大名の御世帶としては些かのものです、けれども其の外の出入商人で中々多い商品を持ち込むのがあります、菓子屋、葉茶屋、洋食品御用、鳥獸肉、乃至水菓子屋、或は西洋野菜屋などの御用で割合に御臺所の支拂の大きいのがあります、駿河臺の戶田家では月々御邸に持ち込む御菓子の代が二百圓以上だそうです、何にしても第一流の大名華族の勝手元から支拂はれる庖厨經費は少くも千圓はあらうといふ事です。大名の家の暮し方の大きい事に就て一寸常の人の氣の附か

ぬ事があります、某家の年の暮に麻裏草履五十足、庭下駄三十足棕櫚箒二十本といふ御買物がありました、これは元日から新規に取かへるといふので必要だけを御買入になつたのださうです。それから又某侯爵家では御主人が大層覆盆子を嗜好さるゝので、二月の末三月の始頃からいちごの走りを御出入の八百屋へ御注文になる、是が中々大きい高で、どうかすると月に百圓近く御支拂になる事がある、又某家の御隱居様は小禽の御道樂があつて年々御出入の商人からさし上る珍禽の代が五百圓以上あるそうです、又御贅澤の方から申すと、某家の御祖母に當らるゝ方は、世の中が如何ほど變つてもキット昔時の御習慣を御用ひになるといふ風で、久しく舊領地に居られた處から朝夕の御食事、すべて舊領地の品でなければ御嗜好に適はぬといふのでお國から東京まで三百里の山河を隔て、一週間に一度は乾度送り向けさせてあるといふ事を承はりました。是等は中々輕ひ御身代では續かぬ事でありませう。

## △日常の御手當金（三百圓の小遣錢）

御臺所に次いで御用の多いのは呉服屋、小間物屋、玩弄品屋、筆墨紙などいふものが多いのです就中呉服屋小間物屋は毎日の御用ではないけれども、時としては一時に何百圓といふ御買物があッて金高にすると臺所入費の三四倍ほどの高になりますけれども、近來いづれのお邸でも大名の家庭では、會計上やかましい規則が立てられて、殿様奥様の私用品は一定の御小遣から自辨される外、猥りに澤山な品物を御買入になる事は出來ない事になつて居ります、譬へば令孃の衣裳を新調になるとか、若様の時計、自轉車を御買入になるとかいふ時に會計部で必要と認めたらば早速支出を致しますが、さもなければ一應御意見を申上げる事になッて居ます、これは少しく多言を憚りますが、或る侯爵家の御主人が少々素性のよろしからぬ事に八九千圓の金を御費になつた事がありました、其節家令が御意見を申上げていふには、御借り遊ばした金を拂はぬと

申しては當家の御名聞に拘はる事でありますからそれは會計部で御立替申て仕拂を致しませう、併しその代り御主人樣は當會計から九千圓の負債を遊ばした事ゆえ今月より月々の御手當金の內から百圓づつ頂戴する事に致しますと嚴重に申し上げたといふ事であります昨今大名華族の家政は大概此の方針となッて居る樣で是れは主人公御自分に發案されたのもあれば、舊臣の內から又は顧問方から家憲を制定して會計法を取極めたのもあります、それで某侯爵家などは御主人の小遣として每月三百圓、奥樣の小遣として百



細川侯爵本邸（高田老松町）

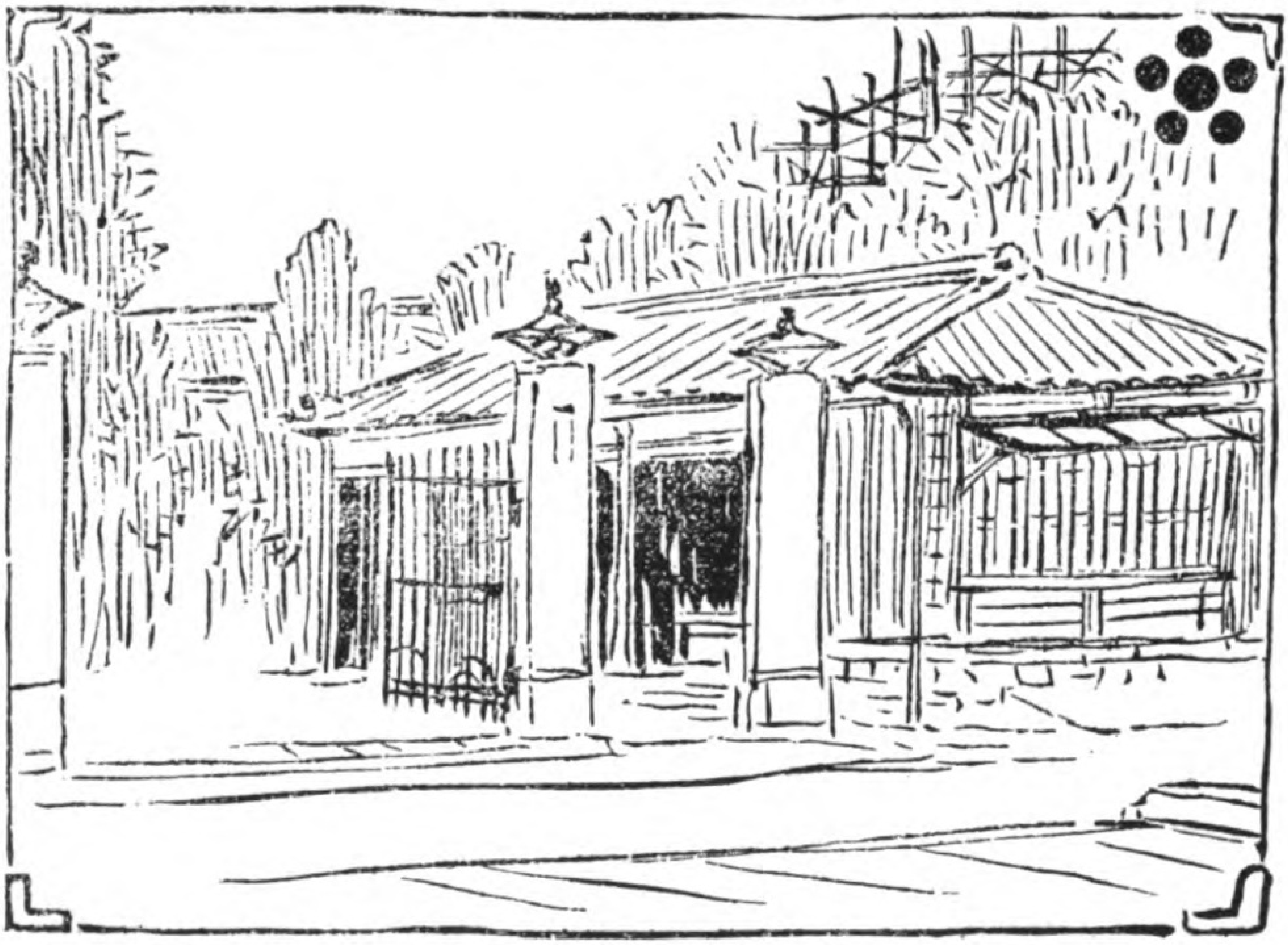
圓、老公御夫婦の小遣として三百圓と定めてあります。それ故、隱居樣御道樂の蘭疇を飼養さるゝのもその金で、又奥樣が流行の小間物を御買になるのも其金、御主人が折節柳暗、花明の御遊びをなさるのも其の金で會計ではこれ等私用の小遣には一錢も支出しない事になッて居りますけれども私用以外の費用、縱へば御主人が表面の交際上に御遣になる費用、奥樣が社交上に立たれた時の裝飾などは、すべて會計部の支出となるのであります。

△小宮內省（郡內の夜具十組）

大名華族の家で第一流の格になると一家は恰も小さな宮內省を成して居ります、まづ表方では家令が大臣の役で、家扶家從それ〴〵事務の受持が定つてゐます、御家に傳はる財產の管理は大概理財の才に富んだ經驗ある舊藩士が顧問として後見をしてゐますから是れは殿樣でも家令でも勝手自由に運轉をする事は出來ません、唯其中から年々家計に必要なる金額は每年豫算を立て〻請求する事になつてゐて、會計掛は月末になると銀行から引出して諸種の支拂を致します、それから調度掛といふものがあつて器物一切の保存、新調を司どり、春夏秋冬、其の季節季節に必要なものを藏から出してそれ〴〵日用に供へ、用が濟めば直ぐに塵埃を拂つて又それ〴〵藏へ仕舞ひ込み、夏の土用と寒の土用と年に二回の虫干をし又時々秘藏な品物を取り出して吟味して保存を大切にする役目で中に多忙を極めます、殊に何かの催ふしがあれば第一に必要なのはこの調度であるから春ならば春の物、秋ならば秋の物とチヤンと其時節を心得て居てそれに應じた品物を取り出して粗忽のない樣にせねばなりません、それ故この役目は中々老功な者でなくては務まりません。タトヱば老公の御病氣全快の祝に大廣間の床に掛ける探幽の軸物は藏の何番の棚に保存してあツて、それに對した花瓶、置物はどの品がよいといふ事など裝飾と配合位はチヤンと其人の心得になくてはなりません。

次に奥向は老女が一切の庶務を預つて居ります、御親戚との交際上の事柄は申までもなく上は姫樣の緣談より下は乳母小間使の身の上の進退まで大方は老女の取捌きです、又殿樣を始め奥方、姫君其他上つ方の衣服調度は、女中頭の任で是又中々繁忙の役目であります現今大名華族の奥向に於ける老女、女中頭の如きは大槪奥方御入輿の當時里方より附添ひて參ツたものが多い、それ故老女の給料などは大概里方からお仕送りとなツて居るのが多い、中には奥方の賄料として月々何百圓といふ金が御里から送ツて來るのもありますからその內から手當として年何程と御遣はしになるのもあります、昔時から大名華族の邸へ御殿奉公に這入ると

いへど多くは地方の農家の娘などが行儀見習を主眼とするので現今でも奥向に奉公してゐるものは給料として何程と取極てはない其の代り臨時の下賜品など小さい金で買はれぬ物を頂く事が多いので。或る大名家の老女などは郡内の夜具ばかり十組奥方が穿古しの絹足袋が葛籠に三杯積つてゐると申します。序に表方の給料を申しますと第一流の家で家令が百五十圓より三百圓家扶が、五十圓より百圓、家従となるとずつと下つて二三十圓が止りですけれども其代は家も、飯米も殿樣から下つて、時とすると御勝手元の溢れが毎日のやうに銘々の臺所へ下つて來るから、衣食住の諸式に自分の金を出す事は滅多にありません。



前田侯爵本邸（本郷元富士町）　時局の爲め建築工事御遠慮

### △節儉の御家風

（新教育の結果）

いづれの御屋敷でも近年は節儉といふ事に御注意になつて、不必要な經費はなるたけ省略せらるゝやうであります。是までは家令家扶任せであつた、財產上の取締も今日では侯爵家の主人御自身、御計算を遊ばすやうになつて、御屋敷中に不急な建築工事などは一切廢されたのが多く、よしや新たに御新築になつても多くは西洋流の實用主義で

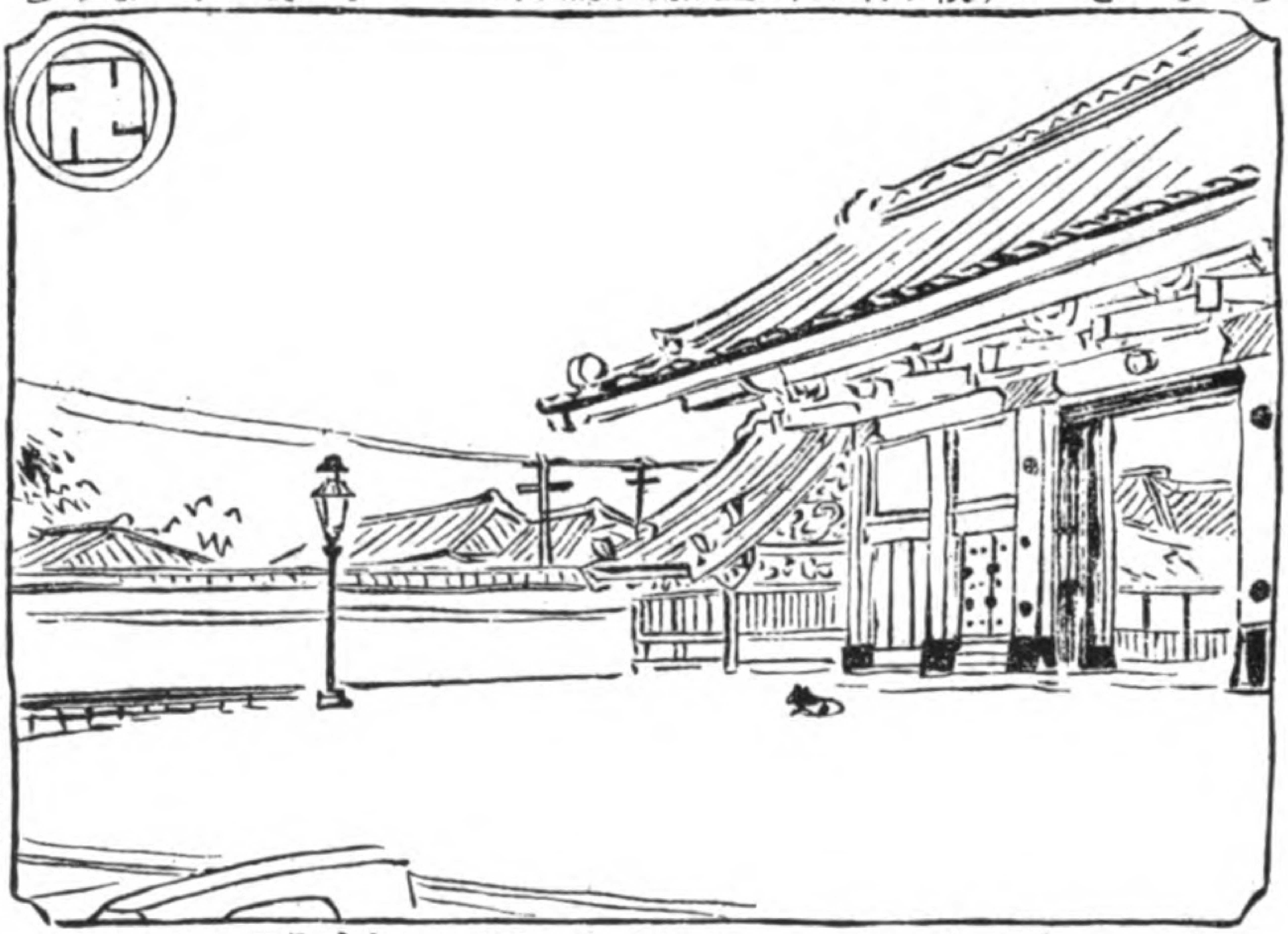
生活上に無用な處ろは悉く省かれるやうであり、日常の衣食に就ても、御自身徳用を考へて滅多に贅澤物は備へられぬ樣になり、朝夕の肉野菜までも勘定書を御覽になる殿樣もあります、そして多少の餘裕があれば社會公共の事に御盡しになるといふ美風となりました。是等近頃學校敎育を受けられて社會一般の事情をも知られた結果、又新らしく奧方として嫁かれた方の中には新敎育を受けて家政とか、家事とか、すべて生活上の鄙事を心掛られた結果でありませう。

去乍ら家政御改革とか節儉主義とかいふのは寧ろ第二流のお邸に多いので第一流方では矢張り豪華は免かれません、扨て同百萬圓の財產でも身代に內福と、不如意との差はありませうが大名華族の生計は同財產程度の商人輩に比較すると遙かに豪華な處があります當時大名華族專一の收入は株劵で鐵道株郵船株銀行株、大抵その利廻り七八分に居りますから有價證劵百萬圓の財產に對しては年々七八萬圓の所得はある勘定となります。華族第一流の格で二十萬圓以上の所得ある家が三家、十萬圓、以上の所得が七家だといふ事であります、華族の生活の豪華決して怪しむに足りません。就中むかし五六万石の小大名で今日三十万石以上の大諸侯と肩を幷べる位な有福も隨分ありますが、中村の相馬家、肥前の松浦家、大村家、松山の久松家などはいづれも、大名華族中の有福者だといふ事です。

## △御殿生活今古の比較

大名の暮しも舊幕時代は當今と違ひて萬事高等で中々豪華なものでありましたが、今日は諸事御手輕で、むかしの十分一の面影も見る事は出來ない僅か三萬石五萬石でも大名の奧向となれば下々で想像の及ばぬ程な事が有ました、これは去る國持大名の奧向に仕へた人の實話で有ますが、大名の奧が如何に手重であつたかの一端を知る事が出來ませう、まづ奧方御寢間の模樣を摘いつまんで申しませう、奧樣御寢の間は十二疊敷の立派な上段の間で突當りに金襖の飾てある違ひ棚、並に御床の間、左右共金襖無地で引手は總銀に唐草も

よう正面の御障子は四尺位の黒塗の細骨、こゝへ夏は萠黄の紗を張り、御繪師が七草などを畵きたる物で、眼も覺むるばかり、四隅の柱に菊坐附銀の蚊帳の釣手の鐶に萠黄絹の太打が行儀よく結付てあるといふ、御取繕ひです、次の間に御腰元が三人居て二時間交替で御夜詰を致します、この御夜詰は夜半御寢になると朝御目覺までの間で其時間は可なり永いやうですが、夜詰中は、御茶は勿論、御菓子まで極上等の品が出て夜中は喰べ放題といふ事になつてゐますそれのみならず上等の御辨當まで頂けるわけで、下々の者の夢にも知らぬ榮耀の限りです。



蜂須賀侯爵本邸（三田綱町）

それから奥方の御寢になる御布團は眞綿の厚さ一尺ばかりもある緋純子二枚重ねた上に又緋の郡内の少し薄手の上布團が重ねられ、それに御夜着、御掻捲はいづれも紫純子、若し寒中冷へます時は三枚目の御夜具の背に徑三寸位の菊坐の銀金具の鐶があつて天井に吊る仕掛になつて居ります、又御枕元には銀の御急須、蒔繪の御煙草盆など置かれてあります。

右舊諸侯の奥向の一端、迚も今日では宮様方の御息所もこれ程の御大層はあるまいと思ひます

△某伯爵家一ヶ年

諸費豫算表

是の計算表は先年某侯爵家に於て家事後見役交替の際家扶より調製して示したるものなれば大名華族家政參考の爲めこゝに掲ぐ。

一金五萬七千二百二十圓　豫算總額

内譯

| | |
|---|---|
| 調度費（圖書買入費含む） | 三千一百圓 |
| 被服費 | 五千二百八十圓 |
| 修繕費（器物保存費含む） | 二千三百六十圓 |
| 賄費 | 一萬六千八百圓 |
| 奥向諸用 | 二千六百圓 |
| 御手當金 | 三千四百圓 |
| 祭祀費（菩提所墳墓一切） | 七百六十圓 |
| 交際費 | 二千四百圓 |
| 教育費 | 六百五十圓 |
| 海外留學費 | 三千四百圓 |
| 臨時費（旅行費選擧其他） | 七百七十圓 |
| 醫藥費 | 千二百八十圓 |
| 俸給（家令以下三十五人分） | 七千二百八十圓 |
| 雜給幷諸手當 | 二千一百八十圓 |
| 庭園諸費 | 五百三十圓 |
| 寄附金 | 六百七十圓 |
| 慈善金 | 二百五十圓 |
| 舊藩子弟奬學資金 | 二千二百圓 |
| 電話、電燈、水道諸費 | 九百五十圓 |
| 厩舍諸費 | 三百六十圓 |

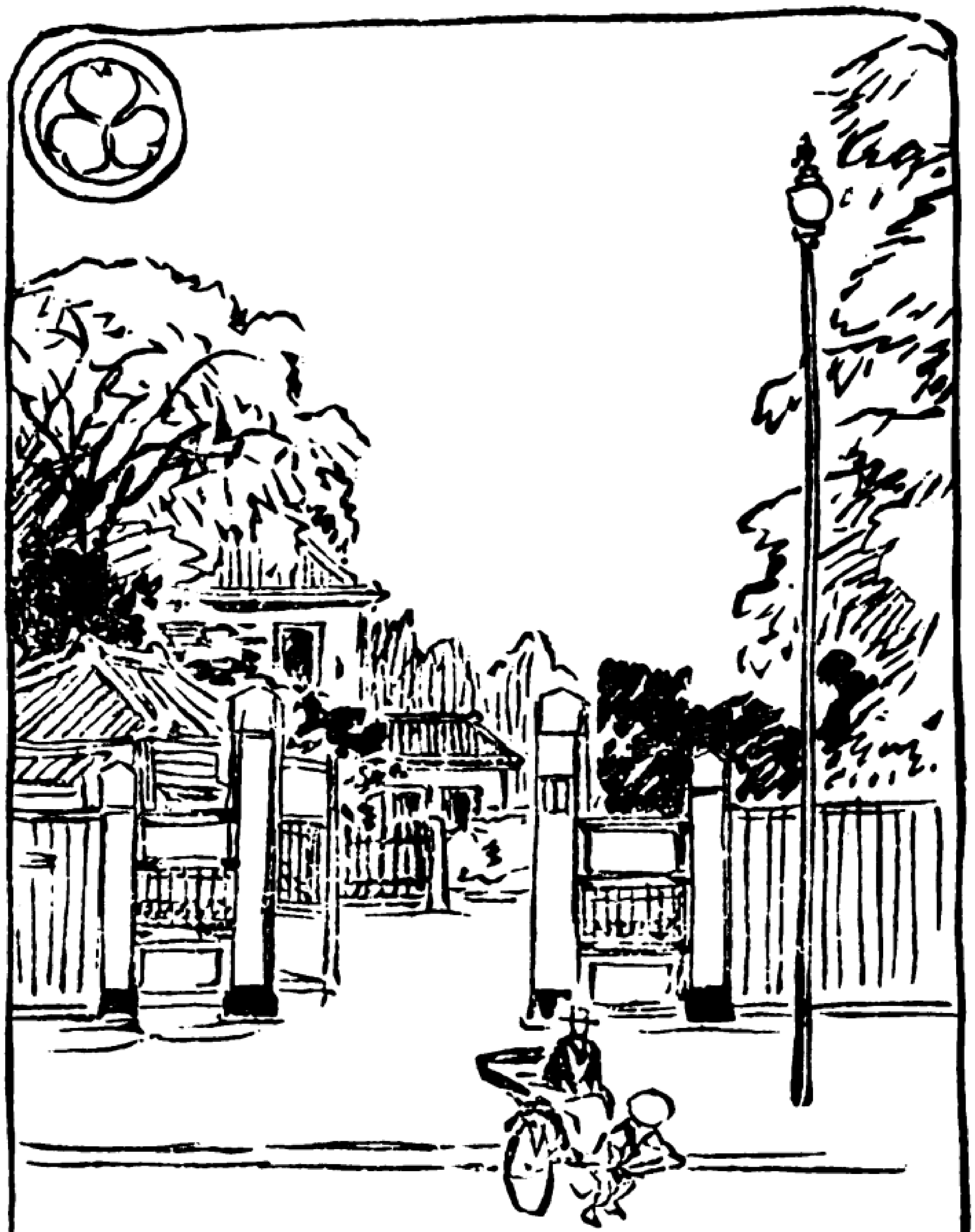
右諸費の中より直接庖厨の諸用に關する賄費の内譯

▲賄費月額千四百圓（一萬六千八百圓の月割）

内譯

| | |
|---|---|
| 米穀 | 百六拾圓 |
| 魚肉 | 百三拾圓 |
| 野菜菓物 | 九拾八圓 |
| 菓子 | 七十六圓 |
| 茶、珈琲 | 五拾圓 |
| 鳥獸肉 | 四拾五圓 |

和洋酒類　七拾八圓
味醂醤油、味噌　三十八圓
薪炭　六拾八圓
鶏卵、鰹節　五拾五圓
砂糖　六十圓
洋食品料　百弐拾八圓
獵犬七頭食料　三拾五圓
庖厨諸費　二百二拾圓
臺所臨時費用月割　百五十圓
以上


徳川(紀州)侯爵本邸(飯倉)

奥向には家庭教師として科學の智識ある西洋婦人を御招聘になッて、令嬢令息の方々が朝夕語學の稽古をされる、勉强は唯語學や音樂位なものですけれども、それが因縁となッて保守的な大名華族の内方も段々と衣食住の全體に亘ッて西洋風に同化されるやうになッて參りました、それ故庖厨の方も自然と簡易な洋食が流行して參ッて奥方や姫君が、ミス、ジョンソンやミセスコーツを師匠にして娯み半分、筒袖に白キャラコの前垂がけで、メリケン粉をお溶になる、フライ鍋でヘットを御焼になる、鳥のシチウやロールキャベツは

## △日々の献立

下等な料理屋の品よりはよく御出來になるといふほどに近來俄然として御臺所は肉汁の香氣が高くなッて參りました。こういふ情勢でございますから、主人公始め御家族一同近來は洋食御嗜好で、一週に一二度、或は朝晝夕の內一度は單簡な洋食の御献立を遊ばすやうになりました。それ故和料理の方も自然に元よりか御勘略の氣味で三汁七菜の本式は暫らく言はず、二汁五菜も御手輕な家政では滅多に遊ばさなくなりました。御大身の御邸では必らず和洋兩方の料理人をお雇ひで別々に御注文される、之れによッて御賄を致します、中には、一人で和洋兩方出來るのを御雇のもあります、こゝに記しましたのは、某侯爵家で舊を御忘れない老公への賄ひ方が取合せました献立表で四季の內から二ッづゝ撰り拔いて見ました。

◎春の部

▲向　からし味噌、比良目作り身、若紫蘇
▲椀盛　印籠豆腐、わらび、鴫
▲取肴　ひじき、花かつを
▲吸物　仙臺豆、わさび絞り汁
▲香物　粕漬茄子、漬菜
▲菓子　煉羊羹

◎其二

▲向　芥子ぬた、鱚、うど、防風、木耳
▲椀　丸半片、小松菜、ちさ
▲燒物　味噌漬鯛、鮑ふくら煮
▲吸物　うにせん、二葉紫蘇
▲取肴　雲丹燒白魚、ほいろ若布
▲香物　百一漬茄子、紀州漬物瓜
▲菓子　金團

◎夏の部

▲向　皮引鮎、大短冊たて
▲燒物　鯛
▲椀盛　こち、冬瓜、じゆんさい
▲取肴　新百合根、細いんげん
▲猪口　〆鯖、胡瓜小口、酢味噌あへ
▲香物　守口大根粕づけ

▲菓子　小倉野

◎其二

▲向　小鯵亂作り、菊味

▲焼物　鮭かけしほ、すり生姜

▲椀盛　和かしんぢよ、はつ茸、さき茄子

▲吸物　一鹽せいご、さや刀豆せん

▲猪口　十六さゝげ浸し物

▲菓子　蕨もち、茶巾

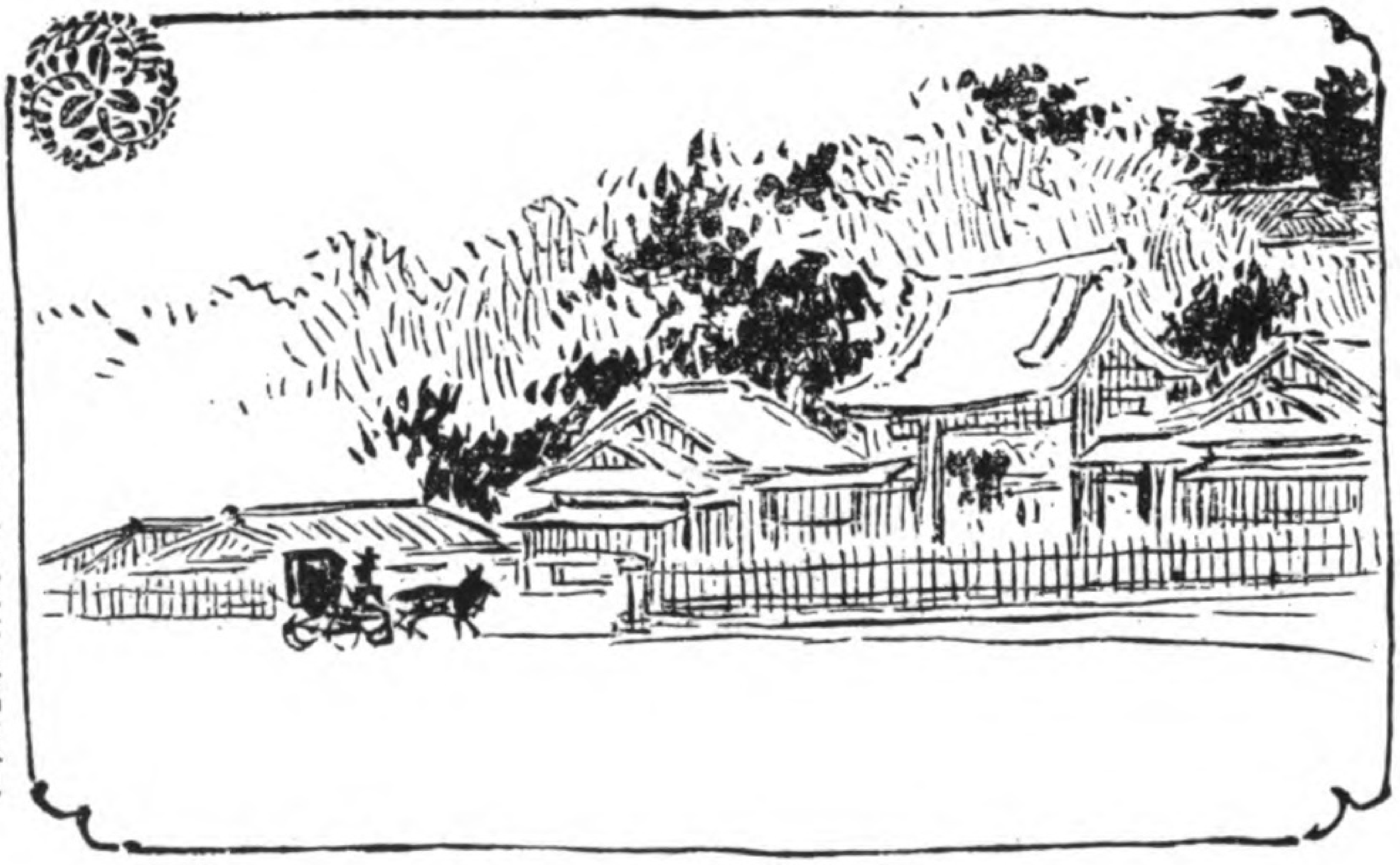
◎秋の部

▲向　當坐鹽鮭さいがた大根おろし

▲焼物　カマスひらき

▲椀盛　流しんぢよ榎茸、みつ葉

▲皿　鹽ふり甘鯛



黒田侯爵本邸（赤坂福吉町）

▲吸物　海老ほくし潮仕立

▲漬物　淺漬大根

▲菓子　宮城野、角切干やうかん

◎其二

▲向　大粒貝の柱、大根輪切、きく味、合せ酢

▲椀　ひざ折鰈、そぼろ小鴨、裂松茸

▲焼物　鹽焼かます、ひらき

▲取肴　いなだ筋つけ紫蘇の實

▲取吸　芝海老

▲香物　淺漬大根

▲菓子　三色牡丹餅砂糖かけ

◎冬の部

▲向　ひらめ細作、黄菊、はじき葡萄三杯酢

▲椀　半月しんぢよ、亂切串子、しぼり湯葉
▲燒物　大鰭、鹽燒
▲吸物　貝の柱生のり
▲取肴　いなだすし、黑くわゐ
▲香物　鹽押茄子
▲菓子　饅頭

◎其二

▲向　かき鯛いり酒、わさび
▲燒物　粕漬鮭、敷鹽油
▲椀　しんぢよ、うど、のり
▲吸物　鱈こんぶ
▲肴　味噌燒鳥、鹽煮ちよろぎ
▲猪口　鹽鰤酢漬、生酢仕立
▲香物　新澤庵
▲菓子　求肥

△華族の財産と得所高

今日世界各國を見渡しますに、財産の大きいのは、土耳其や露西亞の帝室、英國の貴族、米國の事業家であります。日本の華族はまだ一家で何億圓といふ大財産はありませんから、迚も西洋諸國の富豪と比較にはなりませんが、併し國力に割合せて華族の富は決して小さくはありません、聞く處によると、華族社會で一番御有福の聞へあるのは、毛利家、前田家、島津家の三大名だといふ事です、毛利家は三十六萬石の大名でむかしの石高からいへば第八番目でありますが、維新の際、卒先して王事に盡された家柄で、明治政府の創立には其の藩士が尤も多く加はりましたので、諸事萬般都合のよい方に廻られたのでありますが、維新以來家政を取捌く人々が政府の有力者であッたから御身代の方にも種々都合のよい事があッたらうと申します、次は前田家、是れは幕府時代大名中の呼び頭で百萬石の大諸侯でありました。又島津家は大諸侯でもあり、且つ維新の際、毛利家と共に王事に盡された兩大關であるから維新後の家政も自然御都合が宜しく參ッたのでせう。今近い年の調で見た大名華族の財産幷に所得高

の概略を申しあげませう。

毛利家　公債株券高四百五十萬圓　一ケ年所得高二十五萬圓

島津家　公債株券高三百二十萬圓　一ケ年所得高二十二萬圓

前田家　公債株券高二百五十萬圓　一ケ年所得高十八萬圓

細川家　公債株券高百八十萬圓　一ケ年所得高十五萬圓

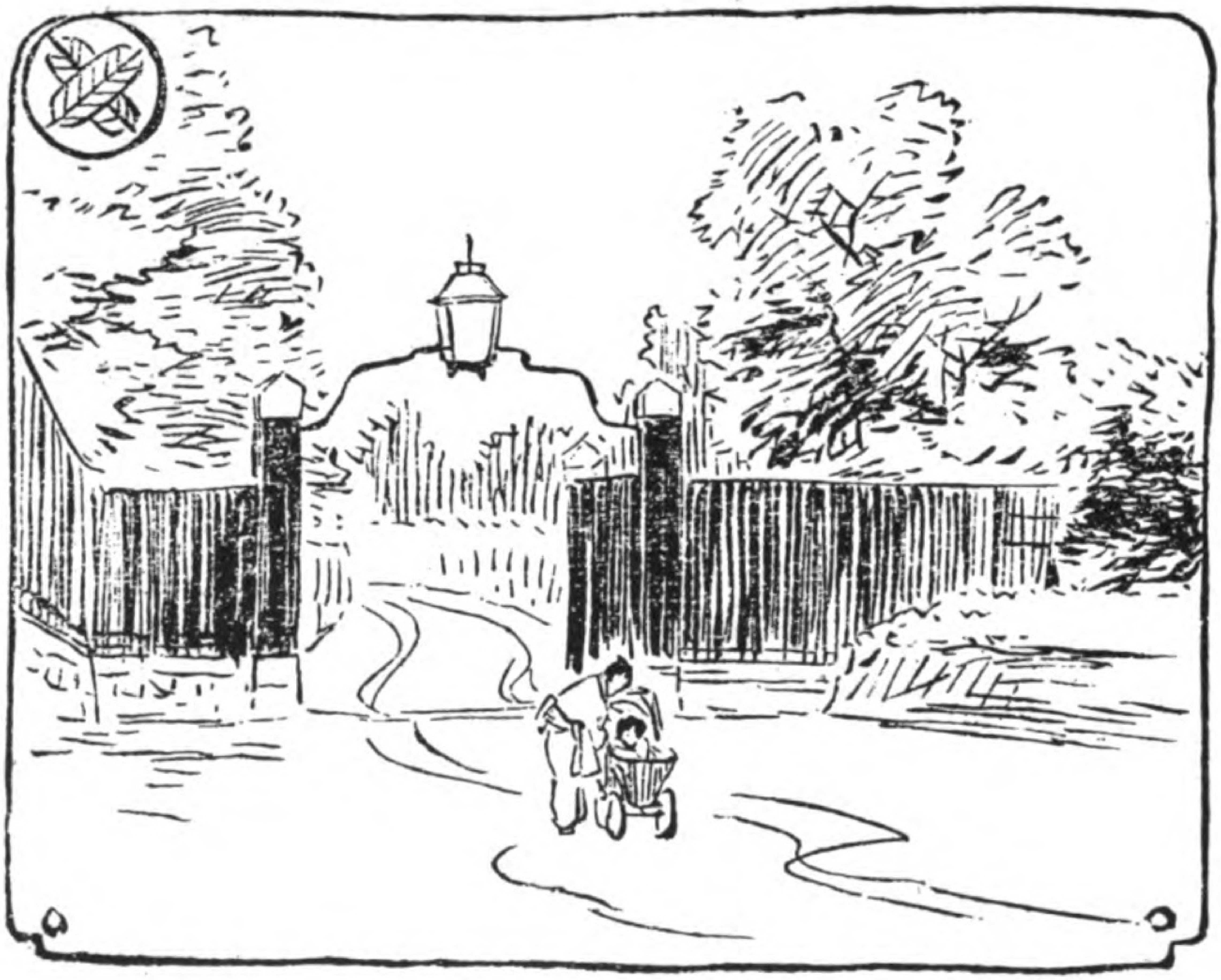
| | △持株 | △所得高 |
|---|---|---|
| 德川(紀州) | 百五十萬圓 | 十二萬圓 |
| 池田(備前) | 百四十八萬圓 | 十二萬五千圓 |
| 德川(尾張) | 百四十五萬圓 | 十一萬五千圓 |
| 淺野 | 百四十二萬圓 | 十萬二千圓 |
| 黑田 | 百四十二萬圓 | 九萬五千圓 |
| 鍋島 | 百四十萬圓 | 八萬五千圓 |
| 蜂須賀 | 百三十五萬圓 | 七萬八千圓 |
| 池田(因幡) | 百十二萬圓 | 七萬五千圓 |
| 松平(高松) | 百五萬圓 | 七萬圓 |
| 山内 | 九十五萬圓 | 六萬五千圓 |
| 松浦 | 八十二萬圓 | 六萬五千圓 |
| 德川公爵(總本家) | 八十萬圓 | 五萬二千圓 |
| 有馬 | 七十五萬圓 | 四萬八千圓 |
| 藤堂 | 七十五萬圓 | 四萬八千圓 |
| 相馬 | 七十二萬圓 | 四萬六千圓 |
| 伊達(宇和島) | 七十五萬圓 | 四萬六千圓 |
| 井伊 | 七十五萬圓 | 四萬六千圓 |
| 水戸德川 | 七十二萬圓 | 四萬八千圓 |
| 久松(本) | 六十萬圓 | 四萬五千圓 |
| 戸田 | 五十五萬圓 | 三萬六千圓 |
| 島津公爵 | 五十二萬圓 | 三萬八千圓 |
| 阿部 | 四十五萬圓 | 三萬五千圓 |
| 酒井(姫路) | 四十二萬圓 | 三萬二千圓 |
| 大村 | 四十六萬圓 | 二萬九千圓 |
| 小笠原 | 四十二萬圓 | 三萬五千圓 |
| 尙 | 欠 | 三萬五千圓 |
| 松平(松江) | 四十二萬圓 | 三萬圓 |
| 佐竹 | 三十一萬圓 | 二萬五千圓 |
| 奥平 | 二十五萬圓 | (欠) |
| 酒井(鶴岡) | 三十三萬圓 | 二萬五千圓 |
| 吉川 | 二十三萬圓 | 二萬一千圓 |
| 秋元 | 二十六萬圓 | 二萬五千圓 |
| 毛利(豐浦) | 三十一萬圓 | 二萬五千圓 |
| 眞田 | 十八萬圓 | 二萬圓 |
| 松平(前橋) | 二十五萬圓 | 二萬三千圓 |
| 伊達(仙臺) | 十五萬圓 | 一萬五千圓 |
| 津輕 | 二十四萬圓 | 二萬二千圓 |

| | | |
|---|---|---|
| 柳澤 | 二十三萬圓 | 欠 |
| 島津 | 三十萬圓 | 欠 |
| 立花 | 二十二萬圓 | 一萬五千圓 |
| 上杉 | 十八萬圓 | 一萬七千圓 |
| 南部 | 二十三萬圓 | 一萬七千圓 |
| 溝口 | 十五萬圓 | 一萬二千圓 |
| 龜井 | 十三萬圓 | 一萬二千圓 |
| 榊原（高田） | 十二萬圓 | 一萬二千圓 |
| 京極 | 十四萬圓 | 一萬二千圓 |
| 戸田（松本） | 十四萬圓 | 欠 |
| 久松 | 十萬圓 | 欠 |
| 一橋 | 十四萬圓 | 一萬二千圓 |
| 田安 | 十四萬圓 | 一萬二千圓 |
| 稻葉 | 十三萬圓 | 一萬二千圓 |

右所得額は三十四年度徴税員の調査によりて其大數を揭げた者でありますから、今日の實際とは元より大分の相違があるでせうがまづ大体の點に於て大名華族の資產の額が粗々想像せらるゝのであります。尤も是はいづれも役所の請求によつて餘義なく發表されたものですから是丈で華族の身代を盡したといふ事は出來ません、所得税の計算に登らない家屋、土地、寶財といふものが、他の階級に比較して大名華族には割合に多いのであります。隨つて實際の所得高も多いのであります。序に申して置きますが、大名華族の外に、舊公卿華族、新華族があります、公卿華族は大名と違つて舊祿は極めて微々たるもので、今日の公爵家でも僅かに千石、千五百石位なものでありましたから一般に維新の時の祿券は些少なものでありました、故に今日公卿華族の資產ある岩倉、三條の兩家を除いたならばむかしの五攝家といふ格でも十萬圓位が頂上でせう。

王室式微の際久しく寥慷の生活をなせし公卿華族も維新祿券の配當あつて以來辛ふじて其家運を挽回し、普通百石四位以上の家は祿券五千圓より一萬圓、淸華にして三位納言の家柄は一萬五六千圓より二萬圓、堂上淸華の內にて特殊の名流、若くは王政復古の際朝廷の覺え目出度かりし家々はこ秩祿以外に優なる賞典祿をも賜はりて攝家相當一朝にして數萬圓の祿券を所持するの身となり、三百年來、試み來りし米鹽の苦辛始めて免かれ、或

は宮廷に入つて月俸を得るあり、或は所在の官衙に仕へて吏人となるあり、明治政府にあつては岩倉具視右大臣の時、數百年來朝紳の疲弊せるを慨して大に盡力する者あり、或は助成金と唱へ、恩賜と稱し、帝室の僅に富ませ玉はんと同時に務めて朝紳一家を救ふの處置ありしを以て縉紳家は直接間接に其の恩顧を蒙り、鎌倉以來常に貧薄なりし公卿の一族も稍く其面白を開くに至る、次で朝紳華族の



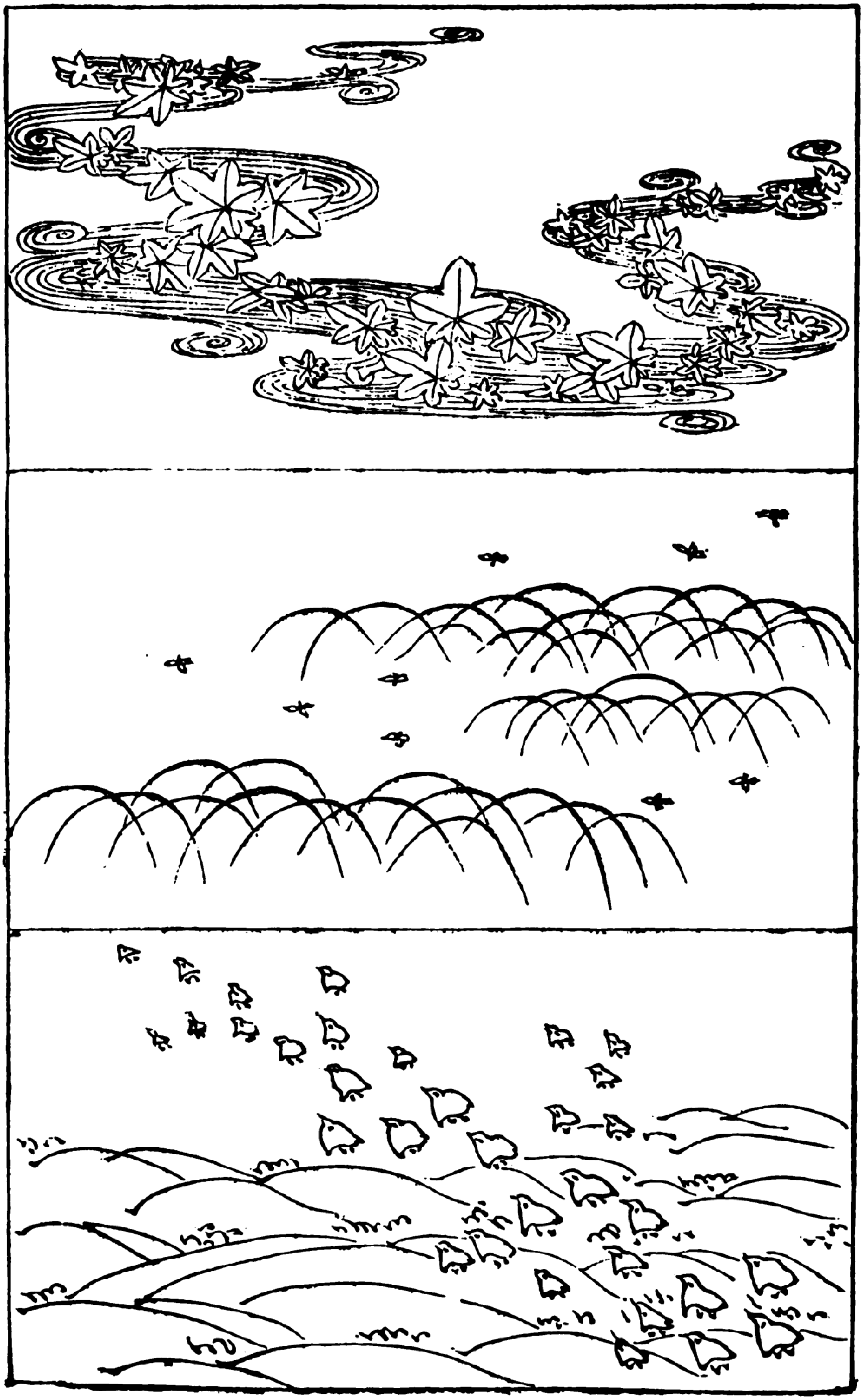
淺野侯爵本邸（本郷向ヶ岡）

爲めには空前の恩典とも稱すべき明治十七年七月七日の華族令あり、舊五攝家は公爵として金を賜ふこと十萬圓清華は侯爵として各五萬圓、其他伯子男爵共其家格に準じ爵に應じて賜金、各一萬圓乃至三萬圓、槿花一朝の榮耀を見るに至れり此の如く朝紳華族が明治聖代の恩典を蒙ると莫大にして僅に二十年の昔時を顧 れば殆ど夢の如く實に沙彌から長者の境界と

も云べき有様なるが、扨て此の如き恩典を蒙りし朝紳華族の生計如何と見るに、勿論舊淸華以上の名流、現在公侯伯爵家の歴々にあつては其家道も概ね饒にして宮廷に仕へず官衙に食せず一ヶ年の所得二三千圓より一萬圓近くに及ぶものあり、官吏と比較すれば通例勅任官の生計を立らるべし、されども是を彼の武辨華族の同爵者に比較すれば其の及ばざると遠し、今京紳華族中割合に所得ある數家を列擧すれば左の如し。

| | 維新祿券高 | 所得高 |
|---|---|---|
| 鷹司家 | 十萬八千圓 | 九千二百圓 |
| 一條家 | 十萬九千圓 | 九千二百圓 |
| 岩倉家 | 六萬二千圓 | 六萬二千圓 |
| 二條家 | 五萬五千圓 | 九千三百圓 |
| 九條家 | 六萬一千圓 | 一萬三千圓 |
| 近衛家 | 五萬九千圓 | 八千二百圓 |
| 三條家 | 六萬五千圓 | 欠 |
| 以上公爵 | | |
| 菊亭 | 三萬二千圓 | 欠 |
| 醍醐 | 一萬四千圓 | 二千四百圓 |
| 久我 | 二萬三千圓 | 八千三百圓 |
| 廣幡 | 二萬八千圓 | 一千八百圓 |
| 中山 | 三萬九千圓 | 九千二百圓 |
| 西園寺 | 二萬三千圓 | 五千五百圓 |
| 嵯峨 | 二萬四千圓 | 二千六百圓 |
| 四條 | 一萬六千圓 | 三千四百圓 |
| 以上侯爵 | | |
| 東久世 | 二萬一千圓 | 八千四百圓 |
| 園 | 一萬五百圓 | 二千四百圓 |
| 柳原 | 一萬七千圓 | 八千二百圓 |
| 姉小路 | 一萬三千圓 | 一千二百圓 |
| 清水谷 | 一萬五千圓 | 一千圓 |
| 日野 | 二萬一千圓 | 一千六百圓 |
| 廣橋 | 九千二百圓 | 三千圓 |
| 正親町 | 一萬八千圓 | 二千三百圓 |
| 甘露寺 | 一萬千六百圓 | 一千二百圓 |
| 以上伯爵 | | |

公、侯、伯の名家、貴紳にして其所得以上の如し、曾て大名にあらず、豪族にあらず、舊來家に傳はる寶物といへば一卷の家系冠笏に過ぎざる公卿の子男爵にして、朝廷恩賜の祿卷を除けば他に些の財物なく、收入なき元より明かにして偶々宮内省へ奉仕して幾何の月給を得るか若くは互撰議員となつて定期の歲費を得るものを除くの外は概して微額なる公債株券の利子に依つて生計を立つるに過ぎずして其收入とても一ヶ年二千圓以上は覺束なく下つて千圓位に過ぎざるものは其生計の程度奏任の下級にも及ばざるあり。(完)



# 高等官吏の生活

國法講習會師範　近藤正一

一口に高等官と云へば世間体は大層立派な様ですが、その内幕に立入つて見れば思はぬ困難も苦勞もあるもので局長とか知事とか云ふ位置に成れば兎も角、ヤット未だ奏任官であると云ふ計りの書記官、參事官などに至つては人知れぬ苦い生活を爲ねばならぬものであります。

年俸は僅に千圓、それでも相應に見榮も體裁も飾らねば成らぬ、細君の親父が彼男は行末見込のある男だと云ふので、學校を卒業る直ぐに今の位置に引き立て丶、家も持たせ娘も嫁せたのであるから省中でも顔の新しい割合に羽振は好い方です。

斯ふ云ふ成立であるから生活費は亦存外に多く要る、譬へば交際向きなども同寮や朋友の交際の外に別に細君の交際と云ふものがあつて立派な一廉の費目を持つと云ふ工合、それは某長官の令嬢としての交際や華族女學校時代の交際があつて、末班の高等官吏にしては比較的派手に爲ねば成らぬので、そして收入と云つては天にも地にも俸給の千圓、出張の旅費や手當も無いでは無いが、それも巡回の地方に出てはまゝ持出しに成ることもあるのです。

他人の目からは誰某は細君の實家が好いからと云つて羨まれる様なもの丶、實を云へば家を持つた當分こそ種々と世話もして呉れ、時借なども出來たが今では中中家計の不足を補けて呉れるなど丶云ふことは思ひも寄らぬ、加之に小供は出來る交際は年々に殖えて月末の仕拂の度には主人公の機嫌は頗る宜しくない。二つ目には令嬢育ちの、貴族的のと嫌味を云はる丶、その辛勞さ苦さは決して一通りで無い、その度に學校に居た無邪氣な時代がなつかしくて成らぬこともあるとは此種の階級に屬する細君の述懐でせう。

### △嫌と云はれぬ義理

時局と云ふ可い托つけの爲に大抵の交際は開戰以來は

一切謝絶つて居る樣なもの、、ヤレ繃帶の献納だの、軍人遺族の救恤だのと云ふ婦人團體からの勸誘を受けては流石に嫌と云ふことも出來ぬ、それ計りでは無い愛國婦人會へ加入せよの赤十字社へ入會せよのと……それも長官の夫人や義理のある奥さんからの勸誘とあつて見ればどうも致方が無い、これ等をザット積つて月々四圓や五圓は如何しても別途の支出がある、これも矢張月末には主人の不機嫌の種でモーこれ丈で澤山であるのに學校に居た時分世話に成つた學監さんが發起で活動寫眞や活人畫を興行して軍人遺族の救護にすると云ふので贊成員だの主唱者だのに書き加へられて切符の十枚も十五枚も押付らる丶、加之も主人は發起人が氣に入らぬ、彼等の財囊を肥すのだと云つて終には餘計な人身攻擊までも始ることもある、これを思ふと高等官の細君も氣樂な樣で存外氣樂ではない。彼の水戸黃門の歌にある如く「只見れば何の苦もなき水鳥の足に閑なき」と同じ事です。



## △交際

鹽煎餅を茶受にお八つの雜談や、鈍張芝居見物のお交際は裏店の内儀達の交際として下流の婦人社會には昔から行はれたものです、一體に日本では婦人社會の交際と云ふものが、中以上の社會には餘り多く行はれ無かつた、けれども、近來は婦人の交際と云ふことが中流以上、上流に迄だん／＼と流行して某政事家の夫人や、某書林の細君が全盛の頃には其等の人々が音頭取で種々の婦人團體が隨分澤山に出來た、それに又然樣なること柄を利用して己等の利益を謀ろふとする半幇間的の官吏上りや、敎師の食詰者が黑幕に成つて盛にこの種の集會を煽り立てたのであるから今日では然程でも無いが一時は婦人の交際と云ふことが非常に流行して、今日何會明日も何會と云ふので、實に婦人の集會交際が最盛を極めたこともあつた、それで一度この交際社會に足を入れた夫人達はこの交際的集會の爲に殆んど毎日なしと云ふ有樣、勿論この種の會合とても素と婦人達のことであるから決してこれが斯ふと云ふ弊害と云ふ程の事は無いが、有體に云へばかゝる交際場裏に立入つた爲に意外な失費が嵩むで多少生活上の苦痛を多く感じたのと、幾分か奢侈に流れたと云ふ位の事で、それも外國の婦人等の樣に夫人自らの財産があるのでは無し、結局は良人の財産を減ずるのであるから、こんな事が婦人の交際と云ふことが家庭の平和を傷つくる原因となつたことも無いでは無い、彼の某子爵夫人某政事家の夫人が離婚と成つたのも斯かる集會や交際に多分の費用を使はれた爲で、其他現に三四の家庭に云ふに忍びざる風波を起したのも必竟はこれが原因と爲つて居ることは誰も知つて居る所でそれもセメテ華族や富豪などならば然程の痛痒も感せぬであろふが、押し並めてかゝる會合に立交るのは中邊の高等官吏の夫人や、世に云ふ紳商の細君などであるから、斯かる交際と云ふことの始つた爲に内實非常に苦痛を生活の上に感じたと云ふことは確かなる事實です。

それで交際や集會に就ても、單にその會費……會費と云つても平の會員であれば高が一年に一圓か二圓多く

とも四五圓に過ぎぬのですが、それが高等官吏の夫人位に成ると是非名譽會員だとか特別會員とかに引張り込まる丶從つて會費も少くは無い、先づ一年二十圓から二十四五圓が通相場であつて、少し多いのは五十圓も取らる丶と云ふ程である、希には特別會員でも僅か二圓か三圓の會費で濟むのも無いでも無いがそれは眞に有名無實、會が有るか無いか分らぬ樣な類のものです。

そして集會の目的は慈善的の事業とか婦人の敎育とか云ふので質素と勤儉を標榜するのであるが、根が婦人達の事であるから如何しても虚飾外見と云ふこと



が何時の間にか主となつて何れの集會も衣服の共進會、流行の競爭と云ふ風に成り勝で、現に余が知て居る或る集會ではこの弊風を矯ると云ふので參會の婦人は綿服着用と云ふ申合せをして案内狀にもその事を申し添へてあつた、それで某公爵夫人は眞面目にそれを守つて故らに綿服を新調して出席された所が參會の婦人は金襴の帶やダイヤモンドの指輪、例に由て例の如しであつたから、その夫人も何と無くキマリが惡くて中途から退場された事もある、これは婦人の情として免れぬ事柄でありませう。

斯樣な有樣ですから今夫人が何

かの位へでも出席爲やうとするには衣服や身の廻りの調へ丈も中々容易ではありません、それに衣服とても何時も何時も同じ服裝と云ふ譯にも參らぬと云ふ樣な傾があつて集會の爲に會費の外にいろ〳〵と餘計な費用が必要です、それ計りでは無い往復には日本夫人の習慣で是非とも車を雇はねば成らぬ、抱車夫のある家では別に車賃は拂はぬが然し車夫への心付けや、支度を要する、抱の無い家では宿車を雇ふて定紋か苗字の頭字を縫ふた法被を着せねば成らず加之も集會の始めから終りまで待せて置く、この費用計りも壹圓以上壹圓五十錢以下、故に若し月に四五回も集會交際の席に臨うとするには六七圓より少からぬ車代を拂はねばならぬ、少し交際好、出勝の夫人などはどうしても車代計りが月十八九圓から二十二三圓も要るのです。

それで若し交際社會に多少名前を知られて何某の夫人とでも云はるゝ樣に成る時は亦いろ〳〵の義金だの寄附だのを賴に來る、ヤレ某夫人の旅行の見送り、誰某の出迎、それは〳〵實にうるさいもので、暇費と費用計りも中々容易なものではありません。

又官吏の細君には富豪や華族の夫人と變つて別に一種の交際、交際と云へば交際であるが仕事がある、それは長官や羽振の可い上官の夫人の御機嫌伺ひの爲に盆暮の如き定つた時は勿論、少くとも隔月に一回位は何とか口實を捕へて相當な手土產を持參せねばならぬ手輕な所で風月のカステーラ位、若し先が小兒でもある家であればこれは外國から送くつて參つたとか何とか云つて珍らしさうな玩弄品を贈ると云ふが普通、大した費用も要らぬがそれでも一ヶ年には彼我十五圓や二十圓は消えて仕舞ひます。

### △主人の嗜好

主人の嗜好は以前から隨分多方面であつたが近來は趣味の方面がガラリと變つて書畫に骨董品それに餘り執心な方でも無いが圍碁が少々、近來は亦同僚のお交際と云ふので謠曲も少し計り始つた、が先ア何方かと云へば物好きは地味な方であつて餘り費用の嵩む方では

無い、只時々の堀出し物が大抵は僞物である位、それも應擧や探幽の掛物を十圓内外で買ひ入れらるゝのであるから大した失敗も無いのでせう。

### △兒童の教育

教育と云つた所で令息も令孃も未だ一向の小供であるからこれと云つて注目する程の事は無い、が夫人の實家が權門である丈に主人公も何所となく貴族的の趣味を愛せらる方で總領の娘は華族女學校の幼稚園へ通はしてある、次の男の子は主人公に別の考があるとか云ふので學習院へは遣らぬと云つて居らるゝ、兎も角も手の要る小供二人、戰爭前までは二人の小供にめい〳〵傳が付けてあつたのであるが近來は勤儉の主意から下の小供の方は專ら夫人が親しく養育らるゝ事に成つて小女一人を減じたのであるが、然し斯樣な譯で生活費は隨分容易でありません。



### △家庭の趣味

舅や姑の多くは餘り新婦との折合の好く無いもので嫁が實家へ歸つて第一の愚痴は舅姑の讒訴です意地が惡くて、思ひ遣りが無くて甚しきは夫婦仲が好過ぎるなど〳〵さへ云はるゝと云のもある樣ですが、然し思ひ樣に由ては舅姑程嫁の身に取つて便利なものは無いであらう、それは舅姑は家政の指導者で斯樣なる事柄は斯く〳〵に處分

するとか、斯々の折にはこれ〳〵するのが此家の爲來りであるとか、と云ふ風に差圖をして與れるので、舅姑のある家は嫁が家政を料理する上に於て非常に樂と云ふて好い。それであるから、一家の家風と云ふものにチヤント極りが付て行くのです、假令少々世間體の惡い事も、あれは彼の家の家風であると云ふ様に人が恕して與れることもある、そして舅姑のある家には特殊の面目と趣味があつて何となく沈着て居る、然るに舅姑の無い家と云ものは……况して夫婦共學校から出た許りの新世帶などでは何分にも整然とした取締……所謂極つた家風と云ふものが乏い、一寸した事であるが下女や書生を召使ふにしても、又親類や朋友の交際に就ても所謂朝令暮改の弊を免れないで家庭の威嚴規律を欠く傾きがあります。

主人公の書齋が下宿住ひ風で細君の部屋が女學校の寄宿舍式、それも惡くも無いであらう、が如何しても無趣味で殺風景たることは免れぬ、であるから終にそれが兒童の趣味の教養、人格の修養と云ふ方面に對つて意外の惡感化を來すこともある、然樣な立場から云へば舅姑のある家や舊家とでも云はるゝ土着の家には一種の奥床しい所のあるものである、それが官吏などで旅から旅へ世を送る種類の家庭では何とも譯の分らぬ混合的不規律な家庭の有樣であります。

## △主人の威權と細君の威權

勿論一槪に云ふことは出來ぬが押し並べて古風な家庭では良人の威嚴は遙に細君の威嚴よりも重んぜられて居るものであるが、前述の如き官吏などの樣な混合的家庭ではまゝ細君の權力が良人の權力を壓して居ることがある、まして夫人の實家が權門であるとか富豪であると云ふ塲合には尚更にこれが多い、然りとて殊更に細君が實家を笠に着るの、女尊男卑を主張すると云ふ次第でも無からうが如何いふものか良人の威權が細君の威權よりも劣るので、マア一寸した事であるが昔風の家庭では良人を訪て來る客の席へ細君の出づると云ふ事は少い假令有つても一通りの挨拶が濟めば直ぐ

に其所を退出する、然るに官吏的當世風の家では中々令夫人引下つては居ぬ、又引下らしても置かぬ、終始席上に侍つていろ〳〵と接遇をさるゝこれはホンの一例であるが萬事がその主義で押し通ほさるゝので、獨りそれ計りでは無く下女や書生出入の八百屋までが主人公よりも夫人の權力を尊重すると云ふ傾きのあるのは此種の家庭の特色であらう。

△住所及家屋

東京で官吏の住所と云へば先づ麹町區内、四ツ谷、赤坂、牛込、麻布などと云ふ山の手がお定りで其内にも軍人が牛込と麻布とか、大藏省や内務省の官吏は小石川、麹町と云ふ樣に自ら一定の區域が出來て居る、それはめい〳〵勤めの官廳への便否とか、兒童の通學する學校の位置などから何となく斯樣な傾向を生ずるのでせうそして彼等が下町よりも山の手を多く撰ぶのは下町の狹つ苦い所で高い家賃を拂ふよりも山の手の高臺で空氣も好く眺望も好い方が利益であると云ふのも一つの原因でせう、それに役人の住宅は如何しても小くとも門の一つもあつて植込の少々ある庭園を有して所謂お屋敷然として居らねば威嚴が欠くると云ふ樣な考へも一つの原因でせう。兩三年以前までは官吏の住所は前記の麹町や四ツ谷や



小石川などでありましたが、現今ではそれが千駄ヶ谷澁谷、大久保などまでも押し込んで然樣な遠方から通勤すると云ふ風に爲つた、それは俗塵を避くると云へば大變に立派な樣であるが實は生存競爭の爲に起る自然の結果であることは爭はれませぬ。

家屋、官吏の住宅は普通の商家とは趣の違ふて居ることは勿論、世に云ふシモタ家風とも亦た變つて居る、所謂前に云ふお屋敷風で無くては無らぬ。門を入つて玄關があつて、少し上等の向きは供待迄も附いて居るそして家の間數が大小合して六七間、少し廣いのは十間位のものもある、即ち八疊の應接間に六疊か四疊半の書齋、客間、會食室兼用の一室が十疊か狹くとも八疊で、これは家の内で尤も立派に裝飾さるゝ室であるそれに茶の間、書生部屋、下女部屋、細君の居間、寢室、これ等が先づ普通の上等の部で洋風の一間もある家は到底もこの階級の人々の生活費の許さぬ所であるがもし主人に翻譯とか、退廳後から私立學校の講師にでも出懸けると云ふ特別の收人のある向きは格別である。家賃は勿論場所に由て多少の相違はあるが大抵この邊の家屋では一ヶ月十八九圓から廿四五圓迄です。

## △生活費

家族は奥が主人夫婦と二人の小供、それに小間使兼の兒守女一人と飯焚女、外に書生が一人上下總計七人の暮、給金の出るものは二人の女中計りであるが書生にも少し位の小使は遣らねばならぬ、これが合計四圓半米屋の拂いが如何しても月に七圓から八圓は要る、そして幼稚園の月謝、牛乳、小兒の間食など云ふ、小供にのみ要る費用が平均に五圓五十錢、肴屋だの八百屋だのと云ふ副食物の費用が十四五圓から多い月が十八九圓、薪炭油味噌醤油から新聞雜誌などの拂が五圓から六圓、それに家賃が二十圓に夫人の交際費が七八圓、雜費と云ふべきものが六七圓、主人の小使と云ふものは勘定の外として如何しても月々七八十圓の生活費は必要です。

年俸千圓内外の官吏の生活費はザットこの位のもので

あるが時々は思ひ懸けぬ失費も要るものであるから、先づ手一杯に支拂が出來て借金の出來ぬのは餘程經濟の上手な方と云ふて可い。

# 大阪 商家の家庭

岸本柳子

一般商家の娘さん方ですら高等小學卒業位では滿足せぬまで、文明の潮流はさしも保守的な大阪を化して、驚くべき進歩の域に達せしめ、諸種の事業また長足の發達をして來ましたが、乍去由來大阪は商業の地として昔から知られて居る丈、家々人々明け暮れたゞ營々として業に勵み、孜々として利を念ふの外、又他意なしと申てもよい位ですから、從て表面の開けた割合には、家庭の狀態にまだ保守の氣を脫しませんで、家柄だの家筋だのと無暗に門閥を尊崇する風は今も腦裡を離れません、ですから自然家庭に於ける萬事が後れ勝ちに成て居るかと考へられます、最も近來は諸國から諸種の人が移住して參りまして、家庭の風儀も千差万別といふ有樣で、一般にとは申されませんが、併し土着の家の大方は今も猶尠からず舊思想に支配されつゝあるやうに思はれます。

大阪の家庭では主人を旦さん、主婦を御寮人さん、老婦人をお家さん、男の子を坊さん又は坊ち、令孃の長を孃さん、次を中孃さん又は中はん、其次を小孃さん又はこいさんと稱ぶので、それが召使とか或は出入の者とかゞ令孃に對する尊稱ばかりでなく、或家なぞでは現在の親達まで、不見識にも吾子に對して、坊ちだの孃なぞと呼ぶのでして、たとへ夫れ程でない家でも、吾子女に向て決して呼び捨てにはしません、のみならず他人に向て子女の噂をする時でも、彼人が斯うしられまして、此人が何う云はれましてと、一寸聞けばいかにも美しいやうなものゝ何とやら變な心地がします、名を呼ぶのですら既に其通りですから、其他は推して知られます、今其子女即ち坊さんと孃さんが、いかに教育され、何のやうに躾られつゝあるかを少しば

かり記して見ませう。

▲坊さん

「坊ち〳〵と何時まで坊ち、二十才過ぎたら若旦那」と云ふ子守歌は今もをり〳〵耳にしますが、二十才どころではない、一角立派な壯年に成つてもまだ獨身である間は、大抵坊ちで通ります、そして兩親の膝下に大平樂を並べて居ても、人怪しまず自分は無論のこと〳〵それが當り前として考へられて居るのです。

大阪の家庭では殊に夫妻の懸隔が甚だしいにも係らず、女の子は申すまでもないこと、男の子でも十四五になるまでは、



其敎育は大方母親の專任のやうになつて居るのです、で此坊ちは女ばかりに取卷かれてお山の大將己れ一人と云ふ風な中に、可成溫和しう、上品にと云ふのを何よりの箇條にして、壯健で色の黑いよりも、孰らかと申せば少々弱くとも色の白い、きやしやな質であれば、何處其處の坊ちは御美麗でお優しいなど、喜ぶやうな人々の手に育てられるのですから、何うしても柔弱に陷ると云ふ事は免れませぬ、近年は學校でも智育よりも寧ろ體育に重きを置く傾きで夏期は水泳までも敎へますが、是れに出る生徒は大概中以下の子弟が多く、他は指を屈する程よりな

いさうです、そして其理由として聞くのは、いづれも太陽に燒けるから不可いとか、色が黒くなつては醜いとか云ふのださうです。ですから十四五にもなつて、愈々是れから眞の勉强に掛らうといふ時代には、誠に身體が弱い、少し書物に身を入れると、直ぐに病氣を惹起すものですから、遂には商家に深い學問は不用ぬ、それよりも實地に就て活きた學問をさせた方がと云ふ美しい名の下に高等小學かせい〳〵が尋常中學位で敎育は止めて了ふのが多いのです。

學校を止めてからも、以前にも我親にまで坊ち〳〵と奉られて、家庭敎育などいふ事には更に注意されなんだ坊ちは、店に出れば周圍の空氣に化せられて、商業の掛引を覺へる前に、既に〳〵穢れた巷に酒に醉ふ事を覺へるか、左なくば彼家の坊ちは靜粛しい感心なと讃められるのは、餘りの脆弱で、内氣に過るといふ風に成て了ひます、で今更のやうに驚かされた親達は、他に幾らも適當な方法もあるべきに、甚だしい家では踊を習へば運動になるの、義太夫が好いのと勸めるさうです、されぱこそ堅い〳〵と思ふて居る坊ちが、算盤の勘定がいつしか忍び音の端唄に化したり、結算の中で鹿爪らしう握つて居る筆の先には、都々逸や川柳なぞが染められて居るのは、左程怪しむに足らぬ事です、其處で財産のある家ほど、大きな間違ひのない內にと云ふので、徵兵の檢査もまだ濟まぬに最う嫁の詮索に急いで、お父さんになつてから兵隊に出る坊ちは幾らもあります。

## ▲孃さん

元來が家庭敎育と云ふ事の意味を大方ならず誤解れて居て、字は書けずとも、書物は讀めずとも琴三味線を知ねば耻辱であると云ふ風に敎育されるのですから、孃さんなるもの丶幼時から嫁入時までの、それは〳〵複雜な事と申ましたら、實に非常なもので、幼稚園に通ふ樣になると同時に、最うソロ〳〵踊の稽古が始まるのです、それから七才八才になれば琴に掛つて、十

才或は十一二才に成つて漸と手が屆くやうになると、今度は三味線といふ順序に行くのです。

近頃では時勢に伴れて、此弊が餘程少なくなつた樣ですが、それでも學事よりも遊藝がいかに大阪の家庭に歡迎されて居るかは、舞なり琴三味線のお浚らへの爲に、幼稚園或は學校を休ませる事を更に意に介しないのや、孃さんをお浚らへに出すと云へば、母なる人は申までもなく、父親までが夢中になつて、家內中上を下への大騷ぎを演ずるのでも知られます。

何しろ十五六にもなつて、漸と高等小學を卒業するかせぬに、最う緣家を求め出すといふ有樣ですから、此時期の娘達の多忙しい事と申ましたら、少し勉強する質の人になると、早朝御飯前に稽古屋に行く、食事後學校に出る、それから又お茶とか生花とかに通ふと云ふ風に立廻るのですが、何うかした折に學校の課業に追はれて、已むなく遊藝の方を怠る時なぞありますと、直ぐにお母さんから小言です「私達の小さい時分は寒の內でも朝早く起きて、物干なぞに出てお浚らへをしたものです、人中で顏赧らめさせたくない爲ばかりを、左樣まで六かしければ學校を止るもよし、女に深い學間は不用ぬ、此上裁縫さへ出來れば……」と云つた風で遂には癈學させて、只管裁縫と遊藝を仕込むのでして、裁縫の修業は誠に結構ですが、此又縫物屋といふものに就ては隨分世評もあり、實際種々な弊害もありまして、其結果やら又根本から誤つた、矛盾した敎育の仕方から、只最う堅う〱と云つて育てられて居るにも係らず、孃さん方の扮も芝居好きですこと、華美好きなこと實に意想外なのです。

市立高等女學校と云ひ、或は私立何々女學校と云ひ、いづれも隨分澤山の女生徒を收容しては居ますが、其中に眞に大阪人の娘はどれだけありませう、大阪の家庭では孃さんのお嫁入荷物の中に、學校の免狀はよしや一枚もなくとも、それは大した恥ではないのです、寧ろ琴の免狀のないのを此上ない耻辱のやうに考へられて居るのです、されぱこそ師匠の收入期は秋の暮から春へかけてだとか云ひますが、何故かと云へば此間

が最も多く行はれる婚禮期で、嬢さんの技倆の如何に係らず、目錄に奥許の免状を記すが爲め、多くの金を出して、買ふからださうです。

那様な風で多くの母親は、家庭教育とか躾とか云ふのは、琴三味線乃至茶の湯、生花なぞを上達させる事のやうに考へて居るかと思はれます、其證據には學校の試驗に落第しても左ばかり咎めもせず、今日は可厭な課業があるからと云ふ申分は無雜作に許しながら、他に於てはたとへ雨が降うが風が吹うが決して〱怠る事を許さぬのです。



坊ちと云ひ嬢さんと云ひ、是れはホンの一端で、まだまだ如何はしう思はれる點の少なくないではありませんが、併し其樣な風に教へられ、育てられた人々が未來に於て何のやうな家庭を作るでせう、周圍の凡てが進むに從ひ、今日では最も舊弊家の多いと云はれて居る船場中ですらも、女の子なりとてせめて高等小學校だけ卒業させねばと云までにはなつて來ましたが、兎に角内容よりも外觀、實質よりも形式といふ弊は何うしても脱し去らぬ樣です。

## ▲虚飾の家庭

誰れでも大阪の人は實質に乏しいとか云ひますが、家庭に於ける凡てが兎角實よりも外面を貴ぶ傾きがあつて、虚飾に流れ易いものですから、それが其家庭に育つ處の人々の第二の性質となつて、顯はれるからでせう、たとへば菓子折一つ人へ贈るにも、風味の善惡は扨措て、見た處の大きくつて立派なのをと云ふやうな風ですし、人にしても左樣です、初對面なぞの場合には八字髯でも生して洋服でも着けて居れば、同じ叩頭をするにも、餘計に頭を下げると云つた風なのでして、女の帶なんかも、まさか餘所行きのは左樣でもありますまいが、一角の御寮人とか嬢さんと云はれる人でも、何うかするとはぎとか申てホンの結び目だけ、人の目に着く處だけ三尺か四尺、立派なのを着けて居るのがあります、外觀のみに汲々として居る風は是れでも知られます。

商業地丈に生活塲裡の競走が殊に劇しく、其樣な餘裕のないからでもありませうが、大阪の家庭では一家團欒して樂しむといふ塲合が至つて少ない樣です、主人は忙しう商業に駈け廻て居るのに、妻君は氣樂さうに芝居觀に行て居るとか、或は妻君が多くの召使を操縱して毎日〳〵家政に心勞して、塵まぶれに成て働いて居るにも頓着なく、主人は青樓の二階で藝者に取卷かれて、面白可笑しう遊んで居ると云ふ風に、兎角別れ〳〵に娛樂をするやうです、又たとへ一家擧つて冬ならば埋火の邊り、夏ならば端居涼しい椽側なぞに團欒ふ折があつても、素より文學だの高尙な音樂、或は繪畫とかいふやうな思想は養はれて居ませんから、自然談話の品位も下つて來て、芝居の話でなければ役者、落語家、其他藝人の品評か、手近な人の善惡を云ひ合ふ位で、眞に淸い美しい家庭の快樂を味う事は誠に少ないやうです、それらの原因からでゝもありませうか、變化を希望する方は依然進歩せずに、昔の方がと思はれる衣服の好や、髮飾りは痛く變化して、御寮人でも娘さんでも兎角役者の舞台姿や、藝者を標準として、身粧を作るといふ有樣で、一寸見には何れが素人か、黑人か見別けの着かぬ人が往々あります。

商家なぞでは何事でも餘り角々しいのを好まぬ故とは申せ、主人と雇人の間の詞使なぞの粗略なと申ましたら「御寮人さん八百屋はんが來やはりました」と申せば「直き行きます、一寸待てゝ貰ふとくれ」と云ふ風で我子にすら、父親までが坊ちの、孃ちやんのと呼ぶのですから其筈かも知れませんが、下女を呼ぶにも、お松どん、お梅どんと云ふやうに、奇麗と云へば奇麗ですが、變です併し其見た處聞いたところのやうに使ふのも優しう勞て居るかと云へば、それは餘程疑問で、中々拔目はないとのことです。

それから大阪の家庭には慈善心が痛く缺けて居るやうです、最も孤兒院もあり、慈惠院もあり、授産場なぞもあつて、其等はやはり土地の家々から受くる處の同情の塊を以て維持して居るのではありますが、それが眞に父なく母なく兄弟もなき孤兒等を、憐れと思ふ心から溢れた慈悲の涙の雫でありませうが、多くの慈善家、寄附者の聲に耳を傾けますと「他の人なら斷つて了ふのだが、彼の人から言はれて豈か謝絶もならず又僅の事で世間から彼是云はれるのも不体裁から、十錢宛でも遣て置うか」と、名の爲め世間体の爲に慈善家となるもあり、或はまた「取引さへなければ何でもないが、今彼人に氣不味う思せては、不利益だ、マ、よ損して得取れと云ふ事もある」と云つたやうな風で營利の爲に余義なくされて、天晴れ寄附家の名簿に連



なつて居るのもあるとやら、それで居て何々協會とか某の紀念碑、又は銅像建設なぞと云つて、名望ある人人の名を多く並べたり終局には木杯でも貰ふとか、左樣でなくとも何か一寸でも自家の利益になるやうな處には、比較的寄附金が集まると云ふのでも、大抵家庭の理想が解るかと思ひます。

愛は婦人の眞價であり、婦人の美德は同情を以て最とすとか申位で、最も慈愛の心に富み、優しかるべき筈の婦人方でも、何うかすると慈善音樂會に行くよりは芝居を觀た方がと云ひ、慈善市に出す金で寄席を聞きに行く方遙かに面白いなど丶云はれる人も澤山あるやうです、そして其慈善事業に對して冷淡な婦人が、何うかと云へば役者が挨拶に來たと云つては十圓紙幣を投げ出したり、落語家がお世辭を云つたとて、三圓五圓の金を與へる事を更に惜まぬさうです。

兎に角今の大阪の家庭と云ふものは、尠からず虛飾と華美の空氣を以て滿されて居ます、ですから二言目には上方贅六だの、實質に乏しいの、浮薄であるのと呼ばれるに至つたのでせう、そして其虛飾を衒ひ、華美を好むと云ふのも畢竟は舊思想を脫し得ずして萬事形式に拘泥し過るからではありますまいか、書けばまだまだ盡きませぬが、先づ是位に致て置きませう。

# 牧師の家庭

庭　芝　萊

久しく逆境に處し、誤解と迫害の中に布敎し來つた基督敎も、今や漸く頭角を現はし、我國の宗敎界に於て一方の覇者たるに至り、世人も其勢力を認識する樣になりました。

さて一概に基督敎と申ますが、中には舊新の二大別があつて、それがまた小分派に別れて居ります、目今我國にある新派丈でも十數派ありまして、幾分かづ丶儀式禮典或は其政治を異にして居ります、而して其敎師の資格にも多少の差異がありますから、「牧師の家庭」を紹介するに當り、先づそれ等の事の大要を述べ

ねばなりませぬ、さて牧師なるもの、、資格及威分の大概を述ぶれば、私の知つて居る丈は大要左の如くであります。

一、普通學を卒へて神學校に入り、或は更に外國に航して專門の學科と、傳道の實習をなし、それより一教會の牧師となり、教會と一部の團體（教師會議、或は地方會の如き者）の推撰により學說及び信仰の試問を經て就職するもので、其識見は當今の學者輩に讓る所なき者。

二、必ずしも一教會を牧せざるも、牧師たるべき諸學科と其信仰及決心を旣設の試驗委員によりて試驗せられたる者、



三、さまで學殖豊富と云ふにあらざるも多年傳道者として布教の經驗を有し、一教會を司牧し得ると認識し、推撰せられし者

大要右の如き人々が其宗教の儀式なる按手禮を受けて牧師となり、信者に洗禮を授くる高尚なる職務に從事するもので精神界に於て重要の位置を占むる者でありますが、多くの教派中、舊教は主權外人にあり、また新派の中にも之と等しき者もありますが、今囘我が紹介せんとするのは是等外國ミッションに關係あるものでなく、全く日本人が經營して、少しも外人の手を借らざ

る教會のそれでありまして、且前記資格の第一項に該當する牧師であります（附言、此の如き牧師は組合、日本基督二大教派に多く見、美以派之に次ぐ）

さて此の如き名譽の聖職にある牧師の家庭の壯態如何、請ふ先づ牧師の成功すると否とに大なる關係あり且つ無言の傳道者として布教上に多大の影響を與ふる内助者即ち其妻女をして、彼女自身の境遇を語らしめよ、彼女曰く、

▲**牧師の妻**　と申しても、世間の奥さんと異なる所はありませぬ。唯彼は多くて二人の舅姑と三四人の小姑を有せるのみですが、牧師の婦は教會員てふ多數の小姑を戴て居るのみで御座います、そして是等の小姑は所謂十人十色であつて、之に對する中々六ケしく御座ひますけれども、唯「左樣然らば」と御機嫌ばかり窺ふて一時を彌縫するが如きは、一教會を司る牧師の妻の正當の所爲ではありませぬ。心の奥底には「我は教會の母なり、會員は等しく我が愛兒なり」てふ確信を要します、此の如く嫁と姑の二役を並有して居る姿でありますから、自重する所は須らく自重しなくてはなりませぬ。

▲**財政**　ですか、これは御承知の通りいづこも全じ秋の夕ぐれで、極めて苦しくあります、其上に過分の心勞と働きをしなければなりません、教會から受取る俸給は漸く一家數口をさゝへる丈で御座ひますから遣りくり算段は中々容易でありません、衣服も立派にすれば立派にしたで、とやこう申されますし、粗服すれば粗服したで何の彼の噂されます。御承知の如く牧師の交際は上下を通じて居ますからあまりつまらぬ風にしても居れず、家の内も多少模範と云ふことを心掛けねばなりませぬ、で御座ひますから内幕は中々困難で御座ひますよ」と以て其家庭の一端を知ることが出來ませう、一体牧師の生活は教會と組合とは大分違ひますが、現在教會にある牧師即ち日本人丈で計算して居る教會の牧師の謝儀は、大抵三十圓以上八十圓位でありませうが、併し獨立教會で八十圓と云ふは一二しかありませぬ、之を平均すれば四十圓内外で御座いませ

う、少しく名ある牧師にして、若し學校の教師なり其他の職務に就けば優に百圓以上の收入は得られるのです、然るに金錢を外にして此聖職に從事して居といふのは止むに止まれぬ宗教的精神と、無形の慰樂があるからであります、さて餘談はさて置き假に五十圓の謝儀を得、家族四人合計五人ある、牧師の一家が一ヶ月の豫算は如何と云ふに支出大要左の如くであります。

十圓　家賃　　廿圓　食費
五圓　交際費　十圓　雜費
五圓　子女教育費

これで見ると被服費や臨時費などは支出方法がない樣でありますが、これは教會でクリスマス、プレセントと暑中の慰勞として呈する多少の金員と、結婚或は葬儀の折など謝禮として贈る金即ち臨時の收入がありますからこれでどうやら都合よく行けるのです。それに教會員中の呉服屋が反物を呈するとか、青年等が相議して靴を贈るとか、物品の贈物もありますから、不時の事なき以上は借金もせずに濟みます



牧師夫人語を續けて曰く『それから

▲**平生の心掛**　ですね、先牧師の妻は良人と同じく一視同仁の心掛なくてはなりませぬ、申すと生意氣の樣に思はれるか知れませんが、宗教上の目から觀る時は、富貴だの顯榮だのと云ふ人世の階級は一もありません、之を神より見れば同じく其愛子で正道を踏み聖旨を行ふものが一番貴ひのでありますから牧師夫妻も亦た此心を以て人

に對さなくてはなりません、要するに伊藤大勳位であらふが岩崎や三井であらふが、乃至車夫馬丁であらふが、同じ兄弟姉妹で「人」としての價値は同一であると云ふ考へを以て居なくてはならぬ、又之を一家內にすれば、一家のことは全く妻女が擔當して良人をして內顧の憂なからしむる樣に努めるのです、これが所謂無言の傳道であり、又た良人をして充分なる說敎をなさしむる原因となるのです、聖書に「來り見よ」と云ふ辭がありますが、牧師の家庭も亦た此覺悟がなくてはなりませぬ。次に

▲「一家の整理」の問題に移る順序ですが、之とても普通の事であつて、牧師の家庭とて別に異つた事もありませんが、要するに手不足なるも臺所から、庭、坐敷の隅々までしやんとして居ることが出來ると云ふ樣範を示す樣に心得ねばなりませぬ、何時敎會員が來ても居心地よく、「牧師の家に行くと何だか春風に吹かれる樣な氣がする」と云はしむる樣に出來なくてはなりません」と。語れば極めて簡單なるも之を實際に現はすは中々困難なものですが、我が訪問した牧師の內君が之を殆ど完全に實行し居らるゝのです、其敎會員中の年若い連中の話に、先生の御宅に往つたけれども奧さんが御不在だつたから歸つて來た」と、此一語以て他を察することが出來るではありませんか、夫人又曰く

▲「一家の慰樂」と仰づしやるんですか、左樣之を敎會即ち牧師の妻としては、他人の知らない樂みがありますよ、それは外でもありません洗禮式に常に敎はれんことを祈つて居つた人が受洗したり、長く敎會に出席しない人が出て來たり、日曜學校の生徒が生長して立派な信徒になるに、ホームを持つたりするなどは實に樂みで御座います。それから私は隱しなく申ますが良人の愛情ですね、前申ました通り財政向は困難ですし、責任も亦た重ふ御座ひますが、良人が何にくれとなく同情を以て世話して呉れますことです、是等はよし一枚の晴衣がなくとも誠に嬉しふ御座ひます、それですから私も日々心掛けまして良人が訪問や傳道から歸つて來た時、夏であつたなら成るべく涼しそうな座

敷へさつぱりした衣服を準備し、冬ならば衣服を暖めて御待受をする樣にして置きます、是等はあたりまへなのですが、又其間に目に見へぬ言語にあらはし得ぬ感情を呈する樣にします、話が段段長くなりますが、今一言申せば學校仲間即ち

▲同窓の友人との關係で御座います。學校にある間は親しく交はりもし、語り合ひも致しましたが、一旦學校を出でゝそれ〱嫁しますと、中には御手車で驅け廻つて歩かれ、家には二三人の下女を使ふ身分となつたものもありますが、私の樣に牧師の家内になつた者は何となしに下げしめらるゝ風があるので御座ひます、私などは別に何とも思はず、寧ろ其人々を氣の毒に思つて居る位ですが、中には妙な考へになる方もないではありません、申すまでもなく牧師の職務は精神上の働で、此世に於ける名利や地位の如きは、眼中になき筈ですが、併し年若い御奥さん方は一種の感じを起さるゝのも無理はありません、現に同窓會に集つた時などは隨分心外に思ふヿも御座ひます」と申されました、如何にも婦人としてありそうなヿですが、これは未だ宗教といふものが我國に於て眞面目に考へられ、また宗教家を尊ぶ念慮が少ないからであらふと思ひます、そは兎に角に此



牧師の
▲家庭の現狀●●●●●は如何であるかと云ふと、此家は一家六人ありまして、下女が一人居ります、朝は食事前に家族全體が一室に會し、約三十分程朝の集會を開かれ、萬國共通なる聖書の日課を讀み、牧師は之に簡單なる注釋をなし、一日の恩寵を祈り、其日の爲すべき働に神よりの祐助を希ひ、かくて食卓に着くのです序に申ますが、獨り牧師の家庭に限らす凡ての信者の家庭では食事毎に其食物は神の與へ給ふものとなし神に感謝を捧げて食すると云ふとです、それから此家では、西洋風に。

▲一週間の働●●●を定めて置くそうです、其事も詳しく聞きましたが、少し忘れた處もありますけれども大抵左の如くに記臆して居ります。

月曜日、此日は牧師の休養日であつて、大抵家居し或は山河に遊んで疲勞を醫さるゝ、されば一家内に於ても其心を以て一日樂しく送らるゝと云ふとです。

火、此日は來る日曜日の爲に祈り、且つ其日の說敎の大抵の準備をなし、二三の參考書も調べる、妻君は敎會員の訪問に出掛け、夜は求道者即ち基督敎を調べたいと思ふ人の爲めに集會を自宅に開く。

水、此日は牧師の來客に接する日と定めてあるそうで、妻君は其爲めに一日周旋さるゝそうです。

木、此日は妻君が一家の萬端の事務を整理し、午後には婦人の集會に出席する樣になつて居ります、而して牧師は訪問をなすとか。

金、此日は牧師に取つて大切な日で來る日曜日の說敎を定めんが爲めに、祈禱し且つ考ふるのです、夜は敎會の公の祈禱會があります。下女は勝手元の整理をなすとか。

土、此日は牧師は大抵靜かに身體を養ひ或は會員を訪問する、妻君は翌日の食品を買ひ調へたり、子供の來週よりの事柄の爲に忙はしくして居る。

日、これは云ふ迄もなく朝夕の說敎や、聖書講義、日曜學校などの爲めに、精神上の大なる働きをなす日なので、牧師一家にとりては最も重要な日で御座いま

す。

▲子女の敎育の事は、全く妻君の擔當であつて、牧師自身は相談は受けるが、自ら指揮する等の事はない、長男は今中學の四年級で外の二兒は孰れも小學校に通ふて居るが、東京市では近來他の區の者は、いくらよい小學校が近い所にあつても入學せしむることが出來ぬ、その爲めに此妻君は非常に苦心され、塲合によつたら轉居迄もし樣として居られる、それから如何に子女の敎育に意を注いで居るか、また一家内如何に平和であるかを思はしめたのは、此中學に居る長男のまだ二年生の頃であつたのです、或日の事學校より退けて家に歸つたが、顏に驚きの色あり、且つ其母に對して今驚くべきものを見て來たといふから、何事であらうと訪問者も耳を欹て丶聞きますと、意外、車夫同志の喧嘩であつたのです、こんな事は常にあることで更に不審議の事はないが、此長男の子は、これ迄斯樣な物爭ひなどを見たこともないから、實に一大事件でも起つたかの如くに思つたのでした、心なくして考へるとつまらぬ事の樣ですが、如何に母たる人の日常の心掛の周到であつたかを知らる丶でありませう。

又此家庭を訪ふて氣の附くのは父も母も自分の子供を呼び捨てにしない事です、そしてすべての事命令的にせずして自覺し或は自ら働く樣に仕向けて行く、それから叱責と云ふことは稀にしかない、が、一旦叱責する塲合になると、之を別室に呼び嚴として正しますから、大抵一言にして謝し且つ悔悟すると云ふ事です、これは久しく仕へて居つた下女の話です、母は此の如くでありますか牧師は殆ど關せず、日常友人でもあるかの如くに子女と遊んで居る、私は思ひました流石に牧師の家庭であると、さて此の如き家庭の、

▲娯樂式は讀み物 は如何なるものであるかを紹介するも亦興味あることであらふと思ふ。若し假りに人ありて此家庭を訪ふたとしませう、すると大抵此奥さんによりて取次がれ、應接間兼客室に導かる丶でありませう、かくて座に就て先づ床の間を見ますと、故聖者の語を何某の書家によりて書せれたものか掛つて居

るそれから額は花鳥のもあれば、故大説教家の像などもある、それから卓上に目を轉ずると寫眞帖があつて大抵名所古蹟の寫眞が挿まれて居る、それから新聞紙は時事新報と國民新聞の二種であります。さて聞く所によりますと牧師の最も好まるゝのは魚釣であつて暇さへあれば出掛られる、さりながら魚がとれ樣がとれまいがそんな事はどうでもよい、唯だ氣を轉ずるのみそれから圍碁も少しはやられるが而したゞ交際の爲めらしい、奥さんは園藝が好きと見へて折々庭に下りて一生懸命に草木の世話して居らるゝ、それから料理の事です、これは娯樂とは云へまいが、兎に角好きです
私が訪問した時の話に「私は經濟的にして甘き料理をなさんとを勉めて居る」と申されましたさすれば一は一家の爲めであらふか、小説本は讀まない事もないが、近來の駄本は一冊もない、却て意外に古き忠臣義子の書の如きものと英文のものがそこらに見當る、其他はこれと云ふ程の事はわからぬ。
申せば猶はありますが餘りに長くなりますからこれ位にして置きます。
最後に讀君に申ます、私の想像する處では、相當の學力と見識とを有して居る牧師にして若し其傳道事業に成功しなかつたならば、其責任の三分の二は妻君にありと思ひます、之に反して着々として成功を見る牧師があつたならば其の妻君はどこか欽すべき資質を備へて居ると想像されても大した間違ひはなからふと思ひます。

### 教會の洗濯競爭

去る頃英國リバープール市の某教會に開かれたる慈善市に附屬して催はされたる珍らしき競爭が西洋手拭を洗濯する競爭にして二分半の間に多くのタヲルを洗濯し上げたる者を以て勝者とし一定の賞與を與ふるに在りしが、當日は參觀の婦人は何人を問はず自由に競技に加入し得ることに定められありしと云ふ、此競爭後には大に一般の歡迎する所となり、所々方々に行はるゝに至りし由なるが、或所にては競爭者を既婚未婚の兩組に分ちて競爭せしめたるに、勝利は常に既婚婦人中に多かりし由なるも、時には兩者殆んど同一の成績を並し勝敗決せずして分れたることもありき

## 社會生活の安全機關　巡査の生活

△△生

官吏といへば、上は國務大臣、下は巡査、等しく國家の公職に居るものであります、俸給から申しますと太臣が五百圓で、巡査の初級が八圓であります。すると一人の大臣は六十二人の巡査と匹敵致します、人間の働らきも斯くまでに違ふものかと思へば、其の裏面には人の地位と立身、出世には限りのないといふ事が證據立てられます。

巡査は等外の一小吏とは言ひながら矢張官吏で、國家の公職を務むる點に於ては親任官と撰ぶ處ろはありません。まづその歷史を申しますと、維新草創の際には捕亡様と唱へられ、棍棒を携へて罪人の捕押をしたものである、其節は今日のやうな行政官でなくて、直接に罪人の糺問をもして中々權力のあッたものです、今でも山間の部落などへ參りますと中々權威があッて村民輩よりは全く別人種のやうに敬ひ尊ばれてゐるのであります。それ故斯る地方に於ての巡査の生活といふものは、村の富豪以上で、巡回、出張といふ様な時には、村の料理店、宿屋で上等の御客様である。隨つて、體面も飾らねばならぬ、又著るしく威嚴をも示さねばならぬされば都會に於ける交番所の人とは全然類を異にして居るのであります。併しこれは山村僻地に務める方々の狀態であるが、一歩眼を轉じて大都會の各警察署に屬した方々の生活狀態を見ますると實に御氣の毒な事が多いのであります。

御承知でせうが巡査の職には五ヶ年の誓約年限といふものがあッて、其間は一身上の都合で以て轉職する事を許されませぬ、若し之に背きますと誓約違犯として免職の處分を受けます、尤も相應の學問のある方で、一時凌ぎの腰掛に奉職さるゝ方もあるから、他に優る生活の方便があれば、そんな事に頓着なく退かるゝのが常で御坐います、今日就職して居らるゝ方の多數は種々の悲境に陷ッた結果で、始めから進んで志願され

た方はまづ稀でせう。思はしい口があれば出やう／＼と考へて居らるゝ方が多いやうに見受けられます。それ故、どうしても始め一二年は尻が据はらず、それで跡に殘る人の多分は家族を持ちて、其の爲めに、薄給をも我慢して謹々務めて居らるゝものと考へます。聞けば米國の巡査は一等給が月六十弗だといふ事です日本の金にして百二十圓です、元より生活程度が日本よりも數倍高いでありませうが、それにしても割合は遙かによいです、日本全國で巡査の俸給平均九圓内外は今日の生活程度、物價の割合から申すと甚だしい薄給で、待遇のお粗末千萬な事は、我々國民の大に恥入る次第で、寧ろ其人々に對して感謝の意を致してもよい位。それで中等國民以上の品格と、威嚴とを保ち、官規に服從し、時としては危險をも冒し、忠實の上に清廉潔白を旨として人民に望まれつゝあるのを思へば我々は殆んど無代價を以てこの安全なる社會生活上の保護機關を買ッたものと思はねばなりませぬ。

まづ東京を標準として巡査一般の勤務法を申しますと全員を甲乙の兩部に分けまして甲の部が午前八時から翌日の午前八時まで勤め、乙の部が是に交代して又翌日の午前八時まで勤めるといふ風で、互に一晝夜づゝ雨の日も風の夜も派出所に出て勤めるので、つまり、隔日に當番、非番となる勘定です。けれども、非番であるからとて決して安心して休む事は出來ません。それ密行だ、それ火事だ、それ祝捷會の雜沓取締だ、それ提灯行列、それ兩國の花火、それ緣日、それ祭典イヤ又強盜の徘徊が繁しい、放火が流行する、やれ何それ何と殆んど非番毎に呼出しを食ふといふ樣な有樣で、中々一家團欒の樂を完ふする事は出來ません。扨又當番となりますと、派出所に一部三人の詰合で、一人は巡回、一人は見張、一人は休息と一時間毎に輪番勤務をするので御坐います。此の短時間の休息時間に眠るといふ事は到底出來ないので、横になると申しても兵士の歩哨と同樣、少しの油斷も出來ませぬ。何かしら事故が湧いて來れば休息は全潰れとなるのであります。又場合によりますと隨分危險な場所に立入り

生命を賭して職務を執行しなければならぬ時もあります、又人が酒でも飲んでソイ〳〵噪ぐといふ樣な時は人民保護たる巡査の身の最も忙しい時で、冬の夜など料理店の二階座敷で客は藝妓を聘んで陽氣で騷いて居る其の下で、薄給の巡査は寒風に頰を劈かれ嚴霜に手足を凍らしながら、巡回つてあるくのであります。時としては醉漢の喧嘩の中裁をもし、爲めに思はぬ罵詈、惡口を吹きかけられる事がある、それを成可く忍んで行くのが巡査たる身の職務上の精神であれば致方もありません。こんな事で職業上の苦辛艱難は世間の人の知り得られぬ處にあるので御在ます、いつぞや、時事新報は巡査の境遇と題して。その職務の劇しきに同情し、その地位の低きに同情し、其の待遇の薄きに同情して大いに世間公衆の汪意と反省を促された事がありましたが實に巡査の境遇は我我の同情を傾けてよい處ろかと存ます。



扨其俸給は東京を標準として申しますと普通巡査の等級が七等に分れて居りまして、一級俸が十五圓其より段々に下つて七級俸が九圓です、尤も巡査部長となりますと二十五圓まで昇れますけれども府會の決議で平均十二圓と決めてありますから昇給は容易でございませぬ。中には二十年も勤續して、

四十八九、五十以上の年配に達し、頭に霜を頂いて居らるゝ方で矢張十五圓位、それで子供の五六人も出來て居られる方もあります。隨分苦しい生活をして居らるゝ様に見受けますが、まづ通例よりは少しよい位な處ろで、月收十三圓の外宿直料、夜勤辨當料三圓五十錢、細君内職見積高一圓五十錢合計十八圓が精々でございます。是の收入から家計を立てゝ行かるゝのには、中々巧みに經濟の智識を應用せねば、ならぬから都會で巡査の生計を立てらるゝ主婦の御骨折は尋常一様の事ではなからうと存じます。私は先日或る巡査の細君に就て實際の家計の積り方を聞いて見ましたのに大要左の如くでありました（但し家族は二人の子供、一人の老母、主人夫婦都合五人）

| | |
|---|---|
| 一　六圓五十錢 | 米代 |
| 一　三圓五十錢 | 副食物一切 |
| 一　一圓五十錢 | 薪炭 |
| 一　一圓 | 茶煙草菓子 |
| 一　六十錢 | 理髪入浴 |
| 一　壹圓五十錢 | 生命保險 |
| 一　一圓 | 義務貯金 |
| 一　六十錢 | 義務雜費 |
| 一　三十錢 | 新聞 |
| 一　壹圓五十錢 | 衣服穿物 |

右の内家賃の記入してないのは或る人の別莊内に住して居らるゝので之れ丈は無料となりますいづれにせよ十八圓の收入で物價高直の今日家族五人の生計を立てて行くには非常なる節儉、否、むしろ必要品をも省いて計算を立てねばならぬ位であるのに、この家は、老母にも相應に滿足を與へその内で生命保險にも入り、義務貯金までもして綽々として餘裕のある様にして行かるゝのは我々の意想外に感ずる處ろであります。是れを思ふと現今社會の一部分には百圓の收入ある身分で老親への奉養も十分盡さず、其上に借財などして毎月窮々で居られる向も多いのがあるそうです、そんな不心得な經濟方をされる世の細君達は今この巡査の主婦に對して大に恥入るべき事だらうと思ひます。

細君の申されるには主人は職務上殆んど不眠不休で外出勝ですから偶々歸宅されると家族一同食卓を圍むのが何よりの樂みだと申されます、又主人の嗜好は花卉盆栽でありますが、元より餘裕のある御身分でないから、珍奇な鉢物を御賞翫になるといふ事は出來ませんから、擂鉢や、素燒の鉢に西洋草花又は朝顏の變り種などを栽へて樂まれる、又細君の方は娯みと經濟上から養鷄を始めて、此頃は牡一羽に牝三羽を養ひ、平均月に二つづゝの卵を得る事が出來ると申されます。これは家庭の娯樂の一つです。

又衛生上の事柄を申しますと、同家では主人の出勤時間が極つて居るので朝は早起、大抵五時に床を離れて主人は二人の子供を伴れて十丁位戸外を運動して來てそれから簡單に冷水浴をして植物など眺め、食事を濟して出勤となります、冷水摩擦は主人のみならず子供にまでも勵行されて居るので風邪一ツ引かず至ッて壯健だそうです。

次に細君の内職と申せば、專ら他家の裁縫を引受けるのですが、年末、又は春になれば中々多忙で、一ト月五六圓位收入される事もあるとか、尤も二人の子供と一人の老母の世話もあり又家族一切の衣服の調製やら臺所の立働らきで中々閑暇がありませんから、毎月續いて裁縫物を澤山引受ける事も出來兼ると申されました。兎に角、小官吏の家計を執つてよくも斯う見事にやらるゝ事と感心致しました。

# 海軍士官の生活

笠間醉雨

▲應接室の模樣

室一ぱいに唐草模樣の由多加織が敷かれて眞中に圓形の卓子を陣取らせ、それを圍んで華車な皮張の椅子が三四脚。卓子の上には紫檀の卷烟草入が置いてある、仰げば、黄海々戰の油繪額、常盤艦乘組員の寫眞額それと相對して「英氣凌雲」の扁額が掲げてある。顧返

つて、床の間を見れば、狩野流の蘆雁と柳燕との對幅が懸けてあつて、その前には目覺むるばかり奇麗な九谷の花瓶に、女郎花と桔梗とを飾げなく挿し込んである。其他床には獅子の香爐や、玉製の大砲の雛形みたやうな物を二三臺据え付けてある。また向の隅には硝子張の大なる書棚が置いてあつて、海軍に關する西洋書籍を一ぱいに詰めてある。是れは海軍中佐某艦長の御宅の應接室である。

▲各室と庭園

玄關は三疊で、正面の楣には帽子掛があつて、又左右には棚を拵へ、古い本箱がずらりと並べてある。それから、右手へ緣側から、前記の應接室へ通れる都合になつてゐます。應接室の隣室は、十疊の座敷で、九尺の床の間には、文晁の富士山の墨繪の幅が懸けてあつて、其前には、紫檀の卓臺に蘭の植木鉢が載せてある。又其隅には、大弓が二張、琴一丁が立てかけてある。違棚には愛らしい嬰兒の寫眞や、砲彈や、寫眞帖などを飾つてある、地袋の下には碁盤が置いてある。

應接室の後、即ち北の方は六疊の室で、其室には一間張の机が一つと、普通の桐机が一脚と並んであつて、又本箱や、本棚や、寄細工の文庫やらが、整然と据えてある。又小さな衣桁が置いてありますが、こゝは即ち令孃達の勉强室で。

其次の座敷は矢張り八疊で、其室には總桐の簞笥が二本並んでゐて其上には、鏡臺、手簞笥などが載せてある此室は中佐と夫人との居間になつてゐる。

次に主人中佐が在宅の際讀物などを爲さる所の十疊の奥座敷がある。

令孃達の室に對ひ合つて、六尺の廊下があつて、四疊半の小座敷がある、先づ茶室と云つた風のものですが、これは母堂の隱居室に充てゝあります。元より爐も切れるやうになつてゐて、小さな床には遠州筆の一茄子の茶掛が懸けてある。又小さな長火鉢や茶棚なども飾つてある。

玄關の後は六疊の茶の間で方形の大きな食卓が置いてある。其室の左手は臺所になつてゐて、向の方に三疊

の下女部屋がある。
間數は、玄關と下女部屋の三疊とを入れて、凡て七間、疊數四十二、建坪は三所の便所、緣側、臺所、湯殿、玄關、物置を合せて四十坪。

門より右手の扇骨木の生垣の一体は、應接室と十疊の座敷に面する庭園で、若松の綠深き築山に瓢簞形の泉水、これには錦鱗、影を浮べて悠々と水に文を作つてゐる。築山より、一面の青き芝生で、丁度氈を敷きなせるやうになつてゐる。左手には植木の棚があつて、萬年青や、松葉蘭、松、梅、さては西洋種の草花などが陳列してある。

後庭は茶室、令孃達の室、主人の居間に面して、其所には、牡丹、芍藥、さては菊などを作つてある、臺所の後の方には、小さな畑の畦が在て、小松菜や、茄子や、胡瓜など節に應じて作るやうになつてゐます。庭園、空地合せて百坪ばかり。



▲起床と朝食

朝四時半頃に下女が起きて、それぞれ臺所に立ち働くのですがやがて、夫人も起きられ、令孃達も起きられ、中佐母堂も起きられ、各自に雨戸を明け、大抵各自の寢室を掃除することになつてゐます。

夫人は自ら襷掛で、下女を助けて朝食の用意をせらるゝのですが、令孃達にも、平生可成、自分の事は自分が爲るといふ主義ですから、寢室の掃除それから學校の辨當なども自分で拵へて、決して他人

に委さぬといふやうになつてゐる。主人も在宅の時は中々の朝起で、座敷の眞中に机を据えて、其前に畏つて、讀書せらるゝといふ風、朝食は方形の食卓を圍んで、一同、之に向ふ。これは中佐が永く英國に留學して彼地の家庭の風に感染せられたからです。

▲朝食後の各自の勤

主人は七時半人力車が來るので、これに乘つて、參謀本部まで往かれます。令孃綾子、絹子、兩々相携へて登校の途に就きます、さて出る者は出て行かれて、漸く家の内が何となく落ち付いたやうな風になりますと夫人は奧座敷を掃除し、床の間、違棚などに乾拭をかけそれから、裁縫、洗濯したり、或は臺所にて調理。中佐の母堂は六十五の高齡ながら早朝から起きて、自分の部屋の掃除など爲され、朝食を了へてから、孫の正忠君を幼稚舍へ連れ行き、また歸る時間にはこれを迎に往かるゝ。

▲夕餐の快樂

午後三時頃には令孃綾子絹子も歸つて來て、家の内が俄に笑聲と話聲とで賑かになります。埓いで、主人歸宅といふ順番、やがて夕餐となる。晝食とは違つて、家内一同、例の方形の食卓を圍んで、主人は機嫌うるはしく幼き令息に向ひ。

「坊や、今日は學校で何が一番おもしろかつたッ　言つて御覽！」

正忠は笑靨な食卓に置いて、頭を傾て口元には微笑さへ浮べながら、

「ハイ、おもしろいことですか、……。」と、ちよつと考へた振して、

「お伽噺でした。」

「うむ、さうか、お伽噺だつたか、どんなお伽噺の—、一つ聞かして吳れないか。」

「ハイ」と、ばかり、正忠は輕く首肯きまして、

「お父樣、面白いんですわ。」と、少し笑ふ。

「さ、早く聞かさないか、そんな事を云はないで……。」

「ハイ、ハイ、お父樣、それは、……」と、食卓にある醬燒の海滓を小さな手で指しながら、

「此の海滓と河豚との譚—」

「うむ、さうか、そりや面白い、酒の肴になるぞ。さ、早く、聞かして吳れ。」と、主人の中佐は少し笑ひながら仰ると、

「お父樣、お父樣。」と、正忠は乘り出して、

「ある時、海滓と河豚とが出遇つて、いろ〳〵と身の上話を始めました……。」

「うむ、面白い〳〵。」と、主人は打ち興ずるので。

「……すると、終には、河豚が自分の事ばかりを大層褒めて褒めて、自分ほど偉い者は無いと云つた。そして、海津の悪口まで云つて、海津なんかは、眞實の鯛に成らうと思つたが、元と悪い事を働いたから、赤くなれないで黒鯛となつたんだ……。」

此時、一同腹を抱へて笑ひました。正忠も笑ひましたが、猶も語を續けて、

「……それで、河豚がそんな悪口を云つて、そして、手前なんか其黒鯛の子だ……とか云つた。……で海津もなか／＼負けません、河豚なんかといふ奴は、毒の魚で、吾々仲間でもペストかコレラ病のやうに嫌はれて居る奴だ、その證據は人間にも嫌はれて、てんで喰ひ物にせられぬ因果な奴ぢや、そんな奴に相手になると此方の品が下る、なんかと云ふと、河豚は、怒ぽいから、例の腹をぽんと膨らかした。……すると、其處へ舟が來て、漁士がぱつと投網を打つた。二人は一生懸命に逃げ出した。……海津は身體が細いから、どうやらこうやら網の目を抜けた。けれども河豚は怒つてゐましたから、急に腹を縮めることも出來なかつて、到頭網に引つ掛つて、漁士に捕られましたといふ話でした……そして、先生は、何でも一寸した事に怒ると河豚のやうな損な目に會ふつて……。」

と、何時になく、正忠は淀なく、斯う長々しく、箸を措つて話しました。

主人は、さも愉快げに、箸を卓上へ投り出して、

「うむ、面白い、面白い、なか／＼宜い譯だ、海津は、それこそ目出たいといふ譯になつたんだ。」

斯様に、談笑の中に夕餐が終へるのであります。が、何れも喜悦溢るゝばかりの面色で、圓満和楽の家庭の美しい光明は此時に發揮されるのであります。



### ▲夕餐後の各自の務

夕餐が終へると直ぐ綾子嬢は書齋に赴いて、ヴハイオリンを奏でまする、絹子の唱歌、正忠の「伐てや懲らせや」、それはなか／＼賑かですが

やがては、各自書齋に入りて、今日の復習、明日の下調など、綾子が物書けば、絹子は書讀むといふ工合で互に仲睦じく一つの洋燈の下に勉強するのです。

主人は夕餐を了へてからは庭下駄で芝生散歩、やがて書齋に入りて書見、調物、執筆。

夫人は其間に小遣帳を付ける、日記を記す、裁縫物を調べる、忙しいのです。

隱居樣は矢張り夫人と共に茶の間の燈の下に、氣に任して、孫女の仕立物を爲る。

▲就寢

大抵午後八時頃になると、先づ正忠君が八疊の夫人の居間で、寢床に就き、夫れから、襖一枚を隔て丶令孃綾子絹子の君が六疊の自分の部屋(即ち書齋と兼ねて)で、枕に就くのです、次いで、主人、隱居、夫人といふ順で、一體の主義は、早起早眠といふ風で、即ち朝早く起き夜早く寢ねるは、人をして健康に、富貴に、怜悧ならしめるといふ眞理を践んでゐる。

且つ、下女は八時半までは自由に使ひ、夜は大方下女自身の爲めに時間を利用させるといふ風、そして召使は殊に朝早くから起きて働く役目でありますから、深更まで來客などある時か、さなくば或る時特別の場合の外は、成る可く早く寢に就かしむるといふ方針。

最終に寢に就く者は、即ち夫人で、凡て、燈を以て家中の戸締を見廻り、殊に臺所の火消壺や火鉢の中などを注意して調べ、既うこれで大丈夫といふ上で、始めて枕を高うして寢られるのであります。

▲間食、入浴、散步

間食は衛生に善くないといふことで晝間令孃令息などに餘り與へない『どうも、何にか、ありますると、遣らない譯に參りません、しかし、夜寢る前には斷じて與りません。』

入湯は冬季なれば、三日隔に立て、それから、漸々温かになれば二日隔に立て、夏になれば毎日立てる、都合によつて、錢湯へも行く。

また、主人が冷水摩擦の健康に功あることを述べて、家人に勸めたものですから、隱居を除くの外は殘らず寒中と云へども、齒の根を喰ひしめて、摩擦するといふこと。

夕餐が了へると、主人は家人を伴ひて、時々、縁日など

へ散歩に出掛ける、また閑暇の節は年に一度か二度位鎌倉か逗子か、横須賀などへ遊覧に出掛けるけれども平生は芝居や寄席などへは誰人も往かぬ、幻燈とか、活動寫眞とか、又は普通の見せ物などへは、主人も夫人も度々行かれる。

△家計の收支（平時）

一、年俸
　一千八百九拾八圓也（海軍中佐一級俸）
　一ヶ月俸給　金百五拾八圓

收入　百五拾八圓
　内三拾八圓（これは主人の小遣にて、其内水交社費、共濟會費赤十字社費、製艦費、等含む）

一殘　百二拾圓（實際夫人の受取高）

一支出　九拾五圓四拾九錢五厘

内譯

| | |
|---|---|
| 金二拾圓 | 家賃 |
| 金九圓 | 米代 |
| 金七圓五拾錢 | 魚 |
| 金三圓 | 肉 |
| 金六拾錢 | 鷄卵 |
| 金二圓四拾錢 | 牛乳 |
| 金四圓五拾錢 | 野菜 |
| 金二圓四拾錢 | 醬油味噌調味料 |
| 金五圓六拾錢 | 衣服料月割 |
| 金二圓五拾錢 | 薪炭代 |
| 金一圓八拾錢 | 石油代 |
| 金四拾八錢 | 新聞代 |
| 金五拾五錢 | 雜誌代 |
| 金一圓 | 煙草代 |
| 金三拾錢 | 紙筆 |
| 金二圓拾二錢五厘 | 生命保險 |
| 金二拾二錢 | 衛生組合費 |
| 金五圓 | 夫人小遣、時としては衣服料となる |
| 金二圓 | 隱居小遣 |
| 金二圓 | 小供小遣 |
| 金五拾錢 | 郵便電信料 |
| 金五圓三拾錢 | 月謝（三人分） |
| 金二圓八拾錢 | 下婢給料 |
| 金一圓二拾錢 | 小間使手當 |
| 金六十二錢 | 西洋洗濯 |
| 金八圓 | 車代（主人） |
| 金一圓 | 雜費 |
| 金三圓 | 出生祝（松魚節切手） |
| 金一圓二拾錢 | 庭園手入費 |

▲差引殘金二拾三圓四拾錢五厘

殘金は悉く三井銀行に預ける。そして、衣服費、藥價節季の贈物代、冠婚葬祭の費用、慈善會費、愛國婦人會費、見舞品代、庭園の手入費等凡て臨時費に充つべきものも、大抵毎月定額の内で事が足りるやうになつて居ります。(右表中臨時費は一目見易すからしめん爲め波線を引いて下に記して置くのです。)

當家の家計の收支は、主人が陸上勤務の時と、海上勤務の時とは非常な差異が起つて來ます、殊に戰時の場合には、俸給なども增給しますから、自然、毎月の殘剩金も多額になります。

右の表は、昨年十月の表で、即ち平時の場合で、主人が陸上勤務の時の表でありますが、當今は乘艦して出征中故、即ち戰時の場合でありますが、如何に其家計の收支差異あるかを知らん爲め、本年最近七月の表を次に掲げ、そして、其を比較して略評を加へませう。

▲戰時の家計の收支(本年七月の表)

平時は海軍中佐の俸給百五十八圓が、戰時には五割の增給。けれども、矢張家事費百二拾圓を定額として、收支の表を作られ。多大の剩餘金は總て銀行へ預けて置くのであります。

一收入百二拾圓(實際夫人の受取高定額とす)

一支出九拾壹圓四拾九錢五厘

內譯

| | |
|---|---|
| 金二拾圓 | 家賃 |
| 金八圓 | 米 |
| 金四圓八拾錢 | 魚 |
| 金一圓 | 肉 |
| 金三拾錢 | 鷄卵 |
| 金二圓四拾錢 | 牛乳 |
| 金三圓七拾錢 | 野菜 |
| 金二圓三拾錢 | 醬油味噌鹽味醂 |
| 金二圓 | 薪炭 |
| 金一圓三拾錢 | 石油 |
| 金七拾八錢 | 新聞代 |
| 金九拾錢 | 雜誌代 |
| 金六拾錢 | 煙草代 |
| 金三拾錢 | 紙代 |
| 金二圓拾二錢五厘 | 生命保險 |
| 金二拾二錢 | 衛生組合費 |
| 金五圓 | 衣服料月割 |
| 金二圓 | 隱居小遣 |

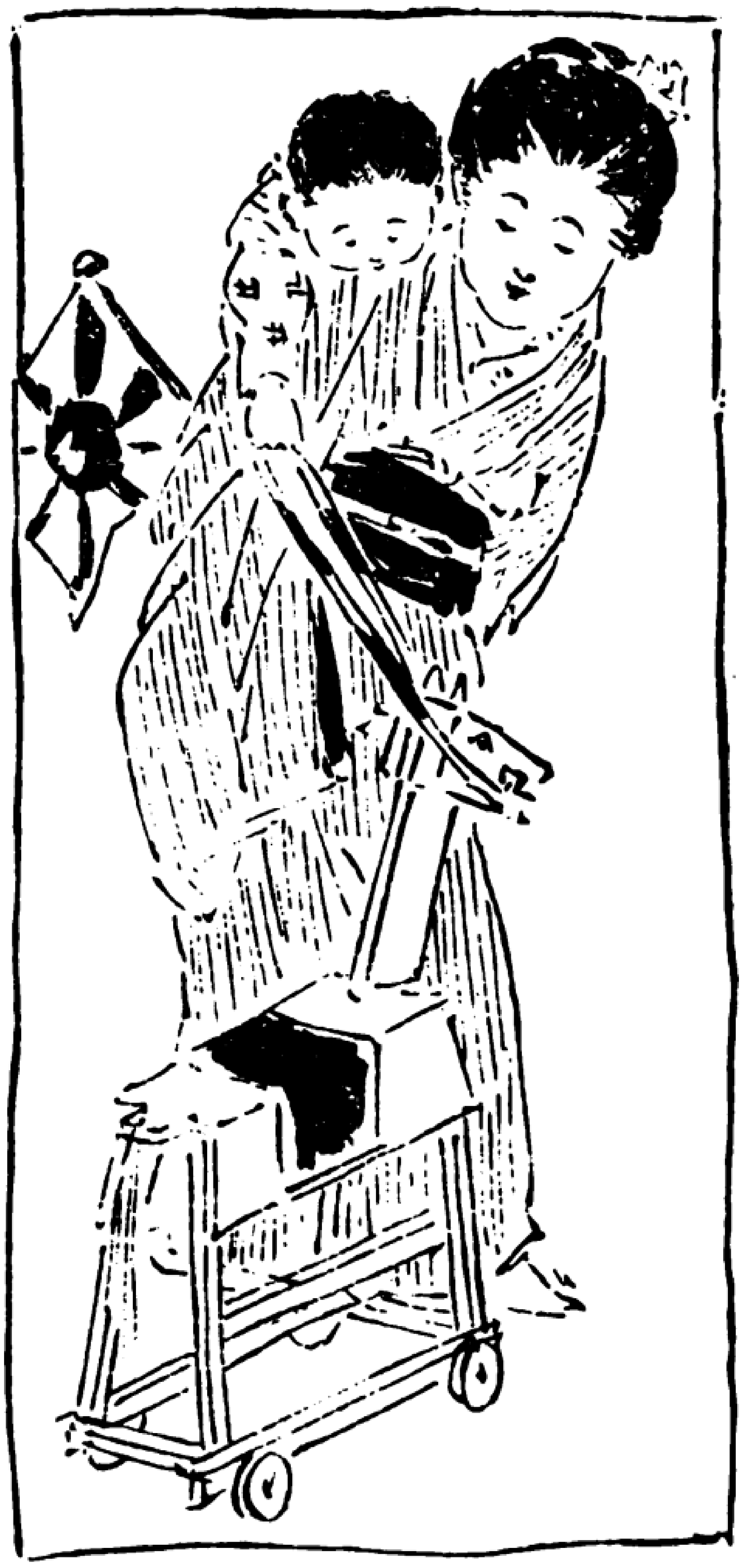
| | |
|---|---|
| 金二圓 | 小供小遣(二人) |
| 金一圓八拾錢 | 郵便電信費 |
| 金五圓三拾錢 | 月謝(三人) |
| 金三圓二拾錢 | 下婢給料 |
| 金一圓四拾錢 | 小間使手當 |
| 金拾二錢 | 結髮料 |
| 金拾五錢 | 西洋洗濯 |
| 金九拾錢 | 車代 |
| 金一圓 | 雜費 |

〜〜〜〜〜〜〜〜

| | |
|---|---|
| 金五圓 | 廣瀨中佐銅像建築費 |
| 金五圓 | 獎兵義會へ |
| 金六拾錢 | 祝勝會費用 |
| 金七圓 | 戰地郵送品 |

一差引金二拾八圓五拾錢五厘

これを前の表に比べて見まするに、臨時費殆んど拾八圓あるにも拘らず非常な少額にて事足るといふ仕末であります。平時で主人在宅の時より比べて見まして減額となつたものは、第一に酒と車代とで、第二は肉代と煙草代などであります。そして、平時より増額となつたものは、(臨時費を別問題とす。)先づ、郵便電信料と新聞の號外と雜誌費等であります。そして、又、此月は臨時費殊に多く拾八圓もあるのですから、若し是れ無きと假定する時には、剩餘金四拾六圓にも達します。これを、平時の表、即ち前掲昨年十月の表に比べて見ますれば、殆んど二倍剩餘するといふ割合になります。



猶ほ、戰時の増給額多大ですから、割合に多く預金が出來る。斯樣に成る可く、夫人は預金はされるけれど、平常の準備金として三拾圓ばかり備へてあるさうですが、別に之を用ゐることも滅多にない。猶ほ海軍々人は、啻に戰時ばかりでなく、乘艦中或は航海中には

幾分か増給せらるゝから、大抵は剩餘となるさうですが、軍人一般、殊に海軍々人は一面から見ますれば外交官だけに相互の交際も烈しく、自然使ひ方もあらくなり、又自分の部下の爲めに彼是と消費することが多いもの故、從つて預金も出來ません。そして、先づ中佐になれば、少しは預金も出來るさうですが、それ以下の時は、殆んど收支相償ふといふ風で、なかなか預金などは思ひもよらぬと。

▲月々の献立表（昨年中の表）

一月十日
- 朝　大根の味噌汁　燒海苔　漬物
- 晝　玉子燒　大根味噌あへ　漬物
- 夕　鷄肉と豆腐との清汁　比良目のさしみ　このわた　香の物

二月二十日
- 朝　豆腐の味噌汁　大根おろし　漬物
- 晝　精進揚げ　蕗の佃煮　香の物
- 夕　緬羊の熬り燒　牡蠣と松茸の二杯酢、豆腐と牡蠣の清汁　香の物

三月廿二日
- 朝　菠薐の味噌汁　てつか味噌　漬物
- 晝　鯛鮓　漬物
- 夕　針魚の鹽燒　おろし鹽三杯酢　漬物

四月七日
- 朝　わかめの味噌汁　日光唐椒　漬物
- 晝　筍　漬物
- 夕　櫻鯛の潮汁　まぐろの刺身　香の物

五月二十日
- 朝　納豆　鳥味噌　漬物
- 晝　豌豆と揚げ　漬物
- 夕　松魚の刺身　豌豆の胡麻あへ　香の物

六月九日
- 朝　きやべつの味噌汁　漬物
- 晝　藤豆と揚げ　漬物
- 夕　鯵の鹽燒　百合根の甘煮　漬物

七月廿一日
- 朝　茄子の味噌汁　漬物
- 晝　たうがん葛かけ　なまり干　漬物
- 夕　こちの清汁　茄子の鴫燒　漬物

八月六日
- 朝　みやうがの味噌汁　漬物
- 晝　南瓜　漬物
- 夕　鷄肉ときやべつ（ソース付）　みやうがと玉子の清汁　枝豆　漬物

九月九日
- 朝　大根の味噌汁　漬物
- 晝　かますの干物　漬物
- 夕　鮎のフライ　かますの清汁　漬物

十月十二日
- 朝　芋の味噌汁　漬物
- 晝　さんまの鹽燒　茸飯　漬物
- 夕　鯔と蒲鉾　辛魚松竹の二杯酢　漬物

十一月十九日
- 朝　豆腐の味噌汁　納豆　漬物
- 晝　ほうれん草の浸物　漬物
- 夕　むつの煮付　小鳥と松露の清汁　漬物

十二月十五日
- 朝　ねぎの味噌汁　漬物
- 晝　鱈の煮付　漬物
- 夕　鯉濃汁　白魚の濱燒　漬物

▲交際

中元年末の贈物とか、或は又冠婚葬祭の贈物供物などは可成早くこれを贈ることにして居られる。また主人不在の時の來狀などは夫人自ら返書を認め、凡て萬事を引き受けて家政を掌つて居られる。

▲不慮の場合

家人の病氣の時は、例ひ風邪ですらも早速醫師に診斷を乞ひ服藥するといふ事にしてあります。下女など病氣の時は六七日は養生させ、夫人自ら其仕事を扶け、若し猶ほ經過惡い時は宿元へ下げるといふ所置を執られます。

▲家庭敎育

令孃令息の敎育に關しては餘り多く關はないで、いくらか放任主義といふ風でありますが、折には、夫人自ら生花茶の湯などを敎へて、女は女らしきやうにと家庭敎育に、極めて注意して居られます。また、家庭に於ける讀物（元より敎科書は別として）は純潔雜誌の外は餘り多く見せないやうにしてあります。小說などは家庭に適當なる物は餘り無いから購讀させぬといふ風になつてゐます。

▲召使に對する注意

「別にこれといふこともございませんが、一体下婢などと云ふものは、無敎育文盲の者が多いのですから、幾分か、呼吸をして、使ふやうにする方が、德だと考へます。私の所では、幾分か奬勵するといふ風にして、今日の掃除は能く出來たからといつて、褒美として何かちよつとしたものを與へることもあります。また、漬物を上手に拵へるやうに吩咐け、また凡て食物には蠅の止らぬやうに喧しく云ふのです。そして、大抵夜八時半まで用に使ひ、それから、後は自分の用をさせます。そして、可成早く寐かしてやるやうにしてあります。」

▲戰時に於ける其家庭

海軍々人は、平常乘艦の時でも、朝から晩まで始終波や風と戰つてゐるので、そして、大方は住宅に不在がち故、いざ戰時と云つても、矢張り不在でありますから、留守の者には、さ程異つた心持が致さないのであ

ります。併し、其一人の夫たり、一人の父たる中佐其人に向つては、何れも其武運の長久を禱らないものはありませんが、何日の海戰にても中佐の家人は始終我海軍の勝利といふ事に重きを置いて狂するほどに喜ばれて、そして、中佐の身の上の如何は二の次にしてゐられるます。

# 新聞記者の家庭

池田秋旻

### △無冠の帝王

總理大臣とならずんば新聞記者となれとの西諺は、如何に其任務の重大にして、且つ名譽と權力との集合點であるかを知ることが出來る、我輩は今「新聞記者の家庭」と題する記事に筆を染むるに當り、記者の如何なるものであるかに就て、多少の所見を叙し、次で其家庭の狀態に及ぼさうとするのである、

然るに新聞記者の任務と云ふものは、誠に種々雜多であつて、一言に之を包括することは甚だ六ケ敷いのであるが、先づ其概要を述べて見れば、(一)彼等は社會の代表者として、有りとあらゆる出來事を、其紙上に發表し(二)其出來事に就て之を批評し、人をして其可否善惡を覺らしむると共に(三)一方には之を指導誘掖して先達者の地位に立ち(四)時としては命令的に輿論を左右して、之が實行を迫ることもある、新聞記者にして果して其天職を全ふするならば、總理大臣以上の仕事が出來るのである、何となれば彼は何事にも關係し、何事にも容喙し、然して何事をも自己の考へ通りに、之を批評し、之を指導し得るからである、我輩が記者を稱揚して、無冠の帝王とするのは、決して謂れのないことではない、

現に倫敦タイムスの如き、其新聞紙に勢力あると共に、記者も亦た大に世間から敬重されて居る、近くは同社巴里通信員として、佛國に於ける最も有名家の一人に數へられた、彼のブロウイッツの如きは、其事跡の

著しいもので、彼の大手腕は普佛戰爭後に於ける獨逸の陰謀を暴露し、又伯林會議の大秘密を發見して、詳細に之をタイムズ紙上に掲載し、一方には佛國外務卿ズカーズ公をして、表面に己れを利用せしむると共に、タイムス紙上に無限の光彩を添へ、一方には傲慢不遜のビスマークをして、端なく鼻を明かしめ、當時の外交界を縦横無盡に引掻廻したなどは、聞いたゞけでも隨分愉快である、是は目醒ましい一つの例に過ぎないが、其他歐米の諸新聞紙が、或は議會を左右し、或は輿論を動かしつゝあるは、少しも珍らしくない隨つて記者其人の地位も中々高い所に置かれてある。



△我邦新聞記者の地位

翻つて我邦新聞記者の地位如何を顧みるに、我輩は轉た茫然の嘆なき能はずである、今の社會は無禮にも、記者を稱して新聞屋と云つて居る、諸官省の小役人までが、記者を遇すると、至つて冷淡である、試みに陸海軍兩省に於ける記者の扣所を一瞥せよ、門番の隣りでなければ、則ち薄暗い穴藏の中である、然も秘書官、副官等に名刺を通じても容易には逢て呉れない、農商務省は事務の性質が性質だけに、面會などは極めて手輕であるが、それで

も大臣になると、何とか個とか云つて鳥渡は逢はない併し是は我邦官尊民卑の弊習から來るので、強ち新聞記者だから、之を冷遇すると云ふ次第ではない、是でも先方ては普通一般の人に比すれば、破格な取扱ひをして居る積りなのである。

左れば一般の社會に對しては如何であるかと云ふに、是も目下の所では、餘り敬重されて居るとは云へないが、政治教育宗教の如き、直接に輿論と關係を有して居る方面では素より、其他實業の方面でも、銀行諸會社の如き、稍や其規模の大なるものに至つては、新聞紙の力に賴む所が多いだけに、記者に向つても亦た相當な待遇を拂つて居る。

△記者の人物

記者の人物如何は、單に社會に於ける、新聞紙の地位勢力如何に關係するばかりでなく、內に在つては一家の主人公であるから、家門の盛衰興敗、和樂爭鬩等には直接の關係を持つて居るのである。

而して我邦新聞記者の地位が今日の如く、左程に高くないと云ふものは、記者其物の性質よりは、寧ろ其人物に因るのである、一例を擧ぐれば故福澤翁の如き、彼の人は世間からは教育家と見られて居る、成る程教育の上も充分其目的を達し、其門下に人材輩出したとは、疑ひないが、要するに其名聲の揚り、其地位の高められたのは新聞紙の勢力であつて、此翁の本領は全く此に在るのである。左れば自からも「發棋はさすより助言が面白い」と云つたとがある、一生官途にも就かず、又政治の局面にも當らないで、何時も批評家の地位に立つて居たのも之が爲であらう。近頃では原敬、小松原英太郎など云ふ人々も新聞記者の列に加はり、又各新聞社の首腦にある人々の內には、虛名を賣るを勉めない爲に、世間からは知られないでも、相當な人物は少なくないのであるが、唯だ憾むらくは、玉石混淆して、玉よりも石の方が多い傾きがあるゆゑ、自然と其地位も餘り上らないとは云へ、新聞記者が決して他の小役人や、商賈人に比して、下等な地位に居ると云ふのではない、唯だ歐米の記者に比して聊か遜色が

あると云ふのである。

新聞記者の中で上位を占むるものは、論説記者並に政治擔當の記者である、次は其社の方針に依り、文學を重んずるもあり、又商工實業の方面に力を入るゝもあれど、小相場劇評などは先づ下等に位するので其人物も大抵これに相當して居る。

◆記者の收入

其地位、學問、人物から云つて、今の我邦新聞記者ほど收入の少ないものはない、先づ普通の記者として、一通り仕事の出來る人で、月俸三十圓から五十圓である、中には七八十圓乃至は百圓百五十圓の人もあるが、それは東京の大新聞でも、一社の中に二人か三人も有るか、社に依ては一人もない位である、是は新聞社の經濟が他の諸會社の如くに豐かで無いのと、一つは從來新聞事業は道樂商賣と云ふ習慣が殘つて居るので、今では道樂どころではない、非常に忙がしい事務的勤勞になり、又相當に收入のある新聞社でも、給料は依然として少ない、隨つて新聞記者の家事經濟と云ふものは、甚だ憐れなのが多い、記者自身は或は擇んで此業務に就き、或は止むを得ずして、之に從事して居るのであるから、折には不平の起ることありとするも、何とか諦らめを附けて居るが、氣の毒なのは妻君である、殊に記者などゝ云ふものは、商賣柄廣く交際を結ぶの必要があるので、其結果は往々冗費を重ぬることになり、臺所の方は非常に困難することもある、然し是は一般にさうと云ふ譯でもない、記者の中でも理想の高い、品行の善い人は啻に冗費を遣はないばかりでなく、餘暇があれば或は著述をしたり、或は雜誌などへ寄稿して俸給以外の收入を得ることも甚だ困難ではない、此點になると全く其人物如何に因るので、一概に之を極める譯には往かない、それにしても、新聞社と云ふものは年二度の賞與なども、無いのが原則で偶ま有る社でも銀行諸會社などに較ぶれば至つて少ないから、今若し新たに記者の妻君にでもならうとする人は、贅澤の出來ないのは勿論、樂みを金錢以外に求めることとし、何時も貧苦と鬪ふの覺悟が無くてはならない。

▲勤務の場所と時間

新聞記者は普通自宅から其社へ出勤するのであつて、平時ならば、先づ十一時、十二時頃から出掛けて、五時前後に引上げるのが、通例である、随つて午前中の時間は多く家庭に在つて過ごすことが出來る、記者の腦中には、常に他に先じて事を探知しやうと云ふ考へがある爲め、随分氣骨は折れる、其代りに勤務の時間は短かい、通例宅で少し早目に晝飯の食事を濟して往けば宜いのである。

處が時としては特派員となつて、各地に出張を命せられることがある、それも五日か十日の内地旅行ならば、別に變つたこともないが、一年二年と外國に派遣されることがある、我邦の新聞社では、まだ歐米各國へ、常置の特派員を出して居る處はないが、朝鮮京城、清國北京上海等には之を置かれてある、中には獨身の人もあるが、外國となると獨身生活は殊の外寂しくもあり、又國に殘された家族も互に氣に懸るから、多くは家族携帶で任地に務めて居る、外國派遣となれば手當も相當に取れるから、家事經濟も左まで窮々するにも及ばないし、又他國のことであるから何となく室家の和樂も保ち安い、京城などではさうでもないが、北京上海などになると、妻君の友逹が少ないので聊か寂寥を感じることもある。

平時に在つては右の如く、新聞記者と云ふものは、忙しいやうな、呑氣なやうなものであるが、目下の如き戰時に際しては、それは中々忙しい、殊に外廻りの記者、編輯主任者などは殆んど晝夜の別なく、勤務せなければならない、是には御存知の通りの號外と云ふものが、一分一秒の早きを爭ふので、決して油斷がならない、随つて平時は十二時に出て宜い人も、午前七八時から出掛け、又日を繰合せて宿直をせなければならないので、家に居る間合は至て少ない。

△從軍記者の家庭

其上に從軍などを命せられると、戰地へも出て往かなければならない、大抵司令部附であれば、危いことは無いやうなもの丶、何んなことで怪我が無いとも限らない

し、第一恐ろしいのは病氣であるから、家族の人は一般の出征軍人と同樣に心配して、其消息の來るのを待つて居る次第である、此度は從軍記者の待遇も大に好くなつたと云ふことであるが、それにしても從軍は隨分骨の折れるものである、斯る時に家族のものが、出征者の身の上を心配するのは、申す迄もないことで、留守居となつては其上に又家のことも心配せなければならない、若い妻君で小供はあり、女中は居るけれども、男の氣のないのは、往々外から異論の魔がさし易い、現に我輩の知て居る、從軍記者の留守宅へ、此間竊盜が這入た、妻君は音を聞いて眼を醒したそうであるが、若しもそれが强盜に變じては大變だと云ふので、知らぬ顏をして、二十圓許のものを持て往かしたそうだ、烏渡聞いて見れば、如何にも意氣地のない話だが、女ばかりの留守宅では、是が普通の處置であらう、長い間の留守宅となれば、何でも慥かな男一人を、夜だけにても好いから雇入れる必要がある、其他小供の病氣或は舅姑でもあれば、それ等との折合など、急に主人が不在になると、種々な故障が起り易いものである、併し是も妻君たるものゝ一の修業で、日新文明の世に、半年や一年の留守居が出來ぬやうでは致方がない、今でも膽力あり、事に慣れた妻君は立派に留守の任務を果して居る人もある、殊に從軍記者の家庭で、主人の不在中、他の人の得る能はざる一の樂みは、其人の通信を新聞紙上で讀むことである、少しの間でも別れて居れば、書信の往復は何より心を慰むる其中にも、紙上の通信とあれば、特に力が入つて居るから、平生其人と爲りを能く知つて居る家族などから見ると、其人の擧動が明々白々と見える心地がして、偶に滑稽交りの通信などあると、思はず吹出すこともある。

殊に從軍記者は、戰地でも危ない處に出ないのが原則になつて居るから、是迄の處では日清戰爭の時に、一人か二人か銃丸に觸れて、非命の最期を遂げた人があるだけで、是も云はゞ好んで死地に投じたので、軍隊では從軍記者に負傷させることは、非常な不名譽になつて居るから、隊の方でも充分注意して吳れるし、また

自分で少し氣を附ける人ならば、怪我などは先づ無いと極めて置いて宜しい、そこで愈よ無事に歸つて來て、家附近の停車場などへ出迎へ、目出たく手を携へて、家に歸り、紀念の從軍服を脱がせた時の愉快は又格別なものである。

△記者の妻君

新聞記者の妻君と云つて、特別なる範圍や階級のある譯でもない、從つて取分けて此に記載することは六ヶ敷いが、現に四十歳以上の人は申す迄もなく、三十歳前後の少壯記者でも、其妻君には女學校出身の人が少ない樣である、是には種々の事情があるので、我邦の結婚法は、今尙は兩親の選擇に任せる風がある處からして、昔氣質の兩親は、唯だ柔順なことにのみ眼を着けて、深く其他を顧みないのと、又一つには記者自身も女學生風に少々歷足らない處があつて、寧ろ學校育ちでない方が善からうと云ふ樣な處から、人柄を見定めたのが多いらしい、此邊を標準として結婚した妻君は、家事を善く勉め、槪ね物事に綿密にして、之と指すべき大なる欠點はないが、併し學校生活の味を知らない人は、文筆に從事するもの丶勞苦を察せないことが多い、例へて見れば其夫が朝も早くから机に向つて書を讀み、文を草するのを見て、何か慰み半分に遣つて居るやうに思はれ、偶ま朝夕の忙しい時に、小供が泣いたりすれば、少し位ゐは小供を見て與れても善かりさうなものだと云ふ不平が起る、是も一方から云へば無理のない話であるが、文筆を握つて苦心經營するのは、車夫が車を曳き、土方が土を運ぶのと同じことで、中々骨が折れる、其骨折を察しないと云ふと自然と苦情を言はなければならぬことになる、我輩の知人中には隨分個樣なのがある樣だ、又小供の敎育或は家政改良の上に就ても、唯だ是迄實家で見習ひ聞習ひしたことばかりで、更に學理の應用と云ふことが無い爲め、曲りなりにも天下の耳目だとか、社會の先導者だとか云つて居る新聞記者の目から見ると、往々歯痒いことがある、此點は女學校出身の人ならば、少しの注意で直ちに補ふことが出來るが、今後は知らず、目下の所では、女學校出

身の人も、折角學んだヿの應用は至つて乏しい樣に見えては居るが、職務が職務だけに、記者の妻君には、其夫の文筆的生活の趣味を解するだけのヿが出來ないと云ふと、概して收入の少ない、新聞記者の妻君として、心を慰める材料が乏しく、夫婦間の和樂も何となく圓滿を欠くの憾みを免れない、此點は商家の妻君に商事の氣轉を要し、農家の主婦に農事の心得を要するのと同樣である。

△記者の前途

我邦現今の新聞記者は、前途に如何なる期望を抱いて居るか、此期望は懸て家庭に少なからざる影響を及ぼすのである、凡そ新聞記者の前途には三つの進路がある、(一)其一生を新聞記者で終らうとするもの(二)記者たる間に知見を廣め、名聲を賣り、多くの人に交際を結んで置いて、將來政治の舞臺に飛躍せんとするもの、(三)記者より實業界に轉ずるもの、處で我邦の記者は概ね何れの進路を取るかと云ふに、第一の一生を記者で送らうとする分に對しては、前にも言つた通り、記者の收入が餘りに少ない、其割合に社會上に於ける地位も、格別多くないと云ふので、大抵は一時の腰掛に記者を務めて居る、尤も最初から文學の方面などで、身を立てる積りの人は、他に轉じた處で、思はしい收入もなく、收入は不足でも、仕事の上に興味があるので、其補ひを附けるから、末長く務める人もあるが、此種の人は記者を止めた所で、自宅へ引込んで著述でもする位なヿであるが、其以外の人は、初め面白い積りでも、豫想に反するヿが多い爲め、大抵は中途で嫌氣がさして來る、止めやう〳〵と思ひながら、善い口を搜し當てるヿが出來ないで、止むなく遣つて居ると云ふ樣なのが先づ普通の狀態であらう、第二の政治家に轉じる分は、衆議院議員の候補者位から始めて往くのもあり、或は直に秘書官や參事官になるのもある、然るに我邦では妙な風があつて、學者でも新聞記者でも、政治家になると、何うも品格を落す氣味がある、一時流行した新聞記者の勅任參事官などは、何れも失敗に終つて居る、第三の實業家に轉ずる分は、是

は其人にも因ることであらうが、大抵は成功して居る。歐米諸國のことは別として、我邦今日の如き記者の待遇では、特別の事情ある人を除くの外、好い加減に切上げて實業界に入るのが普通の進路だと思はれる、以上の通りで、我邦新聞記者の地位と云ふものは、實は未だ固定して居ないのであるから、其人々の考へと境遇とに依つて、家庭の狀態も亦た種々に變化するものと思はなければならない。

## 東京　細民の生活

△　△　△

細民！これ社會問題の一であつて、心ある者は眞面目に研究しなければならない事件です、私も是に對しては多少の調査と意見とを有して居りますが、今回の主題ではありませんから、暫く之を後日に期するとして直接彼等の生活の狀態の一二を實見のまゝ記しませう併しその以前に細民と云ふことに就て少しく概論せねばならぬ、何となれば等しく細民と云ふけれども、種種分れて居るし、又た部落に依ては多少其生活の有樣を異にして居ますから。さて專門の研究者の見解は如何であるかは知らぬが、

▲市内の三大細民窟　即ち芝新網、四谷鮫ヶ橋、下谷萬年町に就ての觀察に依ば、氣質の點に於ては四谷鮫ヶ橋が最も柔順で、下谷萬年町が其次、芝新網は最も宜しくない樣に思ふ。併しながら柔順は或意味に於て意氣地なきを意味する、矢釜し屋は時々活氣あるを示すから、どちらが良いとは今判斷はしない、兎に角市内の三貧窟と云へば之れであると云ふに止めて置きませう。それから職業の點に於ては地の理によつて芝新網が一番都合よい樣に思はれ、四谷鮫ヶ橋は最も不利であります。されば我が觀察した丈では、鮫ヶ橋に最も甚しい貧者窮者を見るのです、例へば他の貧民窟に於ても同居者は無論あるが、九尺二間而も疊もろくにない破屋に四家族も入つて居ると云ふが如きは、鮫ヶ橋に多く見らるゝ、それ故に我は鮫ヶ橋を以て細

民中の細民と思つて居る。これは先づこれ位にして置いて、彼等の▲職業はどんなものであらうか、其賃錢は如何と云ふに、我が調査した丈でも七十六七種、其妻の內職は五十二三種ある、併し今一々之を掲ぐるは煩に堪へないから、其中僅かばかりを記せば、

人力車夫、日雇、土方、車力、立ン坊、紙屑拾、蜆賣、硝子毀買、ヤツチ箱張、下足直、大道藝人、緣日商人、按摩等より、犬殺し、餌堀、千ケ寺詣、



其他にして、妻女の方は煙草卷、髮結、洗張、團扇張、紡績女工、駄菓子賣、襤褸撰、土方手傳、露店商、などであつて、賃錢は其仕事によりて違ひますが、大抵左の如くであります。

| | | |
|---|---|---|
| 男 | 最少額 | 十錢 |
| | 最多額 | 五十錢 |
| | 平均 | 三十錢 |
| 女 | 最少額 | 四錢 |
| | 最多額 | 二十五錢 |
| | 平均 | 十五錢 |

さりながら雨天や病氣で仕事が出來ないこともあるから男の方は最多額三十五錢內外しかならず、女の方では十五錢は六ケしい、此の如く種々雜多でありますから、

どれを採て讀者に紹介し樣か、之には困りますが、私は遂に其最大多數なる

●●●▲人力車夫　を撰びました、さて此車夫の數は今日如何程であるかは正確に知れない、殊に電車開通後其數を減じたと云ふ人もあるが、今回内務省で調査したのによると益増加すると云ふから孰れが正確かはわからないが、兎に角市内には少くも四萬二千人内外の車夫があります、中には細民と云ふことの出來ない者もありますが大多數は細民であつて、即ち細民が大部分を占めて居りますから、其社會の家庭を記せば大抵細民の狀態が知れたのであります。

さて斯云ふ私の乘つて居る一人の車夫があります、是は芝區本芝の者ですが、此者から聞き又自分も實際其社會を訪問して調査しますると（便宜上中等位の車夫を標準とす）大要左の如くであります。

其家族　夫婦及女兒二人嬰兒一人合計五人にして妻は煙草卷工場に通ひつゝありしが、目今病で家にあり長女は年十六にして現に第二煙草專賣所の女工、次女は十一歳にして嬰兒を傅りつゝあり、

其收入　當主は健康の者にして、足も强ければ相當の收入あるも、多き時は一ヶ月十二圓、長女の工錢一ヶ月約三圓六十錢なれば、合計十六圓六拾錢の收入ある都合ですが家賃、車の齒代、仲間の附合ひ等を引き去れば、一ヶ月平均八九圓内外を以て一家五人を糊する都合です、而しこは唯豫算にして、近來毎月々々賃錢減少の樣なるが上に妻の長き病の爲めに極めて困難しつゝあります。然れども此の如きは目今は先づ上等の部であつて、他の者は日々「どうすれば凌がれるか」の問題に胸を痛めつゝあるのであります。最近の調査によりますと交通機關の整備してくると、戰爭の爲めに大に打擊を蒙るとで、此春迄は日々五十錢の收入あつた者が今は十四五錢乃至二十錢しかないと云ふことである、假に二十錢とすれば一ヶ月僅かに六圓、彼の激しき勞働に從事し且家族多きもの、如何にして日々生活して行くであらうか。さてこれは此位にして置て、私の訪問した哀れなる一家族を御紹介致しませう。彼

は姓は傘名を米吉と云ふて妻のつやと、女兒が二人あつて此程迄は、下谷龍泉寺町の有名な

▲三木長屋　の一棟の矮屋に住つて居つたのですが、去る七日我の訪問した時に、此家――僅かに家賃一圓足らずの家にも住ひ兼ねて、其附近の他人の家に同居する樣になつたのでした、さて彼は元と能登國の者であつて、國に居る時は雜魚賣をなし、兎に角に生活丈は差支へなく出來て居つたが、不圖した事より手違ひとなり、國にも住ふ事が出來なくなつたから、僅かの知己をたよりに上京したのは十七八年許前のとでありました。それから少しの資本を以て小商をしたがそれも失敗し全く無一物となつたので遂に車夫となつたのであります。



車夫となるはなりましたが、清潔な車も借りるとが出來ず被服も新調することが出來ませんから、夜になると稼業に出て、往來の人に乘車を勸める、すると時時警官に認められ制規にふれたと云ふて科料に處されたり、獄に投せられた事も度々であつた、それに彼は車夫として其身體が適當ではなかつたものです、そこで妻のつやは機の横糸を組む内職にあり附いたが一日一生懸命に働いて僅かに五六錢しかとれない、併し米吉も聊かながらとつて來るのがあるから、細々にも烟を立て居つたのであります此の如く一家窮乏して居るのに、天性とでも申ませうか、彼つやは

▲同情の念　が厚かつたのです、其一例を云ふと

其知人にして獨り者の婦がありましたが、不圖した事より重き病に罹つたが頼るに家なく、養ふに人なしで非常に困難して居つたのを見兼ねて、自分の家に引取り四疊半の一間を與へ、且つ自分の手で出來る丈の看護をしてやりました。隣近所の者は物好よと笑ひ嘲りましたけれども、彼は少しも意に介せず返へらぬ人となる迄親切を盡したから、病人は非常に滿足して彼の世の人となりました、我は彼に問ふに此事を以てしましたが、彼は唯だ「左樣の事もありました」と云ふ丈であつたのです、何と美はしき心掛ではありますまいか、かくて一年、彼つやも亦た

▲肋膜炎　に罹りました、これは昨年の春のとであつたのです、夫米吉の收入は不足なるに彼女は病に罹つたのですから、到底貳度の飯さへ滿足に食するとが出來なくなつたのですが、飯田角藏と云ふ隱れたる慈善家を始め一二の同情者によりて辛くも凌いで居ましたが、近隣の誰れ彼れは今年十三になる長女よしを醜窟に入れろの、乞食にならせよのと勸めますが、つやは斷じて之に應じませんでした、それに此少女よしも中々感心な子であつて一昨年の慈善旅行に伴はれて鵠沼に參つたが、其當時に貰つたものはすべて之を藏ひ、之を母の土產として喜ばせやうと云ふ樣な子ですから少女に不相當な働きをして、母を看護して居つたが一家の都合上彼少女は

▲七年間二十五圓　の約束で或機工々場に送られました、尤も此二十五圓は直にとれるのではなく、最初十二圓であとの十三圓は七年後でなければ受取れぬのであります、少女よしも病める母を見捨て丶行くのは本意ではなかつたが、また已むを得ぬ、遂に泣く泣く工場に送られました、あはれ少女彼は今弱き身を以て如何に烈しき勞働に追ひ使はれて居るであらうか私は彼を訪問しての歸るさ、其知人に逢ふて目今の生活の樣子を聞きました、すると彼等は

▲一日僅かに五六錢　許りで生活して居る、飯は例の殘飯で、主人の外は大抵二回で、時によると芋を以て一日の飢へを凌ぐ事があると云ふことです。彼の

姓は傘と云ひますが降しくうき世の雨は防ぐに由なく妻の名のつやは其顔に艶もなくわびしく其日々々を送つて居ります、知らず世に彼等の為めに一滴同情の涙を注ぐ人はありますまいか。

以上は極貧ながらも、美しい處のある一家を御紹介致しましたが、これから

▲共同長屋に於ける細民の生活の一端を記しませう。聞く所によりますと此共同長屋と云ふのは、本所花町の中井平八と云ふ人が建てたのが最初で、其後之に眞似て今の松倉町や菊川町にも、又隣區の深川でも靈岸嶋や富川町其他に出來たそうですが、私の見たのは富川町のであります。これはトンチル長屋とて有名な合宿所



の近くに立てられたので、二階造りの建物でありました、之に入つて見ますと中央に一の廊下があつて左右に一坪づゝの部屋があるこれは即ち一戸分なのであつて、細民窟の常套語なる九尺二間ではなく六尺一間の家なのでありますさて此長屋の疊建具は附て居るし勝手道具まで備へられて居つて、居住者が交代に使用する様になつて居る、家賃は大抵日掛五錢（六錢なりしか）であります、そして此一坪の處に一家族二人或は四人五人位の人が起臥するのであります、鳥渡考へて見ますと、到底住ひきれぬ、臥るにも重り合ふて居なければならぬと思はれますが、彼等はどうやらこうやらして、やつて居ます、中には七人が晩

に歸りますから家内がそれ迄臥て、主人が歸ると交代する、或は妻が露店に出て、二三時頃に歸ると夫が最早働きに出る頃であるからそのまゝ起きると云ふ風になつて居ると云ふことです、此間迄此共同長屋の生活を送つて居つたもので、今度某の抱へ車夫となつた者に會ふて當時の生活の模樣を聞きますと、先づ人ありて此長屋に引移つて來ると

▲御附き合　即ち引越祝をやる、併し蕎麥を配る樣な餘裕がない、大抵その季節々々のもの、例へば冬ならば燒芋、夏ならば枝豆と云た樣なものを十錢か十五錢位買つて、向三軒(?)兩隣の者が集つて來て談笑の間にそれを食する、これで先づ義務は濟みます。それから長屋中で行事役と云のがあつて大抵代る〴〵勤める、此行事役の勤めは長屋中で死だとか生れたとかの事件が起ると行事役は部屋々々を廻はり二錢三錢或は五錢位づゝ集めて其家に遣るのです、つまり一種の共產主義の初步の樣なもので、其間には義理もあり人情もあつて中々によく組織されて居る、萬々一之に應じないものがあれば、遂にこゝに住ふことが出來ない樣にされるのです。

▲寢具及食物　に就て申せば、蒲團のない者は家主から借りることが出來る、これは大抵五布一枚の並が一夜一錢五厘で上等が二錢です、併し不完全、不潔ながらも自分で所有して居るものが半分もあると申ます、併しこれは往々質草になるのですからあつてもないと同樣で、寧ろ日々得た賃錢の内より借りた方が世話でなくてよろしいと申て居るそうです、食物は晴天打續きの折であれば、賄所も隨分繁昌しますが、雨天になりますと、賄所は忙はしくありません、その譯は彼等は收入金が少いから大抵芋とかチャブで間に合はして置く、中には芋のへタ丈のものあり、時にはこれさへも買ふことの出來ない者もあるとか。

▲小兒の敎育　などゝ云ふことは無論考へもしない、年中遊ばせきりで、少し使る樣になると何でもかまはずどし〳〵追ひやるのです、彼等は大抵朝から晩まで其近所で眞黑になつて遊んで居ます、私が會つた

時七つか八つと思はるゝ一兒を捉へて「何をして居るかし」と問ひ巡すと「アーおまりさんをして居るんだ」と、彼等は今しも犯罪者の挙かれ行く様を真似して居るのであります、何と驚くべきではありますまいか。

是等はたゞ其一例に過ぎません、若し鮫ヶ橋に至り或は萬年町に行くならば、ヨリ不幸なる人、ヨリ甚しき有様を目撃するでありませう、而して九尺二間の四家族の様なども、記すべき事多くありますが孰れ後日を期しませう。

細民の家庭の悲酸なることを申上れば、未だ澤山ありますが主題が細民の生活といふのですから、今回は唯だこの生活狀態の一端丈を御話致して置きます。讀者乞ふ之を諒せられよ。

序に申ます、若し心ある人にして彼等を訪問して、憐むべき狀態を知り且つ之に同情を表さんとせば、警察署等か、區役所に照會した丈では迚も分るものではない、又よしんば直接に參つたとて通り一遍ではだめです、必ず親しく之を訪ねて飯米の上に數十の蠅が群つて居るのを見、一種の臭氣を忍んで、真黒な茶碗から澁茶の一二杯も平氣で呑む丈の勇氣がなくてはなりませぬ。戸間口で逡巡して了ふ様では駄目であります。

# 奥州 漁民の生活

陸前松ヶ崎漁村にて
山形高等女學校長　津口元徳

日本三景の一たる松島より、東南一帶に連續せる沿岸を、七ヶ濱村と稱し、大字菖蒲田、松ヶ濱、湊濱、鼻節、吉田、東宮、代ヶ崎七ヶ村の漁業者六百餘戸、特に所謂松島八百八島の一部を包容せる風景佳絶の海岸あり。

就中、菖蒲田、松ヶ濱兩村最大にして、戸數各百四五十、前者は海水浴場として、此兩村には夏期數百の來客あり、鼻節の一部高山には、洋人十數戸七月より九月に至るまで、風光を賞しつゝ避暑をなし、實に奥羽の大磯鎌倉と云ふべき名勝たり。

予は、昨年及び本年の兩夏期、松ヶ濱なる漁家に數十日を過せる事とて、其所感一ならず、今其生活の狀況一斑を記し、全國漁家の生活狀態を知るの一端とならさん。

▲家の階級

漁家と一概に云へど、貧富幾階級にも分つを得べし、若し、上中下の三とせば、今予の主として記述せるものは、其上の部に屬すべし、松ヶ濱百四十戸の區長をつとめ、本宅と納屋、外に厩兼物置の三棟を有し、便所浴室亦別棟となり、馬壹頭、舟二艘、及び畑地若干を有す。

馬は、四五十圓にて購ひ得べし、主として肥料を取るの用に供す、船は、一艘百五十圓あらざれば、櫓櫂等に至るまで完成せずと云ふ、此外網十反を有せざれば船夫一人前たる能はず、一反凡壹圓五十錢を要すといふ、而して該家には二三十反を有すといふ、亦以て普通の漁家以上たるべし。

▲家族の分業

家族は、兩夫婦と、寡婦一名、子供六名、下婢一名以上十二名の大家族にして、皆何れも、分業的に其職務に勤勉なる、到底都人士女の想像及ぶ所にあらず。

老主は、區長の職務の外常に網すきに餘念なく、舟の出入必ず手傳に出で、若主人は、比目魚漁の爲、雨の日も風の夕も、船にて其日を送り、其長男は「かつを」漁の爲他家の舟に同乘し、數十日間外に在りて家門に歸り來る事稀なり。

老婦は内にありて留守居をし、若婦は、其寡婦及び下婢等と早朝馬を牽いて草刈に出で、朝飯を喫して再び畑に出づるや、月を踏で歸るの狀たり。

傍に泣く幼兒には、長女之が守たり、三四歲の男の子は常に其長の保護を受けつゝ、海岸に游泳し、夕陽海上に錦繡を織るの頃、一同歸り來りて食卓につくを常とす。

▲武陵桃源

夕方に至り家族團欒すればとて、別に珍らしき談話をなすとにもあらず、又特更に快活なるにもあらねど

此一大家族は、一の怨言もなく、一の不平もなく、嫉妬猜忌もあらざれば、憤怨叱咤の聲をも聞かず、終日營々其任務を果し、夕餐後予等の許に來りて、石鹸箱の銀色に一驚し、其高價ならざるに再驚する類にて、見るものとして好奇の念を起さゞるはなく、旅順、浦鹽、あるは遼陽方面の戰報を聞き、或は村內の壯丁出征後の狀など語りつゝ、和氣靄然たる狀、實に武陵桃源とは、かゝる有樣ぞと感嘆措く能はざるなり。

▲漁業の收入

當地方の漁業は、大別して三となすを得べし、一は遠洋



漁業、二は近海漁業、三は海岸漁業之れなり。

第一は、金華山沖數里乃至數十里に亘りて「かつを」漁するものにて、數日乃至十數日を要して歸り來るものあり、從つて、其魚數亦夥多にして、時には、夥しき豐漁の事あり、當時一尾二十五錢平均に賣行くべければ、百尾にして二十五金を得べく、之に六名の漁夫乘組むとせば、每人約四圓を得べし、然れども、遠洋數日の勞苦に堪ふべき爲、船体の堅牢、船夫の熟練等を要するを以て此種の漁者は比較的少數なるが如し。

第二は、(甲)金華山沖に投網して、比目魚「赤ゑい」等を獲るも

のと、(乙)同沖邊にて鯛を釣るものと、(丙)同沖邊にて烏賊釣をなすものとの三種あり。
當地方の漁家十中八九は、此種類に属し、其他は魚類小賣商たり。
普通に、(甲)の如きは早朝出帆して、夜間投網し、翌朝之を引き揚げ、其かゝりたる魚を得て夕方歸り來るを常とし、(乙)(丙)亦兩三日にして、其獲物のあり次第歸り來るを常とす。
昨年頃までは、一人にて比目魚四五十を漁せしにより、たとへ、廉價にて、一尾五錢とするも、約二三圓の收入ありしが、本年は殊の外不漁にして、毎夫數尾を得る事難く、從て二日間に壹圓の收入亦難事たる如し、漁夫皆曰く、本年は魚類まで戰爭に征きたるらしと、亦以て好諧謔と云ふべし。
此の如き不漁に加ふるに、天候險惡等によりて、休業する事亦再三なるべければ、其收入の少なく、日常生計の困難なる推して知るべきなり。
第三は、磯邊に於て、小魚を漁するもの、其收入僅少にして、實に休業に勝る片手間業に過ぎざる如し。
此の如くなれば、通常一船に六名同乘し、平均壹圓宛の收入ありとするも、船主には、壹名分の報酬をなす規定なれば、壹人にて、二日間漸く八十五錢に當り然も、各自に所持せる毎十反の網にかゝりたるものは各其所得たる規定なれば、彼我相平均する事なく、不幸にして數日間少漁に遭遇する者もあるべく、特に此等壹名の漁夫にて、數口の家族を糊する比々皆然れば、家と云ふも、只雨露を凌ぐに足るのみ、食器と云ふも、二三の缺け茶碗あるにすぎず、夏は裸体にして冬は襤褸、敷くに席なく、臥ぬるに被ひなき、赤貧の狀亦以て察すべし。

▲生計の概算

今予の滯在せる家にして、當時の漁業收入より計算せば、二艘中一艘は常に出漁するものとし、月々十二圓七十五錢(一日間八十五錢の割にて)の收入あり、若主人は月の三分の二出漁するものとし、八圓五十錢を得、長子の收入亦月に四圓とせば、合計二十五圓廿五

銭にして、一ヶ年の所得三百圓を得るの計算なり。

今其支出を考ふるに、質素なる漁家なれば、副食物料は凡て畑地よりの收入にて事足るとするも、一日麥三升、白米壹升を要し、廉價に見積るも五十銭を要するとせば、一ヶ月十五圓、一ヶ年百八十圓を費し、酒味噌醬油、薪炭費等如何に廉價とするも五十圓を下る事なかるべく、租税十圓、網及び舟の修理費卅圓、下女の給料十二圓、年回其他の變凶費八圓とするも、殘り十圓にて家族一同の被服敎育費等を支辨し、且不時の變災、不漁時の準備等を爲さゞるべからず、其生計亦以て難しと云ふべし。

▲飲食と衣服

されば、該家族は、常に麥飯(然も米麥等分)若くは南京米にして、副食物は、香の物若くは味噌汁のみにて、舟の歸りたる時魚類を用ふるに過ぎず。

蓋し普通の農家等にては、魚類は高價なる珍味となすべきも、漁家にあつては、實に無類の不味にして、野菜を好む事頗ぶる大なり、從て野菜類高價にして、中以下の漁家の口に入る事容易にあらず、故に其畑地より得たる野菜なども、半日の副食物となす事稀にして多くは漬物其他に用ゐ、長く貯藏する事をつとむ。

其嗜好せる飲酒の如きも、十分に望を達する事能はざるが如し。

平常の衣類は、多く「つぎ子」にして、洗濯の暇なく且一週一回位の入浴に過ぎざれば、異臭を放つ亦怪むに足らず、盆、正月、及び鎭守の祭禮に際し、都人士女の通常服以下の如きものを晴衣とし、大に得意滿面たる亦以あるなり、上の階級すら此の如し、其他中以下の狀況亦推して知るべし。

出づるに馬車あり、入るに金殿玉樓、錦繡尙不平を唱ふる子女の徒、若くは食前方丈、紅燈綠酒の間に荒逸するの輩、然らざるも、世の識者たる者、此等漁家の生計に鑑みざるべからず、況んや生命を波に委し、世路の險きを夕にかこつ此等の家族にして、其質實親愛の良風如何に發達せるかを通觀する、豈無用ならんや、いでや全村に渉りたる一二の事項を倘記述せ

ん。

▲漁村の文化

此の如き富裕ならざる部落なれば、八百屋もあらず呉服屋もあらず、小間物店もなければ、豆腐屋もなし、只雜穀店と駄菓子屋ありて、凡ての用便は鹽釜にて達せざるべからず、從て、酒、味噌、醬油などの不味なる、殆んど口に入るべからず。

郵便物を投函するも、又切手葉書を求めんとするも、凡て十五町程隔りたる蒿蒲田村まで至らざるべからず、此等の交通機關に至りては、實に電話電信等の至便のみに目慣れたる人達の夢想だも及ばざる所なり。

一例をあぐれば、同村内なる鼻節村高山の洋人某氏に宛てたる予の書狀は、右の如く僅々十五六町隔りたる蒿蒲田に投函し、更に壹里半隔りたる鹽釜に達し鹽釜より約二里の道程を取て、宛名の某氏に達する例にて、壹里未滿然も同村内に發せる書狀は、更に四里の距離と二日間の日子とを費して、初めて目的を達するに至る、畢竟、村民にして郵書の發送、到達數稀少なるが爲、郵便函置場などの設置もあらざればなるべし。

村内にて、新聞雜誌を購讀する者亦殆んど稀なり、予は大に探索して、仙臺の東北新聞紙を購買せる一家を發見せしが、未だ東京の新聞紙を購讀せる者あるを見ず。

多くの兒女に、不就學者多く、入學せる兒童も、大抵尋常科卒業を程度とし、其多くは、中途に退學せるもの丶如し。文化發達の度を推知すべし。

▲疾病と醫療

一般に壯健なる兩親なれば、其子弟亦壯健なる者多し、されど平常の粗食と、不衞生、幷に良醫に乏しき爲、不慮の疾病死亡不具等を生ずる比々皆然り。

予の滯在中二兒の病めるありしが、村醫は何れも肺焮衝と稱し治療數十日なるも、其効なかりき、依て更の鹽釜なる醫師にかゝりしに、一は腦膜炎にして、一は心臟病なりきと、從て今は漸次快方に向ひつゝあり、此の如き類なるを以て、四肢の不具者、眼病など、殊に多し、其發病當時の狀を聞くに、兒童中俄かに手足

の動かざる事あれば「虫が釣ッタノダ」とて其儘に放置せしもの遂に此の如くなりきと、蓋し、壮健なる兒女が其活動に任せ、四肢の關節を違へる事屢々なるべきを、之を原の如く關節に挿入する事をつとめず、放棄せる爲、遂に抜けたる儘に肉付き、生れ付かざる不具となるもの丶如し、此を以て凡ての疾病を推せば、其亂暴蓋しあきるゝ計りの事あり。

小兒を呼ぶにも、野郎は通稱にして、馬鹿畜生は、其叱聲なり、普通の訓戒は、鐵拳五六のお見舞なりとす、從て普通の疾病などは、數十日間放棄するは常なり、其醫に診察せしむるは、死生の境に達したる頃にて、可憐の兒女が如何に非業に埋れつゝあるかを思へば、敎育の普及一日も早からん事こそ希望なれ。

▲信仰と參詣

一般に神佛の尊敬は非常にて、近くは鹽釜神社、金華山神社、羽前の羽黒山、遠くは、伊勢大廟、讃岐の金比羅様など、崇敬至らざるなし。

從て斯る貧困の間にても、必ず此等諸神社に參詣せざるはなし、其旅費も、平常に於て、組合又は講仲間などの設けありて、數年内には一回若くは數回、遠地の神佛にも參詣するを得べし。

之を以て之を観れば、若し平日に於て、備荒儲蓄の方法を立てなば、不時に備ふる事出來得べからざるにあらざるべけれど、概して漁村には、此等の方法完全ならざる如し、遺憾といふべし、神佛の參詣亦、諸國を旅行し、種々の事物に遭遇し、其得る所尠少ならざるべけれど、漁村の變災に備ふる用意亦必要なるものあるべし。

▲全村の美風

村内の良風と稱すべきは、人民質朴率直にして、特に隣保相助け、朋友互に相救ふの情誼に富みたる事、此なり、蓋し、萬里の波濤を蹴て大海を枕とする者、不時の變災に遭遇し、有力なる家の柱を失ふべき類例の多々あるべければ、此等の必要よりも、自然に發達せるものなるべけれど、一は全村の氣風、淸素にして正直を學び、誠實を事とせるにあらざるはなし、賭博

盜難等の皆無なる亦其證となすべし。

偖一例とすべきは、村の若き娘達、終日の勞苦をも事とせず、夕食後に於て、重なる各戸に麥搗の手傳として廻る事此なり、家によりて、舂の數あり、爲に四名或は六名、或は八名一組となり、一舂に二人相對して杵を押し、面白き聲し、をかしき節をつけ、うたひつ、つきつ掛聲と笑聲とにて、夜十一時を過ぐるに至る、毎夜此の如くにして、一の報酬もなく、一の謝禮なし、澁茶一掬、非常の好遇禮謝として、喜び歸るもの豈數年數月の習慣ならんや、蓋し我帝國人民の神世ながらの美風相傳せるものといふべし、口に文明をとなへ、表に富貴を誇るの徒、或は强食弱肉、虎視耽々排擠陷穽を事とするの輩、特に嫉妬、猜忌、狐疑褊狹に陷り易き婦女子は、此等天然なる美風に顧する所あらざるべからず。

涌頭處賊はもう亡せました、漁師は皆安心して舟に出てゐます、併し一時は魚河岸も飢饉でした。

## 東京附近 農家の生活　二

秋生

東京近在の農家は、おなじ農家とは云ひながら、さすがに壁一重隔てゝ東京といふ都會に接して居るだけに、矢張其の生活の仕方なども、普通の農家とは稍や趣を異にした節々が御座います。で、固より順序立つて委しくしるすと云ふことも叶ひませぬが、なるべく變つた所を申上げるの趣意で、心附く儘に、彼れ是れ打混せてお話するとに致しませう。尤も是れは或る一部の觀察でありますが、推して亦全體を知るの料にはならうかと思ふのです。

▲日々の食事

日々の食事には、上中下共に、舂割めしを用ゐて居るのが多い、其分量はかの山家などで、半麥半米の麥飯を用ゐて居るのに較ぶれば、少しくは增ですが一體に質素で、米の飯は節季、物日の外は用ゐません、こ

れは東京と壁一重であるとは云へ、大分の相違です、お副食の野菜物は、固より自分々々の畑の物で間に合ひ、魚類も東京から賣りに來るし、さなくても態々東京に買ひに行き、又は他用で東京に行つた序に、魚屋から購めて歸るといふ樣な自由な事が出來るのであります。『東京に行く』と云ふと、何か遠方へでも行く樣に聞えますが、東京の場末から僅に五町か十町の所に住む人でも、矢張東京に行くといふ言葉を使ふのが習慣で、東京の者には、何となく可笑しく感せられます。

▲生魚よりは乾魚

さて其の東京から行く魚屋などの話に據ると、近在では、生魚よりは、却つて乾魚の方が賣行が好いとか申しますが、是れも、繁忙な農家の事であるから、なるべく煮燒に手數の懸からぬものと、一つには保存の仕易いものとを取る傾向になる所爲か、之を見てもよく勞働する人に限つて、贅澤な眞似は出來ぬ。

又食事に必要な種々な品、例へば鹽だとか、醤油だとかいふもの、或は其他の日用品は、大抵は例の萬屋にあり、其店に無い物は自宅にあるか、さなくば直ぐ附近の東京にあるといふ譯で、矢張不自由は少いのであります。

▲留守居と賄役

臺所の用をするものは、妻か、娘か、老婆か、何れにしても婦人であるが、田圃の仕事が忙しい時分には妻も、娘も、皆家を空にして出て仕舞ふから、跡に殘るのは老婆で、先づ最も勞働の出來ぬ人であるから、留守居ともなり、又其間の賄役ともなるのであります。田圃に出て居る一家の人が中食を遣ふのは、自家へ歸つてするときもあれば、又田圃で辨當を食べるともありますが、其等の世話は、大抵此の留守居がするのであります。又晩餐も老婆が拵へて待つて居るので一家の人は毎も樂しく食事をすることが出來る。老婆の此の仕事は、謂はゞ隱居役とでもいふものでせう。

▲早起きと靑物市場

早起きは農家の德で心地の清々しさ、風物の美しさ

所謂田園生活の快味は此にあるので、是れは何處の里に行つても變りは無からうと思ひます。

近在の農家では、隔日又は數日置きに、東京の青物市場に行くので、此日は取りわけ早く起きて、男衆が車を挽いて東京に參ります。勿論青物を持つて行くので、畑から取れ次第であるから、幾日置きになるかは作物にもより其家の畑にもよる事なのであります。市場は神田多町又は其外の所にあり、近在からは夜の暗い中に出て、其家の女房や、娘達が車の後推しをして行くのですが、東京の都大路に住む人々は、恐らく其姿を見たとも少からうと思ひます。

此の青物の賣代金は、直に近在農家が生活の料となるのです。但し麥や米の方は、又別に捌口があつて、夫れ〲現金に引換へられて、矢張生活の料になつて來る。是等が農家の主たる收入でありますが、東京に接近して居るだけに、金銭の融通も、他よりは幾許か付け易い樣に見受けられます。

▲農家の副業

農家の副業としては、鷄を飼ふとか、花木を養ふとか、草鞋を造るとか、山林を買ふとか、それは色々な事がありませうが、大體に於て、何處の農家と較べても、著しい相違はありません。尤も山家でする樣な、炭を燒くとなどは稀れであります。そして副業も、東京を相手に――即ち東京の人を顧客とすることが多くあります。現に記者の知つて居る農家では、植木屋しまして、隨分高貴な邊へも出入りをして居る樣に聞きましたが、顧客の方から云つても、樸訥な農家の者に依頼するのは、甚だ安心な事と信じます。

▲着物と住居

着物でも、住居でも、何れかと云へば東京風に染みて居らぬ、是れは田舍であるからといふ故ではなく、農家であるからなのです。

けれども、田園に出る時の服裝は格別として、普段着、晴着になりますと、餘程東京化せられて居ます。東京の流行も追々と傳はつて來るので、殊に若い男女は早く之に感染します。娘達が晴着を着た時、又は若

者が夜遊びをして歩行く時の姿などを見ると、殆ど東京と撰ぶ所がない樣なことがあります。節季、物日の折々に、青物市場に行つた戻りを利用して場末の呉服店から一反二反と購めて來て娘などに與へる、是れが流行の端となるのです。

住居も同樣、茅葺か何かで、中にはお手製のものさへあつて、何處迄も農家として出來て居るが屋内の家財家具に至つては、隨分東京から來た物が多いのであります。併し着物でも、住居でも、全體の風俗が東京になつて仕舞ふことは、土地が東京に含まれぬ中はあるまいと思はれます。



▲安息日

近在の農家が安息日として舉つて業務を休むの日は盆、正月、其他の節季、物日であります。中には、一日十五日に休む所もあるさうです。

盆や、正月に就て面白いのは、場所に依つて、其日が一定して居らぬことで、或所は舊曆を用ゐ、或所は一日後れとし、又或所では新曆にも其れをして居ると云ふ風に、誠に混沌として歸する所が無いといふ有樣なのであります。記者は先日北豐島郡の或村へ參りましたら、娘達が三々五々群をなして、晴着の姿で歩行いて居るのを見ましたから、人に尋ねますと、「今日は八

月廿四日（舊曆七月十四日）だから、ウラ盆（盂蘭盆か）です」と答たのには、未だに不思議と感じて居ります。斯かる日に、農家の士女が如何なる事をして樂しむかといふヿは、此に事新らしく書立てる迄もないヿでありませう。

▲近所持寄り

所謂「近所持寄り」の風習は東京の近在にもあります。即ち禍福相憫み、相祝ひ、若し一家を起す樣なヿがあれば、近所合壁寄つてたかつて家屋を拵へ、家財家具を用意するといふ、互に持寄りの仕事をするヿで、誠に善い風習だと思ひます。そして平生の仕事をするときも、此の傾向はあり、又節季、物日の安息日にも自然此の傾向はあるのです。歲晚「餅搗き」の折など、大勢徃きつ、來つ、互に手傳をして居るのは、餘所目にも甚だ愉快に感ぜられます。

▲子供の養育

是は甚だ放任主義ではありますが、多くは健全に成長して行く、是れも、一に田園生活の有難さと謂はねばならぬ。

總べて農家の家政は、其家の婦人が總がゝりで、誰れが何といふ區別も無しに遣つて居る姿であるが、子供の養育の如きも矢張左樣で、唯だ母親が中心となつて居るのみです。斯くて學齡に達すれば、村立學校又は近い東京の小學校に通はせ、大抵は義務年限を了へさせます。それからは、東京の商店などへ奉公に出すなり、自分の家で働かすなりするのですが、高等の教育を受けさするのは、比較的少い樣です。

▲一家の樂しみ

一日の勞働を濟まして歸れば、一同打寄つて夕飯に取り懸り、是れから、一家團欒の樂しみが初まるのである。主人が一杯の酒に舌鼓を打てば、餘の者は其日の出來事などに就て語合ふ、東京の新聞も來て居るので、其れを讀む人、其れを聞く人——煤つた洋燈の下には、眞に繪にある樣な光景が現はれるのです。それから、暫らくすれば寢に就き、又明日の仕事を夢に見のが、農家の生活の樂しみの極致であります。東京と壁一重を隔つるのみでも、實に霄壤の差があります。

# 鳩山博士の庖厨

模範的家庭の好評ある鳩山春子夫人の食物談を御紹介申しませう曰く私は世間の粗食論には徹頭徹尾贊成が出來ませぬ、私の知つて居ります老人の中にも粗食者は隨分澤山ありますが肉食を取る丶方よりも一体に衰へて見ます、從て記臆が惡かつたり目が霞んだりして居ます、私自身も數年前から何かが臆劫で忘れつぽくなつた樣に自分に思ふですが原因は學校時代に極端な粗食をしたからだと思ひます、幼さい折に父に連られて東京に出ましたが間もなく漢學先生の家塾に預けられました先生は非常な親切な方でしたが昔の人ですからまた非常の粗食家でした、師範學校に入つてからも御存知の通り食物は粗末な方でしたから、その後自分に氣がついてから非常に注意して居りますが發育すべき時代の不攝生は取返しのつかないものかと思ひます、それで唯今宅では老人から子供まで乳は皆用ゐて居ります朝飯は皆な好きますので味噌汁は是非致します晝には皆留守で御座いますから肉と野菜位極く簡單に濟ませます晩は成丈氣をつけて居りますが別段異つた思付きもありませぬから普通の洋食に野菜を取合せます位ですそれから序ですが私思ひますのに日本の人はお菜が割合に少量故ですが非常に御飯を大食する樣に思ひます副食物に滋養分がありますと御飯はそれ程食べずとも宜いので身体の爲にも却てその方が宜いだろうと思ひますそれに間食ですネあれは矢張習慣とは云ひながら三度の食事に滋養品が少ない故かと思はれるのです、宅の子供等には間食は一切させませんのですが子供達もあまり欲しがりませんです、經濟の點からも食事を質素にして間食する方が費が却て多い樣です。

# 俳優の家庭

錦鱗子

荊棘の中に芝蘭を生ず、ト宗吾の淨瑠璃めかして神武以來二千五百年の古諺を引用するも、梨園子弟の家庭を寫す劈頭、先づ雪寃の本義を明かにする所以に外ならぬのである。金屏風も膓は反古である――それとおなじ比例に、紙屑籠の底からも往々金の指環を發見する事實がある。世の中進みゆきて、劇を詩、俳優を美術家と信ずる多くの人々と雖も、尚ほその家庭に對しては、之を風紀紊亂の根據地と看なし、またの名は腐敗倶樂部、若くは男地獄木部でもあるかの如く誤認する例が少なくない。ア丶天倫の樂みの伏す下、何れの處か春風和氣堂に滿たざらん。筆者素よりその總てを保證するかぎりにあらねど、特に今相知れる二三の實例に顧みて、少しく彼等の『美なる方面』の消息を傳へて見たいと思ふ。

▲妻● 俳優には限らず、總じて藝人の家庭においては、主人よりも妻女の勢力範圍が最も廣く、且つ最も價値があるので……。主人は勿論技藝に遊ぶの人であるから、一家の經濟、交際向、其他俗事の爲めに之を煩はすのは宜しくない。否な斯る內顧の患を屢々せしめられ、算盤を斜に構へて眉に八の字を疊むと云ふ――即ち妻の內助力の弱き藝人には、古來決して名人上手を出した例がない。技藝家は唯だ技藝に向つて突進すべく、之をして俗事以外に樂天の位地を保たしむとは、是れ其妻の最大義務たるを思はねばならぬ……デ斯る必要に促がさるゝ結果、自然と妻の仕事が多くなり、仕事が多ければ勢力も廣まると云ふ順序――そこで妻が諸方面に展開して內外の事務を切つて廻すと共に、主人が超然として崇高なる技藝圈中に悠遊することが出來る……義太夫界の名手攝津大椽の妻は正に此觀念を有してゐて、貧苦の中に良人をして米の直段を知らしめなかつたとある。近頃沒した太棹の大家豐澤團平、渠の妻千賀女は『三十三所花の山』の作者とし

て人に知られ、良人之に飾附して世に傳へたるものであるが、家事經營の才においてもまた天晴れの手腕を示してゐた。これらは伯鸞孟光と云はんよりも、近く美術家としての池野大雅堂夫妻にも比すべきであらうか。◎デ俳優の妻と云へば、兎角議すべき出身の多き中に、◎團十郎の妻　ばかりはさすがに耻かしからぬ素性、このお増は龜岡なにがしと云ふ御用達の娘で、そのころ河原者と云はれた俳優に嫁せしは既に破格とする所。のみならず當初團十郎が頗る冷かに待遇したのを、ヂッと辛抱して露ばかりも不滿の色を見せぬ……。團十郎が旅から歸つて、柳島の合羽屋の寮に燻ぶつてゐた名代の大世話場にも、お増は良人が節季師走單衣を染返して着てゐる傍に傅き、今戸燒の火入にかぢり附いて打顫ひながら、而も倘ほ行屆いて團十郎の世話を仕たと云ふ。所謂釜甑塵を生ずるも晏如たりとまでは悟り切れなかつたらうが、兎に角此間の生活に名人趣味が溢れて居りはすまいか。晩年の團十郎は興行毎にその給金をお増に極めさせたが、興行主は晴雨殆ど測度すべからざる渠の外交手腕に弄ばれて、青くなつて逃歸ることも屢々ある――最もこれは成田屋一家に限らず、菊五郎の妻お里における、其外重なる俳優、大抵は細君をして折衝の任に當らしめたものと記臆する――それからこのお増が諸事大名式にふるまひ、弟子を買物に出しても剩錢の事を忘れて仕舞ふ場合が多かつたから、中には不經濟の女房と難じた人もあるが、極懇意の者に聞いて見ると、決して忘れる譯ではなく、所謂知つて知らぬ顏で、それだけの品を弟子の身に附けてやつたのだと云ふ――斯ることは大立者の妻たる度量として、大いに買込むべき點と思はれる。總て俳優の妻は金錢の切離れに注意する――即ち活きた金を遣つて先づ内部から人望を收める、それが間接に良人の身の箔となるので……。されば萬事に氣を配り、不評の種ともなるべき仕打に就ては、良人と雖も遠慮なく之を匡してゆく。左團次の養母、即ち◎名人米升の後妻　に一場の佳話があるが、それは小團次と云ふ男、何か出先きで立腹すると、蟲を殺して我家に歸り、突

然圍爐裏の火をざくりと掬つて青疊の上へ撒きちらす亂暴。スルと女房は默つて見て居り、翌日になると小團次が秘藏の花壇の蘭、何百圓と云ふ盆栽を片ッ端から石の手水鉢に投附けて微塵にこわし『アレまた猫が惡戯を』と大聲で笑ふ早速の復讐。さすがの米升も盃を脱いで、以來入ッ當りを止めたと云ふのは、チト藥は強くても面白い遣方ではあるまいか。デ役者の妻が芝居內外の事を取仕切るに就ては、文政の頃にも◎切餅の由來と云ふ可笑しい話がある。或時和泉町の幸四郎が何かふくれて樂屋入りをせぬと云ふと、帳元の立花屋治助が『お神さんにお目に掛りたい』と高麗屋方へ尋ねてゆき、妻女が逢ふと直ぐに紫縮緬の袱紗包みを火鉢の傍に置いたが、一ト目見て廿五兩包みの四ッもあらうかと思はれる代物。治助はすまし切つて唯『親方は芝居へお出でになる方が宜いでせう』と云ふと、妻女も紫包みをチラリと睨んで得心し、頓て幸四郎に樂屋入りをさせた。處が治助は其跡で包みを解き『今朝はまだ飯前です』と中から切餅を出して、火鉢で燒いて喰ひ始めたから、妻女は呆氣にとられて仕舞つたが、廿五兩包みを切餅と云ふのは是から始まつたのである。無論よくない例であるが、幸四郎の如き大立者でさへ女房次第であつたと云ふ、その勢力の一證として記しおく。◎脚本內讀の場には必ず妻女のたづさはらぬとはない。狂言の世界も極り、作者が臺本を携へて內讀に來る——ト夏期ならば明け放したる茶座敷、庭には遣水の痕消々しく、紗簾微風に搖くあたり、竹椽の端近く唐木の小机を前に控へ、白地の襟くつろげて團扇片手にユッタリと着座する主人、下手より之と差對ひ、一閑張の小机に臺本を載せて徐々讀み始むる作者先生、この横合に座を占めて、始終臺本を覗き込みながら、聞耳立てゝゐるのは妻女であるが、作者は書く人、主人はする人、妻女はまた之を見物するお客の側に立ちて、局外よりイヤそこは受けるとか受けなからうとか口を入れる。のみならず良人保護者の地位に立ちて、爰にはこんな臺詞が欲しい、是非立廻りを一ッさせて……など自他兩様に研究を重

ね、ひたすらに良人の役をよくせんと努むる、その勢やまことに多とすべきものがある。妻女若し事なく納まれば、餘は皆な一瀉千里に通過するので、その責任の重きも素より言を待たぬ事。さてまた芝居休み中における弟子の保護、心注けは申すに及ばず、子女の敎育、奉公人の取締と、凡そ妻女の肩の休まることは、束の間だもあるまいと思はれるが、何さま別天地の人々を相手として、他をそらさず、おのれを損せず、八面に當りゆく一家經濟の切盛りは、所詮普通の理想を以て遣遂ぐることは出來ぬので……、筆者は此點において、俳優の妻に敬服することを辭せぬものである。

▲子女　修業と云ふは踊と唄物、片言交りに口の利ける頃から子役に出て『かーかーさーまー』と笛のやうな聲を出し、稍々長じてお家流の一筆啓上でも書ければ、それを學者の部に入れた時代と違ひ、今の俳優は時代の要求に應じて、その子女の敎育に容易ならぬ苦心を拂ふこととなつた。無論下廻りの家庭は別として、兎も角も立者と云はれる人になると、お出入先が皆な立派であるから、小供にも一ト通りの文字を授けておかねば、貴紳の前に出て二度目の御挨拶が詰ることになる、殊に近年劇の研究微細に渉りて、審美論などの八釜しくなれる折柄、所詮踊の稽古で五年十年を終らせる譯にはゆかぬ——ト先づ大抵の處までは氣が附いて來た。そこで小學校の高等科を普通と定め、それ以上となると、自宅に敎師を招くのもあれば、また夜學校に通ふのもあり、甚だしきは猿之助の伜團子が中學通ひの如き一異例をさへ見るに至る。訥子なども、さすがに早く着眼して、宗之助、長之助の兄弟に英學を仕込み、本藝以外の學力においても、既に嶄然頭角を露はしてゐると云ふ、デ踊の稽古は素より弛みなく、藤間花柳の門には朝夕俳優の子の足跡の絶えたことがない……

◎遊戲は如何　その稽古所通ひも振袖の裾引摺りか何かで、男衆に送られてゆく時代とちがひ、今は自轉車の鈴の音、チリーン……と風を切つて師匠の本城に乘附けると云ふ、勇ましき武者振の少年が多いのである。自轉車と云へば昨今梨園子弟の間にその流行を極

め、現に明治座などは『櫻輪會』なる團体を設けて居り此會の莚升は勿論の事、吉右衛門、宗之助の輩も正にチャンピオンたるべき熟達を示してゐる。それからまた草鞋履きの遠足に希代の健脚を誇り、美事十丁間濵車と競走したと云ふ、韋駄天の伜が出來上るなどの騷ぎもある、寫眞は多少廢れたが、馬、ボート、劍術、相撲の如き尙武的遊戲は、相變らず一部に行はれ、別にまた本藝の調子を固める爲めとて、義太夫を稽古する少年は比々皆然りである、斯る傾向を生ぜる結果、自然と筋骨も練れて來て、青年俳優中には勇氣勃々、松丸太大の足を叩いて萬丈の氣焰を吐く手合が多くなつた。デこれは非常に喜ぶべき現象であつて、ハ如何なる妙技も健康の外からは生れ來らぬことを思ふと、彼等の體育に資する此種の遊びに對して、盛んに双手を擧げざるを得ぬではないか。

◎**繪の事**　心掛ある俳優は古來多く繪畫を稽古したもので、團十郎、菊五郎、訥升、田之助などが土佐派の生田隣春を師としたとは誰知らぬ者もあるまい。當今でも楓湖だの小蘋だのと、各自師匠撰みを爲て、先づチヨイと花鳥の席書ぐらゐには差支へぬ人が多いのである。親々とても繪の修業と來ると決して故障を入れない——否寧ろ之を勸誘するを例とするが、これに關しては双方の間に多少意思の違ふ處がある……と云ふのは、芝居の隙に出入先きへ行つて扇子など出されても、徹塵恥をかゝせぬやうにと云ふのが親の至情で、當人達も無論そこらの覺悟はあるが、稍々進歩した手合になると、之を本藝の側に應用して、舞臺上の色の配合、衣裳の好み、書割の遠近法、さては姿勢の美を研究する料にもと……斯樣な理想、斯樣な抱負を示して、丹青の技に汲々としてゐるのがある。これらもまた梨園子弟の家庭に新たなる曙光の導かれたものと、大いに祝はざるを得ぬのであつた。芝翫もかなりに描く、高麗藏も花鳥人物ぐらゐはなぐる。吉右衛門の如きは楓湖門人で楓蓬と名乘り、師をして造詣測るべからずと舌を卷かしめた程であるとか。

◎**俳優の娘**　はと云ふと、これも決して踊や常磐津の稽古のみに身を委ねては居らぬ……茶の湯

花は無論として――花は池の坊大流行とある――小笠原流の行儀作法、音樂は和洋を兼ねて、ピヤノ、ヴアイオリンまでも廣くわたらせ、若き男子の出入多き家庭におくは宜しからずと、現に之を預くべき適當の老師を撰擇してゐた人もある。稼業柄とて時間の餘裕なき中流の俳優にても、娘を持つほどの親々にして、裁縫學校の門一ッ潜らせぬ舊弊人は稀であらうと思ふ。俳優の娘なればと目に附くとを厭ふ人は、矢張宅に教師を招きても外國語などを研究させた事例がある。併しこれらは餘り多からぬとで、唯だ團十郎の姉娘がフレンチをやると云ふ如き、たまさかの例によつて立證されるに過ぎぬけれど……。要するに俳優中の或者の家庭は、外邊に想像し得られぬほど嚴格を極めて、主人の芝居出勤に對する妻子の送迎の鄭重を盡せるなど坐ろにゆかしさを感ぜしむる場合がある。これは彼等の技藝上に劃せられた人爲の階級よりも、家庭振粛の嚴しきだけそれだけ、おのづから茲に自然的階級の確立を見たるものと、最も眞面目に觀ずるより外はあるまい。

▲主人の家居する場合はと云ふと、彼の向鉢卷で雉鳥の聲に夜を徹する賭博俳優の類――これらは素より一顧だも與ふる限りでないが、筆者の知れるなにがしの俳優に極めて美しき事實がある。それは芝居の休み中、何時行きて見ても、窓近の机に靠れるか、または庭のハンモックに横はるかして、必ず書見に耽つてゐるから、ハテ何を讀むのかと差覗けば、先づ大抵は最近發行の小說、デなくば日本の歴史、物語の類であつて、ツイ此程は『本朝武家評林』と『陰德太平記』とを繰返してゐた。そこで如何に書中の趣味を解するかと探るに『ヘイ何か自分に適しさうなものはないかと、それを搜すのが何よりの樂みです』と云ふ――素よりそれ以上を味はふ腦力はないものとして、兎も角も這般の興味を書籍中にあさり行く渠が◎技藝的娯樂ならずとも、また大礎ならずとも、一脉の清風は絶えずその懐に往來せるとと信ずる。渠はまた時によると鍬を携へて後園に出で、自身に野郎仕事の型をやるの

みか、伜にも弟子にも隙さへあれば、「百姓セエ、百姓セエ」と無理に力業をさせる。是れ宛乎たる一農夫の家庭である。片市が池上にゐた時分、肥桶を擔いで畑を仕たと云ふのも名高い噺であるが、息子の亀蔵、弟子の松江などが直黒になつて之れを手傳ひ朝夕は一同木劍を取つてヤットーの稽古を始める——誰か之を俳優の住居と思ふ者があらうぞ。この市蔵の天眞を流露してゐる質朴生活は、正に俳優臭味を脱却したものではないか。◎稽古噺　師弟と云へばとて一々手を取つて敎へるにあらず。俳優は唯だ師匠の舞臺を見てゐるのが修業——と申して「今度の役はどんな腹で行け」とか「あの臺詞はこんな息で云へ」とか、初日後に直して呉れたり、また問へば自宅でも彼是れと話して呉れぬではない。併しながら要するに俳優の稽古は、踊り師匠が今入りの弟子の手解きをするとは譯がちがふ。そこで相手の仕打が氣に入らぬ時、或は此彼で伜に當てさせやうなど云ふ場合には、往々自ら立上つて差圖するともあるが、多くは皆な口傳口授に止まるので……

近年の俳優の例を並ると、團十郎は寺島の息子に「對面」の五郎を敎へた時は、珍らしく自身に悉皆科白の手本を見せたと云ふが、弟子に對しては兎角放任主義で「おれは知らぬ」と投出して仕舞ふのを例とした。デあるから京都の祇園館で須磨浦の敦盛を雁次郎に敎へた時、弟子が皆な羨ましがつたと云ふではないか。この中にも故人新蔵ばかりは師匠を逃さなかつた。「おれは知らぬ」と十八番を出し掛けると、「イヤ知らぬでは困ります」と追窮してゆくから、ツイ蒼蠅がつて一二言口を切る、スルと透さずそれから手繰り出して、首尾よく聞いて仕舞ふと云ふ遣方——そこで新蔵が來ると團十郎は眉に八の字であつたが、外の手合には精精「此役はこうした人物だからその性根で……」ぐらゐの極めて漠然たる處を揮舞はしておいた。尤も晩年には自分の型を傳へる積りで、氣の向いた折節は家橘、染五郎等を茅ケ崎に呼寄せて、細々と差圖を仕たものである。菊五郎は自分の工風がやかましい程あつて、弟子を敎へるにも随分皮肉な突込み方を仕たが、併し

團十郎の如く『知らぬ』と逃げるやうなことはない、初めて『牡丹燈籠』を出す時に、幽靈の出入りが氣に濟まぬからと、音五郎を連れて網燈籠をぶら下げ、庭の木立の間を夜の十二時過までも徘徊して『どうも凄くねへ』と後には癇癪を起したと云ふ噺がある。斯うした寸法だから、イザ芝居の初日が出るとなると、その前十數日間の宅の騷ぎ、家内一統この凝性の飛ッ沫を受けて山出の下女が臺所の隅にふくれた例は珍らしくない。さう云へば俳優の家の下女は、概して九段目のおりんを寫した山出しに限られてある――蓋し或は風紀振肅の必要上から來て居りはせぬかと疑はれる。さてまた俳優に形式的の稽古のなきことは前にも述べたが、八百藏は近來大いに見る處があつて、伜英太郎を始め門下の青年輩に令を下し、隔月一回と云ふやうな期日を定めて、自宅に稽古芝居を催ふさせてゐる。勿論鬘も衣裳も手細工ばかりで、道具などは手拭を二三本掛け渡して暖簾口に見立てる如き大茶番。それでも彼等は皆な熱心に役々を演じて居り、師匠八百藏が之を批判して彼是れと直させてゐるのは、何と好箇の奬勵法ではあるまいか。デこれは立花屋一家に限らず、苟も多少の門人を持つ俳優は、是非之に倣ふべく施設をさせて見たい――イヤ若し望み得るならば、師匠の務めとして小さな稽古舞臺一ツぐらゐは、家庭の一部に設けさせておくまでの必要があるので……。

▲經濟　凡そ俳優の身分ほど懸隔の甚だしきものはなく、廿五日立六千五百圓の高給を取る大立者もあれば、おなじ日數を汗水垂らして、三圓五圓と云ふ見じめな下廻りもある、されば從つてその生活を一尺度の下に研究するとは出來兼ぬるけれども、先づ借家住居をせぬ◎一流二流の俳優になると、經常費として少なくとも一ヶ月二百圓近くの阿堵物を要する、(團菊左の家庭は除外例とする)、衣食と云ふ中にも見得を張るべき俳優の生活は、衣の側において寒暑共少なからぬ出費を見るので……。贔屓に出入りの者へ出す仕着とか、贔負先に配る浴衣、袱紗、末廣、團扇などの費用――これにまた意外の高價を拂ふのであるが、斯る臨時費

用は別口に見込むものとして、一方即ち食の側においても彼の團十郎が世の相場如何に拘はらず、生涯一等米を喰ひ通したと云ふ程度の痩我慢は到る處に之を發見することが出來る、よし料理番をおくほどの贅はせずとも、抱車夫、男衆などの外に、三四人の弟子や手代は始終臺所に轉がつて居り、小供でもあれば婆ヤだの何だのと、お爨、仲働の外にも多少の奉公人を要するから、素人屋の小人數の家内で、隨意に機關を廻すやうな譯にはゆかぬ……。素より口に租税を拂はぬ連中の集まりゆゑ、これらの人をして主人即ち『親方』に指を指させまいと、内外に見得を張つてパッパと金をふりまく、それも鐚一文無駄には棄てぬと云ふ此間の呼吸、結局月費額の膨脹若くは緊縮を、生きた支途に伴はしめると云ふのが、妻女その人の技倆を示す所以――アヽまた難い哉である。月税と云ふものも下廻りには重荷であるが、これは立者に取ると大した苦痛ではないとの事、無論の噺であらう。が素より無盡藏ならぬ一家の財力……小供の修業に拂ふ費用の如きは說くに足らずとして、イザ伜の名題披露などの大打撃を被る場合には、金庫一切の門戶を開かせて外資輸入を待つ逆境をも見るのであるが、斯る羽目になると妻女は必ず口を切つて『お氣の毒でも少し動いて見て下さいまし』と云ふ……トその反應は忽ち二座三座の掛持稼ぎとなつて、主人公大いに筋骨を勞するの成行となる併しさすがに技藝に遊ぶの信念ある人は、利益と云ふよりも寧ろ必要に逼られてその天職を盡すものと觀じ現に某優の如きは『本業の爲めに運動するのはいくら度を過しても疲れたとは思ひません、苦しいと感ずるよりも一ト足先きに、必ず樂境を探り當てることが出來ます』と云つてゐた――蓋し悟入した一語ではあるまいか。それから大磯、鈴川あたりに別莊を持つ人々は夏期に至ると芝居の休み中には必ず出掛けて、山秀水靈の詩趣を文字以外に味はふのが例で、この留守中には本宅の經濟において著しき減額を示し得ると云――然らば出入りの者が皆な別莊進撃をやるかと聞くに、離れてゐては汽車の便さへ煩はしくなり、三度が一度

となるに連れて、避暑先の費用とても、無論目の玉の飛出る氣遣ひは御座らぬとある。此においてか俳優の家庭は夏期萬歳と三呼せざるを得ない……。◎三流四流の人々になると、大抵皆な借家住居を仕てゐるから、ボロ隠しの爲めに屢々水草を追ふて移轉するのがある。多少目に附く役をもする手合が、一ケ月百圓以內、甚だしきは六七十圓で一家の口を糊さうとするには、その苦しさ並一ト通りでないから、ツイ餘計な贔負廻りを仕たり、或は邪道へと踏入ることになる。尤も家屋持の中にも松助の如き經濟上手があつて、窮せずして火の車を廻したがる淺黃幕裏の魂膽、まことに容易ならぬ辛勞であらうと推察する。次に下廻りの家庭はすべて非常なる慘憺の中に、却て偶ま物質以外の怡樂天地を發見してゐる佳例が少なくない。けれどもヘボ作者の脚本は必ず四場以上に亘るべからず――ト己れを知つて不取敢頭取の禿顱を煩はすことに仕る……

# 力士の家庭

大兵生

▲留守居をして居ても

「お內儀さん、今戻りました」と障子の外から、其れこそ土俵で敵手と睨み合ふ時の樣な身構へで、無作法にかう云ふたのは、未だ髮の毛も伸び揃はぬ、栗髷の小相撲である。

「オヤ誰れ、誰れだい、歸つたつて。

「ヘイ私、小秀山です。

「アラさう小秀山かい、お前何して、よく早く歸られた事ね、マア此方へお入りな。

內は八疊の間の正面の床の間には、摩利支天尊の畫像を安置し、此方の梱間には、五岳が松の自畫自贊、其れに向つた右方には、先代の横綱何某が片屋入の、減金もや〻剝げかゝつた寫眞を其の儘の額の下には、後に簞笥、前には欅の如輪木の長火鉢を控へて、細面の

色は少しく淺黑い方だが、鼻筋は通つて、口元の締まつて、何所までも垢脫のした利發らしい三十女房、粹がかうした成る身の果であるとは、衣裳の着扮し、物の言振りにも其れと知れるのである。

『お內儀さん御機嫌宜しう……

『ハイ、お前も變りがなくつて……、其れによく稽古に精が出たと見へて、場所の時分から見ると、大層身體も出來た事ね、一昨日來た關取の手紙には、巡業もいよ〳〵後一場所で切上げとして、何うせかう押詰つては日延も出來ず、遲くも廿六七日頃迄には歸るといふて寄越されたから、乘込み初日なら今日頃は二日目若しか又一日道中といふ事にでも成つたとして明後日あたりは歸られるかと何日とは違ひ歲暮ではあるし、何にやかや用事もあるから、今も一人で其樣事を考へて居たのよ、其れにお前は何うしてこんなに早く一人で歸つて來られたんだエ。

『エイ、私も其方へ行く筈でしたが、出發前の日に、少し腕を痛めたもんですから、ナニ大した事もないですが、關取さんが、後はモウ二日の興行だし、無理をして相撲を取るにも當らないから、此處から直に東京に歸つて、お內儀さんの手傳ひして、障子張りやら居圍の掃除でもして、春の仕度をして置けと言ひ付かつて來ました。

『オヤ左樣だつたの、ソレでは變りのない處ぢやアないわね、ソして其の何かい、怪我をした處は何うなんだい、サウかい、モウ痛みはしない、其れア好い鹽梅ね、だがお前無理をおしでないよ、百瀨の先生にお願ひ申して、全然療治をしてお仕舞よ、別けても大事な出世場所も近いて居るし、何んでも身體が肝腎だからねエ、本當に係うして留守居をして居ても、關取始め一同の者が、何卒壯健で、息災でと、朝夕宿彌樣にお祈願申して居るのだよ。

云ふて內儀は、熟々と若者を、見まもつて居たが、此度は莞爾やかに笑ひながら。

『小秀山お前は、身體が出來た計りぢやアない、衣物もいゝのが出來たのね。

「ヘイ來しなに、アの名古屋の旦那さんに作さへて貰ひました。

「ソレは甘い事をしたのね、だが家に居る時には何んなもんでも搆はないから、其れは汚さない樣にしてお置きよ、旦那衆から戴いたものは別けても大事ですよ其れから何にかい、關取始め外の者にも別に變つた事もなかつたかね。

「内の關取さんは今年はモウウンと元氣です、先月だつたが、先々月だつたが、始めて少し煩つた樣ですが何アニ風邪ですから、直に癒つて仕舞つて、今ぢやア元氣一杯で、肩口もかう持上つて、腕などの堅い事と云つたら、鳶口でも通るまい、是れでは此度の場所は無敵だといつて、餘處の關取衆も感心して居ました。

▲愚痴は出る

此の夏は、中國、四國、九州かけて、巡業中の長い間身体に少しの障りもなく、豪い元氣で歸らるゝとは、眞逆に小秀山が才覺で、土産話しと、程のいゝ事をいふて居るのでもなさゝうな……。

思へばこゝに半年あまり今日から此地で三日間、次は何處で二日間、また其の次は何處々々といひ送らるゝ葉書一枚頼りにして、其の往先を暦に誌して、今日は酉の日、明日は戌此の郵便の着くは何日かと、大圖計つてする音信、所詮は委しい仔細迄言ひ送れるものではなく、其の心配の積りに積る胸の中マア大抵の事ではない。

何事も皆、習ふよりは慣れとやら、其れも今までに仕慣れ、聞き慣れ、知り慣れては、又左程にもなくなつたもの、若しや此方に病み煩ひでもあつたものならば其れこそ何うして宜い事かと、或る夜寢覺めの物思ひ心細さの限りである。

其れも一月に別れては五月迄、また五月に別れては、來る正月の場所前迄、一年中の十ケ月は、旅へ稼業の其の身体、固より地方の興行は、花相撲とさへいふ丈けに、土俵の上の勝負とて、何んの苦にもならない事唯養生さへ能くすれば、別に心配するでもないと、大抵の了簡は付けて居ながら、何にをいふにも稼業が

稼業、酒を呑まない人はなくつて、其の雨の日の骨休め、マア一杯といふ交際から、ツヒ飲み出しては、中々廢せるものではなく、其れ故身体を痛めてはと、兎角は狭い女氣から又種々に心もまはつて、我慢はしても愚痴は出る。

其の事、此の事思い餘つて、一日一日暮した日の、二百日ほど重つてやう／＼歸れは又歸るで、此度は良人が十日の大場所の心配、傍で見るのも樂ではない。

ホンに何日ぞや〇〇關の話しにも、アの觸れ太皷を聞く時は、胸がかう塞がつて、食べるものも飲むものもモウ咽喉には通らない、折角硬くなつた筋骨が、何んだか急に弛むだ樣に成つて仕舞うといはれたが、實際それも左樣であらう、何にせよ、大事な一番相撲、誰れも勝たねばならない出世場所、其れ故に兎や角やと何卒心にさはらぬ樣、食べるものから着るものから、履き物にまで心配して、滑くスッキリ場所入りの出來る樣にと、萬事萬端氣を配る、其れでも時には叱られると許り。アヽアヽ思へば女房の苦勞、何日に成つたら安まる事やら。

と長火鉢に撓れ懸かつて、内儀は深き物思に耽けるのである。

▲直に一口

留守には留守の苦勞して、歸れば歸るでまた苦勞と、苦勞の數を仕盡くす迄、其れ程可愛い良人の歸り、此家に計りは年の内から春のモウ來た樣な賑ひ。

『アラマアお歸りなさいまし、其れでも御無事で、一昨日小秀山が先乗りで、大抵の樣子は彼れから……。

『ヤアモウ今年は何處も彼處も暑かつたが、東京も嘸ぞ酷烈かつたらう。

『別けて殘暑が大變でしてね、夜分なぞは、家でさへ一時頃まで明け放しでしたが、其代りには又寒さもひどく、何うでせう、今日あたりの寒氣といつたら、其れに昨晩から滊車は通しで。

『ウム仕舞日が早くはねたから、其れから直ぐ名古屋まで來て、旦那さんの處へ寄つて、是非一晩泊まれといはれたが、少し急ぐからといつて、夜滊車で遣つて

來たが、ナニ中には、ストーブもあるし、格別寒くも思はなかつたが、新橋に着くと、急に寒さが酷く成つた樣な氣がして、だが東京は何時でも賑かだな。
『ア丶名古屋へお寄りに成つて、彼方でも皆樣お變りもなくつて、ア丶左樣ですか、小秀山も歸りに伺がつて、何んだか大層お厄介樣に成つた上に、彼の衣物まで……。
『ウム左樣だつて、野郎甘い事をして居やがる、今新橋へ來て居たが、怪我の方も全治つた樣だな。
『迎へに出したのですが、お遇ひに成りましたか、まだ歸へつて來た樣子もない、貴方衣物をお着換へなさいませんか、此方のを出しませうか、ソシテ彼の相鴨の好い處を少し取つて置きましたが、直ぐに一口上りますか、……………力坊も御父樣がお歸りだから、其邊まで、御迎へにおゐでといつたら、喜んで出て行きましたが、何方へ行つたか行違つたと見へて……。
『サウだつたか、寒いに風邪でも引くといけない、内に置けばい丶に、さぞ大きく成つたらうな。
『大きく成りましたし、其れに此の頃は中々惡戯が劇くはなる、內々家などにはヂツとして居ませむから、繼（下女の名）も持餘してゐますのさ、ア丶歸つて來た樣だ、ア丶左樣だ、御覽なさいアレが唱歌の眞似なんですよオホヽヽ、高慢チキに成つた事といふたら。
つと起つて、窓の內から、
『繼や、繼や、力坊を連れておいでな。
といふて、此方を振り向きながら、
『其れぢやア七輪ごと此處へ運むで參りませうか。
『ア丶其れが好いな……待てよ。
と一寸と鐵瓶に手を觸れて見て、
『德利も何にも皆な此處へ持つて來い、湯も沸いて居るし、燗も出來るわ。

▲樂しい家庭

『坊や、お父樣がお歸りだよ、さア早く仕つて抱ツ子をなさいな、お父樣が高い／＼をして下さるとさ、おいしい甘々もお有りなさるよ、早く戴いておゐでな、オヤ坊やは何かしたのね、コレがお前のお父さんぢや

アないか、オヤ、此子は可笑しいのね、何にをさう耻愧かんで居るのだね。
『坊、力や、大層大きく成つたな、ドレ來いよ、一寸其れ抱ッ子して見ろ、いやか、何んだ此奴め、其樣顔をして、力坊は弱蟲だなア。
聲こそ出さないが、眼には涙を一杯溜めて、母親の胸にヒシと計り縋り付く。
『オヤマア忌やな力坊だ事、お前お父樣を忘れて仕舞つたのかえ、お前が何日でも、父ちやん、父ちやんといふ、お父ちやんぢやアないかね。
騙せとも、賺せども、モウ母親に噛り付いて仕舞つて情なさ相に、鼻を啜つて泣き出したのである。
『アハヽヽハ、可笑しな坊主だな、餘り見馴れないせいで、氣まりが惡いのだらう。
『オホヽヽホ、本當です事ね。
其顔を、其の顔に摺り付ける樣にして、
『坊や、お前のお父樣ぢやアないかね、頭髮を結ふて居たつても、お顔がお前赤くッても、些とも恐かアないんだよ、オホヽヽヽホ、泣くんぢやアありませんよ、お父樣に笑はれますよ。
泣き聲は段々大きくなつて來た、醉ひがまはつたので關取の顔は追々赤く成つて來た、女房が頻りに氣を揉んで居る後には、お繼が口も出されず、手も出されずに、もぢ〳〵遣つて居るのである。
『貴方の身体が餘り大きいものですから、其れで恐いと見へるんですよ。
『ウム、左樣だかも知れないな。

* * * * * *

家に居るのは、晴天十日の大場所中、其れが終れば旅から旅へと旅での稼業、墨田の土堤に櫻花が咲かうが不忍池に月が照うが、東京に居て東京知らぬ其の代りには、今年の旅は吉野の櫻、去年の秋は田毎の月と、年が年中留守の間の女房の心思遣つては、往く先々からの音信かゝさず、偶々旅路へ呼び迎へては、女房の爲に名所案内、樂しい家庭は至る處に形作らるゝのである。

# 本願寺門跡の奥向

翠葉生

突然僧侶の家庭をお噺するといへば、オヤ彼の妻もなく子もない筈の坊さんに家庭などが？と一寸異な樣に思召しの方も御座ゐませう。御尤です。何にいたせ坊さんが妻帶を致すなどは、罪惡の甚しいものとして、非常に卑しめた計でなく、維新前迄は、絕體的禁止してあつて、若しも此禁制を犯した事を聞いたら、飛んだ騷ぎを出來する。彼方丈は怪しからぬ賣僧ぢやと、忽ち檀家中から彈劾される。幾許名僧智識道德堅固と噂されて、四民の尊敬を受けた坊さんでも、到底此制裁に打ち勝つ事が出來ぬ。處が明治聖代の難有さ、あらゆる宗旨の坊さんが、公然肉食妻帶を許された。

併し公然肉食妻帶を許された今日でも、表立つて妻君を寺院內に迎へるといふのは、割合に少い樣です、從つて圓滿にして暖かなる家庭を結ぶことも出來ぬ、極く無味乾燥な（俗眼より見て）生活をして居る。然るに彼一向宗とか、門徒宗とか云はれた眞宗の坊さんは、維新前、否本宗の開創者見眞大師（親鸞上人）始め妻帶をして居る。即ち人道に背かぬ極めて圓滿なる家庭を結むで居る。ですから維新前迄は、他宗の僧侶、信徒からは、隨分酷い攻擊を受け、賣僧とか墮落僧とか、何とか、角とか此宗旨の者は人外の樣な嘲罵を受けて居た。が、こゝが所謂見眞大師の先見の明とでも云ひませうか。

▲在家爲本

を形示して、士女往生の標準を實見せしめた、いらい人と申しませうか、現今に於ける眞宗の勢力は甚麼でせう。我國全國の寺院七萬一千九百八十八ケ寺中僅に十分の四以上を占めて居る。本派本願寺の末寺計りですら九千三百七十六ケ寺、信徒の數が六百九十五萬七千八百四十一人とは、實に其隆んなるに一驚を喫せざるを得ないのです。

さて是等眞宗各寺院の内部の有樣は別としてこゝに

一寸眞宗本山の奥向きを、お咄して見よう。

▲本派本願寺の奥向

本願寺は名にし負ふ全國に轟いた名本山末寺九千三百餘ヶ寺を支配して居る處であるから、其規模の大なる點に於ては恐らく日本一と云つても過言でない。又此名本山を支配して居る法主即ち門跡なるものゝ勢力は、實に非常なるもので。恰も一國の主權者、否それ以上の勢力を持て居る。七百萬近い僧俗は、實際生佛として崇敬して居るので、一度びこの門跡が地方に巡錫するとなると、沿道堵を爲して之を迎へ、珠數を手にして『南無阿彌陀佛〳〵』と禮拜する。同じ人間を如來樣扱ひするのは馬鹿らしい樣に見受けるが、中々傍のものゝ考もつかぬ程、彼等の頭には唯一の慰安が存在して居るので、さて夫程えらい門跡の家庭は何うか、當門主光瑞上人は故大谷光尊伯、即ち明如上人の長男で、明治九年十二月廿七日の生れ、歳十才の時嗣子と定められ、得度して法號を鏡如と云ひ幼名峻麿を改めて今の光瑞と稱へられたのは、去る二十五年一月七日の事、先代明如上人が去三十六年一月十八日遷化された迄は、僧俗何れも御新門樣の尊稱を以てしたが今は本願寺第二十二法主として法燈を嗣ぎ、同時に家督相續並に襲爵を仰付けられ、熱心に弘法を勤めて居らるゝ。殊に多年海外の新空氣を吸はれた人であるから、一般の山主座主管長とか云はれる連中とは、ずつと頭腦が違つて居る。從て門末の者迄が、今度の御門跡樣はと何れも賴母しく思ひ、他宗の者に迄鼻高々と自慢して居る。さて又其令夫人、即ち

▲御　裏　方　樣

は畏くも皇太子妃殿下の御姉君で、九條公爵の三女籌子と申され、去る三十一年二月七日結婚の式を擧げられた方で、本年二十三才にならるゝ人、未だ華族女學校に螢雪の苦を積まるゝ時代から、夙に才媛の名高かつたが、果然今回の事變に際しては、日頃嗜める三十一と文字。

そみなとてすめら御國の民なれば
つとめざらめやはげまざらめや

と叫むで、粗衣粗食、雨に濡れ、風に吹れ、西に走り、北に馳せ、男子も及ばぬ程の苦心辛勞を以て全國を巡化せられ、親しく義勇奉公の意を致す樣にと、それは／＼熱心に說き勸めて居らるゝ、依之て其性格が判斷し得らるゝ。從て七百萬の門末は、いやが上にも難有さを增して今度のお裏樣はと云つて、また一とつの自慢咄として居る。それも其筈である。何にしても他宗の眞似の出來ない、結婚政畧が旨く出來て居るのだから、見給へ眞宗十派本山の法主と其親籍との關係を。何れも高貴な人々と緣組が出來て居るでは無いか

從て家庭の有樣は一言、

### ▲貴族的生活

であるといへば事足りる、只だ違ふのは朝夕必ず內佛殿に於ける讀經を怠つた事の無いのと、每月十六日と十八日の兩日には、如何なる事情があつても精進お料理で、決して魚類肉類を口にされぬこれは前者が大師の命日、後者が先代上人の命日であるからである。此邊が俗者と異つて居る處で、其他の平生の起居動作は、依然貴族的である。が一度歩を門外に出すと、例の生如來樣扱で、實に素晴らしいものである、先づ一寸の咄が本願寺に於ける門主の對面所即ち例の、

### ▲鴻の間の對面

の如きは、實に大した權式張つたもので、二百人三百人の僧俗を一堂に集めて、

此炎天に好うこそ參詣大義に思ふ……

など〻いふ御聲が懸つた日には皆何れも難有涙を溢して、例の『南無阿彌陀佛』を連呼する。百萬の身代を棒に振つて迄も、御本山のために盡す氣になるのだからえらいものです。然し奧向きでの對面は、矢張尋常一樣で、名刺一枚を出して案內を賴めば門跡には侍僧が取次ぎ、お裏方には女中が案內して吳れる。だが其邊に說教して御座る寺格もなければ、功績もない坊さんとか、普通の信徒などには、幾許歎願しても對面は叶ひませんが對面は叶はぬにしても、何ぞ異つたことがある時にはお齋下されと云つて、大廣間に於て一般の門末にお精進の御馳走がある。這麼時には米百俵の

寄進も敢て惜しとせず、このお齋頂載を山海の珍味と賞美して、三拜九拜頂載する、又無上の光榮と考へて居る。況んやお手元の御馳走に於てをや、お手元とは法主又はお裏樣からの直接の御馳走であつて、所謂奥向きの經濟から御馳走が出る事で、この時は有名な、彼豊臣聚樂の遺物を以て建築された滴翠園飛雲閣に於てせらる。

そして此料理は總て奥向きの料理人が調理するといふ事である。其處で是等萬般の費用は素より世襲財産其他の收入から償ふのであるが、又殊更信徒から四時の音物として、やれ門跡樣の御手元へとか、お裏樣への御手元へとか云つて大根、蕪、葱、茄子の樣なものから或は金子で獻上するのがある、其高が又素晴しいもので、是等の禮物に種々の品、例令ば珠數とか何とかいふものを下げる費用が毎年數萬圓を要するといふ事である、那麼ら何故殊更お手元へ獻上と斷るかと云ふと、夫は本山と奥向きとは經濟の點に於て全然別物になつて居るからである。夫で此門跡の收入の一とつは名號の染筆であつて、門跡自筆の南無阿彌陀佛の六字の名號と來たら、信徒はそれは〳〵非常に難有がつて居る、此御禮金が年に積れば大層な高であるさうな丁度成田山の貫主の小遣は、彼木札のお守りの收入を以て當てられてあると同樣なものです。

此外お咄すれば數限りもないが餘りに内部に立入つては相濟まぬから是位にして、例の、

▲お髮剃頂載

これは一般信徒の歸敬式の事であつて、耶蘇敎の洗禮みたやうなもの、先づ信徒が本山に向つて歸敬式の願をすると、日を卜して何百人といふ信徒を本堂の内陣に集めて嚴粛なる式を擧げ、大勢の僧侶をして讀經させ、軈て門跡は靜々と奉書に包まれた髮剃を信徒の頭へ順を追ふて載してゆかれる、然し大槪はお手代りと云つて、御連枝(門跡の近縁者)が此任に當る樣です

▲現今の家族

△主　人　光瑞伯(法主)
△令夫人　籌子の方(裏方)

△令弟　淳淨院連枝　積德院連枝
△令妹　武子の方　義子の方
△母堂　枝子の方

先代迄はこの法主とお裏方並に各連枝は、各々別室で飮食せられたが、今の法主の代と成つてから。

一家一堂に會合

して飮食を共にせられ、歡聲笑語は常に食堂に涌くといふ有樣、それに法主は常に一族と居室を共にせらるゝから、彼我情緒の通せざると云ふやうな事は無く昔時あり勝ちの御家騷動などが起る隙はなく、極めて和氣靄々たるものだ。こゝに可笑しいのは、この法主は妙に寒に勝ち暑に負ける質で、寒中綿入の重ね衣はした事なく、通常の人が綿入を去るに忍びぬ時でも、サッサと單衣を着るといふ風。ために山内部下の若年輩は隨分閉口するけれど、夏と來たら、いやはや弱いの〳〵、暑中は殆んど病人の樣で、お裏樣から『よくそれで印度地方の御旅行が出來ましたね』と冷笑かされるさうです。

（完）



# 社會三階級の分野




▲上等社會（奢靡、遊食、放逸、不德、少勞、無職業）……
……不生産階級

▲中等社會（勞作、質素、勤儉、活動）………生産階級

▲下等社會（力役、怠惰、浪費、不德、破倫、暴殄、失業）
……少生産階級

▲甲種分野（▲▲▲健全社會）

上等社會　一〇パーセント　日本
中等社會　六五パーセント　英國　多生産
下等社會　二五パーセント　獨逸

▲乙種分野（▲▲▲不健全社會）

上等社會　二五パーセント　露國
中等社會　三〇パーセント　土耳古　少生産
下等社會　四五パーセント　朝鮮



經驗談



# 新夫人の新家庭談

竹村雪子

『私の經驗話をせいと仰つしやるんですか、それは御無理では御座いませんが、未だホームを形づくつてから二ヶ年餘しかならない者ですもの……エそれを聞きたいつて、困りますね……ア、左樣で御座いますか、そんなら御話致しませう、併しどうせするんなら何ち彼もさらけ出して申ます、其代りに姓名だけは公にして下さいますな』『ハイ承知致しました』と云ふ約束で聞いた、新夫人の新家庭に於ける經驗談を御紹介申ます、讀者もどうぞ其積で……

さて此新夫人は神奈川生れで、都下で有名な某女學校の卒業生で、卒業後一ヶ年にして人の妻となられたので御座います、其良人と云ふのは今年三十歳で四五年前に大學を卒業し、間もなく某會社に入りて技師となつて居る人で、生國は備前岡山のほとり、敢て資産家なりと云ふではありませんが、兎に角相當に生活してゆける家であります、新夫人の申さるゝには『良人は一種變つた考へを持て居ます、即ち一言で申しますれば、

▲『自身の事は自身之を處理せよ』『爾の額に汗して爾のパンを得よ』と云ふとで御座います、舅も亦た面白い人で『俺の目の珠の黑い間はお前方の世話にはならぬ、併し大病にでも罹つたなら顏を見せてくれ、併し御國の爲めに手を離されない事でもあるならば、それには及ばぬ、死んだ時丈は立會つて葬式して呉れそれであれば何處に世帶を持たふが勝手だ』と申すんです……一體私は其以前良人とは全く面識ないではなかつたのですが……マアよしませうよ……兎に角御近しい人の紹介で約婚を致しました。愈々一處になる時も

近きまするど、國の父は金を送つて準備にせよと申されましたが、氣性が氣性ですから良人はこれを一錢も用ひないで其儘銀行に預けてしまつたのです。さて愈結婚式も十數日後となりましたが、良人は下宿住ひで家といふものはありませぬ、まさか下宿で結婚するこも出來ませんし、媒介者も大層氣をもんで與れ、そして家を探して上げてもいゝが、併し自分の住む家だから自分で撰らんだ方がよからうと云ふてくれますので良人は二三日家を探しに出掛けましたそうです、かくて住家丈は定まりましたが、所帶道具といふ一段になると良人も大困りであつたそうで、とう／＼私も引出され實母にも同行してもらつて二日許といふものは市中を駈け廻りました、どうやらこうやら凡てのものが整ひますると、儀式の日がはや兩三日に迫つたのです。其頃の心の中つて、ホヽ如何にお轉婆でも洒々申兼ねますから御許し下さいまし、マア兎に角に式も濟んだ披露も濟んだと假定して下さい、一週間許はうか／＼暮しまして、家に落附くことになつたのです。そこでいよ／＼私共は

◆**實際問題**　に入たのですが。學校に居る時分からまた卒業して後も、主婦となつた場合は恁樣々々、母となつたならばしか／＼と理想否な實際に之を實現し得る、人は知らず私は乾度やり通して見せると心中では意張つて居つたのです、併しこれは理想丈であつたのです、尤も其幾分は出來ました、されど半以上は空想だつたと云ふ事を發見致しました。其一例を申しますと、一家の和樂は他人を混ぜざるにあり、雇人の如きも必要なけれど、併し夫婦丈では不便なればと思つて、十三になる小間使を一人置いただけでありました、かくて多年の理想を實行せんとて色々骨折りましたが、第一に失敗したのは

◆**勝手元の事**　で御座いました。學校に居る間それ／＼勉强しました、殊に料理法は好きで御座いましたから人よりも餘計に致した積で御座います、ですから主婦となつてもあまり差閊へはなからふと、人には申さないが心窃かに自負して居つたのです。海老茶式

部式の何のと云ふ評判は、私は受けない筈であつたので御座いました。處が之を實際に試みる段になると見ン事失敗致しました。どうもノートブックの通りには往かんのです、これ畢竟時候の如何や、用ゆる品の善惡に注意しなかつたからで……恁様に失敗に失敗を重ねつゝよふやく完全に出來る様になりました。矢張經驗ですね、經驗を積まなければなりませぬ。それから會計事務を始め一家の整理と云ふことに就ても、中々學校の様な狹い所でやつたことゝは大分違ひますので殆ど一ヶ年と云ふものは大層骨折れました。結婚前に



思ふたのです、いくら忙しいからつて讀書位の時間は充分出來様と、處がこれも容易ではありませぬ、此時間をとるには餘程注意しないとどうしても得ることが出來ませぬ、これ或は私の足らない爲めかとも思ひますが……殊に

▲三分の三の生涯（とは御承知の方もあらんが、こは子の生れた家庭を云ふので、獨身時代は三分の一で、結婚後は三分の二なのです）に入りますと多忙は一層であります、私は私の主義として子の養育は全く母親が任ずべきもので、他人に托すべきではないと思ひますから、一切私の手でやつて

居ります、良人も子傅を雇へ、そんなに骨折てやらなくともよいではないか、それが面白くなければ、しつかりした下女を今一人雇へと申ますが、子供が二人も三人もあつたらいざ知らず、いくら多忙でもこれが妻なり母たるもの丶義務で、男子方の外に出で丶公の事業に斡旋せらる丶と同様だと思ひますから、此事を申て今に此儘にやつて居ります、幸なことには實母も却て之を喜んで呉れますよ」とくさ〴〵の物語りありき、此の如き主義を有する年若き新夫人の家の内部の様如何、これ注意すべき問題であります、私の訪問した時は、座敷の床の間には「閑來無事不從容睡來東窓日已紅云々」の程明道の軸あり、以て主人の爲人も察せらるべく、その前なる夏菊の活花、さてはヴヰクトリヤ女皇が子を撫する圖の額、以て新夫人の理想を察せらるべく、室内の洒掃行屆ける、前庭一片の塵を止めざるを見ても、如何に夫人が其主義實行に忠實なるかを察するを得らる丶でせう。

かくて夫人の談話は、日々の生活談に入る、夫人曰く「先づ一日の朝の事から申上ますと、宅では

▲八時間睡眠　を實行し、下女迄もかくさして置きます。隣近處では朝寢坊の様に思つて居るかも知れませんが、能く眠りよく働くと云ふことは私共の主義として居るので御座いますから、人の批評などは餘り氣に掛けませぬ、其代り働く時は所謂勞を厭はぬと云ふ風にやつて居ます。夜は十時になりますと屹度臥蓐に入り朝は六時の時計が呼はると同時に一同起き出づる様にして居ります、嬰兒は始めの程は夜中に幾度も起きますので、私も一時は閉口しましたが、今は大分慣れて段々都合よくなつて參りました。併し嬰兒丈は大抵七時過でなければ目がさめませぬ。さて六時に起きますると一家皆々その義務がありまして、片附や洒掃の事を致します。これ一つは運動の爲めですが、其間に一種云はれぬホーム的の趣味が御座ひますよ、朝の食事が濟みますと良人は暫く机に向つて居りますが八時になりますと出勤します、其出勤した後は即ち私の時なので、嬰兒を傅りする旁ら下女を相手に一日の

業務に着きます。かくて遲くて午後四時半頃になりますと良人が歸つて來ます、夕飯を食するは大抵五時半から六時頃の間でそれより後一時間許は

▲家族團欒の時　なので……ハイ大抵オルガンを弄びます、是に就ての愉快は色々ありますが中でも私が熱心に吹奏して居りますと、良人に抱かれて側に居ります嬰兒が、手を叩いたりア、と妙な聲を出しますさア調子がちがつて來る、良人は笑ふ遂に一同笑ひ出すのです併し御本人は中々眞面目で何で笑ふのかわかりませんから、キヨロ〳〵見廻します其滑稽さ……これは私共には無上の慰樂



なので御座います、實に子と申すものは一家の和樂の中心で御座いますね……所謂三分の二時代は私共は短ふ御座いましたそれで兩方とも何が何やらろくに考へず、また家庭和樂の中心といふものが御座いませんでしたが、嬰兒が出來ましてから、一家はベビー中心となり、良人はこれによりて慰められ、私も亦た種々手數がかゝるに反例して日に〳〵慰樂を與へられます御話が段々長くなりますから大抵これ位にして置て少し私共の

▲家政上の事　を申ませう洗ひざらひに申ますと、若し良人の國元に歸ればどうやらこう

やら暮して行かれるので御座いますが、前申した樣な譯で御座いますから、親の力を借らず獨力でやつて行く積です、申すも妙ですが、私共の月々の收入は五十圓それに半期々々の慰勞金其他に少しありますので彼是七拾四五圓で御座います、併し慰勞金は一切使用せぬ必ず之を貯金し不時用に備へることにし、臨時の收入は臨時のものを購入することにして置きますから、月々の費用は定收入でやつて行く樣にしてあります、そして宅の生活主義は衛生が第一にしてありますから事業に忠實なるのも、一家の和樂もこれに關係すると多く御座いますから、それで住居も所謂紅塵萬丈とやらの雜沓を避け、恁樣な偏僻な處にして居ります、これ一は居賃も安くありますし、それに空氣もよし、子の爲めにもよろしく御座いますから、次に飲食物は生活の割合によくして居ります、衣服は立派なものを一枚造るよりは、廉いものを多く造るのは私共の主義で大抵は綿服で濟します、兎に角清潔瀟洒と云ふことを主にして居ります、昔氣質な實母なども折々來て「まあお前は年若い癖に……」つて申されることも御座ひます」と語りて更らに言葉をつゞけて曰く「それから清潔と云ふとは不文家憲の一で御座いましてお互に注意し合ふて居ます殊に勝手元は注意を用ゐて居ます」とのことでしたから、私は「事實に就て承りたい」と申ますと、夫人は喜んで應せられ、あまり廣くもあらぬ勝手元に案内されました、今其中の一二を申しますと勝手元には都合よく大小の戸棚を据へ、前面は硝子戸で何處に何があるか一見してわかります、それに戸棚の兩側に目の小さい金網の戸が出來て居るのがありますそこで、之は何の爲めなるかを尋ねますとこゝには大抵煮た物やなんかを入れて置くのでこれはいき拔であると申されました。それから三挺の庖刀はきら〳〵して居たし、水桶なども塵一本さへありませんでした拭巾、これは兎角茶色に替つて居るが普通ですが、此家庭ではこれに注意し常に白に取替へ、少し汚れたものは直に雜巾にして終ふと云ふことです、まあ是等を以て見ても如何に萬事に注意深きかを想像せらるゝで

御座いませう。

やがて再び座に復し、一服の茶を喫しつゝ、四方山の御話を致しましたが、其中に最も私の注意を引いたのは、同夫人が『良人の主義とは少し違ひますが、私は

▲姑が居たならば●●●●●●と思ひます。學窓にをつた時の理想ですと、お嫁に行くならば舅姑も、少姑もない家にと言ふのです、お恥しながら實は私もそうであつて、これが結婚條件の一つであつたのです、併しこれは今になつて見ると間違です、文明の家庭とか、二十世紀の何だとかは知りません、またゑらひ御婦人なら知らぬ事、私の樣なものにはお姑があつた方がよい樣に思ひます、其理由も少くはありませんが、お互同志ですと知らずくの間に我儘が出て來り、また世間の交際上の事、其外舊來のことを知るにも大に困りますそれにお姑さんが居つてちやんとこうして居られ、まだ二人して孝を盡したならばさぞうれしい事であらふと思ふからです、何に六ケしいの何のと云ふても妻たる者の心掛如何にあるのです、人は何と云ふかも知れません、明治の敎育を受けられた新夫人の反對あるかも知れません、併し當今の家庭はまだそうは行かない樣ですから……オヤ何だか議論になりましたね……あなた方の御意見は如何で御座ひます』と語られつゝある間に主人が歸られて談話にまた一花咲きましたが、これは多く計畫談理想談であるししますから、今回は新夫人新家庭談を記するに止めました。

かくて辭し去らんとするや、夫人と共に玄關に出られし嬰兒はにこくしながらチヤヨーナラ。

# 奧樣の懷舊談

待月女

紳士紳商と言はるゝ際の御方ではありませんが、これは私が兼ねて尊敬する某家の令夫人に就て其のむかし語りを承はつたものであります。夫人は元より掲載されるのがお嫌ひで堅く止められましたが、家庭上有益な談話をそのまゝにするのを惜しいと考へましたからこゝにお名前丈を包んで申上げませう。

妾が此家へ參つたのは今より十七年前で、良人が二十七歲、妾が十九の年でありました。其節はお恥かしい事で御在ますが、良人は或る官省へ奉職したばかり

で、俸給は十二圓の屬官、誠に薄給な身の上でした、兩親は田舍に住ふて、元小藩の極く貧窮士族でございました、だから良人へは碌々學資も送れず、それに三男といふ末ッ子でしたので幼少の折から自活の法を覺へまして、様々な事を致して家計を助けたとやら現に米搗もしたし、百姓もする、漁師の手傳までもしたと申して居ります、それゆえに何事も親の厄介にはならぬといふて、たしかに二十歳の時東京へ參ッてからは殆んど自分の力で衣食を給したと申して居ります。隨分苦學をしたのでせう。

二十六歳の折、やッと屬官を拜命して一年經ッて妾を迎へましたのでお耻かしい事ですが下宿屋から本箱一ッ、夜具、布團も碌々ない身で、世帯を持ちまして、夫婦同棲致しましたが、其時の假住居は本郷、壹岐殿阪の下で、一ヶ月二圓の借宅でございました。

妾は元良人の遠縁で、田舍に居ります時分、折々良人の兩親の家と往來をして居りましたが、其節姑の參ッての話に東京に出て居る伜も今度いよ〳〵某省へ奉職しまして、まだ立身とは申されぬが兎に角獨立の出來る様になッたから、あまり年を取らない内に嫁を迎へて遣らねばならぬといふ相談が妾の兩親へかゝつてまア何よりも性の知れたのがよいといふのでツイ妾が參る事になッて伴れられて來たのでございました。

其節田舍で想像した東京の官員様といふものは、中々豪氣なものゝ様に考へまして天にも上る心地で參ッて見ると實に案外な次第でした娘心に一時は落膽して、これでも兩親は出世と思ふのか、まあつまらない事だとまだ世の中といふものを知らない心から、何かなし世間の華奢な有様を見るにつけ、つく〴〵歎息致しましたが、又思ひ返してイヤ勿体ない、これが妾しの縁、天から授かつた良縁である、何の人間は運次第、働らき次第のものである、これで一生を畢るでもあるまいのに、嫁に來草々にそんな果敢ない了見を起してはならぬと、覺悟を極めて世帶を持ちました、

### △新世帶と涙

それから二人で家を探す、世帶道具といつても、僅かに臺所に入用な品丈け其晩夜店で買求めて、良人は掃除した柱に釘を打付るやら、妾は手桶に水を汲んで來て、疊を拭くやら、格子の棧に布を當てるやら、二人がゝりで色々な事を致してやつと住へる樣になりますと、其當坐の極りわるさ、何だか悲しいやうでもあり、又嬉しいやうでもあり、情けないやうな、又愧かしいやうな不思議な心持がして、心は少しも落着ませんでしたアノ井戸端に出て水を汲み、米を洗ひながら、若し今、田舍の兩親か、以前のお友達で



も、ヒヨツと來て、この有樣を見られたら、どうしましやう、それこそ穴へでも這入たくなるだらう自分はまアどうして斯う人知れぬ苦勞をするだらうなどゝ、下らぬ事を考へ出して、近所の人に顔見らるゝのも何だか辛いやうで、晝は碌に外へ出ず夜人の出入が少くなつてから、やつと水汲に出る樣な次第でした。その時の事など、まるで夢のやうで、今から思ふと、あれが矢張娘心といふのでしたらう。そうこうする内、大分世帶にも馴れて來ましたがまだ良人とさし向ひに御膳食べる事が、どうしても出來ません

御膳時になると、御給仕丈して良人が濟ますと、陰の方へ寄つて、そつと音をさせない樣にして匆々にして仕舞ましたが、其度に不審がられまして、お前は病氣でもないか、何だか塞いで居るやうだと言ひ〳〵されました。

嫁入つた當坐三四ヶ月といふものは、東京の廣い事、繁華な事は、目に見ながらも、心には唯茫として何かなし戀しいものは田舍の兩親ばかり、寢ても覺めても思ふものはそれのみで、田舍に居た時の事ばかり心に思ひ出されて、果は一寸拔け出して歸つて來やうかなど途方もない事を考へ出して翼があれば飛びたいやうな氣の起る事も度々でした。

斯樣按排でしたから、元より尊敬はして居ましたけれども、何だか其の時の良人は小倅子のやうに思はれて、格別尊い人とも思へず、いろ〳〵と慰められたり、氣嫌取られたりするのが何だか蒼蠅樣な氣もしまして、心の進まぬ時は、一室に引籠つて、兩親の寫眞など取り出して、わけもなく眺めて見たり、一日かゝつて何の意味もない長い〳〵手紙を書いて送つて見たり、そんな事して日を暮して居りましたが、やゝもすると泣きたくなつて、誰れに相談する事も出來ず、かなしさに唯獨り物の陰で涙を溢して居りました。

斯樣して段々と月日を送つて居る内、自然と夫婦の愛情が重つたのでせう。毎日時刻になると良人の歸宅が待たれるやうになりまして、時には好な物でも拵らえて待受するやうな心持になりましたのが妾の境遇に取つての一と變化で、或る日の事、休日で朝から二人で郊外散歩に出懸ました、その歸りに芝居でも見やうかと申しますから、妾はあまり好まぬ所でしたが這入て見たらば又氣の晴れる事もあらうと伴られて、大勢の人混の中を心羞かしく良人の陰に小さくなつて見て居ました、元より藝などは陰張見る氣もありませんでした、すると何の氣もなく澤山の見物の中で、彼や是やと人の容子など見較べて見ましたが、此時我が良人よりもえらいと思ふ程の人は滿場の中に唯の一人もない樣な感じが起きまして、自分ながら果報な者だと此の

時始めて心に、一種いさましい、頼母しい、且形容し難たい嬉しい楽しい偉大な感情が湧き出しました、それからといふものはこの天地にない尊いものは唯我が良人だと心に刻みまして。妾に取つてはこの現在がこの上もなく楽しい、價あるものとなりました。

△理想の世界

世帯持ち始の一兩年は、薄給の事であり暮し向は隨分不足勝で、家の内には何一つなく、又無くても買ふほどの餘裕もありませんでしたが、去とて決して心の内には不足とは思ひませんでした、元より貧富などはとんと、眼中にない方で、世間がどんなに華美であらうと、周圍の人の身の上がどんなに立派であらうとそんな事には一向御構へなしで、夯はども心には留めませんでした、女の若い時は二度ないものですから、隨分立派にはしたいと思ひましたが、去りとて、それが出來ぬからと言つて心に情けないとか物寂しいとかいふ念は微塵もありませんでした、唯我心に描いた前途の希望を楽んで居まして、現在の美衣美服など毛頭心を動かすに足りませんでした、主人は元より妾とても夏冬の不断着が二枚づゝあるきりで、その外に何を求めやうと言ふ希望もなく、世俗を外にして全く理想の世界に生活して居たのでせう。この時の楽しさ、又この時の世



界の廣さ、迚も今日から想像する事は出來ません。その内一二年は夢の間に過ぎ去つて、三年目の春子供を儲けました。元より親戚も縁者もない、旅の身の上ですから、用は多くなる、手は足らずして、當分下婢を雇ひましたが、當時の境界では續けて置く事も成りませんでしたから、間もなくそれも解雇して手一つで育てました、すると翌年の暮に又一人產れます。こうなつては用事は增々多くなるばかりで、所詮一手でまいりませんから、子守を雇ひます、家族が殖へるに隨つて家は狹くなる、又体裁も構はぬ譯には行かず、彼是して翌年の春、轉居して少し增な家へ移りましたがこうなつて來ると驚ろくほど物入が嵩みまして、何から何まで不足勝、朝夕唯欠乏を訴へるばかり、是までは夢にも思はなかつた、世間の狀態が犇々と身に浸みて參つて、不斷淡泊に考へて居た金錢が驚くほど必要になつて參りました。

### △家計上の大變動

十二圓の俸給がやつと十八圓までなりましたが、金などあつても使ふ必要はないと高く澄して居ました處ろが僅かの間に二人の子供が出來て、家計上に大變動を生じまして、從來に知らぬ生計の艱難を身に覺へました、其の爲隨分、狼狽したり、氣を揉んだりしましたが、去りとて別段よひ分別も出ません、けれども世帶の苦しい事を良人に知らせて心を挫かせては出世の妨けになるからと思ひまして、幸ひ、手に覺へた裁縫の出稽古でもして活計の補に致そうかとも考へ又人知れず內職のやうな事も致そうかと考へました、けれども、そんな事をするのは家庭の爲め小供の爲にも善くなからう、まア儉られる丈け暮を儉めて行かう、それで行けずは又法もあらうと、それから近所の人々にも交際を求めて、いろ／＼世間の事など聞き合せて何か品格に觸らぬよい事でもあれば、身を粉にしても働きませうと、時には試驗免狀を取つて小學校の教師にでもならうかとも思ひましたが、氣を焦るばかりで何一ッ實行はしませんでした。

### △始めて玄關附の家に住む

其の中良人はいつとなく官吏生活は面白くないといふ感念を起しまして、頻りと辭職の事を言ひ出しましたが、今辭職しては一寸當坐の方向に困るから、爰暫らく辛抱して妾が獨立の出來るまで御待なさいといふてそれから妾は女子職業學校へ這入て苦しい中で熱心に一年ばかり技藝を習ひました、彼是する内、御世話をなさる方があつて、良人は地方の去る會社へ行く事になりました、此時の月給は二十圓でしたが、勉強次第で前途の昇進が早いといふ、それが眼目の希望、他に賞與金も多少はあらうし、今の暮を支へて行くのに左程不便もなからうと仰やるので直樣それへ轉職する事に致しましたが、實業界へ出る事は良人が多年の希望でしたから渡りに舟の好都合でした、併し隨分オックウなもので痩世帶ながらも家を擧げて引越すには中々世話なものでした。すると一年半ばかり勤めて居ますうち、又朋友の方が週旋して、〇〇物產會社へ這入る事となり、横濱の支店詰になりましたので、我々は再たび世帶を東京へ移しまして、主人は向ふへ下宿を取つて一週間に一回歸宅する事となり、始めて玄關附の家へ住ふ身分になりました。その時の收入とても一ヶ月や



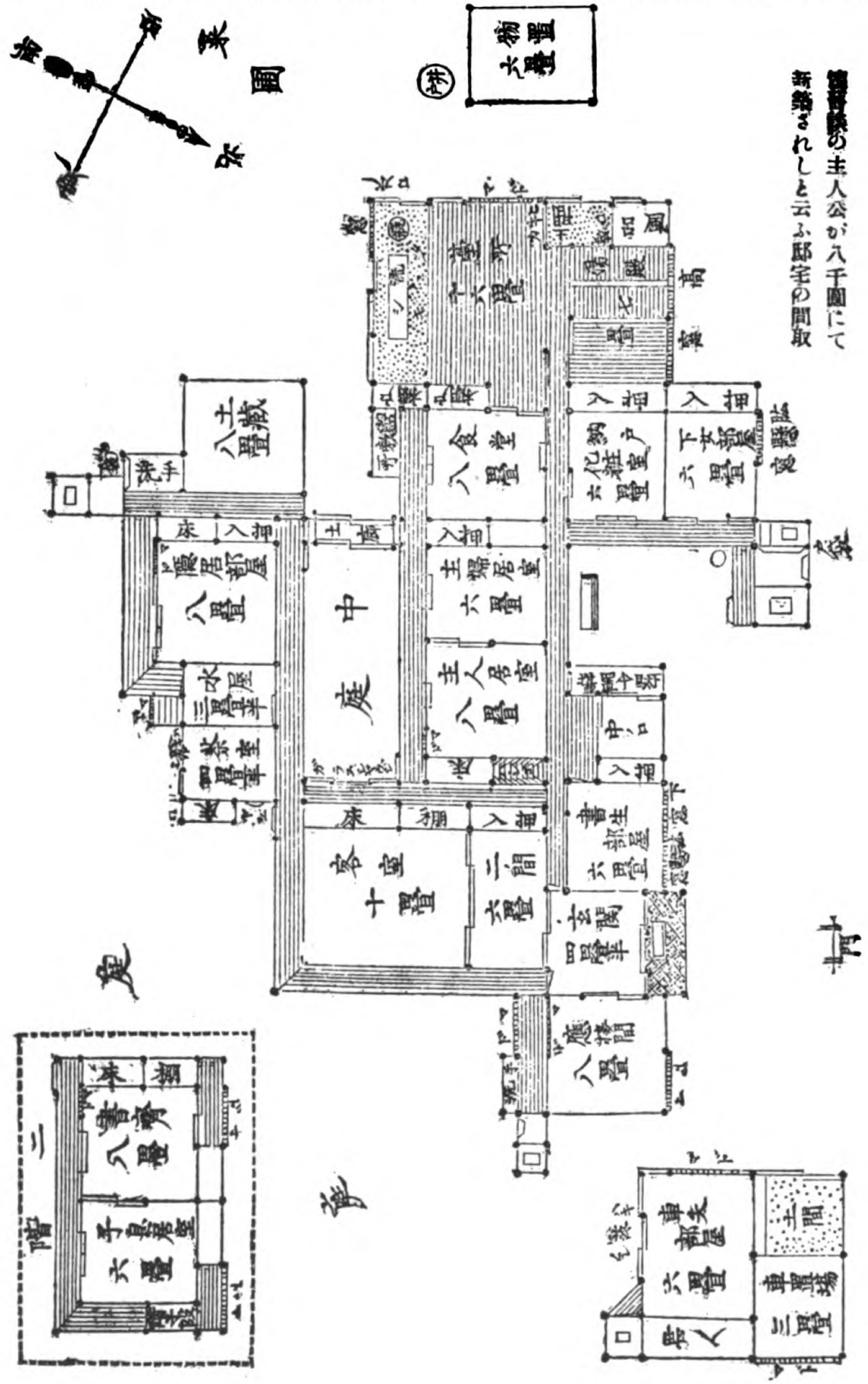
つと三四十圓位なもので中々餘裕のある活計ではありませんかつた。殊に子供も大分成長した上に主人の甥なり、又遠縁の若者が修業したいといふので態々たよつて參りましたので二人共學校へ通はせる。二人の書生に下婢、子供三人に夫婦都合八人といふ家族になりまして、生計は始終不足勝でありましたが、其の代り以前の寂寥に引かへ、今は非常に賑はしい一家を形造る事となりました。是れが丁度、我々が世帯を開きましてから七年目で主人が三十三歲、妾が二十五歲の冬でございます。

### △庭樹一本八十圓の昔し語り

それから今年まで丁度十年、其の間主人は、同じ會社に勤めつゞけで、北海道へ一年、支那へ一年、長崎へ半年、臺灣へ三ヶ月在勤やら、出張やらで、隨分東西は致しましたが、家族は東京に居たきり。十年の間に轉居致したのは二度で、三度目に唯今の宅を新築致しました、これが丁度一昨年の春で、新築に八千圓ばかり費しました。唯今では主人も可なり出世を致して昨年始めて會社の重役に撰まれましたが、其節昔しを御存の方が御坐興に、十八圓の俸給で辛棒した時と今五百圓の收入と、孰らが樂しいかと申されました。妾ども、以前の事は今に忘れず、一錢のお金も貴いと考へますが、主人などは、十年以來散々と世間の廣い處を見て參りました所爲か、動もすると百圓二百圓の金を文久錢のやうに扱ふて居ります。現に此間も庭樹を一本取替るといつて植木屋へ八十圓拂ひましたから、妾は、まア飛でもない事、假しそのお金の半分でも三分の一でもいゝから十五年前に妾が見る事が出來たならば、どんなに壽命の藥となつたかも知れないのに世間の事は意地わるく自由にならぬものだと申した事でございます。

すると主人は不思議な顏して、それでは十五年前にこの金を見せたら、どうするかと問ひますから、貴郞は男だから御氣も付きますまいが、始めて下婢を置きました時、二日目に暇を取ッて去きましたから、仔細は

讀書談の主人公が八千圓にて
新築されしと云ふ邸宅の間取



色々ありましたらうが段々と跡で聞いて見ますと、あの内は簞笥が一ッもない家だと口走ッた事もあるそうです、成程一軒の家を搆えて簞笥一ッないのは可笑なものと妾も心附ては居りましたが、誰の眼にも世帯の淋しいのはよく分るものと一時はそゞろ悲しくなりました。

又同じ頃でしたらう。長男がふと發熱した事があッて身体が燒けるやうでしたから、早くお醫者へ診たいとは思ひましたが、診察料がどの位かゝるものか、又藥代が嵩んで、後で不義理が出來ねばよいがなど色々氣を揉みました其時の苦しさ、けれども診せぬ譯にも參らず心配して伴て行くと四十度以上といふ事で吃驚して、そんを聞くともう胸が波立つてよい事は思はせず若しこの子が、不手當から死ぬ樣な事でもあれば折角惣領に生れて來たものを、兩親の身で居てよく育てゝ呉れなかつたのか、と死んだ子も嘸ぞ恨めしく思ふであらうと身を斬られる程辛うございました、それから又當時御近所はいづれも歷々の高等官で、妾共一軒佗しい暮しは元より承知の事ですが、子供達、…………ア、イヤ又、こんな事を申しては矢張り女の愚痴と思召すからアトは申しませんといつて止めましたが、いやそう／＼まだ肝腎な事が一つありますそれは外でもないあのお產の時でした、始めて子の產れるのに、傍に親も居ず、親身の人も他にはなし、アヽ能ふ事なら國元の兩親に來て戴かうか、それも唯今の境遇では旅費も送れず、若しか又難產でもして、大變に皆樣の御手數を懸けるやうな事でもありはしまいか、こんな細さな家でお產するのも恥しいと思つたり、いろ／＼樣々の事を思ひ出し獨りで氣を病んで居ました。其時にはつく／＼と世の中の不如意な事が身に浸まして今想ひ出しても慄とするやうです。

アヽつまらない事を申上げて嘸いやでしたらうがこれは妾共の內情ばなしで日頃隔てのない貴女丈に申しあけたのですどうかその御つもりで決して雜誌などに御書になつてはいけませんよ。

# 小說家の平生

某作家夫人談
舟人筆記

寫實小說の旗幟を文壇に飄して、天下の讀者を風靡しつゝある某靑年作家の妻君が、自己の家庭に就て語られた所を左に記載致しませう。

私如き者が別段御話の致し樣もムませんが、折角で御在ますから一つ私の心に浮んだ儘を申上げませう、何卒其の御積りで、

## ▲家庭の趣味

小說家と申すものは、讀者の目から見ると、面白い事を書くから、嘸ぞかし其の家庭は面白く出來て居るだらうと想像なさるでせうが、實際は仲々然樣でありませんね、極く趣味の無い、詰らんもので御在ますよ、家庭を裝飾するではなし、盆栽一つ仕立てるではなし、家族と談笑するではなし、唯だ最う朝から晩まで書齋に這入つたきり、口も利かないで筆を執つて居るんですもの、此の家庭の無趣味と云ふことは敢て宅ばかりでは無いやうですね、伺つて見ると大抵の御方が家庭には多く冷淡でお在なさる樣ですね。其は何故かと云ふと、小說家は自分の書く仕事に面白味がある、即ち職業其物が趣味に富んで居りますから、敢て他に向つて餘計な趣味や快樂を求むる必要が無い、又た其の暇も無いものですから、自然沒趣味に成つて了ふので御在ますよ。

そこへ行くと官吏方の家庭の方が遙かに趣味が多う御在ますね、どうしても勤め向が無味乾燥でありますと慰籍を家庭に求めるより外は御在ませんから、家庭內の裝飾的設備や、娛樂的設備に重きを置くやうに成ります。ですから却つて斯ういふお家の方に風流の物や凝つた道具が飾つてありますね。

小說に筆を執ります者の內でも、良人なそば殊に無頓着の方で御在ますから、家內の裝飾なぞには一向お構ひないので御在ます、其の癖作の上に他人樣の家庭を

顯はす時分には、隨分念を入れて數奇を盡したものを描きますけれど、扨て之を自分の家庭に實行して見やうといふ氣には成りませんので御在ます、ですから宅の書齋などは唯だ最う散らかつて居る許りで、カラ埒くち無いので御在ますよ。

手前共の家庭は物質的趣味に欠けて居ること前にお話した通りでありますが、其と同時に精神的の趣味にも冷淡であるやうで御在ますね、夫婦の關係、親子の關係に就て申しましても、人樣から御覽に成れば冷酷過ぐるとお思ひなさる位で、至極淡泊したものなんで御在ますよ、ですから二十世紀式に夫婦連で散步するとか、又は子供を膝に乘せてあやすなんていふ事は頓と無いので御在ますよ、讀者は定めて、小說家といふものは細君が傍で墨を摺る、主人が其に筆を染めるといふ樣に夫婦の情味掬すべきものあるだらうなど丶思召さる丶でせうが、仲々そんな譯のものでは御在ません女房などは可成奧へ引込めて置いて滅多に書齋へ顏なんぞ出させは致しません、其ですから、小說家の家庭には特別の趣味は有つても、世間の讀者が想像する樣な趣味はマア無いので御在ますね。

## ▲觀察

小說家の職掌は見聞した事を面白く書綴つて、之を世間に報告するのですから、小說に筆を執る者は書くより先づ見る事に勉めなければなりませぬ、丁度商人が問屋へ行つて代物を仕込むで來るやうに、小說家は觀察に依つて材料を仕込むので御在ます、だから良人なども一寸散步に出ても眼に觸る丶ものに注意を置きます、ト言つて田舍者が江戶見物に來た樣に敢てキヨロ〳〵する譯ではありますまいが、途上の見聞を疎かにしないで、記臆に留め、又はノート、ブックに控へて置きますと、一寸した事でも何時か役に立つので御在ますよ。

何時ぞや柳浪さんのお話に、「私が宙外君と一緒に遊谷田甫を散步してゐた時でした、道端に海老茶色の毛糸の鞠が落ちて居るのを見附けまして、一種の趣味を

感じましたから、少時立止つて其に目を留めて居ると宙外君が何かに成るかい、と言ひますから、成るとも乾度使つて見せると言つた事があつたが、とう〳〵其が材料と成つて二三篇の小說が出來た」と仰言られましたが、本統に小說家といふものは面白い所に目を附けて居ますものですね、素人が見ては何の詰らないと思ふ樣な事でも小說家の眼には妙に面白く映じて、其が乙う紛糾つた想を呼び起す種と成るのですね。

何時でしたか、日は忘れましたが、良人が散歩から歸つて參りまして、何を言ふかと思ひますと「僕は今日始めて夫婦喧嘩の呼吸を知つた」と申すので御在ます其は又た何ういふ譯でと問返しますと、「今、向の長屋の軒下で夫婦喧嘩の眞最中つていふ所を立聞して來たんだ、本統に面白かつたよ、一つお前を相手に練習して見やうぢやないか」つて申しますから、私は幾ら戲談でも其んな眞似は眞平ですつて斷つて了ひましたつけ、オホヽヽ馬鹿らしいでは御在ませんか。それから良人は芝居が好きなものですから、芝居へは能く行きますよ……否え、私は何時も留守番ですの……是は一つは人の服裝を



見る爲めだつて申しますよ、衣裳の新流行なぞを知るには劇場が一番宜い相ですからね、彼の髪結が矢張り左樣だ相ですね、時の流行に遅れない樣に、新しい髪の結ひ方を覺えるには、芝居へ行つて見るんだつて言ひますよ、職業といふものは妙な所で一致するものですね。

其柄又た此の觀察にも散歩的の近まのもの許りでは間に合はぬことが御在ますから、左樣いふ塲合には態々遠方へ旅行に出掛るので御在ます、例へば作中の景色が想像では旨くゆかぬ、何うしても何處其處の實景を背景にしなければならぬとか、某地方の生活狀態を調べて來なければならぬとか申す塲合には、今迄筆を執つて居つても、急に其を投げ出して了つて、旅支度を致すので御在ますよ。

良人は旅行が好きで、少しでも知らぬ地方を歩いて來ると其丈の利益は屹度ある、小說家は旅行をせねば不可、書齋に許り引込で居ては迚も善いものは出來つこないてよく申しますよ。人の噂によると露伴先生は此頃水彩畫を習つてお在でなさる相ですが、其の所爲か近頃の御作を拜見致すと、自然に對する觀察が以前とは大分お違ひなすつた樣ですね、是は全く水彩畫をお書きになる結果だらうと思はれます、其故良人でも此頃は三宅克巳さんに手本を書いて戴いて頻りに水彩畫を稽古致して居ります。

## ▲執筆

小說家はどなたも大抵夜フカシの朝寢坊と極つて居る樣で御在ますね、良人なども矢張夜は遲い方で、何樣に早くつても二時より前には休んだことは御在ませんですよ、夜が遲いものですから、隨つて朝が遲く、十時に成つて漸く目を覺すので御在ますよ、けれど良人では明かるい內は書けないと申しまして、晝間は筆を執らず、重もに讀書致して居り、日が暮れて暗くなつてから書き出すんですから、誠に變知奇なんですよ。而して書き出しますと五時間でも六時間でも机に向つたまゝ身動き一つ爲ないで、一生懸命なんで御在ます

よ、で、興味が湧いて來た時は筆端に靈が在るかと思はるゝ位筆が早く成つて來まして、他から見て居つても面白い樣に進むので御在ます、斯ういふ時は熱中して了つて全で夢中ですから、他の言ふ事なんぞは耳に這入りは致しませんわ、又た話し掛て折角の興味を坊ぐるでもありませんから、此の時は可成く書齋に近付か無い樣にし、子供達も傍に寄らないやうに遠避けて置くので御在ます。

そこで筆を休めてまづ一服といふ時を見計らつて、茶を入れて持て參るのですが、よく入加減が拙いと言つては小言を言はれるので御在ます。

夜良人が筆を執つて居る間は、子供達や下女を寢せ付けて置いて、自分丈一人次の間で縫物を致して居るやうに先の内は致して居りましたが、毎晩の樣に遲くなりますので、良人が氣を揉んで「俺に構はず、先に休んで呉れろ」と斯う申すんで御在ます、けれど良人が苦しんで書いて居りますのに、私一人臥せつて了ふのは良人に對して餘り同情の無い仕方でありますから、强情を張つて良人の休むまで起きて居たもので御在ました、けれど再三「お前が起きて居て呉れると幾干かお前の爲めに筆が牽制されて困る、一人の方が結句氣樂で心が落着いて好いのだから、先へ休んで呉れろ、どうせ小說家は夜稼ぐといふ樣な變則的の職業なんだから、終宵夫の側に侍すなんていふ世間の禮法に從ふには及ばんよ」と申すものでから、此頃では最う先へ御免を蒙つて了ふので御在ます。

それから徹夜なぞ致す場合には、煙草が好きなものですから、筆を擱いて考へる合間々々に煙草を吸つては茶を飲むので御在ます、其故仕舞には煙草の辛いのと茶の苦いのとで口中を苛め付ける爲め、恐ろしく舌が荒れて、不快を感じる相ですよ、で、斯ういふ時には何か甘味を口に入れると宜いといふ事を或る人より聞きましたから、榮太郎の甘納豆を小瓶に入れて、机の抽斗に入れて置くやうに致しましたが、之を用ゐてからは大層工合が宜しい相で御在ます。

▲習慣と遅速

小說家が筆を執る上には種々の習慣が有つて、皆さんが夫々違つて居りますよ、蘆花さんの樣に靜かな所でなければ書けないつていふ方もあり、小波さんの樣に什麽騷々しい賑やかな所でも一切頓着なさらぬといふ方もあり、朝の新らしい頭でなければ書けぬといふ方があるかと思へば、一寢入した後でなければ筆が動かぬといふ方が御在ます、其から又た陽氣な明るい所でなければ書けないと云ふ方があるかと思へば、其のコントラストには良人の樣に暗くならなければ筆が執れぬといふ者もあります、習慣と云ふものは誠に妙なもので御在ますね。

柳浪さんは徹夜して夜が明けた時は、どんなに外が明るくならうとも、日が高くならうとも、書續けた原稿を書終るまでは、雨戸を締めたまゝ、洋燈も點けたままで書いて居らるゝ相ですよ、是は雨戸を明けて新しい光線を入れ、新しい空氣を入れると周圍の光景が改まる、隨つて心持が全然變つて了ひ、其が爲めに前夜來折角書き進んで來だ筆の調子を破つて了ふから、殊更に暗くして置いて前夜と同じ調子を保つて置くのだと話されましたが、是も矢張り小說家の異つた習慣の一つで御在ますね。

其から小說家には筆の速い方と遲い方と二タ通りある樣で御在ます、紅葉山人は名代の遲筆家で隨分御手間の掛つた御作があるやうに承つて居ります、而して山人は書終つてからも再三讀み返して御覽になつた上で親切に手をお入れに成り訂正や挿入の文字で原稿が散散になる程御念が入りますから一篇の小說にも隨分多くの時間が費されて居ります、然るに露伴先生の方は其と反對で非常にお早い相です、一回位のものなら、新聞社から小僧が取りに來るのを、玄關に待たせて置いて書いて了はれるのだから、先生の速筆にも實に驚くつて申して居ります。

良人は何方かと云ふと拙速の方で、一氣呵成を尊びますから、十枚や二十枚は雜作もなく書いて了ひます。

併し此の速い遅いは其の人の技倆に依るのではなくして、全く天性なので御在ますね。

### ▲一日の仕事

小説家は誰も左様で御在ませうが、別して良人などは不規則ですから、日々の所作なぞも少とも極つては居りませぬのですよ。

朝は大抵十時に起きそれから入浴に參り歸て來て新聞を讀みながら牛乳を飲み、十一時過に成て朝飯を戴き、其より書齋に這入つて筆を執るので御在ますが殆ど坐りずめで翌日の明け方までも書き續けて居ります、是が先ア良人の日課で御在ませうよ、其の他は時々散歩に出たり、玉突に行つたりする位のもので、申上る程の事は御在ません。



一日に幾干程書くかと仰言るのですか、是も矢張極りは御在ません、職人のやうに何時から始めて何時までに何枚仕上といふやうに規則正しくは參らぬのですからね、多い時は三十枚も四十枚も書上げて了ひますが少い時は五六枚も六ヶ敷い事があり、何にも書かずに讀書して居る事もありますから、他の職業の樣に製作高なんてものは少とも極ては居らんので御在ますよ。

唯今は東京の新聞に書いて居りますが、其の餘暇に雜

誌に出しますものが一つと、地方新聞に送つて遣るのが一つと都合三通り書いて居りますので、仲々忙しう御在ますよ、中でも東京の新聞の方は友人の面白い經歴を仕組んだもので、三年前から案を立てゝ居りました程丈有つて、幸に世間の評判も宜い樣で御在ます。

そこで私共の最も愉快に感じますのは作に對する世間の反響で御在ます、其が無い樣な時は張合が御在ませぬけれど、少しでも反響が有て御覽なさいまし、どんなにか嬉しう御在ませう、良人は口癖の樣に、文學者と云ふ者は世評に頓着するには及ばぬ、藝人なぞとは違ふから世俗に諂つたり、讀者の意を迎へたりするには及ばぬ、假しんば現世に容れられぬにしても、百年の後に眞の知己を得れば可なりなどゝ威張たことを申して居りますけれど、其の實少しでも好評であると非常に喜ぶんで御在ますよ。

左樣いふ譯ですから、東京の新聞へ書く方には隨分骨を折つて居りますが、地方新聞の方は極く容易なものであるとかで、毎日一時間かそこいらで譯なく書いて了ひますよ、書くと言つても此時は自分に筆を持つ譯ではなく、安樂椅子に仰向に寢轉んで居りながら、口述して、書生に筆記させるので御在ます、其を後で一遍讀んだ位で直ぐに送て了ひます、地方新聞に書くのも宜う御在ますが、唯だ困るのは、原稿料が遲れて、いくら催促しても送金しないんですもの、餘程約束を固くして置かないと馬鹿を見るので御在ますよ。

## ▲世話女房

小說家といふ業體は居職と同じく運動不足は免れません、大抵の方が胃病に罹つてお在での程ですから、食物には餘程注意しなければなりません、それに腦を使ふ職業ですから、可成滋養分を澤山に供さなければなりません、良人は餘り食物には特別の趣味を持て居ない方で、好惡が少く、何を出しても默つて食べて呉れますから、私共は樂で御在ますけれど、歿られた紅葉先生なぞは、隨分食物に八釜しい方で、何でも一食の膳に十種以上の物が並ばなければ承知なさらない位で

すから、調理の任にある奥様の御苦心は一ト通りでは
なく、又た大層お上手だつて言ふことで御在ますよ、
鏡花さんのお話に、「先生の所の香の物位旨い香の物は
恐らく何處にもあるまい」と言はれましたが、此の一
事を以て見ても紅葉さんの奥様が如何に庖厨の事にお
骨を折られたかゞ察せられます。

それに紅葉さんはお子さん方に少しも構ず、人から冷
淡と言はるゝ位で、一切奥様に任せ放しでしたから、
奥様は子供の世話と煮炊の事に追はれて、碌々休息す
る暇もない程の御心勞で在た相ですよ、其故偶に先生
が外出でもされると、何といふ病氣も無いのに氣の弛
みからガツカリして、お歸宅がある迄御寢て被居る相
で御在ます、是は平生に氣を張つて被居る故で御在ま
すね。

敢て紅葉さんの奥様に限らず、一般に小説家の妻君は
普通の家の主婦よりは遙かに骨が折れるので御在ます
よ、ですから何うしても小説家の女房は世話女房でな
ければ不可ません、主人の職業が職業で御在ますから
料理のことから、子供の養育から、近所の交際から家事
一切を切つて廻して行つて、主人には少しも頓着せし
めない程の手腕がある者でなければ不都合です、又た
其位でなければ勤まりは致しません、お引摺の奥様や
人形然と床の間に据えて置く様な御婦人では迚も〳〵
其故小説家の所へは滅多に御世話なんぞ出來ませんの
で御在ますよ。

### ▲不定收入

小説家は元來浪人的の職業で、何處に勤めるでもな
ければ、何處から補助が下りるでもありません、但
だ一枝の筆を資本に尠からぬ報酬を得、其に依つて生
活して行くので御在ます、報酬は原稿料と、印税收入
と、版權收入の三種が御在ますが、多くは原稿料で御
在ます、原稿は二十行二十字詰を普通一枚と算し、之
に對する相場附は作家の地位と聲名の程度に依て幾通
りも御在ます、目下の所では第一流が一圓より一圓五
十錢、第二流が一圓以下でせうね、其故ちつと長い物

を書けば、相應に纒つた金が這入るので御在ます、故に文筆を以て世に立つ職業の中では、最も收入が多いと言て宜いので御在ます。

私共の生活方を打明けてお話致すと、一ヶ年に二月つゞき位の新聞小說が二回で是が三百圓、雜誌への寄稿が七回乃至十回、是が少くとも三百圓、其の外地方新聞より寄越すのが五六十圓、何の角ので年には七百圓位の收入、之を月に割りますと、五六十圓に成りませう、けれど不定收入で在つて、月に依つて多く這入る事もあるし、少く這入る事もあるから、毎月一定の俸給に依つて生活する人とは大分經濟の立て方を違へなければ成らんので御在ますよ。

## ベルツ博士 衛生々活談

S. N. 生

東京帝國大學の御雇で有名なベルツ博士は獨逸の人で、明治九年に日本へ來られてから今年まで二十八年の間、一日も欠さず、大學へ出勤して、學生を薫陶し、或は患者の診察治療に從ひ、日本の醫學社會へ尠からざる新智識を與へられた方であります、現に博士の薫陶によつて、醫學上の智識を弘め、名を成した學士博士も澤山あつて、我が醫界の爲めには、一個の恩人といつてもよい位です、それ故宮中などへも屢々召されて名譽ある待遇を受けて居られる。隨て上流社會の信用厚く、凡そ貴顯、紳士の病床とあれば、必らず、一應は博士の診察を求むる事となつて居る位です。併し斯くいへば博士は上流社會專屬の御醫者であつて、一般中流以下の病家には緣故の薄い方かといふに、決してそうでなく、寧ろ博士は下層生活の勞働主義を贊成し、其の衛生說の如きは華奢、逸樂を斥けて、質素勤勉の裡に人生の眞味と健康の宿る事を信じて居られる方であります。左の談話は博士が平常の持論で人間萬事、活動、困苦の間に天與の衛生の保たれて居る事を道破したも

のであります。

△衛生は運動

私は今年五十五歳になります、日本へ參つてからも二十八年、其の間の經驗によつて御話を致します 私思ひますのに一切の動物はよく動き、よく働らくので活きて居ります、働かなくなれば死にます人間も矢張動物であるから、其の生命を長く保とうと思へば何でも働くに勝した事はありません。又人間は壯健でなくてはこの世に在つて眞の快樂を得る事は出來ません。身体の壯健を保つには食物の滋養、衣服の適度、住家の淸潔、この三つは離れぬ關係でありますけれど、壯健を保つ眼目のものは運動が一番大切です、いくら滋養物を詰め込んでも、立派な家屋に住ふても身体を動かさずに壯健を得やうと思ふのは大なる間違であります。

私屢々意見を申します、日本の學生は學問や智識を養ふ事に熱心で、書物を貪ぼる事が甚だしい、アレは大變惡るい、肝要な躰格の發達する時に精神ばかり使ひますと腦へ血が集つて、樣々な病氣が起るのであります、又婦人が是れと同じ樣に、戸外へ出る事を厭ふて家にばかり蟄居します。日本の都會に居る婦人の半分は大概病人であります。それですから私は、何でも運動が第一の藥だと申して少し位な病人には遠慮なく躰育の事を勸めます。

△日本食主義

近頃食物に就ては大分やかましい樣ですが、私の持論は元來日本食賛成で、濫りに肉食を勸めません。米の飯は大變によろしい、私も久しい以前から毎日米食をして居ります、但米は消化の遲いものですから、十分に運動をしなくてはいけません。又肉食もよろしいが、日本ではまだ肉食をするやうに世の中の方法が整ふて居りません、殊に廉い肉は消化が惡く、今日東京で三十錢か四十錢位で洋食を食べさせる樣ですが、あの樣な肉は滋養分が十分にあらうとは思へません、それか

ら肉を食べるのは晝食でも晩食でも關いませんが、食後に充分運動しなければ食ふたものが十分に滋養の効を奏する事が出來ません。又日本は野菜に富んだ國で、何處へ參つても新鮮な靑物は澤山あります、野菜は食物の中で輕蔑されて居りますけれども、實際は中々滋養分に富だもので、私も三食に野菜を多く用ひます、其內でも大豆などは調理の方法さい能くしたならば大變藥りになるものです、殊に日本では極めて廉價で、日本の下等社會の人が存外に健康で、筋肉の發育がよいのは、多く麥飯に味噌を食ふて働らく所爲です、上流社會の人が白い米の飯に魚の肉など少しづゝ食ふて居るよりも、味噌や煮豆や、豆腐などを澤山に用ひた方が滋養になッて居ります。私も大豆を粉にしたり、潰したのを煮て喰べて居ります、又私の診察に參る第一病院でも病人に大豆を喰べさせて居ります。殊に糖尿病の人などは澱粉を禁じますから最もよいです。

### △衣服の改良

食物に就ては日本食は贊成ですが、衣服の方を申すと是れは甚だ欠點が多い。私は曾て衣服改良の事に就て屢々意見を述べましたが、殊に少女の衣服は成可く早く改良したいものです、御覽なさい、アノ長い袖と、重たい裾が身体にからまッて手足の運動を妨げます、私の考へでは袖は筒袖がよろしい、裾はなるべく膝限りにして足の運動を自由にさせた方がよい、西洋の女の子は皆膝までの衣服で充分輕く足が動かせるやうにして居るから運動も仕よいのです、殊に裾が重いと膝に當るから自然に足を內側へ曲げて歩きます、大人は習慣上容易に改まらぬとした處ろでせめて少女丈でも改めて段々と改良して行きたいものです。

### △運動の効力

私は毎朝定ッて六時に起きます、而して起ると直くに庭の芝生の上を跣足で歩きます、凡そ三十分間も歩きまして、夫から今度は躰操術を行ふのです、体操といへば小學校でやるやうな躰操です、そうしてから食

事して出懸ます、外へ出るに私は馬車や人力車を用ひますが、夫でも運動不足な時は人力車を下りて態と歩きます、又時としては自轉車にも乘て隨分遠方まで乘出します、世間では自轉車に就て種々と衛生上非難もありますが、私は健康な人の身体には極よろしいものと考へます、又た私は毎朝鐵啞鈴や棍棒を用ひて躰操しますが、雨天の時には室内に備へてある運動器械によッて、十分に躰育を實行して居ります、この器械はホワイトリース、エキザーサイザアといつて米國製のもので數年前から日本へも參ッて居ります。

### △戸外運動

戸外の運動も其方法は澤山あります、まづ普通は端艇でせう。西洋では男子は無論の事、婦人でも小兒でも誰でも端艇漕の嗜好を持て居て、隨分盛に行りますが、日本では學生の外にはまだ一向に用ひられないやうです、併し單に運動の具としては西洋のよりも日本の端艇の方が好いやうです、何故なれば、西洋の船は坐つて漕ぎますから膝から下の運動がわるい、然るに日本の短艇は立ながら漕ので身体の各部分が皆活動します。

### △善良の習慣を作れ

運動は衛生上極めて必要であッて、無病健全の最上の擔保であるけれども、規則的に是を實行するといふ事は容易なやうであッて實は甚だむづかしいのです。それには第一家の主人、主婦が先に立つて實行しなければ可ません、子供達にばかり遣れ〳〵と奬めて見ても、主人が卒先して好模範を示さなければ成効は忠束なひです、西洋では父母が先に立ッて必らず運動を勉める事になッて居ります。世間の人の多數は不斷運動を怠たつて病氣を起こし、これが爲めに苦しい思ひをし、高價な診察料や藥代を拂ッて何とも思ひませぬが、これは甚だ間違た習慣だらうと思ひます、病氣になッて藥を飲むより平常の運動を勤めた方が、どれ程健康によいか分りません。又多くの醫者の中には病人に向ッ

て貴方運動をしなくては可んと言いつて自分は少しも運動をしないのがある、それ故病人が醫者の言ふ事をきゝません。又醫者によると衰弱した人に向ッて無暗に滋養物をすゝめますが、滋養物の効能は或る程度まで、それから先は身体の活力にあるのです、食料は何でも構はん、運動すれば壯健です、詐りかどうか彼の勞働者を御覽なさい、隨分粗食はして居りますが、それでも上流社會の人に比べて身体は餘程壯健です。それ故、よいと知つた事は迷わずして速やかに實行するのがよいです、千百の智識を蓄へて居ても實行しなければ何の甲斐もないのと同じく理屈は知つて居ても實際行なッて見なければ効力は少しもありません。ですから若しも怠る習慣があれば、その習慣を破ッて早くよい習慣に隨かはねはなりません。（完）

## 小兒のあそび

四五歲なる小兒の頻りに紙をばひき裂き、兩手に唾してより居るに、何爲すにかと問へば、仕事をと答ふるに、仕事とはといへば、繩をなすなりといふ、をかしきことをいふ子かな、さることをなす家にてもあらぬにと、その時は不思議に思ひしが、後に聞けば隣家の農夫の爲すをこの小兒のしばらく傍目もふらず見てあるに、「坊ちやん大きくなつたらかゝる仕事をなさるか」といへりしにて其まれせしことゝわかり、大笑ひせしことあり、げに周圍の狀況に支配さるゝこと遠なるは小兒なり、多人數集りてまゝごとをなすを見るに、お父さんは外に仕事にお行きなされ、私は御飯を焚きますわ、いや私は裁縫の先生よ、皆さんお稽古にお出なさい、私は學者だから御本を讀むの、雖さんは兄さんあなたが姉さん、この方がれんれと、おもひ〳〵に役割を定め、けふは私方にてお馳走をしましたからとて、打ちよりて騒いて居るかと思へば、既に興さめてやふと一人があら地震が來るから門を閉ぢましよ、今車に載つて來よりましたと騒げば、皆々急ぎ戶を閉ぢ一かたまりになりていと靜かなり、其の口を切りし娘の母君は漢學を修めて手紙の文など立派なる奧樣の愛女なり互にいさかひしてその中にいちはやく一人を叩き、敵手の泣くに大人の出られては大變と逃げ去れるものあり、やう〳〵泣聲の止みしと思へばはや先の兒は來りて遊びましよといふ、此方は未だ涙を拭ひつゝも笑顏をなして何が爲になきしかと疑はるゝまでに睦しくなりぬ、あゝ無邪氣、成長の後はいろ〳〵に花咲き如何なる實をか結ぶらん。（小山松枝）




# 琉球風俗

坪谷水哉

大隅國の西南端から、臺灣東北の端れまで、海上殆ど五百里の間、嶋嶼は點々長く列なりて、或は斷へ、或は續き、さながら庭中の踏石の如き形を爲す、其間に大なる嶋を中心として、附近に小嶋嶼の散在するより、大別して四の部落と爲し、先大隅に屬する硫黃ケ島、種子ケ島、屋久嶋、口永良部嶋等を大隅群島と稱し、其の西南なる口ノ島、中ノ島、諏訪ノ瀨嶋、等をトカラ群島と呼び、上記の各嶋を合せて七島と稱し、其の群島の横たはる海洋を七島灘と名け、鹿兒島から琉球を經て、臺灣に往來する普通の航路となつて居る。

又七島の西南に、喜界ヶ島、大島、德ノ島、沖ノ永良部島、輿論島が列なつて居る、之を總稱して大島群島と呼ぶ、七島の風俗は、薩摩大隅邊と甚だしき相違なきも、大島群島に至れば、衣食住の有様から、言語までも、内地とは風俗が著しく變る。此の各島中で、大島は、大嶋紬で内地人に普ねく知られ、喜界ヶ嶋は俊寛僧都の嶋流しで、名髙いが、其他の島々は、餘り多く世に知られて居らぬ。重立ちたる大さな嶋でさへ其の通りだから、其等の嶋の近傍に散在して居る數多き小島は、一々數へ擧げても益が無いから言はぬが、此の七島と大島群島とは、方今鹿兒島縣に屬し、何れも大隅の西端から西南二百里計りの間に在つて、ヨシヤ其の風俗が琉球人に似て居ても、之を琉球とは言はぬのである。

大島群島の西南の端れの輿論島を越ゆると、更に其の西南に細長くして虬の如き形したる一大島が、横はつて、其の周圍にはまた小さな嶼が散らばつて居る。此細長き大島が沖縄本島で、其の形が虬の流るゝ樣だ

といふので、支那人は古くから流虬と呼び、後に音の同じい琉球といふ文字を使用する樣になつて、今は其の琉球本島と周圍の小嶼と　合せて、琉球群島と呼で居る、日本人は、其嶋の形が沖に繩を浮かべた樣だとて沖繩と稱し、今は其の本嶋に縣廳を置かれ、沖繩縣とは乃ち是れだ。其の沖繩群島の西南、百里餘を隔つて、また宮古島、石垣島、納表島の三大島と、外に數十の小嶼とが散在して、之を八重山群島と呼び、其の群島中の最も西なる與那國島は最早臺灣の東北岸まで五十里計りで達する所にある。

此等の沖繩群島と、八重山群島とを併せて、普通に琉球と稱し、琉球飛白、琉球漆器、琉球莚などの產地として琉球の名は廣く內地の人にも知られて居るが、其の各島の風俗が、內地とは全たく相違して、去りとて支那風でも無ければ、臺灣の生蕃とも異なり、仲々面白い特色を具へて居る。余が見たるは沖繩縣廳の所在地なる沖繩本島の那覇港と、舊時琉球國の王都であつた首里の市街と、八重山群島を管轄する島役場所在地の石垣島の四箇といふ村とに過ぎぬが、此の三所が全琉球を通じて最も樞要の所であるから、全體の風俗は略ぼ之だけでも推側が出來る。で、略ぼ其の中の奇らしいと思はれた節々を說かふと思ふ。

鹿兒島から船に乘り、種子ヶ嶋や屋久島を左方に見七島灘を過ぎ、更に大島、德ノ島などをも左に見て、海路三百七十餘里を越え、沖繩本島の那覇港に着くと先づ目に附くのは舟で、一本の大木を刳りて幅三尺未滿、長さ三間計りなる所謂獨木舟に乘り、數里乃至數十里を隔つる嶋々の間を乘り廻はし、遠く望めば魚の泳ぐが如く、僅に二三人より以上の人を載す能はざる小舟にて、逆捲く浪の上を滑ぎ廻はり、中にも糸滿人とて、那覇に近き一村落の土人は、此の小舟にて遠洋まで漁業に出懸け、其の漁獲の器具は槍一本にて、深く水底に飛び込み、槍にて巨魚を突き留め、抱いて浮み出ること、宛かも海獸の如しと聞けど、其の漁獲の樣は見ざりしが、細き獨木舟に小さき帆を揚げ、浪漕ぎ分けて快走する、其の熟練と大膽とは、感服の外は

無かつた。
那覇の港へ上陸すると、目に入る物は盡く奇しからぬは無い。婦人は盡く跣身にて、芭蕉布の帷子を着るも、帶を纏はず、肌に腹卷を締めて着流したる帷布は腰の邊りにて其の腹帶に挿むのみ、故に胸にて合せる襟は左り前もあれば右前もある。斯くして物を運ぶには、皆な頭上に載せ、薪も載せ、酒罎も載せ、生きたる豚も載せ、尙ほ滑稽なるは多く日傘を指しかざし、豚兒の三匹位も載きて、雙手に之を支へ、他の手にて日傘を廣げて持ちながら步く形は始めて見たる者には變妙奇態で噴き出さゝるを得ぬ。

更に進んで市街の賑かなる所に至れば、兩側の街頭には所狹きまで肆を廣げ、日用品の雜貨、古着、豚の切り肉、砂糖黍の幹、燒豆腐、芭蕉實、冬瓜、など。各其の足の廻りに廣げ、上は例の日傘にて掩ふて居るのが、何れも婦人計りで、彼等は、食事時となれば、右の掌に甘藷(薩摩薯なり)の煮たるのと、左の掌に燒豆腐とを載せて、左右交はる〱に口を着け、箸を用ゐずして喰ふのが常で、其の物品賣買の通貨は、大抵孔のある寛永通寶である。尤も內地と同じい紙幣も銀貨も通用せぬでは無いが、物價が非常に廉いので、五十錢とか一圓とか又たはそれ以上の取引などは極めて少ないから小錢の外には通貨の必要が稀であるのだ。

路上に物を運ぶ者も、市中の大道で物を商ふ者と同く、大抵は婦人で、男子の働らく者は甚だ少ない。一般に婦人は働らいて、男子はヌラリクラリと遊び暮らし、泡盛酒を飮み、夜間遲くまで海邊に出て、日傘の蔭に寢ころんで、歌を唄ふて居るといふ風で、少しく金のある者は、那覇港に澤山ある遊廓で、アンガーといふ娼妓を買ふて遊び續け、中人以上の社會では、成るべく多く良人を遊ばせるのを婦人の名譽として居ることは、トテも內地人の想像の出來難い所である。是れは往時の政治が良くないので、富んで財產を蓄へると、皆な種々な名稱を以て租稅として徵收せらるゝので、誰も貯蓄の思想が無く、其日暮に甘んじて居るからだ。

貯蓄思想の無いには、一とつの理由がある。それは生活が至つて容易い。年中暖かで、雪霜などの降ること無く、夏秋の間は芭蕉布の帷子一枚、厳冬の候でも多く、芭蕉布を二枚も三枚も重ねて着る丈けで、衣服の費用が少ない上に、食物は、例の甘藷と豆腐が常食で、最も美食が豚の肉である位なれば、通常一人の生活費は金五錢あれば足るといふ。住居とても、那覇の市街は瓦葺の煉塀を繞らせど、市外は概ね藁葺の堀建小屋で、二階建は一戸も無い。此れは風が非常に激しいので、二階建では保てぬからだ。斯樣に生活費が少ないので。自然に遊惰に流れるのだが、中にも社會の上流に立つ士族が、三百人計りあつて、此等は毎日殆ど遊び暮らすが本業といふても宜い。

男女ともに髮を結んで、髻に笄を挿み、男子は長短二本で、短かいのを額の上の下から挿し、長いのを上から挿し、婦人のは何れも一本である。其の婦人用の笄は長さ五寸位、恰かも茶杓の樣な形で、貴人は金士族は銀、普通人は眞鍮または木製で、別に遊女に限りて銀製の長いのを、角の如くに頭上に長く挿して居る。で、其の笄を見て、其何人であるかゞ略ぼ推定せらるゝ。儀式の席では、男も女も別に大なる鼈甲を用ゐる相だが、余は或る貴人の夫人が、首里の寺參りに來たとき、華麗な裲を着て、髮には長き鼈甲の笄を挿んで居て、恰かも頭上に一本の角が生へて居るかの如くに見受けた。

婦人の容貌は、概して色が淺黒く、圓顔なるが多い平生勞働することが多い爲に、筋骨逞しく、脂肪質に富み、衛生的の美人と云ふて宜しい。之に反して男子は上下ともに鼻下と顎とに薄き鬚を生やし、概して紳士らしい風采を備へて居る。此れは年中遊び暮らす者が多い爲であらうが、體格は弱わ相にて、千軍万馬の間に馳騁することの出來相な人物は殆ど見受けない。

婦人は何れも左右の手の甲に黥して、蛇の皮の如く一見甚だ氣味惡るき感を爲すが、其の黥の模樣は、沖繩本島と、大島群島、八重山群島、皆なそれぞ〱に異なれども、其の中にも、生れて九歳の頃より方形、十

文字、斜めなる十文字、竹葉形、二個の平行線、四點の内に一點など、漸次に模樣を増加して、三十歳に至れば、左右とも手の甲一杯に黥するのが常で、其の模樣の完備したのが既婚婦の証だ、尤も三十歳に至れば結婚せざる者も、また模樣を完備させるのだ。近來縣廳では、嚴に此の黥を禁じたる爲に、方今小學校に居る女兒には、之を爲す者無いけれども、十四五歳以上の婦人には、手の甲の無垢なるものは一人も無い。

夫婦の關係は頗る親密で、年齡は大抵同じいか、またば婦人の方が多い位で、離婚といふは極めて少ない此れは婦人に嫉妬の念無く、平生自から働らいて良人を遊ばせ、遊女買ひの費用までも、喜んで供給して却て之を名譽として居るといふ奇なる風習だから、夫婦喧嘩などの起る筈も無いのだ。

住居は、那覇と首里とでは、赤色の薄き瓦で屋根を葺き、周圍に、堅固なる石垣を繞らし、其の垣は高くて屋根裏に近く、二階の無い上に檐が低いので、殆ど風の出入が無く、光線の入る所も少なく、室内は始終薄暗い。是れは數しば暴風が吹く爲に、それを恐れての構造で、村落へ出ると瓦屋根が稀で、多くは藁葺である、屋敷中には大抵芭蕉が植ゑられ、氣候が暖かいので、その芭蕉に大なる實が、穗の樣に熟して實るので、其の旨いことは、內地人の想像の出來ぬ位だ。

何れの家でも在家の室內は土間に莚を敷いて、外から例の跣足で歸つても、其の脚を洗ふこと無く、入り口で二三度強くトン／＼と地に踏んで、脚に着いた砂を落して直ぐに室に入て坐り、出る時はまた直ぐに履物無しで飛び出す所は、猫など〻多くの相違なく、また尾陋の御話だが家ごとに豚を飼ふて、之を大便所の代用と爲し、豚小屋と厠とは共通で、人が大便に往くと、下から直ぐに豚が始末して仕舞ふので、慣れぬ間は頗る氣味が惡い。イヤ御話が餘り下へ廻つたから此所で御免を蒙ります。

▲沖繩縣全体人口　四十七萬八千人
▲那覇港人口　三萬五千四百人
▲首里市人口　二萬五千人

# 八丈島風俗

麻軒生

むかしは島も通はぬ八丈島といつた位で大邊遠方のやうに思はれてゐましたが、唯今は月に二回の定期航海で横濱から海路百五十里の所、夕方出帆すると翌日の朝は、キット着するといふ様に、交通が便利になりましたが、其の割合に土地の事情がまだ知られて居りません。

八丈島は小笠原嶋ほど南洋ではありませんから、風土も自然伊豆七嶋に類して居りますが、氣候はまづ半熱帶と申したら可いでせう。降雪、降霜も滅多にない、植物なども大分熱帶に近いものがあります、此島は有名な火山島で、折々噴火した事があります、島の大さは東西二里、南北三里と申ますから雜と東京市の半分の面積丈はあるのです。

島中に東山西山と呼ぶ二ッの高山が並んでゐ、いづれも噴火山の跡で形が富士に似てゐる處ろから、俗に八丈富士と唱へてゐます、上陸して見ると道路はすべて火山灰で素人眼にも噴火の慘劇が想像される位です、が、それにも拘はらず全島一般に樹木が繁茂して風光頗る麗はしく、殊に松の樹、椎の木等最も多く、山腹は立派な森林で、其の裾野は廣い平原で今は大抵牧場となつて、牧牛が、三々五々、裾野の彼方こなたに群を成して牟々の聲を揚て徘徊して居ります、其が如何にも平和で且つ閑静で謂はゞ詩趣に溢れて居ります。内地の人が働に行つて此の孤島の小天地を見ると全く別世界の感じを抱くのであります。

▲特産物

は第一が牧牛です、これは人口一人に對して牛二頭の割合になッて居りますから、其の數は非常に多いのであります。内地と違ッて氣候が暖ですから、一年四季打通して野放しにしてある、殊に滿地青草の繁茂せる土地であるから牧牛改良には好適といふ土地柄であります。それから第二が養蠶です、島内到る所山桑の繁

茂して居らぬ處ろはなく、又島民で養蠶に從事しないものは一人もないといふ有樣で、繭の產額は三千五百石、代價に積ッて十七萬五千圓は年々にあるさうで御在ます。

次に此の島の名產は、昔時から世上に知れ渡ッて居る八丈縞で、專ら羽織地、下着地などに使ひますが、品質が堅實で、見掛が高尚で、皺の寄らない處ろが一特色で、近年は追々と袴地などにも織るやうになりました。

そしてその染料は此島特產の木の皮を煎じて染めるのですが、一遍や二遍ではなく何でも同じ物を四十二回もくゞらせるといふ極めて丁寧な遣り方で、毫しも他の藥品などを交へないから何時まで經ても變色、褪色の患がないのであります。そしてこの織物は同島の貢租として德川幕府の昔から政府へ納め來つたもので、一年に島全體で絹七百六十八端といふ事になつて居ります、それを島廳で取纏めて東京府廳へ送つて、白木屋とか、大丸とか三井とかいふ大きな吳服店に入札拂として金に代ゆる都合になつて居る、それが今日の相場では大概二千圓位なものだそうです。

▲農業と漁業

農業は至つて幼稚なもので、一般に能く作るのは薩摩芋で、これは土人の常食となつて居ます、其他普通の雜穀類、粟とか、黍とか、豆類など一と通出來ますが、米作は一寸困難のやうです、次に漁業も又幼稚で島民に半農半漁で專問の漁師が少い、其代り游泳は中〳〵達者であるから綠蠵や、其他の魚類を潛つて行つて突いて來る、丁度南洋土人が槍で魚類を捕るのと同じ趣向です、併し附近に魚類の夥い事は驚ろくべきものですが、風浪が高いのと、漁獲の方法が備はつて居ない爲めに自然の繁殖に任してあります、若し此島に精巧な漁具を持つて來たならば、定めし意想外の大漁をする事でせうに、惜しい事です。

▲生活風俗

島の土人の風俗は大島邊とさして違いませんが、まづ長煙管でスパ〳〵と悠長に燻らして居る處ろなどは支

那、朝鮮風で婦人は肌を露はす事をせず、殊に乳房を露はすのを大恥辱とし、裸体になつた時も絹布で堅く覆ふて居る位であります。又此島の婦人の帶はすべて細巾で恰も内地の男子が用ふる博多帶位のもので幅廣のものは更に見當らない。婦人に就て殊に異數に思はるゝのは髪の長い事、又その色の黑く艶々しい事で、これは内地人の到底及ばぬ處ろであります、平素は内地の忌中髷のやうに結んで、品物を頭上に戴いて持運びをするのですが、其の姿勢の整ふて居る事は内地婦人なぞは協ひません。

八丈島の婦人は耕作など少しも手傳はず、唯家内に居て織物などに日を暮らし、勞働と言つては水を汲みに行く位なもので、水は井戸から堀つても湧かないから谷川から流て來る水を飲料にするのですが、十六七の妙齡でも五十六十の老婆でも水汲は皆一樣で前述の通り頭に輪を置いて其上に水を滿たしたる桶の大きなのを頂き、兩手を振つて頭で中心を取り、尻で梶を取つて行くのであるから自然に姿勢が正しくなる譯です。

又此地で聊か美風ともいふべきは宴會の風でありますよしやその献立は芋燒酎の舌を刺すやうなものでも宴席で杯の献酬をせず、行儀正しく酒を飲み興に入れば席を離れて、庭に出で踊を歌ふなど極めて無邪氣であるが内地人の如く盃盤の席で狂態を演ずるなどは決してありません。

▲小笠原の風土

八丈島から凡百八十海里を隔てゝ小笠原島がある。これは日本人と歸化人との雜居で風俗も異樣です。

此の島は緯度が南方にある丈け、殆んど熱帶地である風光は全く内地と異り、丘陵の起伏した處ろに檳榔樹椰子樹、芭蕉、鳳梨など熱帶植物が繁茂して八丈島にある松の樹などは藥にしたくも見當りません、其故一寸見た處ろでは、瓜哇、スマトラ邊に行ッたやうな心地がします、家屋の構造も南洋風で屋根、壁の別なく悉く檳榔樹の葉を以て葢はれ、一見内地の草葺屋根の樣ではあるが近ついて見ると一種面白い眺めがあります。

この島は父島、母島、兄弟、姉妹の群島から成立ちて居りますが、父島母島は可なり大きい島で島廳は父島の二見港内にあります、商家の模様も一と通り内地風で割合に清潔ですそして路傍でバナヽの熟せるのを賣つて居る按排など又一種の風情があります、このバナヽは現今盛んに東京へ輸送して參りますが、水菓子屋の店に吊してあるのは多く小笠原産です。

本島には種々雜多の人種から出來た歸化人が多くつて婦人などは日本の織物で製した洋服を着し、下駄を穿いて居るなどは頗る異風であります、又西洋人と日本人との間に出來た雜種兒も澤山ありますが、是等の兒童は巧みに英語を操り又日本語にも通じて割合に教育があります。

歸化人部落の小學校には英語科が設けられて目下四五十名の生徒を養成し、又普通科即ち日本語をも教授して居ります、歸化米國人の中には四十年前に此地に來てゐる者もある、そして日本政府から年金を貰つて安樂に生活してゐる者もあります、彼等の家は矮小ながらも西洋造りの形をしてゐて寢臺もある、椅子もあるそして秩序正しく配列されてゐる、食物は玉蜀黍バナナ、正覺坊、其他魚類などであります。

## 我家の下婢

我家に田舍出の女中あり横ぶとりの色黑く見る人の笑をまねく姿なれど心の清く諸事實直なるは驚くの外なしこの女故鄕にありし折は家計上にて學びやの門一度もくゞりし事なかりしもそが友よりのふみ受くるごとにおのが文盲なるを殘念に思ひいかで學びにいそしみばやと思へど田舍にありては意を貫く事がたく當人大決心にてこたび上京せしをふとせし縁にてやとひ入れしなりかゝる志願ありての奉公なれば閑あるごとに筆紙より手をはなさずこと〲に知識をみがくにのみ心を用ふるさまあはれしほらしく此方も及ぶかぎりはいとまあたへてはげまし居るも諸事熱心には感にたへたり

さる日龜井戸迄所用ありて連れ行きしが歸るさ天神に詣でしに社前に額づきてひたすら祈るさま凡ならず何事を願ひしぞとたわむれにたづね見しに今年中に尋常四年位の學力をさづけ給わらば黑髮きりて御禮申べしと祈れりとゆふにいとおどろきて髮をきるとは極端ならずやといへば一げい覺るにかみの毛位何とも思ひはべらすとて平然たり妾しみ〴〵はづかしく身を省みて心づきし事もあれどこゝにはおはづかしくて申上げられず

歸宅後兄君にきこへ上げしに天神樣もはまの願ひにはちと閉口遊ばしたらうなど大笑なされしも志には感心なしよびいだしていたくほめ給へり精心一到何事か成らざらんとはかゝる事にやあらん

（たみ子）

# 米國公使の家庭

各國公使の中で、一番嚴格でもあり武骨でもあるのは、本邦駐剳の前米國公使アルフレッド、イーパック氏であるとの事、氏は別段熱心な基督敎信者と云ふ譯でもありませんが、日常生活の樣子を外から見ると、如何にも四角四面の規則的で、恰も昔あつた淸敎徒の面影を思出させる位です、夫人はお年頃五十路あまりに成りませうか、お子樣の無い故かして打見は仲々お若い、是は又た熱心な基督敎信者である丈、嚴格の方では良人に劣らぬ程の几帳面家だと云ふ事です、隨つて他人に對する御交際も至極几帳面で、而も親切でお在なさる相です。

今此の規則正しい家庭の生活方を申しますと、御夫婦共朝は七時に離床に成り、女中の持て來るお湯で以て寢床で悉皆と行水を濟ませ、衣服を着替へられ、八時に朝の食卓に就かるゝが例であります、食物は至つて質素で、朝飯には和洋の味噌汁に、麵包に、珈琲に菓物位の物で、肉類などは稀であります、食事の時間は凡そ三十分を要し、其が濟むと來着の書帖や新聞に目を通され、其より公使は事務舘に御出勤になり、夫人は九時半頃より馬車で買物に出掛け、晝餐は一時少し前、肉と野菜の手輕の物でお濟せになります、夫人の面接日は火曜日と極つて居りますから、お客來は多く此の日で、其他の日には訪問に出られるか、さもなければ家に在て縫物をなし、小物の積りをして女中に縫はせる事もあります、晩餐には假し家族許の食事でも是非衣服を改めるのが西洋の風ですから、皆さんお服易に成つて食堂に出向かれ、玆に肉や魚や、野菜や菓子や、菓物など御馳走のくさ〴〵並んで、御夫婦の打解けてお話もあり、ごゆるりと召上ることに成て居ます、ソコデお就眠の時刻は夫人は九時半公使は十時の規定、毎日此の通りを行つて少しも違はなかつたと云ふ事です。

# 田園生活

某夫人談
記者筆記

私は良人の病氣を靜養せしめる必要からして田園生活をする事となりましたが、田舍へ住居を定めましてから爰に三年の星霜を經過しました。元よりこの淺い月日で田園生活の趣が分る筈もありますまいが、久しく都會生活に慣れた私共の眼から見て、如何にこの田園生活に特種の趣味があるかを少しく述べて見ませう。

私共が新生活を希望して參りました田舍は東京を距る百三四十里の田舍で、海に近く又山に近く、新らしき魚、新らしき野菜の自由に得られる土地であります勿論新らしき魚、新らしき野菜は田舍へさい行けは何處でも得らませうから斯う申した丈では都會生活をなさる方々にはさして珍らしくも御感じなさるまい。併し私の申す新らしいといふのは。網から躍り出すのを料理して膳部に供へ山畑からほり立の野菜を献立にいたすのであります。元より臺所に水道の栓もなければ水瓶もありません、乍併、自然の用水は筧で取り、又水晶を砕いたやうな清水を湛へた小川があつて朝夕サラ／＼と流れて居ますから食後の膳椀、鍋釜の類は皆その清水で洗ひます、のみならず屋後の山には千年色を變へない翠の松が生い茂り、前面の海は渺茫として萬里際涯を知らぬ程の大洋で、少しく風が出ますと嶽のやうな巨濤が潮けむりを揚げて逆卷いて來ます、その恐ろしさ、物凄さ、實に腹の底に浸み渡る樣でありますが、其の代り浮世の雜念を此荒い大波で洗つて付舞ひます、ですから十年間も續けて惱んだ腦病でも三

日間この地に居たらば奇麗サッパリと洗つた樣に平癒致します。乍併都會生活に慣れた方に堪へられまいと思ふのは衣食住の不便です。まづ牛乳を飲まうと思ひましても近所に乳屋があらうではなひから、僅かに村の人を頼んで近傍の小都會から怪し氣なミルクの罐を買つて參つて用を達する位な事です、一事を推して萬事を御察し下さい。サア石鹸が切れた、齒磨がないといつても急に間に合ふ事がありません、封筒もない、半紙もない、イヤ有つても都會の御方が御使ひになる樣な氣の利いた物は一つもありません。下駄がない、傘がない、煙草がない、それから鰹節がありません。砂糖がありません、石油すらも往々品切となつて夜火を燈さない樣な事も度々です、斯樣いふ次第ですから、つれ〴〵に書物を拜見するといつても卜居の始めに携へて參つた物ばかりで、新らしい書物を讀むなど〻いふ事は非常な不便で、東京の新聞紙を見るのが一週間の後、それすら風雨の烈しい時には遲着します。文明の風の行き渡つた今日から見ると、まるでむかしの島流しに遭つて居る樣でございます。

斯ういふ有樣ですから、始めて都會から參つた人は三日も居るともう飽きて仕舞つて匆々と遁げる樣にして去つて仕舞ふ方ばかりでした。けれどそこが私共の辛棒の爲どころだと思ひまして、住めば都といふ古い諺を復活させて、都會生活の習慣をスッパリと波に洗ひ去り、唯今今日丸裸體で此の土地に生れて來たアダム、イーブの樣な心持になりまして土地の人と寸分も異はない生活をする事に覺悟を極めました。

サア斯樣なつて見ますと、物質上の不便、不自由は跡なく消へて仕舞つて、朝夕の事至つてなつかしくなり追々と土地の生活に慣れて來るに隨つて、又いろ〳〵と便利な事、調法な事が出來、思ひ掛ない生活上の樂しみが湧いて來て、これまで都に於て夢にも知らなかつた衣食住の樂しみを得る樣になりました。

序に申しますが田園は多くは山の生活で海濱の生活とは正反對のやうではありますが、私共の參つた村は山に近くて、そして海濱であります。それ故背戸

の小川に清水流れゝば、屋前の石段を下れば前は一面の蒼海となつて怒濤の聲が耳を驚かします。軒から山の頂を見、同時に大海の凄じい景色を併せ眺めるといふ事は關東地方のやうな廣い處ろでは滅多にない事ですが、私共の村は山海兩樣の眺めが朝夕に訪づれて、自然の風物に甚しく富んだ處ろでありました。

### △寒村の生活

まづ其の周圍の狀態から申しませう。私共の村は前述の通り海濱に沿ひ、山を負ふた極めて狹隘な土地で僅かに十四



軒の民家の集まつた寒村でありますが、住民は半農、半漁ともいふ奇態な村で、耕作をして食物を取り、間暇のある時釣に出たり、網を曳いたりして魚を捕らへ賣つて日用品に代へるといふ有樣で至極太古の生活風をして居ります、そこで私共は或る一農家の隱居所を借り受けてそこに世帶を持ちましたが。不思議な事には家賃といふものがないのです。勿論大した家ではないのですが、昔時から例のない事だといふのでどうしても家賃は取りません。其の代り盆と暮の二季に餅代として五圓づゝ包んで與へますと母屋

の主人はもう何かなし恐れ入つて口も利けぬほどの次第であります。

家は八疊二間といふ曲のない造り方ですが、天井は簀子が張つてあるのに、椽側は欅木の一枚板といふ大名の御殿にもない素晴しい構造です、前面に可なり廣い畑が作りつけてあッて、春は黄金の花が咲き、夏は珊瑚の實がみのり、四季折々の野菜物は朝な〳〵に新鮮な色を見せて居ります。で生活の費用と申しますと、五人の家族で一年中に米が十二三俵もあれば澤山です其他の費へは皆な私が手で作り出します、私も此地へ參りましてからは殆んど半永久の防禦陣地と定めましたので、何事も自分でする考へになりまして、その年から畑を作る事、薪を樵る事、機を織る事、鷄を飼ふ事、其外あらゆる農民生活の修業をやりました御蔭に唯今では。大概の雜用は自分の働らきから産み出す様に成りまして田園生活の日用品に少しの事缺もない様になりました。

### △田園も又俗境

東京に居た時分には牛肉や鷄卵を通帳で取ッて晩餐にはキッド葡萄酒を添へるといふ贅澤な暮しを致した主人の事ですから、參ッた當坐は酷く不便に感じましたが。それも一時で、唯今では主人が娯みに掉を提げて魚釣に出ます、又村の人に伴られて投網うちに出る事などありまして、どうかすると小魚を籠に一杯捕つて來て家内中で食べても食べ切れない様な事があります。すると又私が丹青をした畑から一升德利の大サほどもある瓜を見附け出して小供逹を驚かす事が度々あります。斯樣な事は迚も都會生活では夢にも見られぬ樂みでせう。

私は又仕事の閑な折に土地の若い婦人逹を集めて裁縫の稽古や毛糸の編物などを敎へて遣りますが、これが第一土地の者に調寶がられ又尊敬される所以で月謝代りに網から跳ね出した魚を持込まれたり、畑から上ッた野菜山から出る果物を持ち込まれて、年中變ッた

食物が臺所に絶へるといふ事はありません。春の樂しみは女同士隊を組んで山へ蕨採りに參るのですが、これが又どんなに呑氣で、氣の晴れる娯みでせうか、秋の樂しみは茸取り、椎の實拾ひ、雨上りの好天氣に、朝露を踏んで何の遠慮もなく山を駈け登り、一日清涼な山の空氣を吸ひながら手籃に入り切らぬ程な獲物をして勞れて家へ歸ッた時の心地よさ、思も掛ない栗の林に這入ッて毬のやうなのを枝ごと手折つて歸る事もあれば珊瑚の玉をつづゝた樣なぐみの木をもぎ



取つて土産にする事もある其のたのしみは誠に一年中園遊會や運動會をして居る樣な心地であります。

周圍の人は皆質朴で、寛裕で、巧言もなければ惡氣もない。錢勘定にも疎く、人の身の上をも羨まない。ですから頓と世間に物爭といふ事もなくて、人間が自然に優長です。唯少々困るのは怠惰者が多くて閑さへあれば寄り合ふて酒を飲みくだらなく飲食する事です併しこの樣にしても樂に暮して行けるのであるから、まづ此の世の樂天地と言つてもよいのでせう。

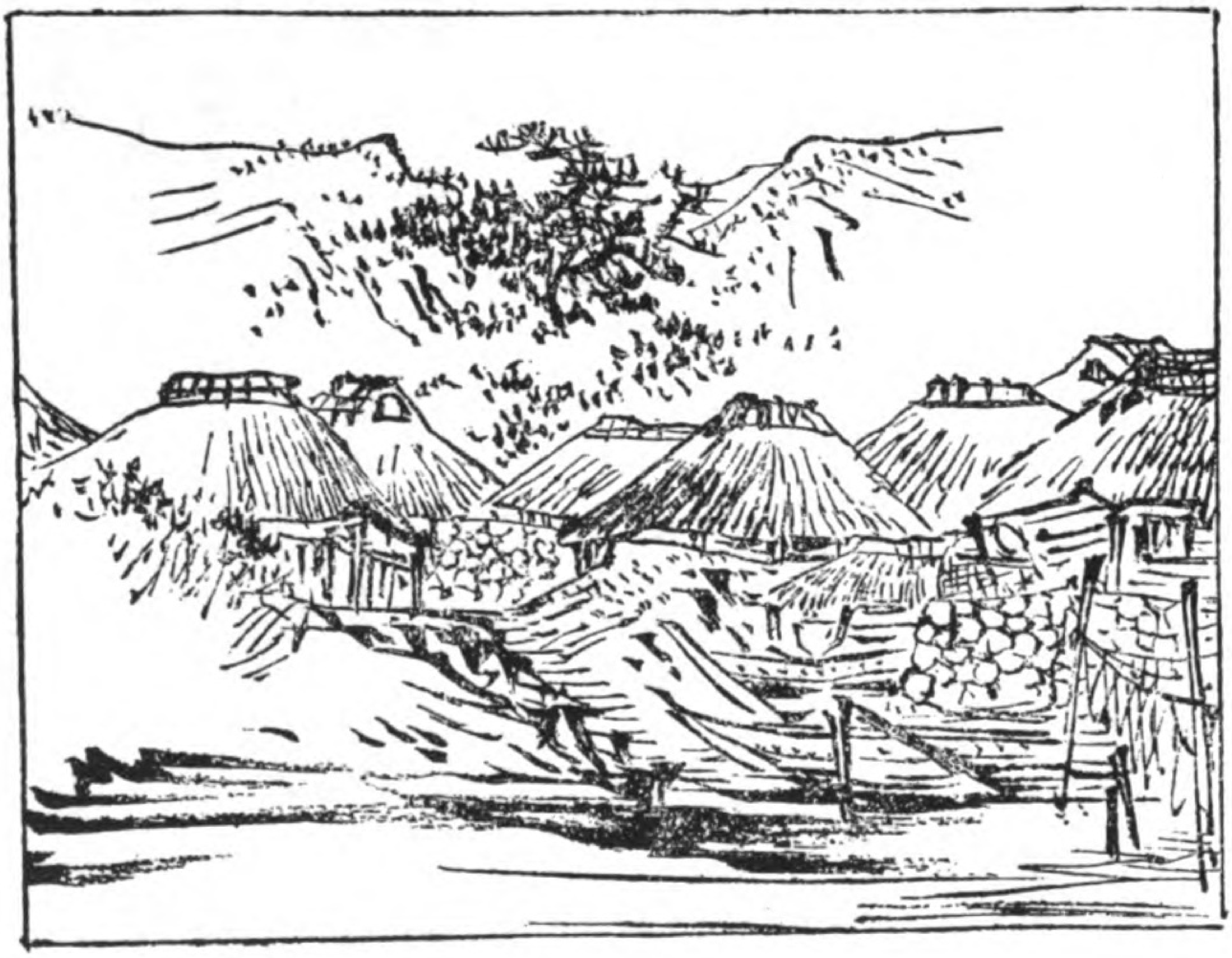
一年中春の末からかけて、夏秋の間が一番忙しい時で如何な悠長な人物でもこの時は汗になッて働らきますが、サア秋が濟んで冬になりますと、世間が閑になッて、方々に酒食の會が開かれます、扨その酒食の會は種々なる名義を帶びて顯はれますが、一年一度のお祭禮を除きましては第一村社ごもり、第二秋忘れ、第三荒神講、第四、豐年祝、第五、山卸しと斯ふ言ふ樣な名義の下に集まつた酒食の會でございまして農民が唯一の愉快とする所ろであります、私の宅でも一度その宿をした事がありましたが、イヤハヤその時は實に賑はしい事でございました。今一寸其時の模樣を記して見ますと。

お客は土地の若者十四五人、これが銘々に米一升と錢十錢づゝ持ち寄ッての會であります。丁度其時は八月中旬村社ごもりといふ名義で御在ましたが、第一會食に肝腎なのは酒といふので、若者三人が買物の役に當りまして一里半ある宿に牛を牽ひて、酒、酢、蒟蒻、油といふ樣なものを買出しに參ります。すると跡の者が肴の準備に取りかゝります。いづれも漁の心得がありますから網を積んで小舟を海へ出す、其跡では天草を煮てトコロテンを作るやら、鷄を料理して五目飯を作るやら、勿論臺所の手傳には屹度お客に相當する位の人數で婦人連が押かけて來まして、膳椀を運び來るやら、皿小鉢を借り出して來るやら、亦は襷をかけて畑へ茄子を採りに行く者もあれば、葱を刈つて來る者もあるいろ／＼と賑はしく献立に奔走しまして、やがて酒樽が積まれて歸る、肴も思ひの外大漁であッたといふので、爰に酒宴の筵は開かれました、何がさて男女合せて三十餘人の大客でありますから無論坐敷に這入り切れません、そこで戸外の廣場へ筵を敷つめてそれへ酒肴を陳べ青天井の會席といふ珍無類の趣向で實に壯快な事でございました。

さてその酒宴の豪快な事を申しますと、菅笠ほどの大サの鉢に魚が山のやうに盛り上られ、手桶の中にうで素麪が溢れるほど涵されて、飯は一と釜に三斗も炊くといふ大仕懸け、實に牛飲馬食の會でありました。そ

れを殘る處ろなく平らげて仕舞つて、それから腹ごなしといふので、綱引がはじまる、隱れんぼが始まる相撲が始まる、何の事はない壽命の洗濯でまるで身体の蝶つがひをはづしての騷ぎでありました。

こういふ有様で飮食する事が年に屹度四五回はあります。兎に角お客が米、味噌を持ち寄ッて來たり、舟を乘り出して肴を生捕ッて來てからの酒宴といふのは一寸他の土地では見られぬ風俗でせう。こうして村の人は日頃の勞苦を忘るゝのでありますが、沍風吹きすさ



ぶ冬の日となりましては、漁も出來ず、田畑も一切閑といふので、三々五々話し伽を逐ふて、それから、それへと爐邊の團欒が開かれます。殊に婦人の團欒は、この爐邊が唯一の樂で御在ます。

△隱遁の準備

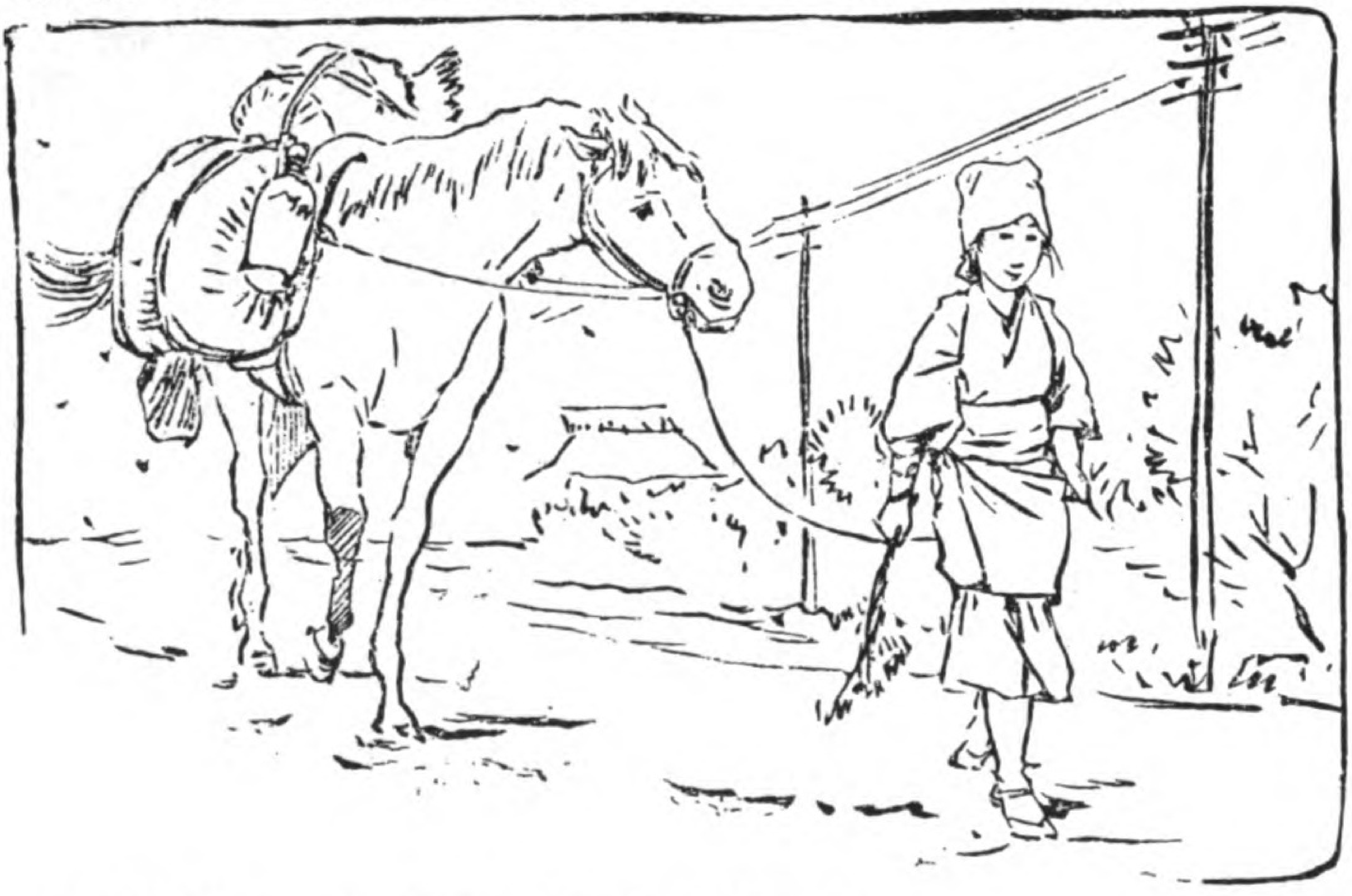
以上は村の狀態を申したので御在ますが、これから一寸私共の個人的事情を申上ませう。主人は元裁判官で十五年間某院に奉職して居りましたが病氣の爲め職を辭しまして唯今家計の主働者といふものはありません

ので収入は少いので御在ますけれども不斷の貯へと恩給によるので現在の家計は寧ろ過分といつてよろしいのです。是は主人が奉職中、末二年間百二十圓づゝの月收でありましたから、毎月の經費を七十圓と極めて殘る五十圓を不時の用意として貯蓄致して置きました。尤もその以前から収入の三割丈は乾度貯蓄して置くといふ方針で十二年間斷へず實行して銀行へ定期預として置きました其の御蔭で今日では五千圓ほどの預金が出來てゐるので、年々の利息が二百五十圓丈け餘分に這入る勘定になつて居ります。で私共夫婦と二人の子供はこの利子で靜かに田園生活を營んでゐるので御在ますが、長男と長女は東京に在る父母の宅へ預けて教育をさせて居ります、それで小供の學資やら又父母への貢ぎとして毎月三十圓丈け、是れは幸ひ別収入として毎月三十圓づゝの恩給金が下るので、今年十八歳になる長男と、十六歳になる長女を東京にお住ひの父母の許へ預けて教育させて居りますので、その學資やら又父母への貢ぎとして恩給の全額を父母の方へ廻す事にして居ります。

一ヶ年二百五十圓の収入では月に割りますと二十圓にしかなりません、斯る少額の収入でどうして生計が立てゝ行かれるものか、小供達の學資や何かは此方で一切世話をするから、もつと生活を張て行くがよからうと毎々父母の方から申して來ます、けれども、唯今の境界の二十圓は都會で百圓の生活をするよりも却て樂な樣に思ひます、第一米代の外に雜用といふものが一向に懸りません、元より坐してゐて萬事を買上げにしたらば田舍の生活でも相應に金は要りますけれども、自から働いて自から營むといふ方針ですから、滅多に金錢を出す事がないのです、世間一般が皆そういふ風ですから私共一家だけ金を使つて生活するのは何だか今日の事に背くやうで勿體ない心地がして矢張土着生活をしますから、費用は極めて少いのであります。田園生活を經驗して早二年にもなりますから、試に家計の今昔を比較して、皆樣の御一笑に供へませう。

△都會生活の家計表

一金百二十圓　俸給收入
内五十圓　貯蓄預
殘七十圓　生活費
内譯　家族父母、主人、主婦、子供四人（十五才以下五歳マデ）下婢一人、總計九人。
十五圓　家賃
十二圓　米代
四圓　主人滋養物代
八圓　魚、肉、野菜
二圓五十錢　味噌、醬油、
二圓　所得税月割
二圓　薪、炭、石油
五圓　子供三人月謝



三圓　下婢給料
五圓　主人車代
二圓五十錢　主人生命保險料
三圓　主人小遣
三圓五十錢　一家交際費
二圓五十錢　醫師藥料

まづこういふ工合に割當てまして實行して居りましたが百二十圓の收入中で五十圓を貯蓄するといふ事は並大抵なやり方では出來ません、それ萬事切り詰めで少しの餘裕もなく、老人へは御氣の毒ながら十分の奉養さへする事も出來ません、又小供等の小遣としては右の通り一厘も割當てない爲め實際は大に困る事がありました、その時は詮方なく主人小遣、又は一家交際費

の中から立替て翌月儉約して貰ふ事にしました、又醫師の藥料も時によれば月極の三倍も入る事がありました、けれども月によると、八圓と極めた魚菜代が三圓位殘る月もあるので、それを他の方へ流用して一時の繕をいたします又衣服料は全く生活費と別物に致して年末給をそれの引當として居ります、兎に角醫師のすゝめもあり常に私の考へでは主人の病氣は永久的に靜養する必要があるものと見ましたから、出來る時に成可く貯蓄をして置いて、他日靜養の料にしたいと思いましたので不滿足を忍んで實行したのであります。

### △田園生活家計表

一、金二十圓八拾錢　一ヶ年二百五十圓收入の月割

内一圓　家屋料月額

五圓　米代

四圓五十錢　郵便賃小包料

二圓　新聞雜誌代

二圓五十錢　一家交際費月割

四圓　雜費

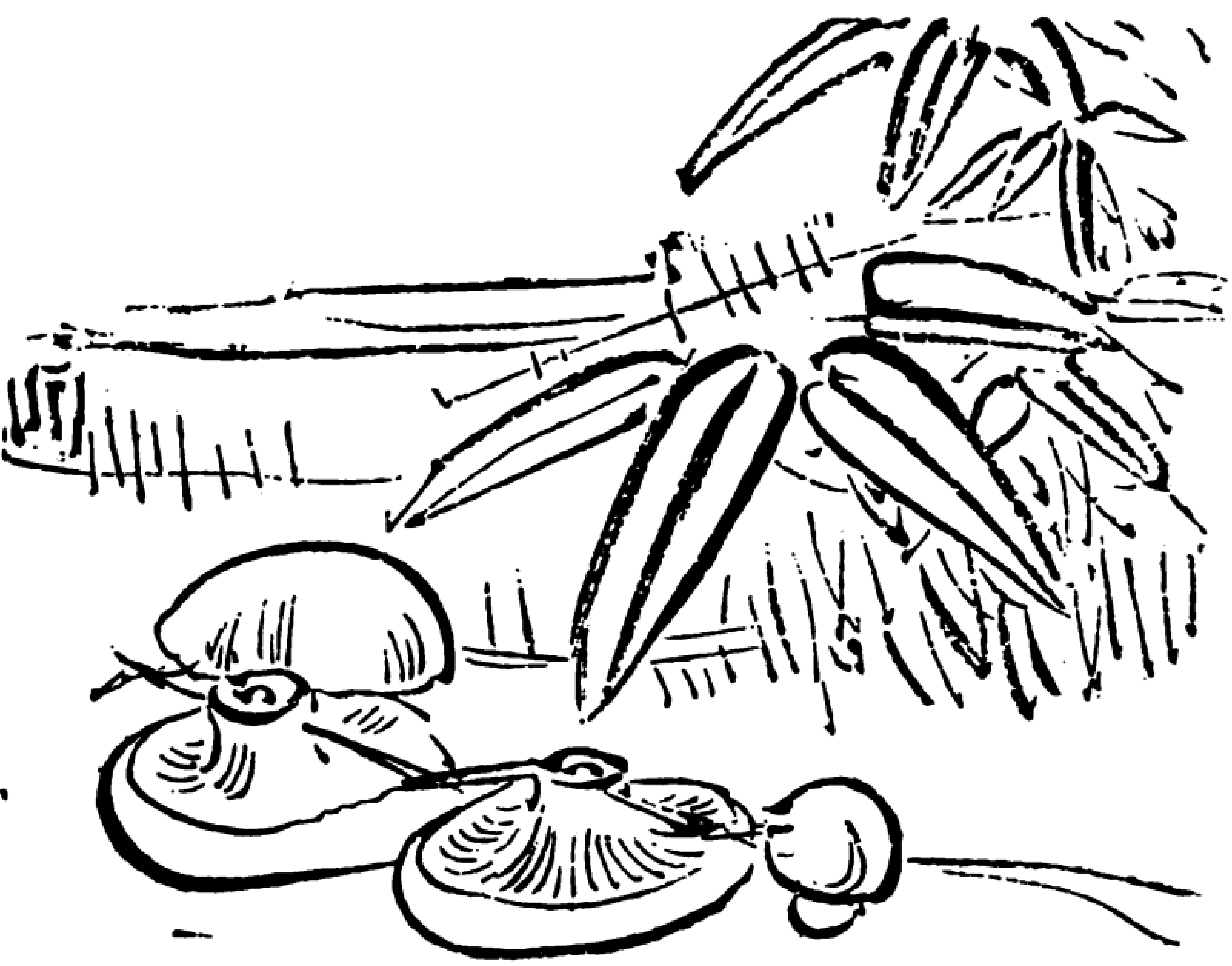
〆十九圓　一ヶ月生活實費

二十圓に足らぬ生活費とは何と簡單なものではありませんか、其の内交際費といふのはチト可笑しいでありますが、これは四季折り〱村人の會食に仲間入をした時の酒食料や、小兒の學校入費、祭禮、村入費の分擔其他村の公共に關する一切の費用を月割にしたものです、又雜費の中には種々雜多な費用が籠つて居ります、まづ下駄を買ひ、髮を刈り、傘の直し料日用品の新調、家の繕ひ、筆墨紙の料もあれば肥料を買つたり、味噌を造る原料にする糀の代價も又この中に籠つて居ります。又この中に郵便費の過大に計算してありますが、これは東京との通信が頻繁で、必要品の三分一は小包郵便で取遣を致すので、斯く多額の郵便賃が出るのであります、前申上げた通り日々の總菜に使ふ、魚野菜の類又薪炭、鹽噌など大概は自作自便ですから、庖厨に要する金は殆んと無いといつてもよろしいで

す、唯如何なる山の奥に住でも眞逆に裸でも居られませんから衣服丈は切詰勘定の外に剰餘金や、他の特別貯金やらの中から引出して買ひます。併しこれは小兒の分丈で、私共夫婦の着料は都會生活の際十分に調へてありますので今日となつて少しも欠乏を感じません。

### △生活の比較

さて田園の生活に於て私の著るしく感じましたのは、農家の生計は都人士の生計に比較して何事も根強く、何事も心丈夫であるといふ點です、成程都會で生活する人は車夫や人足のやうな境界でも月に二十圓位の收入はありませう、けれども二十圓の收入では都會生活をする人の身に取つては實に哀れ至極なもので、迚も家に貯へといふものは十年經つても出來ません、けれども片田舍で二十圓の收入があれば一寸長者の暮しが出來ます、同じ二十圓の金で一方は長者の暮し、一方は貧民の暮しです、これは強ち都會と田舍と物價の相違あるばかりではありません、第一の原因は生活上の性質が異なるからであります。一例を申すと都會では米野菜は勿論の事、家屋料、薪炭、衣類、其他の日用品一切、頭の上より足の爪頭に至るまで恐らく金錢の懸かつて居らないものは一つとしてありますまい。甚しいのは手を洗ふ水にも稅が懸つて居りますから、都會の生活は恰も石の上の生活といつてよいので、日用品何一つとして買はずに濟むものはありません、芥ッ葉一つにも、錢がかゝつて居れば爪の垢にも又金が費へ



て居ります。けれども片山里で生活をする人は、第一薪炭に錢を出しません、家屋に錢を出しません。味噌醤油は手前で造り、野菜にせよ、魚にせよ、都會の人のやうに錢を出して一々買ひ上るといふ事は滅多にしません、少しく骨を折れば山に行つて薪は拾はれる、海に行つて魚は捕れる、衣服も手織で製すれば呉服屋に利を取られる心配もなくてこの上もなく、簡易い生活であります、そこで一寸この兩生活の得失を申しますと、田園生活では收入といふものは殆んどありませんが、其の代り生活費に要する處ろも至つて少ふございます、都會生活はこれと反對で收入の多い割合に費用は中々かゝります、都會生活では百圓の金も不注意に費ひますと五十圓にしか役立ちませんが、田園生活では三十圓の金が六七十圓にも活きて費へます、都會生活で消費の夥しい一例を申し上ると、湯も一つ洗ひます洗濯にも、湯を沸かせば薪代が入ります、石鹸が入ります、糊が入ります、これが田園に居りますと湯は勿論無代價の薪で沸きます、石鹸の代りに灰汁を使ひます、糊は御膳の殘りで間に合せます。些々たる湯も一つにもそれほどの相違があるのです。タトヱば朝御膳に梅干一ッ付けても都會では右から左りに金錢が費へますが、田園生活では、漬物や、鹽味噌には一々金を出すやうな事はありません。畑の縁に植へた茄子、胡瓜が一年中漬物の材料になつて三百六十日の朝夕に調法な御菜となります。總じて農家といふものは收入のない代りに不斷の雜用は家の廻りから湧いて來て少しく手足を働らかせれば年中の食料を保存する事が出來る樣に成つて居ります、農家といふものは又是れが生活の土臺でありますから、何事も疎末には致しません、今假りに双方の生活狀態の比較を取つて見ますと、面白い對照が出來て皆樣の想像に及ばぬ事實を發見する事が出來ませう。

都會生活

△菓物　出入の八百屋より持参せしめたる上、時々罐詰の菓物を買入る事あり、林檎、梨子、葡萄、西瓜、柿、蜜柑等毎月の菓物菓子代として二圓以上の支拂をなした

田園生活

△菓物　家の周圍に四五本の菓樹あり、春より秋に至るまで、美はしき新菓取次に成熟して自然の美味を供す殊に秋の季に至れば、柿、栗の如き貯藏に便利なる

り。
△魚菜　定期の魚菜代每月七八圓の外來客などありし時は往往仕出し屋へ誂らへて見榮、體裁の爲め少からぬ散財する事あり。
△衣類　其他每年、定まりて春着の新調、夏物の流行衣、頭髮の具履物、傘、帽子、手袋、足袋、襟卷、座布團、敷物、其他一切の日用雜品の爲めに消費する金額月割平均十圓以上の經費を要せり。是れ都會生活者の體面上必要の所費なり。

物あれば貯へて翌年の料に供す
△魚菜　大漁の時數ヶ月間の料を一度に買ひ置き乾魚として貯蓄す少しく面倒を厭はざれば糟漬として貯へ不時の來客に供ふ
△衣類其他　四季の移り代りに新衣を調製する事なし是れ田園一般の風習なれば別に異しむに足らず唯夏は帷子、冬は綿入衣あれば十年間打通して每年同じ衣服を着るも少しも體面を損ずる事なし日用諸品も是に準じて永久に用ひ都會の如く頻繁に取り代ゆる事なければ其の爲めに無益の金錢を費す事なし。

## △田園と隱遁主義

田園生活へ這入りましてから、日々の事に不自由はありません、よしや多少の不自由があつたにしろその不自由は都會生活の心意上に苦痛の多いのに比較して却て凌ぎ易いと思ひます、官吏となれば躰面を張らなければならぬ、交際上に氣を遣ふ事も多い、美衣美食して心配を多くするよりも、生活を輕くして氣を易くした方がよいと思ひます、只一ツ困難なのは小兒の教育です、子供は・



幾歳になつても兩親の傍に置いて育てたいと思ひます。さればとて兩親の傍に在つては滿足に教育を受ける事が出來ませんから、矢張都會へ出して祖父母の監督に任せて居りますが、大丈夫とは思ひ乍らも不安心は始終絶へません、今日田園生活で聊か理想の違ふたのはこれ丈であります。

我々親達の希望は子供が我々よりも出世をして呉れて我々に數倍の事業を起し我々に數等上越した生活をし

て貰いたいと思ふのが望みの第一ですから、小供の前途に就てはいろ〳〵と心を碎きますが、田園生活に這入つた現在の我々は、唯現在を程よくするといふ丈けで、別に唯今の處ろ一身上に遠い慮りもございません、それ故主人は病氣保養が專一、私は良人の病氣保養に附屬して、すべての物を犧性に供した考で居ります、それ故、日課は極めて單調で、主人は朝夕三時間づゝ消遙が重なる仕事です、一週間に一回三里往復の山路を上下して躰育につとめてゐます、時としては舟で漁に出たり、又釣魚に一日を暮らす事があります、元來が官吏でしたもの故、田園へ這入りましても一家の風貌が違ひますから、村の人がまるで別人種の樣に考へましたのか容易に馴染みません、けれども私共は田園へ這入ると同時に、全くむかしの事を忘れた氣になつて、萬事土地の人と全く同化するやうに務めました、主人も又當分知己友人に情をあかして暫時交際を斷ちまして全く絶島へ流配された心持になつたのであります、それ故、世間には自然遠ざかりまして新聞雜誌の類も讀まなくなつて、いつしか山中暦日なしの境界になりましたが、これが主人の身に取つて大の藥で精神靜養の目的も達せられ、自然と私共が田園生活をする趣旨に叶ふた譯であります。併し乍ら唯一ッ私共の豫想に反した事は如何なる山奥如何なる僻地へ參つても人間の生活の存ずる限りは俗地俗境たるを免かれぬ一事でした、若しも世の中に俗世界の交際を嫌ふて田園へ引込まうといふ御方があれば、私は絶体にそれを非認いたします。眞に隱れるつもりなら都會に隱れるのがよいです、田舍は寧ろ人の隱遁を妨げる處です、つまり田園と隱遁主義とは兩立しません。けれども是は生活に就ていふ事、其の自然の價値に至つては實に偉大なものと思ひます

### △自然の價値

自然の景色、噫、如何に是が人の心を樂しませませう世の中は進んで漸次に黄金の勢力は翼を伸して參りました、衣服や住家は勿論、食物、器具、日用の品は總て皆高

尙になりました、皆贅澤になりました、殊に人々の慾望が段々と進で參るにつれて、黃金の勢力が熾になりました。そこで私共は今、この田園生活に這入ッた序に、俗世界で萬能力のある黃金で左右し得難い高尙幽遠なる自然の嬉し味を少々ばかり申上げて天然の價値を味はふと思ひます御覽なさい、一寸あの垣根のほとりに咲いて居る菊の花を如何ほど人工が發達して金銀や、瓊をちりばめても、彼の花の自然の色には迚も見替へる事は出來ません、年々に咲いて年々に見られるものであれば、人の眼に、陳腐でありそうなものですが、それが朝な朝な新らしく衣更でもしたやうに美しく綺麗に眺められるではありませんか、あの珠のやうな露を含んで、自然と薫れる風に弄れて、そして一層鮮やかに人の眼の塵を拂はせます、是れがどうして造り物の金銀、珠玉に代られませう。



一もとの菊の花ですら私共は天然の美をそこに見出しました若それを擴めて、自然の山や海に及ぼし森、林、野邊の草木の色々なのに心を寄せて見たならば何樣でありませう。自然の色彩の巧妙な處ろはとても俗眼には見られませぬが、造化の配置の行屆いてゐる處ろは如何な

る名畫も及びません、都會に於ては一寸氣の附かぬ處ですが、彼鬢邊を吹く涼風のスガ〳〵しい價、背を喧むる日光の暖み、又山氣といつて自然の樹木の間から湧いて來る一種微妙な馨りを齎らし來る嵐、是等は目に見へぬ田園生活の餘德であります、若し是れを、人間の肺臟で汚された空氣、塵や掃溜の中から湧いて來る都會の蒸發氣に比較したらば、丸で月宮殿と奈落ほどの相違でせう。

田園生活！　噫、其れが如何に人生の自然でありませうか、私共は僅か二年あまりそこに居て如何にこの汚れた心臟を洗ひましたか、田園を廻る山の翠は、私共に百年の壽命を授けました、屋前を流れる潺々の川は、私共に王公の富貴を與へました、林中の禽鳥は自然の音樂を奏し、四季の稼穡と耕耘は又自然の大パノラマを、私共の眼前に展げて人事のおもしろ味を飽かず供給するのであります。



△春の田園

舊曆二月の末、もう雛祭も近づいて來る絲のやうな春雨が凡そ十日ばかりも打續いて、東風に吹き晒された野原は、しつとりと濕潤を帶びて、雨が晴るとそこら一面に草の芽が萌出る、菜の甲が昇ッて來る、冬以來久しく雪に壓されて居た麥も早七八寸に長びて、もう畑の壤を蔽ふやうになる、畎畝の忙がはしくなッて來るのも是からで、山畑の彼方、此方にチラホラ鋤犂を荷いで働く人が見へて來る併し日が忘れられるほど長くなッて怠惰者は朝起の床離に未練が殘るやうになる眠い眼をこすッて田園へ出て見ると麗かな日の光りが霞に籠られて四方の山々が薄絹でも曳いたやうに見へる一年中の好時季は春と秋との二季であ

るが秋は農家に取ッて一日の樂日がない代り、春は八十八夜前後、種蒔まで凡三十日はまづ遊んで暮せるのです、そこで遠近の山々に霞がかかると兎角氣が暢やかになッて男女老幼、總じて外出をしたがるのです、時は春なれや名ある神社佛閣にお開帳が行はれる、參詣人が蟻の戸渡りの様に道に繋がります八十八夜が間近になり、菩提寺で灌佛の會式が終るとそろ／＼苗代が始まりまして種蒔となる。彼是する中そろ／＼蛙が鳴き始めて田面が噪がしくなる、次で一劃の田の十分の一ばかりが劃られて苗代が作られる、池から上られた種籾が丁度小兒が幼稚園で育られるやうに極めて狭い區域の内で成長するべく作られます、昨日播かれたかと思ふ籾は今既に苗になッて一寸餘に



伸びる、そして其の苗の色は鮮かにうるはしくて眼の覺めるやうです。

扨是の鮮やかな苗が春の終から廣袤數町歩の田地に移し植られて、其が秋の終に幾百千把の實れる眞稻となるかと思へば、自然の力は實に偉大なものであると感せずには居れません。

### △春の農事

扨又片山里で春の仕事といへば大抵茅草刈です、是は一年中の田畑の肥料で、春の暇の多い時に刈り溜めて置くのです、村々の農家では皆競ふて山行をする、朝未明に起ると直ぐ牛馬を驅り出して永の一日山の半腹で稼ぎ、晩方には數十馱の刈草を滿載した牛馬が一大縱列を作ッて歸ッて來ます。

一体この茅草刈といふは、農家の仕事として尤も陽氣で且つ晴々しいもの私共も一日試みに出て見ました。草刈に行く山はさして遠くはありません、併し自分は其山が宿の茅屋の棟の上に頭を抽出して居る故走ッて登れば、直一息に逼ひ登れる事と思ッてゐたのに、其れが道を經て段々と登ッて行くと中々容易でない、麓の雜木の繁ッてゐる間を曲り屈ッて行くと恐ろしい懸崖の突出した處ろに牛が二三頭居て、平氣で草を食ッて居る、私は怖々其處を通り抜けて汗みどろになッてやう／＼這上つて見ると、谷一ッ隔て、向ふの山に放ち飼はれてある牛馬が小く豆のやうに見へました。

山の上から見渡すと一條の水が蛇のやうに脚下から落ちて里の方へ流れて居る、其流水を狹んで兩側に多少の田地が開けてゐる、そして麥が青々と綠の毛氈を敷いたやう、其間に處ろ／＼三角や四角や不等邊三角や長方形な形をした綠色の麥と黃金色の菜圃が、碁盤の目を割ッたやうに鮮やかに劃られて谷を彩つて居る、遙かに眼を放つと、山勢の盡きる處ろは一望十里の平野で、其涯が青螺の破片を截ッて棄たやうな翠色の連山が、天際を限ッて丸で夢のやうに眺められました。

### △新綠の山林

池の汀に菖蒲が咲そめる、茅が軒端に皐月の幟がはためく、樹々の若芽も日增に色濃くなッて艶々しい綠の陰が山路里路を往來する人になつかしくなつて蕨はのびる、欵冬は開く、蠶は上簇に日もない、山には咲後れの躑躅が哀れに萎んで南向の岩の角に草覆盆子が黃金の珠をつゝつたやうに家々の垣根に蔓草が生ひあがつて晝すぎに鳴く鷄の聲が假寐を催ふさせる、卵子の殼を破つて今出たばかりの雛鷄がピヨ／＼の聲をあげて母鷄に餌を求むる、羽虫のついた半身を土に埋めて羽搔をはじめる。

田家は大抵戸を締切ッて野良仕事に出行く、家に殘るものは唯老媼と嬰兒ばかり、村の周圍は寂そりとして陽に干された大豆や、小麥が莚を陳ねて戸口の番人となッてゐる、蠶豆は破けるばかり實が入ッて、もう刈

り取るに間もない、豌豆も蔓が黄ばむで收納の時が來ました。

春以來伸びに伸びだ野菜は片端から拔取られて、日に干されて復來ん春の種に保存される、すべて此頃の日和で山里の麥畑はもう黃熟する、去年以來刈株のまゝに任された田面は乾あがつて鋤かへされつゝ晴れた日の野は戰塲やうで有ます。

△入梅

五月晴天の跡は又梅ッてさみだれます、降りつゝいて鬱陶しく、汚ならしいものだと俳諧の聖が申された、そのさみだれが降つゝいて田畑の養ひをするのです、井手川が泥水で溢れるやうになる、其泥水が縱橫に灌



漑してすき均した田から田へ取次に傳へ渡して、それからそれへと入方へ分配する、そこで廣袤幾百町の田面は見る〳〵間に一面の湖水になッて、それからいよいよ揷秧となります、田家に於ける揷秧の光景は又一種の奇觀です田植時の花嫁は、農村に於ける社交的の飾物です、其現はれるや殊更に靚裝美服して行くのである、其の深い處ろは人の太腿まで沒るほどの泥田の中へ兩脛を埋めて水の面を逼ふのです、これが往來の人をして如何に興を催ふさしむるであらう。よしや其の折雨が降らずとても、一樣に菰を戴いて、又よしや

其の折陽は照らずとも、一様に雪をろしの笠を戴いて少女も老婆も同じ扮ちに装ふて、そして五人八人十二人田の廣さに展開して、さながら織物が機の上に懸られたやうに萌黄の色をなした絨緞が小口から織成されて行くのであります。

田うへがすむと田畑の趣が一變して谷底や窪地はいふも更なり、山の半腹から丘の傾斜のある所まで苟くも水利の通づる限りは階段が作られて畦か仕切られ其處に稲葉が生々として絶へず青波をうたせて居ます此時小山へでも登ッて見ると一條の川を挾んだ地面は不等邊三角形に開けて宛然千疊の青疊を敷詰めたやうである、見渡す幾千町の田地一色の青翠で去年以來の田面の趣を一變しました。



## △夏の田家

いづこの田家の垣根にも蔓艸がはびこつて、夕顔や、藤豆の葉など蓁々として生えあがッて白や、黄や、紫の花は亂れ咲にさきほこッてともすれば、拇指ほどの黄蜂が、さながら黄金の唐獅子が口を開いたとおもはるゝ南瓜の花から蜜を吸ふて居屋敷の廻りに日照草が錯綴してさながら紅白の絨緞を敷つめたやうである、梅や杏の實は既に去り、今は盛りを桃に讓ッて葉隠れの木梢に淡紅く色どつた美味そうな大粒が重味をもつて、ともすれば風にゆられて自然に落ちて來ます。

梨子は青く首だれ、楊梅は最早紫色に霜を帶びて居る、掃溜に捨られた麥の粒や、大根の實や、枇杷の核や、又西瓜の實から一面に新芽が吹き出して丁度日傘の行列をして居る樣で。自から天の恵被の廣大無邊なるを示してゐます。

又屋敷を離れて畑へ出て見ると、地を這ふてゐる冬瓜や干瓢が足下から吃驚する程の大玉が藁葢の上に傲然と座を取ッて居る、そして脚が珊瑚で、頭に銀の纓絡の飾りをした簪のやうな蕎麥の花が傾斜した山畑の畦の一面に作りつけてあります。

日中熱砂を履んで來る旅人は如何に苦しからうさ、れど山路など行く時、峠の上の掛茶屋のあるべき所には、まづ繁ッた數本の大木があり、そして乾度その下には清水が湧出てゐます、又日中柴を載せて歸へる牛の喘ぎがどんなに辛からう、併し道傍の雜艸が青々として生茂ッてゐて歩みを止める間はそれが自然の茵秣になッてゐる、日は照るばかりで暑苦しく、風は死んで稲葉を動かす丈の力らもなく蟬も疲れて暫しは啼き止ます、人は暑さに堪へ兼ねて、かしこ、此邊と木蔭のすゞしき所を撰んで午睡の筵を轉する、大方は神社佛閣の境内、綠蔭の繁ッた閑寂の地に肱を曲げて一炊の夢を貪る、其樂みは又別物であります。まア田園生活の上半期はザッとこんなものでありました、それから先の下半期を申すと隨分長くなりますからそれは又折を見て申しませう。

## 涼しき境

溪流の水迫りて強く流るゝ所、岸に岩あり、岩に松あり、岩は虎の嘯くが如く、松は龍の天に冲するが如し、岩に立ち松のかげに俯して流るゝ水面をうかゞへば、針や撒けると覺しき小鮎群をなし、飛ぶが如くに瀬を上り行くを見る、涼しき境にこそ。

野守が庵の裏庭に、枝もたわゝに連りて結べる水蜜桃の實の、紙袋もて包まざれば、夕日を浴びて紅の雫こぼれんばかりなるあたり、野良より歸る賤の女の一むれ、かしましく興じあふ聲に、驚きて立つ沼の白鷺、遠く彼方の青田におちて胡粉を點じける、涼しき眺めなり。

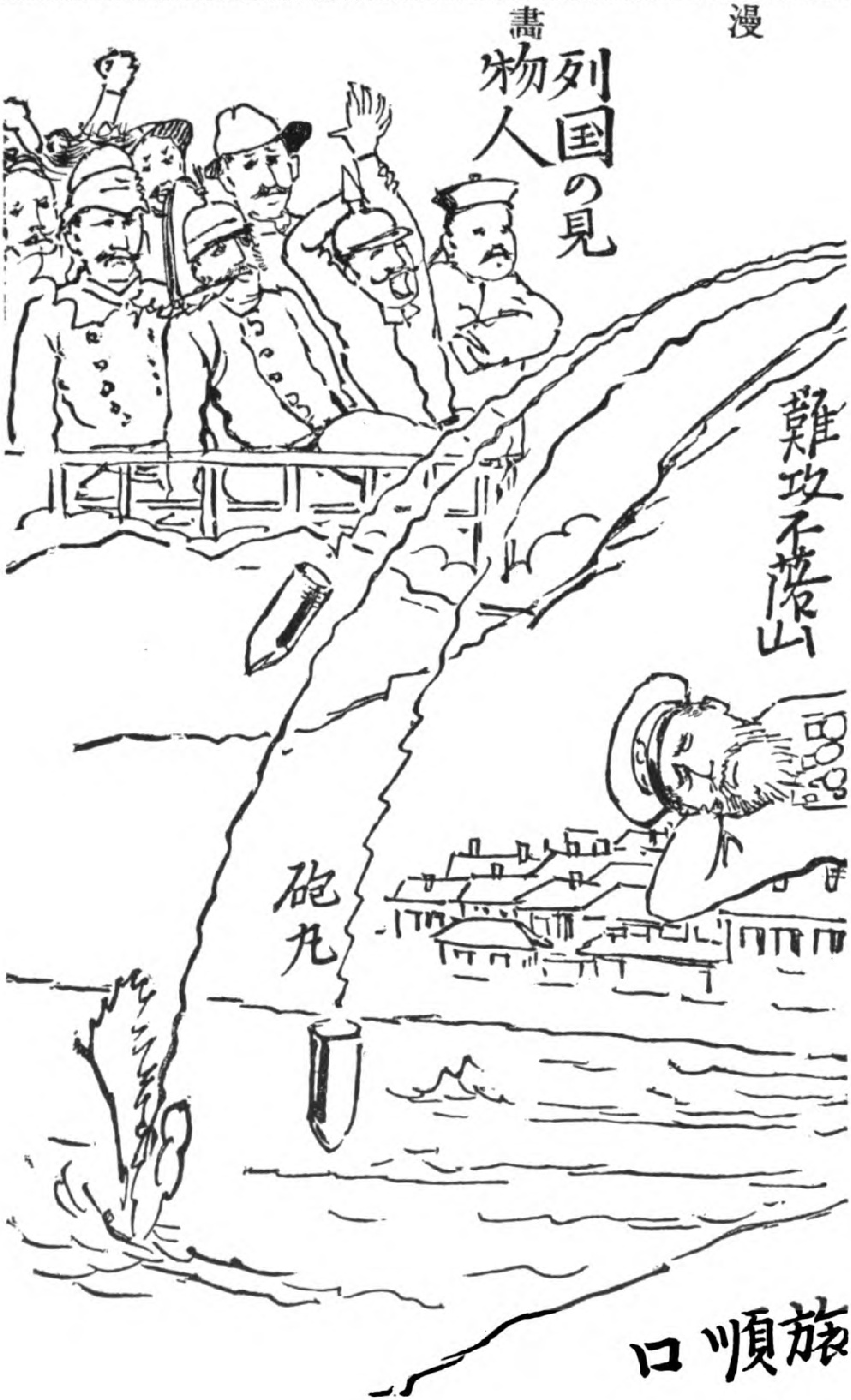
百町の田に水を灌ぐ一條の小河、綠苔むせる石橋のたもと、垂柳のかげに、六つ七つばかりの男の子三人、くろりと裾をからげて、まん丸と肥ゑたる尻を小氣味よく露して、鮒を捕ふるあたり、蜻蛉一つ、水面を無心に飛んで輪を畫くも涼しき境なり。

（森しげ子）

時局




露人の理想こ


漫畫
列国の見物人
難攻不落山
砲丸
旅順口

## 紹介

▲家庭週報

女子大學校の學友會たる櫻楓會にては、去る六月以來家庭週報なる雜誌を發行して、今や其の六號を出すに至れり、本誌は執筆編輯一に同大學生の手に成るにも拘はらず體裁よく、讀んで面白く、巧みに形作られたるは專門の黑人も及ばぬ程なり、加之も毎號新しき趣味を加へて着々進步の跡見ゆるには、編輯者諸孃の熱心も察せられて、末賴母しく思はるゝぞかし、吾人は最高最新の敎育を受けたる明治才媛の事業として、本誌の永く繼續し、光輝ある成功を遂げんことを將來に待つものなり、成瀨本號見る可き記事には、女子高等敎育の必要を論じたるものあり、成瀨校長の英米敎育の比較談あり、敎育ある人の家庭生活を描きたるものあり、其の他文苑に、園藝に、雜錄に、趣味津々として味ふべきもの少からず（定價郵稅共三錢五厘、隔週土曜日發行）

▲雜誌「家庭のしるべ」

白木屋吳服店の機關雜誌にして、家庭に必要なる衣服の撰擇裁縫指南茶道、通俗法律、料理法、式法、素人醫者、一口話、文苑小說等を揭げたれば、家庭の讀み物とするに適す（定價は一册郵稅共十三錢）

▲三尺劍

これば新作小說の合本なり小栗風葉、柳川春葉、田中花堤、廣津柳浪戶張竹風、泉鏡花、中村春雨等諸氏の短篇十數種を集めたるものにて其過半は時局に關係し、表面、裏面の描寫、才藻富麗なる、又戰時文藝界の珍となすに足るべし（定價四十五錢、なり書肆は小石川武島町國民書院）

▲セバストポール

之は露西亞前皇帝アレキサンドル三世がセバストポールの戰鬪に就て手づから記述さるものを飜譯したるものなり。皇帝の著述とは珍らしきものなり、其の可否、觀察の精粗は別として、兎に角一國の主權者として其國の戰を觀察したるもの又一種妙味あらん。譯者は柳川春葉、田中花提。（同上發行）

---

**每月五日發行**

**定價表**

| | |
|---|---|
| 一冊（紙數二百八頁）…… | 金二十錢 |
| 四冊（三ヶ月分）…… | 前金七十五錢 |
| 八冊（半ヶ年分）…… | 前金一圓四十五錢 |
| 十六冊（一ヶ年分）…… | 前金二圓八十錢 |
| 内（定刊數…… | 十二冊 |
| 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一） | |
| 郵稅　一冊 | 二錢 |

**廣告料**

| | 二十四字詰一行 | 中頁（卅二行） | 一頁（六十四行） |
|---|---|---|---|
| 特等 | …… | …… | 割引三十三圓 |
| 一等 | 四十四錢 | 十四圓〇八錢 | 割引二十七圓 |
| 二等 | 三十六錢 | 十一圓五十二錢 | 割引二十二圓 |
| 三等 | 二十九錢 | 九圓二十八錢 | 割引十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

**注文規畧**

- ●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
- ●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
- ●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
- ●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

**不許複製**

明治卅七年九月十五日發行　第四卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博文館發行　日露戰爭實記　定期增刊

# 寫眞版　第六卷　畫報

## 日露戰爭寫眞畫報

**皇太子**全妃**兩殿下**　帝國三鎭守府司令長官　**上村艦隊**の六艦長、武勇聯隊長、**一時**露兵に**虐殺**されしとの噂ありしも其後九死に一生の場合を切り拔けて**我軍**に歸來せし米國從軍記者**エマルソン氏**が露軍及我軍に於て撮影し本館に送り來りし珍奇無比なる**遼陽の露陣**　奉天に於ける哥薩克兵聯隊、陣中の哥薩克騎兵、哥薩克の進軍、露國士官の酒宴、日本軍海城附近進行、蓋平に於ける日本兵の伏射、滿洲人日本軍隊列車を迎ふる眞景　**上海**遁竄中の敵艦、旅順口鐵道、二龍山全景、大和尚山麓我軍の活動、遼陽と海城、營口の寺院、海城の官署、破壞後の鐵道、十三里臺激戰、戰地病院、支那人の避難　**露國步兵**の演習、占領後の南山砲臺、摩天嶺捕虜、常陸丸戰死者葬儀等

正價　每月八日發行　一冊金二拾錢、六冊一圓十錢、十二冊二圓十五錢、郵稅一冊二錢五厘ツヽ

九月八日發行
大判　縱八寸五分　横五寸　美本
口繪四拾頁
石版色刷二枚光澤版八頁寫眞版三十二頁本文記事豐富挿入數十

戰爭實記共通前金　(一ヶ月)四十七錢(三ヶ月)一圓三十五錢(六ヶ月)二圓六十五錢(一ヶ年)五圓二十錢郵稅(一ヶ月)六錢五厘宛

### 畫

●遼東の捕虜……寺崎廣業
●リウリック擊沈……佐久間文吾
●露兵の亂暴……木村光太郎
●沈勇なる斥候……山田正行
●ケルレルの戰死……山中古洞
●泥中進軍の困難……中澤弘光
●白扇を揮て敵前に進む……渡邊金秋
●ノーヰックの最後……福原霞外
●烈壯の極……渡邊審也

——{記　事}——

**征露戰史**　は第一軍楡樹林子樣子嶺の占領より中軍の析木城攻陷に及び、第二軍海城牛莊占領並びに海賊的艦隊の最後に至る、筆力勇健記事明快を極む

**戰事記文**
▲旅順口物語……
▲軍使派遣と垂亡の旅順口……犀東
▲連戰連笑……小波
▲裏面の戰爭……春浪
▲馬賊巨魁と語る……湮波
▲彈丸破裂談……佳水

(後付の一)

文學博士 萩野由之君
落合直文君 池邊義象君 校註

# 日本文學全書

全部廿四册
中判洋裝紙
數約四百頁

吾邦文學の秀高にして優麗典雅なる決して漢洋文學に後れず然れども一時は漢文學の爲めに地歩を占められ維新後は洋學の興隆に遭ひて兎角學者の注意を惹かざりしが近世に至り漸く國文學の勃興昇天の勢となり、隨て初等教育科中の一科目となるに至れり、然るを今や吾國威は更に面目を一新し歐米各國の吾國に對する諸般の研究亦一層微細に入り國文學の如き從來に倍し忽せならざる研究教科となりたれば講學者亦其心して閲讀研鑚せられよ。

**第一編**
▲竹取物語
▲伊勢物語
▲住吉物語
▲徒然草
▲紫式部日記

**第二編**
▲土佐日記
▲枕草紙

▲唐物語

**第七編**
▲宇治拾遺物語
▲多武峯少將物語

**自第八編至第十二編**
▲源氏物語 五册に分本

**自第十三編至第十五編**
▲榮花物語上、中、下三册

**自第十六編至第十八編**

---

奥村信太郎君著

## 通俗文學汎論

叙事詩、抒情史とは如何なるもの乎 戯曲とは如何なる性質を供ふるもの乎此編之を説くこと頗る詳密、先づ藝術の分類に始まりて文學の定義に及び 鼇頭には英獨佛の文學史を掲ぐ寔に文學專門の士の 好指南車なり

賣價二十錢 郵税八錢

---

大和田建樹君著

## 日本大文學史

文學史は文學發達の歴史なり故に苟も斯道に志す人の明にせざるべからざるものとす大和田建樹氏が斯道の開導者として特に得意の本著あるは偶然にあらず四方の君子請ふ一本を机上に備へ玉ふべし

全部五册正價一册四十錢郵税八錢

---

大和田建樹君著

## 和文學史

本書は和文の發達せる由來を 大和田先生に由りて 著述せられたる要書なり、本書の眞價値に至りては茲に之を 喋々する迄もなく 大和田先生の名聲に考へて之を斷ずべし

正價四十五錢郵税八錢

（後付の二）

▲更科日記
▲方丈記
第三編
▲十六夜日記
▲落窪物語
▲辨内侍日記
第四編
▲とりかへばや物語
▲堤中納言物語
▲四季物語
第五編
▲中務内侍日記
▲蜻蛉日記
▲讃岐典侍日記
▲和泉式部日記
第六編
▲濱松中納言物語
▲大和物語

▲太平記上、中、下三冊
第十九編
▲保元物語
▲平治物語
▲秋夜長物語
▲鴉鷺合戰物語
第二十編
▲平家物語
第廿一編
▲古今著聞集
第廿二編
▲公事根源
▲十訓抄
第廿三編
▲水鏡
▲大鏡
第廿四編
▲増鏡

**正價**●壹冊金貳拾五錢●五冊以上八分引●拾冊以上壹割貳分引●貳拾冊以上壹割五分引▲郵稅壹冊參錢宛（遞信省認可）

**發兌元** 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

池邊増田兩君著

## 中等教育 日本文學史

本書は日本文學の發達に關する史實を叙せしもの、日本文學の研究を爲さんものは必ず此書により其沿革を知るにあらざれば總ての起原由來を知る能はず、學者燈灯なくして闇中に迷ふの愚に陷るべし

正價廿五錢　郵稅六錢

國學院編纂

## 名文評釋

本書は落合、萩野、本居、黑川、關根、小杉、松井の諸大家が國學院に於て講明せられたる國文の講義を蒐成したるものにして、國文學研究者の必ず一讀すべき要書なり

正價五十錢　郵稅十錢

落合直文君編

## 中等教育 國文軌範

落合先生が國文の軌範となるべきもの少きを歎ぜられ、あらゆる國文中に就て、其文理の正しき其詞の美しき其旨味の深きを撰び、本書を編まる苟も文を作らんとする者の爲には未曾有の良書なり

正價廿五錢　郵稅六錢

末松房泰君著

# 冠詞例歌集

冠詞といふ者、我國語の特色にして 往々初學の解するに苦む所なるを、此書はありとあらゆる 冠詞を、五十音の順もて排次し、萬葉以下の集中より、一々歌を擧げて例證したる者にて、國語國文に 心あらん者の一讀せざる可らざる書なりc

賣價拾五錢 郵稅四錢

---

佐々木印東両君著

# 美文散文 磯馴松

本書は印東昌綱君か 病を房州の海邊に養ひ、朝夕其詩眼に映じたる江山の 勝景に錦心を寓せられし歌文 及令兄信綱君の佳什を加へて公にせられたるもの 同好者の必ず一讀すべき要書なり

正價廿八錢 郵稅六錢

---

大和田建樹君著

# 歐米名家詩集

本書は歐米諸國の大家がものされし 詩歌中殊に其粹の粹なるものを 大和田先生の翻譯せられしものにして、 其優婉麗秀なる一讀再讀寢食を忘るゝの思あり

正價卅錢 郵稅六錢

---

佐々木弘綱先生 佐々木信綱先生校註

# 日本歌學全書

全部十二冊 中判洋裝紙數四百廿頁

本全書は佐々木弘綱、信綱兩先生が萬葉集、古今集以下の撰集家集中殊に傑出したるものを撰び、精密に校訂して、丁寧に頭註を加へられたるもの、詠歌者の良材なれば座右必ず欠くべからざる要書なり

●第一編
▲古今和歌集
▲躬恒家集
▲友則家集
▲貫之家集
▲忠岑家集

●第二編
▲後撰和歌集
▲元輔家集
▲順家集
▲能宣家集

●第六編
▲千載和歌集
▲永久百首
▲忠度朝臣集
▲後京極自歌合

●第七編
▲新古今和歌集
▲自讃歌
▲鴨長明集

●第八編
▲林下集
▲源三位頼政集

（後付の四）

内田不知庵君著

## 文藝小品

著者特殊の犀利なる筆鋒を以て機警なる批評精到なる叙事文、其他雜著となりしもの積て堆を成すに到る、本書は其精英を抜き、更に訂正して上梓せるものなり清瑩明暢一讀趣味の津々たる讀下無盡の快あるべし。

賣價廿五錢　郵稅六錢

石井研堂君著

## 雅三俗四

名は雅三俗四といふと雖も其實は雅中の雅なるものにして、大美術家文學者の逸事奇行、書畫骨董の品藻月旦其他の雅話數十件、皆これ清風坐間に起る、特に附屬の二大篇は著者獨得の釣魚文學にして江海の詩味筆端に躍々たり。

賣價十五錢　郵稅六錢

谷信次君著

## 月の光

美文學を綜合し而して此一卷寸珍の書に收め、加ふるに幾多の精畫を挿入して以て文字外の清趣を發揮するもの月夜閑に此書を一讀せば清涼の氣自ら心胸を洗ひ來らん

正價十八錢　郵稅四錢

▲天徳歌合

●第三編

▲拾遺和歌集

▲紫式部家集

▲公任家集

▲清少納言家集

●第四編

▲後拾遺和歌集

▲相模家集

▲經信卿母集

▲高陽院歌合

●第五編

▲金華和歌集

▲詞華和歌集

▲堀川百首

▲山家集

▲金槐家集

●第九編

▲萬葉集上

●第十編

▲萬葉集中

●第十一編

▲萬葉集下

●第十二編

▲悦目抄

▲無名抄

▲歌がたり

▲にひまなひ

▲新學異見

▲歌ぶくろ

▲調の直路

正價 ●一冊廿五錢 ●全部十二冊二圓六十錢 ●六冊一圓三十五錢 ●郵稅一冊六錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

佐々木信綱君校註

## 百人一首講義

本書の體裁。まづ人々の傳記逸話をのせ、次に懇切なる講義、及古人の意見を擧げ、詳細もらす所なし。故に何人も是を讀まば百首の深意を知り、作歌の栞ともなすを得べし。歌に志す人はさらなり、歌を知らざる人も又一本を机上に備へて其眞意をさとりたまへ。

正價二十錢郵稅四錢

佐々木信綱君著

## おもひ草

佐々木先生のおもひ草は 先生が時折に觸れ其錦心より迸出したるものを集めたるものにして、其新派たると舊派たるとを問はず歌學家の必ず味はざるべからざる要書なり

正價五十錢郵稅六錢

佐々木信綱君著

## 竹柏園集

心の強き人、弱き人、美くしき人、清き人、さま〳〵の人、相あつまりて、歌文を研究する事すでに數年。其會員の短歌、新體詩、日記、紀行文、スケッチ類をあつめ、茲に第二編迄上梓す心なやめる人、さびしき旅窓の客がつれ〳〵の好侶伴なり。（第一編、第二編、既刊）

正價各三拾錢郵稅六錢

佐々木信綱先生編

# 續日本歌學全書

全部十二册　中判紙數約　一册五百頁

第一編、第二編

## ●賀茂眞淵翁全集

全二册　洋並綴　正價一册卅五錢　郵稅一册八錢

上卷（自撰晩花集●自撰漫吟集●春葉集●賀茂翁家集●歌意考●にひまなび●十二番歌合●國歌八論●國歌八論評●同斥非●同餘言●餘言拾遺

下卷（さき草●うけらが花●答眞over書●答勝義書●琴後集●贈大平書●答春海書●再贈大平書●魚彥家集●靜屋歌集●山のさち●筑波子家集●縣居門人錄●家集正誤

第三編

## ●本居宣長翁全集

全一册　洋並綴　正價參拾五錢　郵稅八錢

目次（自撰歌●石上私淑言●後鈴屋集●稻葉集●歌のしるべ●詩歌論●詠歌大概評●海士の囀

第四編、第五編

## ●香川景樹翁全集

全二册　洋並綴　正價一册卅五錢　郵稅一册八錢

上卷（桂園一枝●同拾遺●新學異見●古今正義總論●桂園遺文●中空日記●またぬ靑葉●六十四番歌結●うす氷●大ぬさ●歌學提要

下卷（陷所師說●かろかや集●景恒翁歌集●須磨日記●古今正義總論補註●古今正義總論補註●古今正義總論補註論辨●古今正義序註追考●浦のしほ貝初編●桂の下枝

第六編

## ●小澤蘆庵翁全集

全一册　洋並綴　正價參拾五錢　郵稅八錢

（後付の六）

（後付の八）

# 中學世界定期增刊

九月二十日發行　第拾貳號　正價廿錢郵稅二錢

# 東西武勇談

日本の部‖●大伴傳家の歌●沈勇の保昌●鰐を捕る力士●虎を殺す壹岐守の郎等●侍賢門の義平●盜を射る貞盛●冤罪の重光●眇となる忠光●平堀河邸の靜御前●女裝の皇子●南荒の爲朝●怪力の大學生●安倍野の重盛●弓を拾ふ義繼●主に殉する家安●吉野の忠信●重園中の形名の妻●邸跡の義屍●調伊企儺●楠公父子●村上義輝●新田義貞●鬼吉川●小早川隆景●山中鹿之助●加藤淸正●木村長門守●賤ヶ岳七本鎗●伏見落城●青木方齋●仁科信盛●杉田壹岐●平田某●平塚因幡守●本多平八郎●平塚越中●甕破柴田●鳥居強右衛門●立花道雪●尼子經久

支那の部●鴻門の樊噲●張良の鐵槌●劍に伏す王陵の母●身代りの紀信●嚴紹の頭●指を切る霽雲●纓を結ぶ子路●豫讓の孤忠●股を割く介子推●易水の荊軻●文天祥の正氣の歌●檻を折る朱雲●馬援の標柱●魚を割く專諸●蘇武の節●田單の火牛●孤を擁する二義士●遠征の張騫●曹沫の匕首●嵇紹の血●面皮を剝ぐ聶政●胡澹菴の封事

西洋の部●ダビド●サムソン●シリチアデス●イパミノンダスとペロピダス●決鬪の元祖●ウヰリアム三世●黑太子●フレデリッキ大王●ネルソン將軍●ウエリントン公●土耳古の十九勇士●ネー將軍●クロムウエル●ソシントン●愛國詩人●グレンビル提督●ケッベル●シワリン元師●スーリ人の剛毅●伊國の鳥居強右衛門●勇敢なる僧正●塽瑞の戰等(外數十項)

附錄　青年戰爭文學　懸賞當選

東京日本橋區　發兌元　博文館　本町三丁目

女學世界定期增刊 社會百生活
（每月一回五日發行）
明治三十七年九月十五日發行　第四卷第拾貳號　（明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授



女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉚
明治37年9月（第4巻第11号、第4巻第12号）

2007年7月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3146-4 C3321